

ふくしまちょう
福島町

た て さ き い せ き
館崎遺跡

－北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書－

第1分冊

遺構編

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

ふくしまちょう
福島町

た て さ き い せ き
館崎遺跡

－北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書－

第1分冊

遺構編

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



盛土遺構

口絵 2



遺跡遠景 福島町浦和漁港から（矢印が館崎遺跡）



遺跡周辺景観



遺跡周辺景観



遺跡周辺景観





調査区周辺近景（福島町教育委員会『館崎遺跡』（1985）表紙と同カット）



遺跡近景空中写真（矢印が館崎遺跡調査地点）



盛土遺構土層断面



Iライン 土層断面 (白色：Ko-d、橙色：B-Tm) G～H12区土層断面



鹿絶住居 (TH-11) の窪みの土器集中



盛土遺構中の土器集中



TH-9 (仰臥膝屈葬、廃屋葬)



TP-26 (側臥強屈葬、フラスコ状土坑墓)



TP-18 (多遺体埋葬墓、矢印は歯の位置)



TP-82 (側臥強屈葬、楕円形土坑墓)



TP-73 (仰臥屈葬、楕円形土坑墓)

埋葬姿勢



顔表現の可能性がある土器 Ⅲ群 a 類土器



Ⅱ群 b 類 円筒土器下層 c 式



TH-14覆土出土 II群b類 円筒土器下層d1式



TH-54覆土出土 II群b類 円筒土器下層d1式



球状耳飾



石製品

例 言

1. 本書は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局が行う、北海道新幹線建設事業に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが、平成21・22・23年度に実施した福島町館崎遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査および報告書の作成は第2調査部第1調査課・第1調査部第2調査課が行った。
3. 本書の作成にあたっては、遺構調査を中山昭大・影浦 覚・福井淳一・立田 理・柳瀬由佳が、現地での遺物一次整理を遠藤香澄・中山昭大・影浦 覚・福井淳一が、現地での写真撮影は主に中山昭大・吉田裕史洋が行った。室内での二次整理は、土器を遠藤・影浦・柳瀬が行い、石器を福井・柳瀬が、その他は福井が担当した。最終的に、土器を影浦、石器を柳瀬、遺構・骨角器・動物遺存体を福井がまとめた。火山灰の対比は、花岡正光が行った。遺物写真の撮影および写真図版作成は中山が担当した。編集は分冊ごとに行い、第1分冊と第4分冊は福井、第2分冊は影浦、第3分冊が柳瀬、第5分冊は中山が行った。なお、各章・各節の執筆担当は文末に記してある。
4. 石器の実測・トレースの一部は、(株)トラスト技研・(株)シン技術コンサルに委託した。
5. 各種分析・鑑定は、下記に委託した。
 - ・放射性炭素年代測定 (AMS測定) : 株式会社 加速器分析研究所・株式会社 パレオ・ラボ
 - ・石器・石製品石材の岩石学的分析 : アースサイエンス株式会社
 - ・黒曜石製遺物産地分析 : 有限会社 遺物材料研究所
 - ・プラントオパール・花粉分析 : 株式会社 パレオ・ラボ
 - ・炭化種実同定 : 株式会社 古環境研究所
 - ・動物遺存体同定 : 金子浩昌
 - ・人骨鑑定・骨角器材質同定 : 澤田純明
6. 調査終了後の出土資料は、福島町教育委員会で保管する。
7. 調査にあたっては下記の間機および人々のご協力、ご助言をいただいた(順不同、敬称略)
北海道教育委員会、福島町教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、北斗市教育委員会 森 靖裕・三上秀則、函館市教育委員会 長谷部一弘・田原良信、佐藤智雄、野村祐一、福田裕二・小林 貢・吉田 力・松崎水穂、木古内町教育委員会 木元 豊、川内町教育委員会 高橋豊彦、松前城資料館 久保 泰、松前町教育委員会 前田正憲、佐藤雄生、七飯町歴史館 山田 央、森町教育委員会 高橋 毅、八雲町教育委員会 柴田信一・大谷茂之、上ノ国町教育委員会 齊藤邦典・塚田直哉、厚沢部町教育委員会 石井淳平、乙部町教育委員会 藤田 巧、今金町教育委員会 寺崎康史・宮本雅通、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団 坪井睦美・佐藤 稔、伊達市教育委員会 青野友哉、洞爺湖町教育委員会 角田隆志、勇武津資料館(苫小牧市) 赤石慎三、厚真町教育委員会 乾 哲也、奈良智法、シン技術コンサル 時田太一郎・山田あや子、函館工業高等専門学校 中村和之、南北海道考古学研究所 横山英介、函館の歴史的風土を守る会 落合治彦、北海道開拓記念館 右代啓視・鈴木琢也、弘前大学 関根達人、弘前学院大学 鈴木克彦、青森県教育委員会 斉藤慶史、青森県埋蔵文化財調査センター 神 康夫、遊佐町教育委員会 大川貴弘、秋田県教育庁 五十嵐一治、秋田県埋蔵文化財センター 小林 克、(公財)岩手県文化振興事業団 米田 寛、宮古市教育委員会 高橋憲太郎、遠野市遠野文化研究センター 佐藤浩彦、長野県埋蔵文化財センター 川崎 保、新潟県埋蔵文化財調査事業団 加藤 学、新潟医療福祉大学 澤田純明、埼玉県埋蔵文化財調査事業団 吉田 稔、東京大学埋蔵文化財調査室 清水 香、國學院大学博物館 阿部常樹、神奈川県立歴史博物館 千葉 毅、流山市教育委員会 小川勝和、佐倉市教育委員会 小倉和重、横浜市歴史博物館 高橋 健、府中工務局江武史、熊本大学 小畑弘己、金子浩昌、大沼忠春、稲野裕介、岡村道雄

記号等の説明

1. 遺構については、次の記号にハイフンとともに確認順に番号を付けた。記号の頭に付したTは、館崎遺跡の遺構と言う意味。
TH：住居跡 TP：土坑 TTP：Tピット TF：焼土 TFC：剥片集中
TS：集石 SP：小ピット HP：住居内の柱穴・土坑 HF：住居の炉跡
2. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。なお、個々にスケールを付けてある。
遺構 1：40 遺構図一部拡大 1：20
復元土器(器高40cmまで) 1：3 (器高40cm超) 1：4 土器拓影 1：3 土製品 1：2
剥片石器・石製品 1：2 礫石器・大形の石製品 1：3 台石石皿 1：4 骨角器 1：1
3. 遺構の規模については、単位をmとし、以下の要領で示した。現存長は()で示した。
堅穴住居跡・土坑：確認面の長軸の長さ/床面・底面での長軸の長さ×確認面の短軸の長さ/床面・底面での短軸の長さ×最大の深さ
フレイク集中・焼土・集石：確認面の長軸の長さ×確認面の短軸の長さ×最大の深さ
4. 土層の表記は、基本土層をローマ数字(I・II…)、遺構覆土・盛土層をアラビア数字(1・2…)で示した。
5. 土層の観察には『新版標準土色帖』(小山・竹原2004)を用い、『土壤調査ハンドブック改訂版』(日本ペトロロジー学会編2000)を引用した。
6. 火山灰は『北海道の火山灰』(北海道火山灰命名委員会1982)に準じ、以下の略号を用いた。
駒ヶ岳d火山灰：Ko-d 白頭山-苦小牧火山灰：B-Tm
7. 土層断面図では、自然堆積層であるⅢ層・Ⅳ層についてはスクリーントーンで示した。それ以外の土層のうち、I・II・V層を除いたものについては、人為的に堆積したものである。また、上位にスクリーントーンで示された層がないV層は、削平されて上位層と不整合になっていることを示している。
8. 石器の実測図では、たたき痕は「V-V」、すり痕は「|←→|」で範囲を示した。剥片石器の使用による明瞭な光沢と、礫石器の使用による摩耗・磨滅の範囲は、スクリーントーンで示した。アスファルト付着部分については黒塗りとした。剥片石器で摩耗により剝離稜線を消失した部分は斜線で示した。アスファルト以外の付着物、光沢・摩耗以外の器表面変化のあるものは必要に応じてスクリーントーンで示し、その内容を本文中に記載した。
9. 土器・土製品、石器・石製品等、骨角器は、それぞれ別に通しの掲載番号を付した。遺構図中で「掲」を付した番号や総括図で使用した遺物に付した番号は、この掲載番号である。なお、石器の2001以降の番号は、写真と一覧表のみ掲載したものである。

目 次

【第1分冊】遺構編

口絵

例言

記号等の説明

目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	2
4 調査の経過	4
5 調査結果の概要	4
(1)平成21年度の調査結果	
(2)平成22年度の調査結果	
(3)平成23年度の調査結果	
II 遺跡の位置と環境	11
1 遺跡の位置と地質・地形	11
2 周辺の遺跡	15
(1)館崎遺跡の過去の調査と穏内館跡	
(2)先史時代の館崎周辺	
(3)中・近世の館崎周辺	
(4)福島町埋蔵文化財調査報告書一覧	
III 調査の方法	22
1 調査区の設定と座標値	22
2 発掘調査の方法	22
3 整理の方法	24
(1)一次整理作業	
(2)二次整理作業	
4 基本層序	30
5 遺物の分類	32
(1)土器・土製品	
(2)石器・石製品等	
(3)骨角器	
6 近代の遺物	37

IV 館崎遺跡の遺構	38
1 遺構の概要	38
2 盛土遺構	41
3 竪穴住居跡	47
4 竪穴状遺構ほか	80
5 土坑	83
6 Tピット	109
7 焼土	110
8 集石	127
9 フレイク集中	131
10 小ピット	138
11 埋設土器	138
12 杭列	139
13 配石列	139
14 道路跡	139
15 防空壕跡	140
16 塹壕跡	140

一覧表

報告書抄録

【第2分冊】土器編

目次

記号等の説明

V 館崎遺跡の土器・土製品	1
1 土器の概要	1
2 II群b類	4
(1)円筒土器下層c式	4
(2)円筒土器下層d1式	12
(3)円筒土器下層d2式	73
3 III群a類	129
(1)円筒土器上層a1式	129
(2)円筒土器上層a2式	171
(3)円筒土器上層b式	270
(4)円筒土器上層b式末～サイベ沢Ⅷ式(古)	326
(5)サイベ沢Ⅷ式	338
(6)見晴町式	367
(7)円筒土器上層式	371
4 IV群a類	380
5 I群・II群a類・III群b類・IV群b類・V群・Ⅶ群	427
6 土製品等	431
7 近世の遺物	447

一覧表

引用・参考文献

報告書抄録

【第3分冊】石器編

目次

記号等の説明

VI 館崎遺跡の石器・石製品等	1
1 石器・石製品等の概要	1
2 剥片石器・剥片	6
3 礫石器	27
4 石製品	52
5 有意の礫・礫・その他、写真掲載の石器等	219
6 小括	250

一覧表

引用・参考文献

報告書抄録

【第4分冊】骨角器・分析・総括編

目次

VI	館崎遺跡の骨角器	1
VII	館崎遺跡の動物遺存体	17
IX	自然科学的分析	59
1	館崎遺跡における放射性炭素年代測定(AMS測定)(1)(株式会社 加速器分析研究所)...	59
2	館崎遺跡における放射性炭素年代測定(AMS測定)(2)(株式会社 加速器分析研究所)...	65
3	館崎遺跡における放射性炭素年代測定(AMS測定)(3)(株式会社 加速器分析研究所)...	70
4	放射性炭素年代測定(1)(パレオ・ラボ)	75
5	放射性炭素年代測定(2)(パレオ・ラボ)	78
6	館崎遺跡の火山灰の対比(花岡正光)	81
7	福島町館崎遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析(有限会社 遺物材料研究所)	88
8	玉の岩石学的分析(アースサイエンス株式会社)	104
9	石製品等の岩石学的分析(1)(アースサイエンス株式会社)	106
10	石製品等の岩石学的分析(2)(アースサイエンス株式会社)	134
11	北海道館崎遺跡出土玉類と滑石等の同定(榎第四紀地質研究所)	151
12	館崎遺跡出土焼成骨角器の非破壊的組織形態観察に基づく素材同定(序報)(澤田純明)	161
13	館崎遺跡出土縄文人骨の人類学的所見(澤田純明)	174
14	館崎遺跡のプラント・オパール(パレオ・ラボ)	180
15	館崎遺跡の花粉分析(パレオ・ラボ)	184
16	福島町館崎遺跡における炭化種実同定(株式会社 古環境研究所)	189
17	館崎遺跡出土土器の瓦痕調査報告(小畑弘己)	202
X	総括	213
1	館崎遺跡の遺構変遷	213
2	館崎遺跡の土器・土製品	242
3	館崎遺跡の石器・石製品	286
4	館崎遺跡の骨角器と動物遺存体	295
5	館崎遺跡の植生環境	298
6	館崎遺跡の炭素年代	301
	引用・参考文献	303
	報告書抄録	

【第5分冊】写真図版編

目次

写真図版

報告書抄録

挿図目次

I 調査の概要

図 I - 1	遺跡の位置	3
図 I - 2	調査区の区分と表土直下の地形	5

II 遺跡の位置と環境

図 II - 1	遺跡の位置と周辺の地質	11
図 II - 2 (1)	館崎遺跡・穂内館跡周辺の空中写真の変遷(1)	12
図 II - 2 (2)	館崎遺跡・穂内館跡周辺の空中写真の変遷(2)	13
図 II - 3	遺跡周辺の現地形と旧地形	14
図 II - 4	調査区周辺の地形と調査範囲	16
図 II - 5	福島町域南部の遺跡	19
図 II - 6	福島町域の遺跡	20

III 調査の方法

図 III - 1	土層柱状図	30
図 III - 2	土層堆積模式図	31
図 III - 3	近代の遺物	37

IV 館崎遺跡の遺構

図 IV - 1	遺構位置図(等高線あり)	151
図 IV - 2	遺構位置図(等高線なし)	152
図 IV - 3	遺構位置図(1): B~D 1~4区	153
図 IV - 4	遺構位置図(2): E~G 1~4区	154
図 IV - 5	遺構位置図(3): H~J 1~4区	155
図 IV - 6	遺構位置図(4): K~M 1~4区	156
図 IV - 7	遺構位置図(5): N~P 1~4区	157
図 IV - 8	遺構位置図(6): B~D 5~8区	158
図 IV - 9	遺構位置図(7): E~G 5~8区	159
図 IV - 10	遺構位置図(8): H~J 5~8区	160
図 IV - 11	遺構位置図(9): K~M 5~8区	161
図 IV - 12	遺構位置図(10): N~P 5~8区	162
図 IV - 13	遺構位置図(11): B~D 9~12区	163
図 IV - 14	遺構位置図(12): E~G 9~12区	164
図 IV - 15	遺構位置図(13): H~J 9~12区	165

図 IV - 16	遺構位置図(14): K~M 9~12区	166
図 IV - 17	遺構位置図(15): N~P 9~12区	167
図 IV - 18	盛土遺構範囲図	168
図 IV - 19	盛土遺構範囲図(1) P・P' 盛土	169
図 IV - 20	盛土遺構範囲図(2) A 盛土	170
図 IV - 21	盛土遺構範囲図(3) B 盛土	171
図 IV - 22	盛土遺構範囲図(4) C・C' 盛土	172
図 IV - 23	盛土遺構範囲図(5) D 盛土	173
図 IV - 24	土層断面図セクションポイント	174
図 IV - 25	土層断面①	175
図 IV - 26	土層断面②	176
図 IV - 27	土層断面③	177
図 IV - 28	土層断面④~⑥	178
図 IV - 29	土層断面⑦~⑩	179
図 IV - 30	土層断面⑪(1)	180
図 IV - 31	土層断面⑪(2)・⑫	181
図 IV - 32	土層断面⑬~⑮	182
図 IV - 33	土層断面⑯	183
図 IV - 34	土層断面⑰~⑲	184
図 IV - 35	土層断面⑳	185
図 IV - 36	土層断面㉑~㉒	186
図 IV - 37	土層断面㉓・㉔	187
図 IV - 38	土層断面㉕・㉖	188
図 IV - 39	土層断面㉗	189
図 IV - 40	土層断面㉘・㉙	190
図 IV - 41	土層断面㉚~㉛	191
図 IV - 42	土層断面㉜・㉝	192
図 IV - 43	土層断面㉞~㉟	193
図 IV - 44	土層断面注記①~③	194
図 IV - 45	土層断面注記③~⑪	195
図 IV - 46	土層断面注記⑪~⑬	196
図 IV - 47	土層断面注記⑬~⑰	197
図 IV - 48	土層断面注記⑰~⑲	198
図 IV - 49	土層断面注記⑲~㉑	199
図 IV - 50	土層断面注記㉑~㉓	200
図 IV - 51	土層断面注記㉓~㉕	201

图IV-52	土層断面注記㉔-㉕	202	图IV-90	TH-9(5)	240
图IV-53	土層断面注記㉖-㉗	203	图IV-91	TH-10(1)	241
图IV-54	竖穴住居跡位置图	204	图IV-92	TH-10(2)	242
图IV-55	TH-2(1)	205	图IV-93	TH-11(1)	243
图IV-56	TH-2(2)	206	图IV-94	TH-11(2)	244
图IV-57	TH-2(3)	207	图IV-95	TH-11(3)	245
图IV-58	TH-3(1)	208	图IV-96	TH-11(4)	246
图IV-59	TH-3(2)	209	图IV-97	TH-12(1)	247
图IV-60	TH-3(3)	210	图IV-98	TH-12(2)	248
图IV-61	TH-4(1)	211	图IV-99	TH-12(3)	249
图IV-62	TH-4(2)	212	图IV-100	TH-13(1)	250
图IV-63	TH-4(3)	213	图IV-101	TH-13(2)	251
图IV-64	TH-4(4)	214	图IV-102	TH-14(1)	252
图IV-65	TH-4(5)	215	图IV-103	TH-14(2)	253
图IV-66	TH-5(1)	216	图IV-104	TH-14(3)	254
图IV-67	TH-5(2)	217	图IV-105	TH-15(1)	255
图IV-68	TH-5(3)	218	图IV-106	TH-15(2)	256
图IV-69	TH-5(4)	219	图IV-107	TH-16	257
图IV-70	TH-5(5)	220	图IV-108	TH-17(1)	258
图IV-71	TH-5(6)·TH-7(1)	221	图IV-109	TH-17(2)	259
图IV-72	TH-7(2)	222	图IV-110	TH-18(新)·18(旧)·112(1)···	260
图IV-73	TH-7(3)	223	图IV-111	TH-18(新)·18(旧)·112(2)···	261
图IV-74	TH-8(新)(1)	224	图IV-112	TH-18(新)·18(旧)·112(3)···	262
图IV-75	TH-8(新)(2)	225	图IV-113	TH-18(新)·18(旧)·112(4)···	263
图IV-76	TH-8(新)(3)	226	图IV-114	TH-18(新)·18(旧)·112(5)···	264
图IV-77	TH-8(新)(4)	227	图IV-115	TH-18(新)·18(旧)·112(6)···	265
图IV-78	TH-8(新)(5)	228	图IV-116	TH-19(1)	266
图IV-79	TH-8(新)(6)	229	图IV-117	TH-19(2)	267
图IV-80	TH-8(旧)(1)	230	图IV-118	TH-19(3)	268
图IV-81	TH-8(旧)(2)	231	图IV-119	TH-20	269
图IV-82	TH-8(旧)(3)	232	图IV-120	TH-21(1)	270
图IV-83	TH-8(旧)(4)	233	图IV-121	TH-21(2)	271
图IV-84	TH-8(旧)(5)	234	图IV-122	TH-21(3)	272
图IV-85	TH-8(旧)(6)	235	图IV-123	TH-21(4)	273
图IV-86	TH-9(1)	236	图IV-124	TH-22(1)	274
图IV-87	TH-9(2)	237	图IV-125	TH-22(2)	275
图IV-88	TH-9(3)	238	图IV-126	TH-22(3)	276
图IV-89	TH-9(4)	239	图IV-127	TH-22(4)	277

图IV-128	TH-22(5)	278	图IV-166	TH-32(1)	316
图IV-129	TH-22(6)	279	图IV-167	TH-32(2)	317
图IV-130	TH-22(7)	280	图IV-168	TH-32(3)	318
图IV-131	TH-23(新)(1)	281	图IV-169	TH-33(1)	319
图IV-132	TH-23(新)(2)	282	图IV-170	TH-33(2)	320
图IV-133	TH-23(新)(3)	283	图IV-171	TH-33(3)	321
图IV-134	TH-23(旧)(1)	284	图IV-172	TH-34(新)(1)	322
图IV-135	TH-23(旧)(2)	285	图IV-173	TH-34(新)(2)	323
图IV-136	TH-23(旧)(3)	286	图IV-174	TH-34(新)(3)	324
图IV-137	TH-24(1)	287	图IV-175	TH-34(旧)(1)	325
图IV-138	TH-24(2)	288	图IV-176	TH-34(旧)(2)	326
图IV-139	TH-24(3)	289	图IV-177	TH-34(旧)(3)	327
图IV-140	TH-24(4)	290	图IV-178	TH-35(1)	328
图IV-141	TH-24(5)	291	图IV-179	TH-35(2)	329
图IV-142	TH-25(1)	292	图IV-180	TH-35(3)	330
图IV-143	TH-25(2)	293	图IV-181	TH-35(4)	331
图IV-144	TH-25(3)	294	图IV-182	TH-35(5)	332
图IV-145	TH-25(4)	295	图IV-183	TH-37(1)	333
图IV-146	TH-25(5)	296	图IV-184	TH-37(2)	334
图IV-147	TH-25(6)	297	图IV-185	TH-37(3)	335
图IV-148	TH-27(1)	298	图IV-186	TH-37(4)	336
图IV-149	TH-27(2)	299	图IV-187	TH-37(5)	337
图IV-150	TH-28(1)	300	图IV-188	TH-39(1)	338
图IV-151	TH-28(2)	301	图IV-189	TH-39(2)	339
图IV-152	TH-28(3)	302	图IV-190	TH-39(3)	340
图IV-153	TH-29(1)	303	图IV-191	TH-39(4)	341
图IV-154	TH-29(2)	304	图IV-192	TH-39(5)	342
图IV-155	TH-29(3)	305	图IV-193	TH-40(1)	343
图IV-156	TH-30(新)(1)	306	图IV-194	TH-40(2)	344
图IV-157	TH-30(新)(2)	307	图IV-195	TH-40(3)	345
图IV-158	TH-30(新)(3)	308	图IV-196	TH-40(4)	346
图IV-159	TH-30(新)(4)	309	图IV-197	TH-42	347
图IV-160	TH-30(新)(5)	310	图IV-198	TH-44(1)	348
图IV-161	TH-30(旧)(1)	311	图IV-199	TH-44(2)	349
图IV-162	TH-30(旧)(2)	312	图IV-200	TH-45(1)	350
图IV-163	TH-30(旧)(3)	313	图IV-201	TH-45(2)	351
图IV-164	TH-31(1)	314	图IV-202	TH-47(1)	352
图IV-165	TH-31(2)	315	图IV-203	TH-47(2)	353

図Ⅳ-204	TH-47(3)	354	図Ⅳ-242	TP-59・60・62	392
図Ⅳ-205	TH-48(1)	355	図Ⅳ-243	TP-61・63	393
図Ⅳ-206	TH-48(2)	356	図Ⅳ-244	TP-64・65	394
図Ⅳ-207	TH-49(1)	357	図Ⅳ-245	TP-66~68	395
図Ⅳ-208	TH-49(2)	358	図Ⅳ-246	TP-70~72	396
図Ⅳ-209	TH-54(1)	359	図Ⅳ-247	TP-73	397
図Ⅳ-210	TH-54(2)	360	図Ⅳ-248	TP-75・76・116	398
図Ⅳ-211	TH-55	361	図Ⅳ-249	TP-77~79・81	399
図Ⅳ-212	TH-61(1)	362	図Ⅳ-250	TP-80・89・103	400
図Ⅳ-213	TH-61(2)	363	図Ⅳ-251	TP-82・85	401
図Ⅳ-214	TH-51・56(1)	364	図Ⅳ-252	TP-83・86・94	402
図Ⅳ-215	TH-51・56(2)	365	図Ⅳ-253	TP-87・91~93、SP-379	403
図Ⅳ-216	TH-51・56(3)	366	図Ⅳ-254	TP-95~98	404
図Ⅳ-217	TH-113(1)	367	図Ⅳ-255	TP-99・100	405
図Ⅳ-218	TH-113(2)	368	図Ⅳ-256	TP-101・102・104	406
図Ⅳ-219	土坑・Tピット位置図	369	図Ⅳ-257	TP-105~108	407
図Ⅳ-220	TP-1	370	図Ⅳ-258	TP-109~113・115、SP-302	408
図Ⅳ-221	TP-2・6	371	図Ⅳ-259	TP-114・118・119・121	409
図Ⅳ-222	TP-3~5・19	372	図Ⅳ-260	TP-122・123	410
図Ⅳ-223	TP-7・8	373	図Ⅳ-261	TP-126~128	411
図Ⅳ-224	TP-9・10	374	図Ⅳ-262	TP-129・130~133(1)	412
図Ⅳ-225	TP-11~14	375	図Ⅳ-263	TP-130~133(2)	413
図Ⅳ-226	TP-15	376	図Ⅳ-264	TP-134	414
図Ⅳ-227	TP-16・17・21・22	377	図Ⅳ-265	TP-136	415
図Ⅳ-228	TP-18(1)	378	図Ⅳ-266	TTP-1	416
図Ⅳ-229	TP-18(2)	379	図Ⅳ-267	焼土位置図	417
図Ⅳ-230	TP-23・24、TFC-16・17	380	図Ⅳ-268	TF-1~5	418
図Ⅳ-231	TP-25・26	381	図Ⅳ-269	TF-6~9	419
図Ⅳ-232	TP-28~30	382	図Ⅳ-270	TF-10~12	420
図Ⅳ-233	TP-32・33	383	図Ⅳ-271	TF-13~18	421
図Ⅳ-234	TP-34・35・38	384	図Ⅳ-272	TF-19~21・23・24	422
図Ⅳ-235	TP-39~41	385	図Ⅳ-273	TF-25~32	423
図Ⅳ-236	TP-42~44	386	図Ⅳ-274	TF-33~39	424
図Ⅳ-237	TP-45・46	387	図Ⅳ-275	TF-40~45	425
図Ⅳ-238	TP-47・48・117	388	図Ⅳ-276	TF-46~51・56	426
図Ⅳ-239	TP-49・50・53	389	図Ⅳ-277	TF-52~54・58	427
図Ⅳ-240	TP-51	390	図Ⅳ-278	TF-59・60・62~64	428
図Ⅳ-241	TP-55・56・58	391	図Ⅳ-279	TF-66・68・69・72・73	429

図Ⅳ-280	TF-74~78	430	図Ⅳ-317	小ビット位置図(21)	467
図Ⅳ-281	TF-80~82・84~86	431	図Ⅳ-318	小ビット位置図(22)	468
図Ⅳ-282	TF-87~92	432	図Ⅳ-319	小ビット位置図(23)	469
図Ⅳ-283	TF-93~97	433	図Ⅳ-320	小ビット位置図(24)	470
図Ⅳ-284	TF-98~103	434	図Ⅳ-321	小ビット位置図(25)	471
図Ⅳ-285	TF-104~107・109	435	図Ⅳ-322	小ビット位置図(26)	472
図Ⅳ-286	TF-108・112・117・118	436	図Ⅳ-323	小ビット断面図(1)	473
図Ⅳ-287	TF-110・111・113~116・119	437	図Ⅳ-324	小ビット断面図(2)	474
図Ⅳ-288	TF-120~126	438	図Ⅳ-325	小ビット断面図(3)	475
図Ⅳ-289	集石・フレイク集中位置図	439	図Ⅳ-326	小ビット断面図(4)	476
図Ⅳ-290	TS-1・3~7	440	図Ⅳ-327	小ビット断面図(5)	477
図Ⅳ-291	TS-8・9・12・17	441	図Ⅳ-328	小ビット断面図(6)	478
図Ⅳ-292	TS-26・27・29・31	442	図Ⅳ-329	小ビット断面図(7)	479
図Ⅳ-293	TFC-1~3・6・9・10・12	443	図Ⅳ-330	小ビット断面図(8)・ 埋設土器1	480
図Ⅳ-294	TFC-14・15・18~21・31・47	444	図Ⅳ-331	小ビット土層注記(1)	481
図Ⅳ-295	小ビット・杭穴位置図	445	図Ⅳ-332	小ビット土層注記(2)	482
図Ⅳ-296	小ビット・杭穴位置分割範囲図	446	図Ⅳ-333	小ビット土層注記(3)	483
図Ⅳ-297	小ビット位置図(1)	447	図Ⅳ-334	小ビット土層注記(4)	484
図Ⅳ-298	小ビット位置図(2)	448	図Ⅳ-335	杭列(1)	485
図Ⅳ-299	小ビット位置図(3)	449	図Ⅳ-336	杭列(2)	486
図Ⅳ-300	小ビット位置図(4)	450	図Ⅳ-337	杭列(3)	487
図Ⅳ-301	小ビット位置図(5)	451	図Ⅳ-338	配石列・道路跡位置図	488
図Ⅳ-302	小ビット位置図(6)	452	図Ⅳ-339	配石列1(1)	489
図Ⅳ-303	小ビット位置図(7)	453	図Ⅳ-340	配石列1(2)	490
図Ⅳ-304	小ビット位置図(8)	454	図Ⅳ-341	配石列1(3)	491
図Ⅳ-305	小ビット位置図(9)	455	図Ⅳ-342	配石列1(4)	492
図Ⅳ-306	小ビット位置図(10)	456	図Ⅳ-343	配石列2(1)	493
図Ⅳ-307	小ビット位置図(11)	457	図Ⅳ-344	配石列2(2)	494
図Ⅳ-308	小ビット位置図(12)	458	図Ⅳ-345	配石列2(3)	495
図Ⅳ-309	小ビット位置図(13)	459	図Ⅳ-346	配石列2(4)	496
図Ⅳ-310	小ビット位置図(14)	460	図Ⅳ-347	配石列3	497
図Ⅳ-311	小ビット位置図(15)・ 埋設土器1	461	図Ⅳ-348	道路跡(1)	498
図Ⅳ-312	小ビット位置図(16)	462	図Ⅳ-349	道路跡(2)	499
図Ⅳ-313	小ビット位置図(17)	463	図Ⅳ-350	防空壕跡・塹壕跡位置図	500
図Ⅳ-314	小ビット位置図(18)	464	図Ⅳ-351	防空壕跡1	501
図Ⅳ-315	小ビット位置図(19)	465	図Ⅳ-352	防空壕跡2・3	502
図Ⅳ-316	小ビット位置図(20)	466	図Ⅳ-353	防空壕跡4・5	503

図Ⅳ-354	塹壕跡(1)	504
図Ⅳ-355	塹壕跡(2)	505

V 館崎遺跡の土器・土製品

図Ⅴ-1	個体土器出土分布図	2
図Ⅴ-2	Ⅱ群b類(1) 下層c式冒頭	5
図Ⅴ-3	Ⅱ群b類(2)	6
図Ⅴ-4	Ⅱ群b類(3)	7
図Ⅴ-5	Ⅱ群b類(4)	8
図Ⅴ-6	Ⅱ群b類(5)	9
図Ⅴ-7	Ⅱ群b類(6)	10
図Ⅴ-8	Ⅱ群b類(7)	11
図Ⅴ-9	Ⅱ群b類(8) 下層d1式冒頭	14
図Ⅴ-10	Ⅱ群b類(9)	15
図Ⅴ-11	Ⅱ群b類(10)	16
図Ⅴ-12	Ⅱ群b類(11)	17
図Ⅴ-13	Ⅱ群b類(12)	18
図Ⅴ-14	Ⅱ群b類(13)	19
図Ⅴ-15	Ⅱ群b類(14)	20
図Ⅴ-16	Ⅱ群b類(15)	21
図Ⅴ-17	Ⅱ群b類(16)	22
図Ⅴ-18	Ⅱ群b類(17)	23
図Ⅴ-19	Ⅱ群b類(18)	24
図Ⅴ-20	Ⅱ群b類(19)	25
図Ⅴ-21	Ⅱ群b類(20)	26
図Ⅴ-22	Ⅱ群b類(21)	27
図Ⅴ-23	Ⅱ群b類(22)	28
図Ⅴ-24	Ⅱ群b類(23)	29
図Ⅴ-25	Ⅱ群b類(24)	30
図Ⅴ-26	Ⅱ群b類(25)	31
図Ⅴ-27	Ⅱ群b類(26)	32
図Ⅴ-28	Ⅱ群b類(27)	33
図Ⅴ-29	Ⅱ群b類(28)	34
図Ⅴ-30	Ⅱ群b類(29)	35
図Ⅴ-31	Ⅱ群b類(30)	36
図Ⅴ-32	Ⅱ群b類(31)	37
図Ⅴ-33	Ⅱ群b類(32)	38
図Ⅴ-34	Ⅱ群b類(33)	39

図Ⅴ-35	Ⅱ群b類(34)	40
図Ⅴ-36	Ⅱ群b類(35)	41
図Ⅴ-37	Ⅱ群b類(36)	42
図Ⅴ-38	Ⅱ群b類(37)	43
図Ⅴ-39	Ⅱ群b類(38)	44
図Ⅴ-40	Ⅱ群b類(39)	45
図Ⅴ-41	Ⅱ群b類(40)	46
図Ⅴ-42	Ⅱ群b類(41)	47
図Ⅴ-43	Ⅱ群b類(42)	48
図Ⅴ-44	Ⅱ群b類(43)	49
図Ⅴ-45	Ⅱ群b類(44)	50
図Ⅴ-46	Ⅱ群b類(45)	51
図Ⅴ-47	Ⅱ群b類(46)	52
図Ⅴ-48	Ⅱ群b類(47)	53
図Ⅴ-49	Ⅱ群b類(48)	54
図Ⅴ-50	Ⅱ群b類(49)	55
図Ⅴ-51	Ⅱ群b類(50)	56
図Ⅴ-52	Ⅱ群b類(51)	57
図Ⅴ-53	Ⅱ群b類(52)	58
図Ⅴ-54	Ⅱ群b類(53)	59
図Ⅴ-55	Ⅱ群b類(54)	60
図Ⅴ-56	Ⅱ群b類(55)	61
図Ⅴ-57	Ⅱ群b類(56)	62
図Ⅴ-58	Ⅱ群b類(57)	63
図Ⅴ-59	Ⅱ群b類(58)	64
図Ⅴ-60	Ⅱ群b類(59)	65
図Ⅴ-61	Ⅱ群b類(60)	66
図Ⅴ-62	Ⅱ群b類(61)	67
図Ⅴ-63	Ⅱ群b類(62)	68
図Ⅴ-64	Ⅱ群b類(63)	69
図Ⅴ-65	Ⅱ群b類(64)	70
図Ⅴ-66	Ⅱ群b類(65)	71
図Ⅴ-67	Ⅱ群b類(66)	72
図Ⅴ-68	Ⅱ群b類(67) 下層d2式冒頭	74
図Ⅴ-69	Ⅱ群b類(68)	75
図Ⅴ-70	Ⅱ群b類(69)	76
図Ⅴ-71	Ⅱ群b類(70)	77
図Ⅴ-72	Ⅱ群b類(71)	78

圖 V-73	II 群 b 類(72)	79	圖 V-111	II 群 b 類(110)	117
圖 V-74	II 群 b 類(73)	80	圖 V-112	II 群 b 類(111)	118
圖 V-75	II 群 b 類(74)	81	圖 V-113	II 群 b 類(112)	119
圖 V-76	II 群 b 類(75)	82	圖 V-114	II 群 b 類(113)	120
圖 V-77	II 群 b 類(76)	83	圖 V-115	II 群 b 類(114)	121
圖 V-78	II 群 b 類(77)	84	圖 V-116	II 群 b 類(115)	122
圖 V-79	II 群 b 類(78)	85	圖 V-117	II 群 b 類(116)	123
圖 V-80	II 群 b 類(79)	86	圖 V-118	II 群 b 類(117)	124
圖 V-81	II 群 b 類(80)	87	圖 V-119	II 群 b 類(118)	125
圖 V-82	II 群 b 類(81)	88	圖 V-120	II 群 b 類(119)	126
圖 V-83	II 群 b 類(82)	89	圖 V-121	II 群 b 類(120)	127
圖 V-84	II 群 b 類(83)	90	圖 V-122	II 群 b 類(121)	128
圖 V-85	II 群 b 類(84)	91	圖 V-123	III 群 a 類(1) 上層 a 1 式冒頭	132
圖 V-86	II 群 b 類(85)	92	圖 V-124	III 群 a 類(2)	133
圖 V-87	II 群 b 類(86)	93	圖 V-125	III 群 a 類(3)	134
圖 V-88	II 群 b 類(87)	94	圖 V-126	III 群 a 類(4)	135
圖 V-89	II 群 b 類(88)	95	圖 V-127	III 群 a 類(5)	136
圖 V-90	II 群 b 類(89)	96	圖 V-128	III 群 a 類(6)	137
圖 V-91	II 群 b 類(90)	97	圖 V-129	III 群 a 類(7)	138
圖 V-92	II 群 b 類(91)	98	圖 V-130	III 群 a 類(8)	139
圖 V-93	II 群 b 類(92)	99	圖 V-131	III 群 a 類(9)	140
圖 V-94	II 群 b 類(93)	100	圖 V-132	III 群 a 類(10)	141
圖 V-95	II 群 b 類(94)	101	圖 V-133	III 群 a 類(11)	142
圖 V-96	II 群 b 類(95)	102	圖 V-134	III 群 a 類(12)	143
圖 V-97	II 群 b 類(96)	103	圖 V-135	III 群 a 類(13)	144
圖 V-98	II 群 b 類(97)	104	圖 V-136	III 群 a 類(14)	145
圖 V-99	II 群 b 類(98)	105	圖 V-137	III 群 a 類(15)	146
圖 V-100	II 群 b 類(99)	106	圖 V-138	III 群 a 類(16)	147
圖 V-101	II 群 b 類(100)	107	圖 V-139	III 群 a 類(17)	148
圖 V-102	II 群 b 類(101)	108	圖 V-140	III 群 a 類(18)	149
圖 V-103	II 群 b 類(102)	109	圖 V-141	III 群 a 類(19)	150
圖 V-104	II 群 b 類(103)	110	圖 V-142	III 群 a 類(20)	151
圖 V-105	II 群 b 類(104)	111	圖 V-143	III 群 a 類(21)	152
圖 V-106	II 群 b 類(105)	112	圖 V-144	III 群 a 類(22)	153
圖 V-107	II 群 b 類(106)	113	圖 V-145	III 群 a 類(23)	154
圖 V-108	II 群 b 類(107)	114	圖 V-146	III 群 a 類(24)	155
圖 V-109	II 群 b 類(108)	115	圖 V-147	III 群 a 類(25)	156
圖 V-110	II 群 b 類(109)	116	圖 V-148	III 群 a 類(26)	157

圖 V - 149	Ⅲ群 a類(27)	158	圖 V - 187	Ⅲ群 a類(65)	199
圖 V - 150	Ⅲ群 a類(28)	159	圖 V - 188	Ⅲ群 a類(66)	200
圖 V - 151	Ⅲ群 a類(29)	160	圖 V - 189	Ⅲ群 a類(67)	201
圖 V - 152	Ⅲ群 a類(30)	161	圖 V - 190	Ⅲ群 a類(68)	202
圖 V - 153	Ⅲ群 a類(31)	162	圖 V - 191	Ⅲ群 a類(69)	203
圖 V - 154	Ⅲ群 a類(32)	163	圖 V - 192	Ⅲ群 a類(70)	204
圖 V - 155	Ⅲ群 a類(33)	164	圖 V - 193	Ⅲ群 a類(71)	205
圖 V - 156	Ⅲ群 a類(34)	165	圖 V - 194	Ⅲ群 a類(72)	206
圖 V - 157	Ⅲ群 a類(35)	166	圖 V - 195	Ⅲ群 a類(73)	207
圖 V - 158	Ⅲ群 a類(36)	167	圖 V - 196	Ⅲ群 a類(74)	208
圖 V - 159	Ⅲ群 a類(37)	168	圖 V - 197	Ⅲ群 a類(75)	209
圖 V - 160	Ⅲ群 a類(38)	169	圖 V - 198	Ⅲ群 a類(76)	210
圖 V - 161	Ⅲ群 a類(39)	170	圖 V - 199	Ⅲ群 a類(77)	211
圖 V - 162	Ⅲ群 a類(40)	上層 a2式冒頭 ... 174	圖 V - 200	Ⅲ群 a類(78)	212
圖 V - 163	Ⅲ群 a類(41)	175	圖 V - 201	Ⅲ群 a類(79)	213
圖 V - 164	Ⅲ群 a類(42)	176	圖 V - 202	Ⅲ群 a類(80)	214
圖 V - 165	Ⅲ群 a類(43)	177	圖 V - 203	Ⅲ群 a類(81)	215
圖 V - 166	Ⅲ群 a類(44)	178	圖 V - 204	Ⅲ群 a類(82)	216
圖 V - 167	Ⅲ群 a類(45)	179	圖 V - 205	Ⅲ群 a類(83)	217
圖 V - 168	Ⅲ群 a類(46)	180	圖 V - 206	Ⅲ群 a類(84)	218
圖 V - 169	Ⅲ群 a類(47)	181	圖 V - 207	Ⅲ群 a類(85)	219
圖 V - 170	Ⅲ群 a類(48)	182	圖 V - 208	Ⅲ群 a類(86)	220
圖 V - 171	Ⅲ群 a類(49)	183	圖 V - 209	Ⅲ群 a類(87)	221
圖 V - 172	Ⅲ群 a類(50)	184	圖 V - 210	Ⅲ群 a類(88)	222
圖 V - 173	Ⅲ群 a類(51)	185	圖 V - 211	Ⅲ群 a類(89)	223
圖 V - 174	Ⅲ群 a類(52)	186	圖 V - 212	Ⅲ群 a類(90)	224
圖 V - 175	Ⅲ群 a類(53)	187	圖 V - 213	Ⅲ群 a類(91)	225
圖 V - 176	Ⅲ群 a類(54)	188	圖 V - 214	Ⅲ群 a類(92)	226
圖 V - 177	Ⅲ群 a類(55)	189	圖 V - 215	Ⅲ群 a類(93)	227
圖 V - 178	Ⅲ群 a類(56)	190	圖 V - 216	Ⅲ群 a類(94)	228
圖 V - 179	Ⅲ群 a類(57)	191	圖 V - 217	Ⅲ群 a類(95)	229
圖 V - 180	Ⅲ群 a類(58)	192	圖 V - 218	Ⅲ群 a類(96)	230
圖 V - 181	Ⅲ群 a類(59)	193	圖 V - 219	Ⅲ群 a類(97)	231
圖 V - 182	Ⅲ群 a類(60)	194	圖 V - 220	Ⅲ群 a類(98)	232
圖 V - 183	Ⅲ群 a類(61)	195	圖 V - 221	Ⅲ群 a類(99)	233
圖 V - 184	Ⅲ群 a類(62)	196	圖 V - 222	Ⅲ群 a類(100)	234
圖 V - 185	Ⅲ群 a類(63)	197	圖 V - 223	Ⅲ群 a類(101)	235
圖 V - 186	Ⅲ群 a類(64)	198	圖 V - 224	Ⅲ群 a類(102)	236

圖 V - 225	Ⅲ群 a類(103)	237	圖 V - 263	Ⅲ群 a類(141)	282
圖 V - 226	Ⅲ群 a類(104)	238	圖 V - 264	Ⅲ群 a類(142)	283
圖 V - 227	Ⅲ群 a類(105)	239	圖 V - 265	Ⅲ群 a類(143)	284
圖 V - 228	Ⅲ群 a類(106)	240	圖 V - 266	Ⅲ群 a類(144)	285
圖 V - 229	Ⅲ群 a類(107)	242	圖 V - 267	Ⅲ群 a類(145)	286
圖 V - 230	Ⅲ群 a類(108)	243	圖 V - 268	Ⅲ群 a類(146)	287
圖 V - 231	Ⅲ群 a類(109)	244	圖 V - 269	Ⅲ群 a類(147)	288
圖 V - 232	Ⅲ群 a類(110)	245	圖 V - 270	Ⅲ群 a類(148)	289
圖 V - 233	Ⅲ群 a類(111)	246	圖 V - 271	Ⅲ群 a類(149)	290
圖 V - 234	Ⅲ群 a類(112)	247	圖 V - 272	Ⅲ群 a類(150)	291
圖 V - 235	Ⅲ群 a類(113)	248	圖 V - 273	Ⅲ群 a類(151)	292
圖 V - 236	Ⅲ群 a類(114)	249	圖 V - 274	Ⅲ群 a類(152)	293
圖 V - 237	Ⅲ群 a類(115)	250	圖 V - 275	Ⅲ群 a類(153)	294
圖 V - 238	Ⅲ群 a類(116)	252	圖 V - 276	Ⅲ群 a類(154)	295
圖 V - 239	Ⅲ群 a類(117)	253	圖 V - 277	Ⅲ群 a類(155)	296
圖 V - 240	Ⅲ群 a類(118)	254	圖 V - 278	Ⅲ群 a類(156)	297
圖 V - 241	Ⅲ群 a類(119)	256	圖 V - 279	Ⅲ群 a類(157)	298
圖 V - 242	Ⅲ群 a類(120)	257	圖 V - 280	Ⅲ群 a類(158)	299
圖 V - 243	Ⅲ群 a類(121)	258	圖 V - 281	Ⅲ群 a類(159)	300
圖 V - 244	Ⅲ群 a類(122)	259	圖 V - 282	Ⅲ群 a類(160)	301
圖 V - 245	Ⅲ群 a類(123)	260	圖 V - 283	Ⅲ群 a類(161)	302
圖 V - 246	Ⅲ群 a類(124)	261	圖 V - 284	Ⅲ群 a類(162)	303
圖 V - 247	Ⅲ群 a類(125)	262	圖 V - 285	Ⅲ群 a類(163)	304
圖 V - 248	Ⅲ群 a類(126)	263	圖 V - 286	Ⅲ群 a類(164)	305
圖 V - 249	Ⅲ群 a類(127)	264	圖 V - 287	Ⅲ群 a類(165)	306
圖 V - 250	Ⅲ群 a類(128)	265	圖 V - 288	Ⅲ群 a類(166)	307
圖 V - 251	Ⅲ群 a類(129)	266	圖 V - 289	Ⅲ群 a類(167)	308
圖 V - 252	Ⅲ群 a類(130)	267	圖 V - 290	Ⅲ群 a類(168)	309
圖 V - 253	Ⅲ群 a類(131)	268	圖 V - 291	Ⅲ群 a類(169)	310
圖 V - 254	Ⅲ群 a類(132)	269	圖 V - 292	Ⅲ群 a類(170)	311
圖 V - 255	Ⅲ群 a類(133) 上層 b 式冒頭	274	圖 V - 293	Ⅲ群 a類(171)	312
圖 V - 256	Ⅲ群 a類(134)	275	圖 V - 294	Ⅲ群 a類(172)	313
圖 V - 257	Ⅲ群 a類(135)	276	圖 V - 295	Ⅲ群 a類(173)	314
圖 V - 258	Ⅲ群 a類(136)	277	圖 V - 296	Ⅲ群 a類(174)	315
圖 V - 259	Ⅲ群 a類(137)	278	圖 V - 297	Ⅲ群 a類(175)	316
圖 V - 260	Ⅲ群 a類(138)	279	圖 V - 298	Ⅲ群 a類(176)	317
圖 V - 261	Ⅲ群 a類(139)	280	圖 V - 299	Ⅲ群 a類(177)	319
圖 V - 262	Ⅲ群 a類(140)	281	圖 V - 300	Ⅲ群 a類(178)	320

図V-301	Ⅲ群 a類(179)	321	図V-337	Ⅲ群 a類(215)	362
図V-302	Ⅲ群 a類(180)	322	図V-338	Ⅲ群 a類(216)	363
図V-303	Ⅲ群 a類(181)	323	図V-339	Ⅲ群 a類(217)	364
図V-304	Ⅲ群 a類(182)	324	図V-340	Ⅲ群 a類(218)	365
図V-305	Ⅲ群 a類(183)	325	図V-341	Ⅲ群 a類(219)	366
図V-306	Ⅲ群 a類(184) 上層b式末～サイハ沢 Ⅶ式(古)冒頭	328	図V-342	Ⅲ群 a類(220) 見晴町式冒頭	368
図V-307	Ⅲ群 a類(185)	329	図V-343	Ⅲ群 a類(221)	369
図V-308	Ⅲ群 a類(186)	330	図V-344	Ⅲ群 a類(222)	370
図V-309	Ⅲ群 a類(187)	331	図V-345	Ⅲ群 a類(223)	371
図V-310	Ⅲ群 a類(188)	332	図V-346	Ⅲ群 a類(224)	372
図V-311	Ⅲ群 a類(189)	333	図V-347	Ⅲ群 a類(225) 円筒土器上層式冒頭	373
図V-312	Ⅲ群 a類(190)	334	図V-348	Ⅲ群 a類(226)	374
図V-313	Ⅲ群 a類(191)	335	図V-349	Ⅲ群 a類(227)	375
図V-314	Ⅲ群 a類(192)	336	図V-350	Ⅲ群 a類(228)	376
図V-315	Ⅲ群 a類(193)	337	図V-351	Ⅲ群 a類(229)	377
図V-316	Ⅲ群 a類(194)	338	図V-352	Ⅲ群 a類(230)	378
図V-317	Ⅲ群 a類(195) サイハ沢Ⅶ式 冒頭	340	図V-353	Ⅲ群 a類(231)	379
図V-318	Ⅲ群 a類(196)	341	図V-354	Ⅳ群 a類(1) 涌元1式冒頭	382
図V-319	Ⅲ群 a類(197)	342	図V-355	Ⅳ群 a類(2)	383
図V-320	Ⅲ群 a類(198) 上層b式末～サイハ沢	343	図V-356	Ⅳ群 a類(3)	384
図V-321	Ⅲ群 a類(199)	344	図V-357	Ⅳ群 a類(4)	385
図V-322	Ⅲ群 a類(200)	345	図V-358	Ⅳ群 a類(5)	386
図V-323	Ⅲ群 a類(201)	346	図V-359	Ⅳ群 a類(6)	387
図V-324	Ⅲ群 a類(202)	347	図V-360	Ⅳ群 a類(7)	388
図V-325	Ⅲ群 a類(203)	348	図V-361	Ⅳ群 a類(8)	389
図V-326	Ⅲ群 a類(204)	349	図V-362	Ⅳ群 a類(9)	390
図V-327	Ⅲ群 a類(205)	350	図V-363	Ⅳ群 a類(10)	391
図V-328	Ⅲ群 a類(206)	351	図V-364	Ⅳ群 a類(11)	392
図V-329	Ⅲ群 a類(207)	353	図V-365	Ⅳ群 a類(12)	393
図V-330	Ⅲ群 a類(208)	355	図V-366	Ⅳ群 a類(13)	394
図V-331	Ⅲ群 a類(209)	356	図V-367	Ⅳ群 a類(14)	395
図V-332	Ⅲ群 a類(210)	357	図V-368	Ⅳ群 a類(15)	397
図V-333	Ⅲ群 a類(211)	358	図V-369	Ⅳ群 a類(16)	398
図V-334	Ⅲ群 a類(212)	359	図V-370	Ⅳ群 a類(17)	399
図V-335	Ⅲ群 a類(213)	360	図V-371	Ⅳ群 a類(18)	400
図V-336	Ⅲ群 a類(214)	361	図V-372	Ⅳ群 a類(19)	401
			図V-373	Ⅳ群 a類(20)	402

図V-374	IV群a類(21)	403	図V-412	擦り切り土製品(1)	444
図V-375	IV群a類(22)	405	図V-413	擦り切り土製品(2)	445
図V-376	IV群a類(23)	406	図V-414	焼成粘土塊等	446
図V-377	IV群a類(24)	407	図V-415	盛土遺構における個体土器のまとまり (1)	448
図V-378	IV群a類(25)	408	図V-416	盛土遺構における個体土器のまとまり (2)	449
図V-379	IV群a類(26)	409	図V-417	盛土遺構における個体土器のまとまり (3)	450
図V-380	IV群a類(27)	410	図V-418	盛土遺構における個体土器のまとまり (4)	451
図V-381	IV群a類(28)	411	図V-419	盛土遺構における個体土器のまとまり (5)	452
図V-382	IV群a類(29)	412	図V-420	盛土遺構における個体土器のまとまり (6)	453
図V-383	IV群a類(30)	413	図V-421	D1区m2(4)層出土一括土器 (上層a2式)	454
図V-384	IV群a類(31)	414	図V-422	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-11)	456
図V-385	IV群a類(32)	415	図V-423	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-14・54)	457
図V-386	IV群a類(33)	416	図V-424	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-24・5ほか)	458
図V-387	IV群a類(34)	417	図V-425	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-3・4ほか)	459
図V-388	IV群a類(35)	418	図V-426	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-39・30ほか)	460
図V-389	IV群a類(36)	419	図V-427	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-48ほか)	461
図V-390	IV群a類(37)	420	図V-428	遺構覆土内における個体土器のまとまり (TH-7ほか)	462
図V-391	IV群a類(38)	421			
図V-392	IV群a類(39)	423			
図V-393	IV群a類(40)	424			
図V-394	IV群a類(41)	425			
図V-395	IV群a類(42)	426			
図V-396	I群a類・I群b類	428			
図V-397	II群a類・III群b類	429			
図V-398	III群b類・IV群a類・IV群b類	430			
図V-399	V群・VI群	431			
図V-400	土偶(1)	432			
図V-401	土偶(2)	433			
図V-402	土偶(3)	434			
図V-403	土偶(4)	435			
図V-404	土偶(5)・土製品(1)	436			
図V-405	土製品(2)	437			
図V-406	円板状土製品(1)	438			
図V-407	円板状土製品(2)	439			
図V-408	円板状土製品(3)	440			
図V-409	円板状土製品(4)	441			
図V-410	円板状土製品(5)	442			
図V-411	円板状土製品(6)等	443			
			VI 館崎遺跡の石器・石製品		
			図VI-1	石鏃(1)	70
			図VI-2	石鏃(2)	71
			図VI-3	石鏃(3)	72
			図VI-4	石鏃(4)	73
			図VI-5	石槍またはナイフ(1)	74

図VI-6	石槍またはナイフ(2)	75	図VI-43	スクレイパー(6)	112
図VI-7	石槍またはナイフ(3)	76	図VI-44	スクレイパー(7)	113
図VI-8	石槍またはナイフ(4)	77	図VI-45	スクレイパー(8)	114
図VI-9	石槍またはナイフ(5)	78	図VI-46	スクレイパー(9)	115
図VI-10	石槍またはナイフ(6)	79	図VI-47	スクレイパー(10)	116
図VI-11	石槍またはナイフ(7)	80	図VI-48	スクレイパー(11)	117
図VI-12	石槍またはナイフ(8)	81	図VI-49	スクレイパー(12)	118
図VI-13	石槍またはナイフ(9)、 ナイフ(1)	82	図VI-50	スクレイパー(13)	119
図VI-14	ナイフ(2)、石錐(1)	83	図VI-51	スクレイパー(14)	120
図VI-15	石錐(2)	84	図VI-52	スクレイパー(15)	121
図VI-16	石錐(3)	85	図VI-53	スクレイパー(16)	122
図VI-17	石錐(4)	86	図VI-54	スクレイパー(17)	123
図VI-18	石錐(5)	87	図VI-55	両面調整石器(1)	124
図VI-19	石錐(6)	88	図VI-56	両面調整石器(2)	125
図VI-20	石錐(7)	89	図VI-57	両面調整石器(3)	126
図VI-21	つまみ付きナイフ(1)	90	図VI-58	両面調整石器(4)	127
図VI-22	つまみ付きナイフ(2)	91	図VI-59	両面調整石器(5)	128
図VI-23	つまみ付きナイフ(3)	92	図VI-60	両面調整石器(6)	129
図VI-24	つまみ付きナイフ(4)	93	図VI-61	両面調整石器(7)	130
図VI-25	つまみ付きナイフ(5)	94	図VI-62	両面調整石器(8)	131
図VI-26	つまみ付きナイフ(6)	95	図VI-63	楔形石器、Rフレイク、剥片	132
図VI-27	つまみ付きナイフ(7)	96	図VI-64	石核(1)	133
図VI-28	つまみ付きナイフ(8)	97	図VI-65	石核(2)	134
図VI-29	つまみ付きナイフ(9)	98	図VI-66	石核(3)	135
図VI-30	筥状石器(1)	99	図VI-67	石核(4)	136
図VI-31	筥状石器(2)	100	図VI-68	石核(5)	137
図VI-32	筥状石器(3)	101	図VI-69	石核(6)	138
図VI-33	筥状石器(4)	102	図VI-70	石核(7)	139
図VI-34	筥状石器(5)	103	図VI-71	石核(8)	140
図VI-35	筥状石器(6)	104	図VI-72	石核(9)	141
図VI-36	筥状石器(7)	105	図VI-73	石核(10)	142
図VI-37	筥状石器(8)	106	図VI-74	石核(11)	143
図VI-38	スクレイパー(1)	107	図VI-75	石核(12)	144
図VI-39	スクレイパー(2)	108	図VI-76	石核(13)	145
図VI-40	スクレイパー(3)	109	図VI-77	石核(14)	146
図VI-41	スクレイパー(4)	110	図VI-78	石核(15)	147
図VI-42	スクレイパー(5)	111	図VI-79	石核(16)	148
			図VI-80	石核(17)	149

図VI-81	石斧(1)	150	図VI-119	砥石(2)	188
図VI-82	石斧(2)	151	図VI-120	砥石(3)	189
図VI-83	石斧(3)	152	図VI-121	砥石(4)	190
図VI-84	石斧(4)	153	図VI-122	合石石皿(1)	191
図VI-85	石斧(5)	154	図VI-123	合石石皿(2)	192
図VI-86	石斧(6)	155	図VI-124	合石石皿(3)	193
図VI-87	たたき石(1)	156	図VI-125	合石石皿(4)	194
図VI-88	たたき石(2)	157	図VI-126	合石石皿(5)	195
図VI-89	たたき石(3)	158	図VI-127	合石石皿(6)	196
図VI-90	たたき石(4)	159	図VI-128	合石石皿(7)	197
図VI-91	たたき石(5)	160	図VI-129	合石石皿(8)	198
図VI-92	たたき石(6)	161	図VI-130	合石石皿(9)	199
図VI-93	たたき石(7)	162	図VI-131	合石石皿(10)	200
図VI-94	たたき石(8)	163	図VI-132	合石石皿(11)	201
図VI-95	たたき石(9)	164	図VI-133	合石石皿(12)	202
図VI-96	たたき石(10)	165	図VI-134	合石石皿(13)	203
図VI-97	たたき石(11)	166	図VI-135	合石石皿(14)	204
図VI-98	すり石(1)	167	図VI-136	合石石皿(15)	205
図VI-99	すり石(2)	168	図VI-137	合石石皿(16)	206
図VI-100	すり石(3)	169	図VI-138	合石石皿(17)	207
図VI-101	すり石(4)	170	図VI-139	合石石皿(18)	208
図VI-102	すり石(5)	171	図VI-140	石製品等(1) 岩偶(1)	209
図VI-103	扁平打製石器(1)	172	図VI-141	石製品等(2) 岩偶(2)	210
図VI-104	扁平打製石器(2)	173	図VI-142	石製品等(3) 球状耳飾(1)	211
図VI-105	扁平打製石器(3)	174	図VI-143	石製品等(4) 球状耳飾(2)	212
図VI-106	扁平打製石器(4)	175	図VI-144	石製品等(5) 球状耳飾(3)	213
図VI-107	扁平打製石器(5)	176	図VI-145	石製品等(6) 球状耳飾(4)、 垂飾・玉類(1)	214
図VI-108	扁平打製石器(6)	177	図VI-146	石製品等(7) 垂飾・玉類(2)、 円板状石製品	215
図VI-109	扁平打製石器(7)	178	図VI-147	石製品等(8) 三角形石製品、 三脚・四脚石器(1)	216
図VI-110	北海道式石冠(1)	179	図VI-148	石製品等(9) 三脚・四脚石器(2)、 異形石器(1)	217
図VI-111	北海道式石冠(2)	180	図VI-149	石製品等(10) 異形石器(2)	218
図VI-112	北海道式石冠(3)	181	図VI-150	石製品等(11) 鳥帽子形石器(1)	219
図VI-113	北海道式石冠(4)	182	図VI-151	石製品等(12) 鳥帽子形石器(2)	220
図VI-114	北海道式石冠(5)	183	図VI-152	石製品等(13) 鳥帽子形石器(3)	221
図VI-115	北海道式石冠(6)、石錘(1)	184			
図VI-116	石錘(2)	185			
図VI-117	石錘(3)、礫器	186			
図VI-118	石鋸、砥石(1)	187			

図VI-153	石製品等(14)	烏帽子形石器(4) … 222
図VI-154	石製品等(15)	烏帽子形石器(5) … 223
図VI-155	石製品等(16)	側縁有溝石器(1) … 224
図VI-156	石製品等(17)	側縁有溝石器(2) … 225
図VI-157	石製品等(18)	側縁有溝石器(3) … 226
図VI-158	石製品等(19)	側縁有溝石器(4)、 長板状石製品(1) … 227
図VI-159	石製品等(20)	長板状石製品(2) … 228
図VI-160	石製品等(21)	長板状石製品(3) … 229
図VI-161	石製品等(22)	長板状石製品(4) … 230
図VI-162	石製品等(23)	石棒(1) … 231
図VI-163	石製品等(24)	石棒(2) … 232
図VI-164	石製品等(25)	石棒(3) … 233
図VI-165	石製品等(26)	石棒(4) … 234
図VI-166	石製品等(27)	石棒(5) … 235
図VI-167	石製品等(28)	石製品(1) … 236
図VI-168	石製品等(29)	石製品(2) … 237
図VI-169	石製品等(30)	石製品(3)、線刻礫(1) … 238
図VI-170	石製品等(31)	線刻礫(2)、穿孔された 礫、有孔礫(1) … 239
図VI-171	石製品等(32)	有孔礫(2) … 240
図VI-172	石製品等(33)	有孔礫(3)、石製品(4)、 変わり石、礫 … 241
図VI-173	石製品等(34)	軽石製品(1) … 242
図VI-174	石製品等(35)	軽石製品(2) … 243
図VI-175	石製品等(36)	軽石製品(3) … 244
図VI-176	石製品等(37)	軽石製品(4) … 245
図VI-177	石製品等(38)	軽石製品(5) … 246
図VI-178	石製品等(39)	軽石製品(6) … 247
図VI-179	石製品等(40)	軽石製品(7)、 寛永通宝 … 248
図VI-180	石器・石製品模式図	… 249
図VI-181	住居跡床面掘え付けの台石石皿	… 257
図VI-182	住居跡中央ピット出土石器(1)	… 258
図VI-183	住居跡中央ピット出土石器(2)	… 259
図VI-184	岩偶の大きさの比較図	… 260
図VI-185	珠状耳飾・筒状垂飾	… 260

図VI-186	石製品出土分布(1)	… 262
図VI-187	石製品出土分布(2)、 石器・石製品接合状況	… 263
図VI-188	烏帽子形石器・側縁有溝石器	… 264
図VI-189	長板状石製品	… 265
図VI-190	石棒	… 266

VI 館崎遺跡の骨角器

図VII-1	骨角器(1): 鋸頭	… 9
図VII-2	骨角器(2): 釣針・刺突具(1)	… 10
図VII-3	骨角器(3): 刺突具(2)・骨錐・骨笄 … 11	
図VII-4	骨角器(4): 骨針・刺離具・装身具・ 未成品など	… 12
図VII-5	骨角器(5): 残片・サメ歯製品	… 13
図VII-6	鋸頭の材取り想定図・釣針の結合想定図 … 16	

VII 館崎遺跡の動物遺存体

図VIII-1	魚類出土比率	… 32
図VIII-2	サメ類椎骨の大きさ	… 34
図VIII-3	ニシン腹椎長	… 35
図VIII-4	フサカサゴ科遺存体の大きさ	… 37
図VIII-5	アイナメ属遺存体の大きさ	… 39
図VIII-6	マダイ方骨の大きさ	… 40
図VIII-7	サバ科歯骨の大きさ	… 41
図VIII-8	鳥類出土比率	… 42
図VIII-9	哺乳類出土比率	… 44
図VIII-10	哺乳類種別被熱率	… 44
図VIII-11	オットセイ部位別出現率	… 49

IX 自然科学的分析

図IX-1-1	(参考) 暦年較正年代グラフ	… 63
図IX-2-1	(参考) 暦年較正年代グラフ	… 68
図IX-3-1	(参考) 暦年較正年代グラフ	… 73
図IX-4-1	暦年較正結果	… 77
図IX-5-1	暦年較正結果	… 79
図IX-6-1	火山灰採取地点の地質柱状図	… 82

図IX-6-2	火山ガラスの化学組成値分布…	83			
図IX-7-1	日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラ スカ州における表IX-7-1使用の 石器原材伝播図……………	97			
図IX-7-2	黒曜石原産地……………	97			
図IX-7-3	和田村付近地域原石採取地点と和田 峠諸群……………	103			
図IX-9-2-1	帯磁率測定結果(対比試料) ……………	110			
図IX-9-2-2	帯磁率測定結果(福島町館崎遺 跡遺物)……………	110			
図IX-9-4-1	各地域のタルクの $100 \times \text{MgO} /$ ($\Sigma \text{FeO} + \text{MgO}$) - NiO図…	121			
図IX-9-4-2	館崎遺跡遺物試料の $100 \times \text{MgO}$ $/ (\Sigma \text{FeO} + \text{MgO}) - \text{NiO}$ 図 ……………	121			
図IX-9-4-3	各地域のタルクの $\text{Cr}_2\text{O}_3 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図 ……………	122			
図IX-9-4-4	館崎遺跡遺物試料の $\text{Cr}_2\text{O}_3 -$ Al_2O_3 図……………	122			
図IX-9-4-5	各地域のタルクの $\text{Cr}_2\text{O}_3 - \text{NiO} -$ MnO 図……………	123			
図IX-9-4-6	館崎遺跡遺物試料の $\text{Cr}_2\text{O}_3 -$ $\text{NiO} - \text{MnO}$ 図……………	123			
図IX-10-3-1	$100 \times \text{MgO} / (\Sigma \text{FeO} + \text{MgO} - \text{NiO})$ 図……………	140			
図IX-10-3-2	$\text{Cr}_2\text{O}_3 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図……………	141			
図IX-10-3-3	$\text{Cr}_2\text{O}_3 - \text{NiO} - \text{MnO}$ 図……………	142			
図IX-10-3-4	原石産地判別図……………	150			
図IX-11-1	火成岩分類図……………	151			
図IX-11-2	$\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図……………	154			
図IX-11-3	$\text{SiO}_2 - \text{MgO}$ 図……………	155			
図IX-11-4	$\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図……………	155			
図IX-12-1	出土資料と各種動物のOn.ArとH.Ar ……………	167			
図IX-14-1	H5区互層盛土エリア(Loc.1)のプ ラント・オバール分布図……………	182			
図IX-14-2	C9区道路跡エリア(Loc.7)のプ ラント・オバール分布図……………	182			
図IX-14-3	C11区後期盛土エリア(Loc.8)のプ ラント・オバール分布図……………	183			
図IX-15-1	館崎遺跡における花粉ダイアグラム ……………	187			
X 総括					
図X-1	主な拠点集落遺跡の分布……………	213			
図X-2	竪穴住居の型式……………	214			
図X-3	竪穴住居の分布変遷……………	215			
図X-4	埋葬姿勢の集成……………	218			
図X-5	墓・土坑の分布変遷……………	219			
図X-6	盛土遺構堆積模式図……………	221			
図X-7	盛土遺構の分布変遷……………	222			
図X-8	集落の変遷想定……………	224			
図X-9	竪穴住居の分布変遷(1)……………	226			
図X-10	竪穴住居の分布変遷(2)……………	227			
図X-11	竪穴住居の分布変遷(3)……………	228			
図X-12	竪穴住居の分布変遷(4)……………	229			
図X-13	竪穴住居の分布変遷(5)……………	230			
図X-14	墓・土坑の分布変遷(1)……………	231			
図X-15	墓・土坑の分布変遷(2)……………	232			
図X-16	墓・土坑の分布変遷(3)……………	233			
図X-17	墓・土坑の分布変遷(4)……………	234			
図X-18	集落の変遷想定(1)……………	235			
図X-19	集落の変遷想定(2)……………	236			
図X-20	集落の変遷想定(3)……………	237			
図X-21	集落の変遷想定(4)……………	238			
図X-22	集落の変遷想定(5)……………	239			
図X-23	集落の変遷想定(6)……………	240			
図X-24	集落の変遷想定(7)……………	241			
図X-25	個体土器の分布変遷(1)……………	244			
図X-26	個体土器の分布変遷(2)……………	245			
図X-27	埋設土器・倒立土器・正立土器集成(1) ……………	246			
図X-28	倒立土器・正立土器集成(2)……………	247			
図X-29	倒立土器・正立土器集成(3)……………	248			
図X-30	近接して礫が出土した個体土器……………	249			

図X-31	倒立土器・正立土器分布図	250	図X-39	顔面表現の可能性がある土器(3)	282
図X-32	近接して礫が出土している個体土器の分布図	250	図X-40	顔面表現の可能性がある土器(4)・人体文ほか	283
図X-33	半円状を呈した個体土器の出土状況	252	図X-41	長野・霧ヶ峰産黒曜石製石鏃	288
図X-34	突き傷が目立つ土器の分布図	252	図X-42	石器の組成(1)	290
図X-35	土器属性模式図(1)	264	図X-43	石器の組成(2)	291
図X-36	土器属性模式図(2)	265	図X-44	石材産地の現況(1)	293
図X-37	顔面表現の可能性がある土器(1)	280	図X-45	石材産地の現況(2)	294
図X-38	顔面表現の可能性がある土器(2)	281	図X-46	較正年代一覧	302

表目次

I 調査の概要

表I-1	遺構数一覧	8
表I-2	土器・土製品出土点数一覧	9
表I-3	骨角器出土点数一覧	9
表I-4	石器・石製品等出土点数一覧	10

II 遺跡の位置と環境

表II-1	福島町域の遺跡	21
-------	---------	----

III 調査の方法

表III-1	近代の遺物	37
--------	-------	----

IV 館崎遺跡の遺構

表IV-1	遺構一覧(盛土遺構・堅穴住居跡)	142
表IV-2	遺構一覧(土坑・Tピット)	143
表IV-3	遺構一覧(焼土)	144
表IV-4	遺構一覧(集石・フレイク集中・埋設土器・配石列・道路跡・防空壕跡・塹壕跡)	145
表IV-5	小ピット・杭列一覧	146
表IV-6	盛土層の盛土遺構区分と時期	148

V 館崎遺跡の土器・土製品

表V-1	盛土遺構における土器の まとまり(遺存率40%以上)	454
表V-2	堅穴住居跡における土器の まとまり(遺存率20%以上)	463
表V-3	掲載土器一覧の凡例	465
表V-4	掲載土器一覧	466
表V-5	掲載土製品等一覧	524
表V-6	属性一覧	527
表V-6-1	文様帯(基調文様1)	527
表V-6-2	文様帯(基調文様2)	528
表V-6-3	文様帯範囲幅	528
表V-6-4	口径	529
表V-6-5	径較差	529

表V-6-6	口縁部屈曲範囲幅	530
表V-6-7	推定最大容量	530
表V-6-8	推定重量	531
表V-6-9	推定重量比	531
表V-7	盛土遺構内出土土器点数一覧	532
表V-8	遺構内出土土器点数一覧	540
表V-9	盛土遺構内出土 40%以上遺存土器一覧	546
表V-10	遺構内出土20%以上 遺存土器一覧	562
表V-11	個体土器一覧1-627	567

VI 館崎遺跡の石器・石製品等

表VI-1	器種別・石材別出土石器・石製品等 出土点数一覧	3
表VI-2	住居跡中央ピット出土石器等点数一覧	259
表VI-3	珠状耳飾観察表	261
表VI-4	烏帽子形石器観察表	265
表VI-5	側縁有溝石器観察表	265
表VI-6	長板状石製品観察表	265
表VI-7	掲載石器・石製品等一覧	267
表VI-8	盛土遺構等出土石器・石製品等 点数一覧	284
表VI-9	遺構出土石器・石製品等点数一覧 (住居跡・土坑・配石列・塹壕跡)	296
表VI-10	遺構出土石器・石製品等点数一覧 (Tピット・焼土・集石・フレイク集中・ 小ピット・杭列)	303

VII 館崎遺跡の骨角器

表VII-1	点数・重量一覧	1
表VII-2	時期別・器種別詳細一覧	1
表VII-3	材質一覧	2
表VII-4	骨角器属性一覧	14

Ⅶ 館崎遺跡の動物遺存体

表Ⅶ-1	検出動物遺存体一覧	17
表Ⅶ-2	盛土遺構・包含層の動物遺存体出土量と時期	29
表Ⅶ-3	各遺構の動物遺存体出土量と時期	30
表Ⅶ-4	盛土遺構区分毎の動物遺存体出土量と時期	31
表Ⅶ-5	各遺構の動物遺存体出土量と時期一覧	31
表Ⅶ-6	貝類集計表	32
表Ⅶ-7	出土魚類一覧	32
表Ⅶ-8	魚類主要部位点数一覧(椎骨以外)	32
表Ⅶ-9	魚類主要部位点数一覧(椎骨)	32
表Ⅶ-10	盛土遺構・包含層魚類出土点数分布(全体)	32
表Ⅶ-11	盛土遺構・包含層魚類出土点数分布(種別)	33
表Ⅶ-12	遺構別魚類出土点数一覧	33
表Ⅶ-13	サメ類点数一覧(遊離歯以外)	34
表Ⅶ-14	サメ類点数一覧(遊離歯)	34
表Ⅶ-15	サメ類集計表	34
表Ⅶ-16	エイ類集計表	34
表Ⅶ-17	キュウリウオ科集計表	34
表Ⅶ-18	サケ科集計表	34
表Ⅶ-19	コイ科集計表	34
表Ⅶ-20	ニシン科集計表	35
表Ⅶ-21	タラ科集計表	35
表Ⅶ-22	フサカサゴ科集計表	35
表Ⅶ-23	アイナメ科集計表	38
表Ⅶ-24	カジカ科集計表	39
表Ⅶ-25	スズキ科集計表	39
表Ⅶ-26	タイ科集計表	40
表Ⅶ-27	サバ科集計表	41
表Ⅶ-28	カレイ科集計表	41
表Ⅶ-29	ヒラメ集計表	41
表Ⅶ-30	フグ科?集計表	41
表Ⅶ-31	カエル類集計表	41
表Ⅶ-32	出土鳥類一覧	42
表Ⅶ-33	鳥類主要部位点数一覧	42

表Ⅶ-34	盛土遺構・包含層鳥類出土点数分布(種別)	42
表Ⅶ-35	盛土遺構・包含層鳥類出土点数分布(全体)	42
表Ⅶ-36	遺構別鳥類出土点数一覧	42
表Ⅶ-37	カモメ科集計表	43
表Ⅶ-38	カモメ科集計表	43
表Ⅶ-39	ウミスズメ科集計表	43
表Ⅶ-40	カイツブリ科集計表	44
表Ⅶ-41	ミズナギドリ科集計表	44
表Ⅶ-42	ウ科集計表	44
表Ⅶ-43	アビ科・タカ科・フクロウ目・スズメ目・カラス科集計表	44
表Ⅶ-44	出土哺乳類一覧	44
表Ⅶ-45	出土哺乳類骨被熟率	44
表Ⅶ-46	遺構別哺乳類出土点数一覧	45
表Ⅶ-47	盛土遺構・包含層哺乳類出土点数分布(種別)	45
表Ⅶ-48	盛土遺構・包含層哺乳類出土点数分布(全体)	45
表Ⅶ-49	ネズミ科・イヌ科集計表	46
表Ⅶ-50	ニホンジカ主要部位点数一覧	46
表Ⅶ-51	ニホンジカ集計表(角)	46
表Ⅶ-52	ニホンジカ集計表(角以外)	46
表Ⅶ-53	アザラシ科集計表	47
表Ⅶ-54	アシカ類集計表	47
表Ⅶ-55	アシカ類・アザラシ科主要部位点数一覧	47
表Ⅶ-56	イルカ類集計表	47
表Ⅶ-57	クジラ類集計表	47
表Ⅶ-58	オットセイ主要部位点数一覧	48
表Ⅶ-59	オットセイ性別・成長段階別点数一覧	49
表Ⅶ-60	オットセイ集計表	50
表Ⅶ-61	オットセイ部位別遺存状態	50
表Ⅶ-62	オットセイ歯牙一覧	51
表Ⅶ-63	オットセイ主要部位計測表	52
表Ⅶ-64	オットセイ?集計表	57

IX 自然科学的分析

表IX-1-1	測定試料及び放射性炭素年代…	60	表IX-7-10	館崎遺跡出土黒曜石製造物の産地分 析結果……………	103
表IX-1-2	放射性炭素年代及び暦年較正の結果 ……………	61	表IX-8-1	各元素の測定条件(例)……………	104
表IX-2-1	測定試料及び放射性炭素年代…	67	表IX-8-2	F P法蛍光X線分析結果……………	105
表IX-2-2	放射性炭素年代及び暦年較正の結果 ……………	67	表IX-9-0-1	分析資料一覧……………	106
表IX-3-1	測定試料及び放射性炭素年代…	71	表IX-9-1-1	実体顕微鏡観察結果……………	107
表IX-3-2	放射性炭素年代及び暦年較正の結果 ……………	72	表IX-9-2-1	帯磁率測定結果 (福島町館崎遺跡資料)……………	108
表IX-4-1	測定試料および処理……………	75	表IX-9-2-2	帯磁率測定結果(A S対比試料) ……………	109
表IX-4-2	放射性炭素年代及び暦年較正の結果 ……………	76	表IX-9-2-3	帯磁率測定結果(提供対比試料) ……………	109
表IX-5-1	測定試料および処理……………	78	表IX-9-3-1	各元素の測定条件(例)……………	111
表IX-5-2	放射性炭素年代及び暦年較正の結果 ……………	79	表IX-9-3-2	遺物分析結果一覧……………	112
表IX-6-1	火山灰の鉱物組み合わせ……………	82	表IX-9-3-3	対比試料(松前)分析結果一覧 ……………	114
表IX-6-2	火山ガラスの化学組成……………	84	表IX-9-3-4	A S対比試料分析結果一覧 ……………	115
表IX-7-1	黒曜石の元素比の平均値と標準偏差値 ……………	98	表IX-9-3-5	推定鉱物名一覧(館崎遺跡遺物) ……………	116
表IX-7-2	湧別川河口域の河床から採取した 247個の黒曜石円礫の分類結果…	101	表IX-9-3-6	推定鉱物名一覧 (対比試料(松前))……………	117
表IX-7-3	常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取 した661個の黒曜石円礫の分類結果 ……………	101	表IX-9-3-7	推定鉱物名一覧(A S対比試料) ……………	117
表IX-7-4	サナブチ川から採取した80個の黒曜 石円礫の分類結果……………	101	表IX-10-0-1	鑑定・分析資料一覧……………	134
表IX-7-5	金華地区から採取した20個の黒曜石 円礫の分類結果……………	101	表IX-10-1-1	肉眼鑑定結果一覧……………	136
表IX-7-6	生田原川支流支線川から採取した19 個の黒曜石円礫の分類結果…	101	表IX-10-2-1	各元素の測定条件(例)……………	137
表IX-7-7	生田原川支流大黒沢川から採取した 5個の黒曜石円礫の分類結果…	101	表IX-10-2-2	蛍光X線分析結果一覧……………	138
表IX-7-8	中信高原地域原石採取地点における 各原石群の出現頻度……………	102	表IX-11-1	火成岩分類表……………	151
表IX-7-9	館崎遺跡出土黒曜石製造物の元素比 分析結果……………	102	表IX-11-2	原産地対比表……………	154
			表IX-11-3	化学分析表……………	156
			表IX-12-1	二次オステオンの面積(On.Ar)と ハバース管の面積(H.Ar) ……	165
			表IX-12-2	比較動物標本の二次オステオンの 面積(On.Ar)とハバース管の面積 (H.Ar) ……	166
			表IX-12-3	観察所見と種同定結果……………	166
			表IX-13-1	出土人骨の概要……………	175

表IX-15-1	産出花粉化石一覧表……………	186	表X-12	円筒土器属性掲載土器対応表 (文様帯形状)……………	270
表IX-16-1	分析サンプル一覧……………	193	表X-13	円筒土器属性掲載土器対応表 (文様帯貼付等)……………	270
表IX-16-2	福島町館崎遺跡における炭化種実同 定結果……………	194	表X-14	円筒土器属性掲載土器対応表 (突起下の区画)……………	271
表IX-17-1	館崎遺跡検出圧痕の時期別一覧表 ……………	202	表X-15	円筒土器属性掲載土器対応表 (文様帯主構成)……………	271
表IX-17-2	検出圧痕一覧表……………	211	表X-16	口唇上・口縁部に付した縄・燃糸…	272
X 総括			表X-17	基調地文の割合……………	273
表X-1	土器型式別40%以上遺存土器一覧…	242	表X-18	体積高の割合……………	273
表X-2	埋設土器・倒立土器・正立土器一覧 ……………	250	表X-19	推定容量比……………	273
表X-3	裸が近接して出土した個体土器一覧 ……………	251	表X-20	推定平均重量比……………	274
表X-4	形状を保って出土した土器を覆う土が薄 い互層であったもの……………	251	表X-21	口径比……………	274
表X-5	突き傷が目立つ土器一覧……………	253	表X-22	径較差……………	274
表X-6	突き傷が目立たなかった土器一覧…	254	表X-23	文様帯範囲幅の割合(器高比)……	274
表X-7	円筒土器属性一覧(1)……………	267	表X-24	土器内面の化粧土様の処理一覧…	278
表X-8	円筒土器属性一覧(2)……………	267	表X-25	顔面表現・人体表現一覧……………	279
表X-9	円筒土器属性一覧(3)……………	268	表X-26	他型式の可能性のある土器一覧…	284
表X-10	円筒土器属性一覧(4)……………	268	表X-27	骨角器一覧……………	295
表X-11	円筒土器属性掲載土器対応表 (突起形状)……………	269	表X-28	動物遺存体一覧……………	296
			表X-29	植物炭化種実一覧……………	299
			表X-30	炭素年代測定値一覧……………	302

写真図版目次

口絵

- 口絵1 盛土遺構
 口絵2 遺跡遠景、遺跡周辺景観
 口絵3 調査区周辺近景
 口絵4 土層断面
 口絵5 廃絶住居の窪みの土器集中、
 盛土遺構中の土器集中
 口絵6 埋葬姿勢(TH-9、TP-18・26・73・82)
 口絵7 土器集合写真(1)
 口絵8 土器集合写真(2)
 口絵9 球状耳飾
 口絵10 石製品

Ⅸ 自然科学的分析

- 図版Ⅸ-5-1 館崎遺跡TH-18から出土した炭
 化種実…………… 78
 図版Ⅸ-6-1 火山灰採取地点の地質断面と火山
 ガラスのSEM像…………… 87
 図版Ⅸ-8-1 分析位置…………… 105
 図版Ⅸ-8-2 分析機器…………… 105
 図版Ⅸ-9-1 分析ポイント…………… 125
 図版Ⅸ-10-1 分析状況…………… 139
 図版Ⅸ-10-2 分析ポイント…………… 145
 図版Ⅸ-11-1 分析機器…………… 152
 図版Ⅸ-11-2 分析資料…………… 157
 図版Ⅸ-12-1 出土鋸頭・釣針の骨組織形態
 ……………… 170
 図版Ⅸ-12-2 出土釣針の骨組織形態…………… 171
 図版Ⅸ-12-3 出土刺突具の骨組織形態…………… 172
 図版Ⅸ-12-4 出土骨髄・骨寛・骨針の骨組織形態
 ……………… 173
 図版Ⅸ-13-1 TP-73人骨の右上顎中切歯(右
 側)と側切歯…………… 177
 図版Ⅸ-14-1 館崎遺跡H5地区(Loc.1)試料の
 プラント・オパール…………… 183
 図版Ⅸ-15-1 館崎遺跡から産出した花粉化石

…………… 188

図版Ⅸ-16-1 福島町館崎遺跡の草本種実… 200

図版Ⅸ-16-2 福島町館崎遺跡の樹木種実… 201

図版Ⅸ-17-1 館崎遺跡出土土器任意・レプリカ
 SEM画像…………… 204

写真図版

- 図版1 遺跡空撮
 図版2,3 盛土パノラマ、調査風景
 図版4,5 調査風景
 図版6 P盛土
 図版7 P盛土、P・P'盛土
 図版8 P盛土、P'盛土、B・C'盛土
 図版9 P'盛土、P・P'盛土
 図版10,11 A、B盛土
 図版12,13 A、B、P盛土
 図版14,15 A、B、C'盛土
 図版16,17 B、C'盛土
 図版18 A、B、C盛土
 図版19 B盛土
 図版20 B盛土
 図版21 B盛土
 図版22 B盛土
 図版23 B、C盛土
 図版24 C盛土
 図版25 B、C、C'盛土
 図版26 B、C'盛土、A盛土相当部分
 図版27 D盛土
 図版28 A、B、C盛土相当部分
 図版29 C盛土相当部分、南半定点観測
 図版30 南半定点観測
 図版31 道路側定点観測
 図版32 道路側定点観測
 図版33 道路側定点観測
 図版34 B盛土定点観測
 図版35 B盛土定点観測

- 図版36 C盛土定点観測
- 図版37 C盛土定点観測
- 図版38 C盛土定点観測
- 図版39 平成23年度調査区
- 図版40 個体土器出土形態(1)
- 図版41 個体土器出土形態(2)
- 図版42 平成23年度調査区
- 図版43 TH-2
- 図版44 TH-3
- 図版45 TH-3
- 図版46 TH-4、TH-5
- 図版47 TH-4、TH-5
- 図版48 TH-5
- 図版49 TH-5
- 図版50 TH-7
- 図版51 TH-7、TH-8(旧)、TH-30(新)
- 図版52 TH-8(旧)・(新)a・(新)b、TH-30
- 図版53 TH-8(旧)、TH-29
- 図版54 TH-8(旧)・(新)a・(新)b
- 図版55 TH-8(新)
- 図版56,57 平成21年度南半住居跡群
- 図版58,59 平成22年度北半住居跡群
- 図版60 TH-9、TH-47
- 図版61 TH-9、TH-40、TH-47
- 図版62 TH-9
- 図版63 TH-9
- 図版64 TH-9、TH-10
- 図版65 TH-10、TH-11
- 図版66 TH-11
- 図版67 TH-11
- 図版68 TH-11、TH-12
- 図版69 TH-12、TH-35
- 図版70 TH-12
- 図版71 TH-13
- 図版72 TH-13、TH-14
- 図版73 TH-14
- 図版74 TH-14
- 図版75 TH-15
- 図版76 TH-16
- 図版77 TH-17
- 図版78 TH-17、TH-18
- 図版79 TH-18、TH-112
- 図版80 TH-18、TH-19
- 図版81 TH-18
- 図版82 TH-19
- 図版83 TH-20
- 図版84 TH-20、TH-21
- 図版85 TH-21
- 図版86 TH-21、TH-23(新)
- 図版87 TH-22
- 図版88,89 TH-21、TH-22、TH-23(新)、
TH-24、TH-25、TH-40、TP-26
- 図版90 TH-22、TH-25、TH-40
- 図版91 TH-22、TH-29、TH-30、TH-31
- 図版92 TH-22
- 図版93 TH-23
- 図版94 TH-23
- 図版95 TH-23(旧)
- 図版96 TH-23(新)
- 図版97 TH-24
- 図版98,99 平成21年度J10杭付近住居群
- 図版100 TH-21、TH-24、TP-26
- 図版101 TH-24
- 図版102 TH-24
- 図版103 TH-25
- 図版104 TH-25
- 図版105 TH-25
- 図版106 TH-27
- 図版107 TH-27
- 図版108 TH-27
- 図版109 TH-27、TH-28
- 図版110 TH-28
- 図版111 TH-28
- 図版112 TH-29、TH-8、TH-31
- 図版113 TH-29
- 図版114 TH-29

- 图版115 TH-29
 图版116 TH-30(旧)
 图版117 TH-30(旧)
 图版118 TH-30(新)
 图版119 TH-30(新)
 图版120,121 TH-30(新)、TH-8(旧)、TH-22、
 TH-25、TH-29、TH-40
 图版122 TH-30(新)
 图版123 TH-31、TH-32
 图版124 TH-32、TH-34(旧)
 图版125 TH-32、TH-48
 图版126 TH-32
 图版127 TH-33、TH-27
 图版128 TH-33
 图版129 TH-34
 图版130 TH-34
 图版131 TH-34
 图版132 TH-34
 图版133 TH-34(新)、TH-32
 图版134 TH-35
 图版135 TH-35
 图版136,137 TH-35、TH-12
 图版138,139 TH-37、TH-33、TH-9、
 TH-47、TP-51
 图版140 TH-37、TH-47
 图版141 TH-37
 图版142 TH-39
 图版143 TH-39、TH-8(新)、TH-49、
 TH-34(新)
 图版144 TH-39、TH-40
 图版145 TH-40、TH-8(旧)、TH-9、
 TH-30(新)、TH-37
 图版146 TH-42
 图版147 TH-44
 图版148 TH-44
 图版149 TH-45
 图版150 TH-45、TH-47、TH-48
 图版151 TH-48
 图版152 TH-49、TH-35、TH-54
 图版153 TH-49
 图版154 TH-54、P盛土
 图版155 TH-54、TH-55
 图版156 TH-61
 图版157 TH-61
 图版158,159 完掘
 图版160,161 完掘
 图版162 TP-1~5
 图版163 TP-6~8
 图版164 TP-9~13、TTP-1
 图版165 TP-15~18
 图版166 TP-18
 图版167 TP-18
 图版168 TP-18
 图版169 TP-18
 图版170 TP-19、21~24
 图版171 TP-25、26
 图版172 TP-26、28~30
 图版173 TP-30、32、33
 图版174 TP-34、35、38~40
 图版175 TP-41~46
 图版176 TP-46~49
 图版177 TP-50、51、53
 图版178 TP-55、56、58、59、61
 图版179 TP-61~64
 图版180 TP-65~68
 图版181 TP-70~73
 图版182 TP-73
 图版183 TP-73、75~77
 图版184 TP-78、80~83、85
 图版185 TP-82、86、87
 图版186 TP-89、91~95
 图版187 TP-96~100
 图版188 TP-101~106
 图版189 TP-107、114、116、121、122
 图版190 TP-123、126、128、134
 图版191 TF-1、5、6、11、17~19

- 図版192 TF-78、102、112、121
TS-3、4、7、10、12、16
- 図版193 TS-17、18、20～27、29
- 図版194 TS-31、32、TFC-3～11、14
- 図版195 TFC-20、21、23、25～27、29、
31～34、36
- 図版196 TFC-37、39～48
- 図版197 SP-5～7、9、10、12、91、121、
124、130、136、163、171、173
- 図版198 SP-169、226、254、275、SP群
- 図版199 杭列
- 図版200 配石列1、配石列3、道路跡
- 図版201 配石列1
- 図版202 配石列2、道路跡
- 図版203 塹壕跡、防空壕跡
- 図版204 遺物出土状況
- 図版205 盛土遺構出土復元土器集合(1)
- 図版206 盛土遺構出土復元土器集合(2)
- 図版207 使用痕、整形痕
- 図版208 炭化物付着状況(1)
- 図版209 炭化物付着状況(2)
- 図版210 炭化物付着状況(3)、局部破碎土器、
アスファルト付着土器、赤彩土器
- 図版211 土製品(1) 土偶
- 図版212 石器石材(1)
- 図版213 石器石材(2)
- 図版214 石製品等(1) 岩偶(正面)
- 図版215 石製品等(2) 岩偶(裏面)
- 図版216 石製品等(3) 塊状耳飾 切目面(1)
- 図版217 石製品等(4) 塊状耳飾 切目面(2)
- 図版218 石製品等(5) 塊状耳飾(1)
- 図版219 石製品等(6) 塊状耳飾(2)
- 図版220 石製品等(7) 塊状耳飾(3)
- 図版221 石製品等(8) 塊状耳飾(4)
- 図版222 石製品等(9) 塊状耳飾(5)
- 図版223 石製品等(10) 塊状耳飾(6)、
垂飾・玉類(1)
- 図版224 石製品等(11) 垂飾・玉類(2)
- 図版225 石製品等(12) 垂飾・玉類(3)、
塊状耳飾・垂飾拡大(1)
- 図版226 石製品等(13) 塊状耳飾・垂飾拡大(2)
- 図版227 石製品等(14) 塊状耳飾・垂飾拡大(3)
- 図版228 トクサによる加工実験、化石(1)
- 図版229 化石(2)
- 図版230 化石(3)
- 図版231 TH-21・TH-25中央ピット出土遺物
- 図版232 土器(1) 1～9
- 図版233 土器(2) 10～18
- 図版234 土器(3) 19～25、30
- 図版235 土器(4) 26、31～33
- 図版236 土器(5) 27～29、34～38
- 図版237 土器(6) 39～47
- 図版238 土器(7) 48～56
- 図版239 土器(8) 57～65
- 図版240 土器(9) 66～74
- 図版241 土器(10) 75～83
- 図版242 土器(11) 84～92
- 図版243 土器(12) 93～98、100、101
- 図版244 土器(13) 102～108
- 図版245 土器(14) 109～117
- 図版246 土器(15) 118～126
- 図版247 土器(16) 127～135
- 図版248 土器(17) 136～144
- 図版249 土器(18) 145～153
- 図版250 土器(19) 154～162
- 図版251 土器(20) 163～171
- 図版252 土器(21) 172～181、193
- 図版253 土器(22) 182、183、186
- 図版254 土器(23) 184～192
- 図版255 土器(24) 194～201
- 図版256 土器(25) 202～210
- 図版257 土器(26) 211～219
- 図版258 土器(27) 220～228
- 図版259 土器(28) 229～237
- 図版260 土器(29) 238～246
- 図版261 土器(30) 247～255

- 图版262 土器(31) 256 ~ 261
- 图版263 土器(32) 262 ~ 270
- 图版264 土器(33) 271 ~ 279
- 图版265 土器(34) 280 ~ 288
- 图版266 土器(35) 289 ~ 297
- 图版267 土器(36) 298 ~ 305
- 图版268 土器(37) 306 ~ 312、317、318
- 图版269 土器(38) 313 ~ 316、322、324
- 图版270 土器(39) 319 ~ 321、323 ~ 328
- 图版271 土器(40) 329 ~ 337
- 图版272 土器(41) 338 ~ 344、399、411
- 图版273 土器(42) 345 ~ 351、353
- 图版274 土器(43) 354 ~ 362
- 图版275 土器(44) 363 ~ 371
- 图版276 土器(45) 372 ~ 380
- 图版277 土器(46) 381 ~ 389
- 图版278 土器(47) 390 ~ 398
- 图版279 土器(48) 400 ~ 408
- 图版280 土器(49) 409、410、412、414 ~ 417、
434、435
- 图版281 土器(50) 413、418 ~ 433、436
- 图版282 土器(51) 437 ~ 445
- 图版283 土器(52) 446 ~ 454
- 图版284 土器(53) 455 ~ 463
- 图版285 土器(54) 464 ~ 472
- 图版286 土器(55) 473 ~ 481
- 图版287 土器(56) 482 ~ 485、488 ~ 492
- 图版288 土器(57) 486、487、493 ~ 495
- 图版289 土器(58) 496 ~ 504
- 图版290 土器(59) 505 ~ 513
- 图版291 土器(60) 514 ~ 522
- 图版292 土器(61) 523 ~ 531
- 图版293 土器(62) 532 ~ 538、541 ~ 543
- 图版294 土器(63) 533、539、540、555、558
- 图版295 土器(64) 544 ~ 552
- 图版296 土器(65) 553、554、556、557、559、
560、563 ~ 565
- 图版297 土器(66) 567 ~ 570、575 ~ 579
- 图版298 土器(67) 561、562、566、571 ~ 574
- 图版299 土器(68) 580 ~ 589
- 图版300 土器(69) 590 ~ 595、597、598
- 图版301 土器(70) 599 ~ 607
- 图版302 土器(71) 608 ~ 610、613、615、616、
618 ~ 620
- 图版303 土器(72) 621 ~ 631
- 图版304 土器(73) 588、596、611、612、614、
634 ~ 636
- 图版305 土器(74) 637、638、641、649、651、653
- 图版306 土器(75) 632、633、639、640、642 ~ 646
- 图版307 土器(76) 647、648、650、652、654
- 图版308 土器(77) 655 ~ 663
- 图版309 土器(78) 664 ~ 672
- 图版310 土器(79) 673 ~ 680
- 图版311 土器(80) 681 ~ 689
- 图版312 土器(81) 690 ~ 698
- 图版313 土器(82) 699 ~ 707
- 图版314 土器(83) 708 ~ 716
- 图版315 土器(84) 717 ~ 725
- 图版316 土器(85) 726 ~ 734
- 图版317 土器(86) 735 ~ 743
- 图版318 土器(87) 744 ~ 752
- 图版319 土器(88) 753 ~ 762
- 图版320 土器(89) 763 ~ 766、773、774、776、779
- 图版321 土器(90) 767 ~ 772、777、778、780、783
- 图版322 土器(91) 781、782、784、785、789 ~ 793
- 图版323 土器(92) 794 ~ 797、799 ~ 803
- 图版324 土器(93) 804 ~ 812
- 图版325 土器(94) 813 ~ 821
- 图版326 土器(95) 823 ~ 826、828 ~ 832
- 图版327 土器(96) 833 ~ 841
- 图版328 土器(97) 842 ~ 850
- 图版329 土器(98) 851 ~ 859
- 图版330 土器(99) 860 ~ 868
- 图版331 土器(100) 869 ~ 877
- 图版332 土器(101) 786 ~ 788、798、822、827、
887、901 ~ 903

- 図版333 土器(102) 878～886
- 図版334 土器(103) 888～896
- 図版335 土器(104) 897～900, 904～908
- 図版336 土器(105) 909～912, 914～918
- 図版337 土器(106) 919～927
- 図版338 土器(107) 928～936
- 図版339 土器(108) 937～944, 947
- 図版340 土器(109) 948～956
- 図版341 土器(110) 957～960, 962～966
- 図版342 土器(111) 967～975
- 図版343 土器(112) 976～983, 985
- 図版344 土器(113) 986～990, 992, 994～996
- 図版345 土器(114) 997, 998, 1002～1006,
1008, 1009
- 図版346 土器(115) 913, 945, 946, 961, 984,
991, 993, 999～1001, 1007
- 図版347 土器(116) 1010～1015, 1019, 1020,
1022
- 図版348 土器(117) 1024～1029, 1031～1033
- 図版349 土器(118) 1034～1039
- 図版350 土器(119) 1016～1018, 1021,
1023, 1030, 1041, 1044
- 図版351 土器(120) 1040, 1042, 1043,
1046～1050, 1053
- 図版352 土器(121) 1045, 1051, 1052, 1054, 1055
- 図版353 土器(122) 1056～1063
- 図版354 土器(123) 1064～1074
- 図版355 土器(124) 1075, 1077～1084
- 図版356 土器(125) 1086, 1088～1095
- 図版357 土器(126) 1096, 1097, 1100, 1101,
1118, 1121, 1123, 1145, 1146
- 図版358 土器(127) 1076, 1085, 1087, 1098,
1099, 1102～1116,
1118～1120, 1122,
1124～1134
- 図版359 土器(128) 1135～1144, 1147～1153
- 図版360 土製品(2) 1156～1173
- 図版361 土製品(3) 1174～1216
- 図版362 土製品(4) 1217～1262
- 図版363 土製品(5) 1263～1313
- 図版364 土製品(6) 1314～1341
- 図版365 土製品(7) 1342～1363
- 図版366 近世・近・現代の遺物、土器文様
729, 736, 779, 797
- 図版367 土器拡大(1) 569, 591～593, 598,
608, 627, 650, 693
- 図版368 土器拡大(2) 522, 571～573, 594,
634, 635, 751, 906
- 図版369 土器拡大(3) 135, 474, 482, 484,
505, 592
- 図版370 石器(1) 石鏃 1～94
- 図版371 石器(2) 石鏃 95～120,
石槍またはナイフ 121～148
- 図版372 石器(3) 石槍またはナイフ 149～179
- 図版373 石器(4) 石槍またはナイフ 180～211
- 図版374 石器(5) ナイフ 212～214,
石鏃 215～279
- 図版375 石器(6) 石鏃 280～347
- 図版376 石器(7) つまみ付きナイフ 348～390
- 図版377 石器(8) つまみ付きナイフ 391～433
- 図版378 石器(9) つまみ付きナイフ 434～500
- 図版379 石器(10) 筒状石器 501～528
- 図版380 石器(11) 筒状石器 529～560
- 図版381 石器(12) 筒状石器 561～594
- 図版382 石器(13) スクレイパー 595～633
- 図版383 石器(14) スクレイパー 634～667
- 図版384 石器(15) スクレイパー 668～701
- 図版385 石器(16) スクレイパー 702～733
- 図版386 石器(17) スクレイパー 734～771
- 図版387 石器(18) スクレイパー 772～790,
両面調整石器 791～810
- 図版388 石器(19) 両面調整石器 811～829
- 図版389 石器(20) 両面調整石器 830～851
- 図版390 石器(21) 楔形石器 852～863,
Rフレイク 864～870,
剝片 871, 石核 872～883

- 図版391 石器(22) 石核 883 ~ 904
- 図版392 石器(23) 石核 905 ~ 923
- 図版393 石器(24) 石核 924 ~ 937、
石斧 938 ~ 953
- 図版394 石器(25) 石斧 954 ~ 968
- 図版395 石器(26) 石斧 969 ~ 978、
たたき石 979 ~ 994
- 図版396 石器(27) たたき石 995 ~ 1017
- 図版397 石器(28) たたき石 1018 ~ 1039
- 図版398 石器(29) たたき石 1040 ~ 1068
- 図版399 石器(30) たたき石 1069 ~ 1083、
すり石 1084 ~ 1096
- 図版400 石器(31) すり石 1097 ~ 1122
- 図版401 石器(32) すり石 1123 ~ 1131、
扁平打製石器 1132 ~ 1142
- 図版402 石器(33) 扁平打製石器 1143 ~ 1166
- 図版403 石器(34) 扁平打製石器 1167 ~ 1190
- 図版404 石器(35) 扁平打製石器 1191 ~ 1196、
北海道式石冠 1197 ~ 1209、
1234 ~ 1237
- 図版405 石器(36) 北海道式石冠 1210 ~ 1233
- 図版406 石器(37) 石錘 1238 ~ 1250、
礫器 1251 ~ 1255
- 図版407 石器(38) 石鋸 1256 ~ 1261、
砥石 1262 ~ 1267
- 図版408 石器(39) 砥石 1268 ~ 1274
- 図版409 石器(40) 台石石皿 1275 ~ 1280
- 図版410 石器(41) 台石石皿 1281 ~ 1289
- 図版411 石器(42) 台石石皿 1290 ~ 1297
- 図版412 石器(43) 台石石皿 1298 ~ 1303、1308
- 図版413 石器(44) 台石石皿 1304 ~ 1307、
1309 ~ 1312
- 図版414 石器(45) 台石石皿 1313 ~ 1321
- 図版415 石器(46) 台石石皿 1322 ~ 1324
- 図版416 石製品等(15) 岩偶、円板状石製品
1326 ~ 1328、1396 ~ 1409
- 図版417 石製品等(16) 三角形石製品、三脚石器、
四脚石器、異形石器
1410 ~ 1444
- 図版418 石製品等(17) 烏帽子形石器 1445 ~ 1453
- 図版419 石製品等(18) 側縁有溝石器 1454 ~ 1462
- 図版420 石製品等(19) 側縁有溝石器、
長板状石製品
1463 ~ 1465、1474、1475
- 図版421 石製品等(20) 長板状石製品 1466 ~ 1473
- 図版422 石製品等(21) 烏帽子形石器展開
1445 ~ 1447、1449、1550
- 図版423 石製品等(22) 烏帽子形石器展開、
側縁有溝石器展開
1452、1454 ~ 1458
- 図版424 石製品等(23) 側縁有溝石器展開、
長板状石製品展開
1460、1461、1465、1466、
1471、1472
- 図版425 石製品等(24) 長板状石製品展開、石棒
1474、1480、1481
- 図版426 石製品等(25) 石棒 1482、1484 ~ 1490
- 図版427 石製品等(26) 石棒 1476 ~ 1479、1483
- 図版428 石製品等(27) 石製品(1)、線刻礫
1491 ~ 1509
- 図版429 石製品等(28) 石製品(2)、有孔礫、
変わり石、礫
1510 ~ 1525
- 図版430 石製品等(29) 軽石製品 1526 ~ 1548、
寛永通宝 2107
- 図版431 石製品等(30) 軽石製品 1549 ~ 1577
- 図版432 写真掲載石器(1) TH-4・9・18・19・
21 ~ 24
2001 ~ 2022
- 図版433 写真掲載石器(2) TH-25・28
2023 ~ 2035
- 図版434 写真掲載石器(3) TH-28・35・47、
TH-4・5
2036 ~ 2048
- 図版435 写真掲載石器(4) TH-16 ~ 19・54、
TP-7

- 2049～2056、
2075
- 図版436 写真掲載石器(5) TP-66・73
2057～2064
- 図版437 写真掲載石器(6) TP-82・119、
TP-46・134
2065～2074、
2076～2078
- 図版438 写真掲載石器(7) スクレイバー、すり石、
扁平打製石器、球状礫
2079～2095、1087
- 図版439 写真掲載石器(8) 剝片、原石、石棒、
スコリア礫
2096～2106
- 図版440 すり石・扁平打製石器の割れ面に残るすり面
1109、1139、1153、1154、1169、2081、
2086、2087
- 図版441 骨角器(1) 銚頭(1) 1～6、8～13
- 図版442 骨角器(2) 銚頭(2) 7、14～23
- 図版443 骨角器(3) 釣り針(1) 24～40
- 図版444 骨角器(4) 釣り針(2)、
刺突具(1) 41～63
- 図版445 骨角器(5) 刺突具(2) 64～84
- 図版446 骨角器(6) 刺突具(3) 85～97
- 図版447 骨角器(7) 骨錐、骨篋、骨針 98～114
- 図版448 骨角器(8) 剝離具、髪針、管玉、垂飾、
器種不明(1) 115～125
- 図版449 骨角器(9) 器種不明(2)、鯨骨製品、
未成品(1) 126～138
- 図版450 骨角器(10) 未成品(2)、
残片(1) 139～158
- 図版451 骨角器(11) 残片(2) 159～172
- 図版452 貝類 エゾアワビ、クボガイ類
- 図版453 魚類(1) サメ類、エイ類、ニシン科
- 図版454 魚類(2) ウグイ属、キュウリウオ科、
サケ科、タラ科、
フサカサゴ科(1)
- 図版455 魚類(3) フサカサゴ科(2)、
マダイ、アイナメ属(1)
- 図版456 魚類(4) アイナメ属(2)、ホッケ、
カジカ科、サバ科、マダロ属、
ヒラメ、カレイ科
- 図版457 両生類 カエル類、
鳥類 カモ科、カモメ科、ウミスズメ科、
カイツブリ科、ミズナギドリ科、ウ科、
スズメ目、カラス科
- 図版458 哺乳類(1) イヌ?、エゾタヌキ、
ニホンジカ、ニホンアシカ、
オットセイ(1)
- 図版459 哺乳類(2) オットセイ(2)
- 図版460 哺乳類(3) オットセイ(3)
- 図版461 哺乳類(4) オットセイ(4)、アザラシ科、
イルカ類(1)
- 図版462 哺乳類(5) イルカ類(2)、クジラ類

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査		
委託者	独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局		
遺跡名	館崎遺跡		
北海道教育委員会搭載番号	B-03-2		
所在地	松前郡福島町館崎337-11ほか		
調査面積	2,171㎡		
調査期間	平成21年度	平成21年4月1日～平成22年3月31日	
		(発掘調査 5月7日～11月27日)	
	平成22年度	平成22年4月1日～平成23年3月31日	
		(発掘調査 4月12日～8月19日)	
	平成23年度	平成23年4月1日～平成24年3月31日	
		(発掘調査 5月9日～8月31日)	
	平成24年度	平成24年4月1日～平成25年3月31日	(整理作業)
	平成25年度	平成25年4月1日～平成26年3月31日	(整理作業)
	平成26年度	平成26年4月1日～平成27年3月31日	(整理作業)
	平成27年度	平成27年4月1日～平成28年3月31日	(整理作業)
	平成28年度	平成28年4月1日～平成29年3月31日	(整理作業)

2 調査体制

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター			
理事長	坂本 均	(平成27年6月28日まで)	
	越田 賢一郎	(平成27年6月29日から)	
副理事長	畑 宏明	(平成24年6月8日から、平成26年8月28日死去)	
	中田 仁	(平成27年6月29日から)	
専務理事	松本 昭一	(平成24年6月7日まで)	
	中田 仁	(事務局長兼務 平成24年6月8日から、平成27年6月28日まで)	
	山田 寿雄	(事務局長兼務 平成27年6月29日から)	
常務理事	畑 宏明	(平成24年6月7日まで)	
	千葉 英一	(平成24年6月8日から、平成27年3月31日まで)	
	長沼 孝	(平成27年6月29日から)	

平成21年度

第2調査部長	西田 茂	主任	影浦 覚 (発掘担当者)
第1調査課長	遠藤 香澄 (発掘担当者)	主任	福井 淳一 (発掘担当者)
主査	中山 昭大 (発掘担当者)	主任	立田 理 (発掘担当者)

平成22年度

第2調査部長	西田 茂	主査	影浦 覚 (発掘担当者)
第1調査課長	遠藤 香澄 (発掘担当者)	主任	福井 淳一 (発掘担当者)
主査	中山 昭大 (発掘担当者)	主任	柳瀬 由佳 (発掘担当者)

平成23年度

第2調査部長	三浦 正人	主査	中山 昭大 (発掘担当者)
第1調査課長	遠藤 香澄 (発掘担当者)	主査	影浦 覚 (発掘担当者)

平成24年度

第2調査部長	三浦 正人	主査	影浦 覚
第1調査課長	遠藤 香澄	主査	福井 淳一
主査	中山 昭大	主任	柳瀬 由佳

平成25年度

第2調査部長	三浦 正人	主査	影浦 覚
第1調査課長	熊谷 仁志	主査	福井 淳一
主査	中山 昭大	主査	柳瀬 由佳

平成26年度

第2調査部長	三浦 正人	主査	影浦 覚
第1調査課長	中山 昭大	主査	福井 淳一
第1調査部第1調査課主査	柳瀬 由佳		

平成27年度

第2調査部長	三浦 正人	主査	影浦 覚
第1調査課長	中山 昭大	主査	福井 淳一
第1調査部第1調査課主査	柳瀬 由佳		

平成28年度

第1調査部長	長沼 孝	主査	影浦 覚
第2調査課長	鈴木 信	主査	福井 淳一

3 調査に至る経緯

北海道新幹線は、全国新幹線鉄道整備法第4条に基づき、昭和47年に指定され、昭和48年に整備計画に昇格した。平成17年、新青森-新函館(仮)間の工事認可書が国土交通省から鉄道建設・運輸施設整備支援機構に交付され、同年工事が着工した。この事業に関する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、福島町教育委員会を經由して、北海道教育委員会あてに事前協議がなされた。協議を受けた北海道教育委員会は、福島町館崎に所在する館崎遺跡の範囲内に増設が計画されている通信機器室建設予定地について平成20年11月に試掘調査を行った。結果、遺構が確認され、土器・石器を中心とする多量の遺物も出土した。工事の変更は不可能であることから発掘調査は必要であると判断された。

以上の経緯から北海道教育委員会は財団法人北海道埋蔵文化財センターに、1,690㎡の調査面積を指示し、平成21年3月に財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査計画を立案した。



図 I-1 遺跡の位置

(国土地理院平成9年発行 1:50,000地形図 松前に加筆した)

4 調査の経過

平成21年度は、4月23日・24日に建設機械による表土除去作業を実施。調査杭を打設したのち、5月7日から作業員42名体制で調査を開始した。

建設機械による表土除去と、調査前の表面清掃で、調査区のはほぼ全域において盛土遺構の広がり確認され、さらに、盛土の長軸と短軸に設定して掘削したトレンチによって、盛土内に堅穴住居跡をはじめとする多数の遺構が存在することや、土器・石器を中心とした多量の遺物が出土することなど刻々と明らかになっていった。このことから、6月末段階の進捗状況をもとにして、7月に北海道教育委員会と鉄道建設・運輸施設整備支援機構を交えて計画変更の協議を行い、当初単年度調査で完了する予定であった調査期間を、翌年の8月末まで延長することが決定された。この時、調査区外の工用地内にも一部盛土遺構の広がっていることが確認されていたため、調査予定面積も当初の1,690㎡から1,733㎡へと変更がなされた。

次年度まで調査期間が延長されることになったものの、まったく予断を許さない状況であったため、調査終了予定日も当初の10月31日から11月27日へと約1ヵ月延長した。平成21年度の終了面積は839㎡である。

平成22年度は、工期の予定により機構側から8月末までの調査終了を要請されていたこともあって、4月12日より作業員67名体制で調査を開始した。調査が進捗し、盛土遺構が下部になるにつれて、堅穴住居跡や土坑がいくつも重なり合った状態で現れた。調査終盤では調査範囲のはほぼ全域において同時併行的に遺構実測作業が展開する状況となった。幸い、晴天日が多かったため順調に進捗し、8月19日に現地発掘調査を終了した。

平成23年度は、新たに、周回道路の敷設に伴う発掘調査が行われることになった。2009・10年度の調査範囲の西側338㎡（A地区）と北側100㎡（B地区）の計438㎡が調査対象である。5月12日より作業員32名体制で調査を開始、8月29日に現地発掘調査を終了した。

構内道路敷設という工事の性格から、発掘調査は工事による影響が想定される深さまでとなった。このため特に盛土堆積が薄い北側のB地区については遺構検出層まで調査して終了面とした。また、西側のA地区についても既に設置された防護柵の倒壊を防ぐため、法面を設ける形で一部の遺物包含層を残した状態で養生。調査終了後には埋戻しによる回復措置をおこなっている。

3か年合計の調査面積は2,171㎡となった。

一次整理は、2009年度から現地調査と並行して進めていたが、発掘終了後は江別市の北海道埋蔵文化財センターにおいて調査員常駐体制で継続、平成24年度から28年度にかけて報告書作成業務を行った。

5 調査結果の概要

調査で得られた遺構・遺物の件数については一覧表にした（表1-1～4）。調査結果の概要について年度別で以下に記載する。

（1）平成21年度の調査結果

表土と攪乱層を除去して、盛土遺構上面を検出。全体清掃し、測量するところから調査に入った。当初の調査範囲1,690㎡のはほぼ全域に盛土遺構が良好な状態で残っていることが明らかとなった。盛土の高まりの長軸に沿う形で1本、さらにそれに直交する形で2本、1m幅のメイントレンチを設定、土層を確認しながら掘り下げていった。掘削は、安全面を考慮して一部を拡幅して進めた。結果、盛

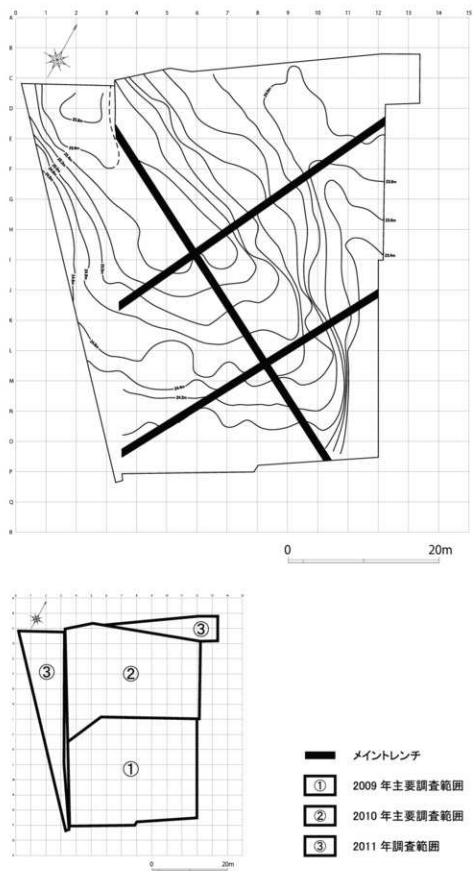


図 I-2 調査区の区分と表土直下の地形

土はもっとも厚いところで2m近くの堆積があることが判明した。また円筒土器段階の盛土遺構は形成された時期によりその色調、包含物や内容が異なり、大きく4つに分けられることも明らかとなった。下層から順に、黄褐色土主体のP盛土（調査時の掘り上げ土）、暗褐色土主体のA盛土（調査時のm3層におおむね相当）、明褐色土と黒色土の数次の互層からなるB盛土（調査時のm2(3)～(9)におおむね相当）、明褐色土主体のC盛土（調査時のm2(2)層及びm2上層・下層におおむね相当）である。これらの盛土遺構は、昭和48年度の第一次調査では「土器集積址」、「再堆積層」、昭和59年度の第二次調査では「土器塚」と表現されており、A盛土およびB盛土は、当時の地表面、即ちⅢ-3層上面に盛土したものである。また、盛土遺構形成前の竪穴住居跡の凹みを埋積するようにも盛土していることが確認された。さらに東西2本が土手状に並ぶ円筒土器期の盛土の内側に、暗褐色土を主体とする縄文時代後期前葉の盛土が堆積していることも明らかになった（D盛土）。

盛土の下部までトレンチを掘り下げ、土層面を清掃したところ、主にC盛土層中に多数の竪穴住居跡や土坑が構築されていることが明らかになった。盛土層を5cmずつ掘り下げながら、任意にサブトレンチを入れて、竪穴住居等の検出に努めた。トレンチによって広がりを確認した後は、切り合いに注意しながら掘り広げるといった方法を探った。

竪穴住居等の確認とは別に、盛土内からは夥しい量の遺物が出土した。とりわけ土器、それも個体の形状を保ったものが多く目についた。個体の形状を維持しているものについては、個体土器番号を付した上で、位置情報の記録と出土状況の写真を撮影し、取り上げていくことにした。この個体土器の取上げ記録は、2011年度まで継続し、館崎遺跡における盛土の形成過程を推考する上での重要な情報となった。

竪穴住居跡等の遺構調査と盛土遺構の調査を同時並行して、調査区の南側から調査を進め、調査期間も11月末まで延長したが、終了範囲はおおむねIライン以南の839mにとどまった。

調査終了に際しては、次年度調査範囲の上部全面をブルーシートで覆い、さらに終了範囲との境に、土嚢を積み上げて、保全のための養生を行った。

(2) 平成22年度の調査結果

期限として鉄道運輸機構側から示された8月末までに調査が終了するように、4月から現地調査を開始した。調査範囲はおおむねIラインより北の調査区である。

平成21年度・22年度、二か年の調査で、盛土遺構のほか、竪穴住居跡50軒、土坑墓6基、土坑113基、Tピット1基、小ピット369基、集石27か所、焼土118か所、フレイク集中48か所、配石列3条、杭列2条、道路跡1条などが確認された。以下時期の細分ごとに概説する。

①縄文時代早期前葉：土坑が6基確認された（TP-61・97など）。

②縄文時代前期前葉：竪穴住居の長軸を北東-南西方向にもつように構築される。P盛土を周囲に敷きつめる（厚さ20cmほど）。その後、A盛土が堆積する。その後の居住域や道路跡部分の黒色土を削平したとみられる。

③縄文時代前期前葉～中期前葉：竪穴住居の長軸を90度変更して、北西-南東方向になるように構築される。B盛土が形成され、道路-土坑域-居住域-盛土遺構という構成で、道路跡を中心に線対称になるように遺構構築範囲が規制されるようになったと考えられる。

居住域は、B盛土と道路跡に挟まれた細長い空間に繰り返し住居が構築されている。繰り返し同地点で住居が構築された結果、V層黄褐色土を掘り込んだ床面だけが検出できた住居、埋められた住居の上部に貼床して構築された住居などが確認された。

フラスコ状土坑は、道路跡を挟んで両側に構築されたとみられる。繰り返された住居の掘削、盛土により、土坑の重複、削平という現象も観察された。

人骨が、フラスコ状土坑2基、長楕円形の土坑3基、竪穴住居跡2軒の床面から1体ずつ合計7体分検出された。別に、円形の大形土坑から8体分の頭蓋骨を含む人骨も確認されている。

また、A・B盛土下位の黒色土上面からは2条の杭列が確認された。杭列の並びから判断すると各盛土の崩落を防ぐための土留めとして打ち込まれた可能性が考えられる。

道路跡は、盛土間の中央部を貫くように、黄褐色土を掘り込んだ帯状の浅いへこみとして確認された。道路面は、踏み固めによる斑状堆積がみられ、硬化していた。遺物はほとんど含まれず、周辺の状態と著しく異なっていた。検出した道路面それ自体はおそらく後期前葉の生活面と思われるが、道路の両脇に円筒土器文化期の墓が検出されていることなどから、円筒土器段階においても既に通路的な機能を有していたことが想定される。

④縄文時代後期前葉：道路跡周辺の円筒土器段階の盛土の上位に盛土遺構が残されていた（D盛土）。道の両端に緑色凝灰岩による配石列が設けられていた。土坑は21基検出され、住居跡は2軒（TH-7・16）が確認された。

（3）平成23年度の調査結果

周回道路の敷設工事に伴い新たに438㎡が調査範囲として追加された。過年度の調査範囲の西側338㎡（A地区）と北側100㎡（B地区）である。道路敷設という工事上の理由から、掘削深度は工事掘削面のレベルまでにとどめてほしいとの要請が鉄道運輸機構の側からあった。このため盛土堆積が薄いB地区については主に遺構検出面までの調査となった。また、A地区も一部遺物包含層を残した状態で養生、埋め戻しをしている。

新たに確認された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑2基、集石2か所、焼土27か所、フレイク集中8か所である。上述の遺構数は、トレンチ調査で確実に遺構と判断されたものの件数である。

A地区は西盛土の主体部から沢地形に向けての傾斜部にあたる。土坑2基、集石2か所、焼土15か所、フレイク集中8か所を確認、調査した。ほか平成21年度に一部調査したTH-54とTP-15の残りについても調査した。TH-14の続きについては、過年度の調査範囲との境界部分が幅1mほど失われていたことと、既に設置されていた外周フェンスを維持するため一定のクリアランスを確保するという制約から、調査できていない。

前述のとおり、調査開始段階で2009・10年度調査区との境界線（3ライン付近）が幅1mほどにわたって崩落し、失われていた。この崩落壁を清掃し、A地区を南北に貫くメインセクションとした。その結果、F～Iラインにおいて、長さ10m以上にも及ぶ大きな土層の落ち込みが現れた。2009・10年度調査区の西壁においてはまったく見られなかったものであったが、過年度の調査では盛土内にたくさんの竪穴住居が構築されていたため、この落ち込みについても住居跡を想定して、調査を進めた。その後、盛土上面を全体に10cmほど掘削した段階で、表面清掃を行ったところ、上面観の平面形としても暗褐色の大きな落ち込みが3つ重なり合うようにして現れ、同時にメインセクションと直交するよう東西方向に設けたトレンチにおいても覆土状の堆積が確認された。複数の遺物集中層が入り込んで、土器を主体としたおびただしい数の遺物が出土している状況も、過年度に検出した竪穴住居跡におけるあり方と類似していた。そこで3軒の大形竪穴住居跡の重なり合いと想定し、TH-57・58・63を付した。しかしながら、複数のトレンチを掘削したものの土層面で明確に遺構の重複関係を確認することはできなかった。土が軟らかく、壁や床と認識できるところがなかっただけでは

これは、出土土器のうち新しい型式の土器の人々が、盛土を掘削して住居や土坑を構築した際に掘り出された古い土器を廃棄し、それと同時に自分たちが使用している土器の破損品も廃棄したためと考えられた。土器集中層の間に間層が入ることから、ある程度のまとまった量が廃棄された段階で、上に土を盛って埋めたのであろう。(影浦)

表 I-2 土器・土製品出土点数一覧

分類	盛土遺構	I・II層掘削等	自然堆積層	竪穴住居跡	土坑	Tピット	小ピット	焼土	集石	フレイク集中	杭列	配石列	埋設土器	壺塚跡	遺構計	総計
土器				107											107	109
I a	2														0	2
I a?	2															
I b	159		4	30	1										31	194
I b-3?	1			3											3	4
I b-4	412	43	161	111	15										126	742
I b-4?	1														0	1
II a	12	1			1										1	14
II b	216906	16285	2707	92390	7624	1	76	843	241	775	4	14	41	498	102507	338405
II b?	14														0	14
II b ~ III a	465	38		19				1							20	523
III a	321330	38219	1651	31265	5192	8	49	1078	483	153		1007		1169	40404	401604
III b	244	47	1	151	11							1			163	455
IV a	83548	65926	1280	11144	3043		140	123	19	11		3093		6626	24199	174953
IV a?	4	1	1	2											2	8
IV b	12	7													0	19
V	1	2	13											6	6	22
V a	53	20													0	73
VI		1													0	1
不明	176	24		124	5			98						1	228	428
土器 集計	623342	120614	5818	135346	15892	9	265	2143	743	939	4	4115	41	8300	167797	917571
その他 陶磁器	3	46	4	3											7	10
土製品																
土俵	30	5		1											1	36
土製品	11	6		0											0	17
土製品?	4			1											1	5
押し切り土製品	85	4		1											1	90
土玉	2														0	2
耳挖	5	1													0	6
彫形土製品	2	2		1											1	5
環状土製品	1														0	1
円板状土製品	161	21	4	94	9										103	289
円板状土製品?	1														0	1
三角状土製品	4														0	4
土製品 集計	306	39	4	98	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	107	456
焼成粘土塊	227	76	2	159	3	1	2	1			1			1	168	473
焼成粘土塊?	18	1		1				2							3	22
総計	623893	120730	5824	135604	15904	10	265	2147	744	939	4	4116	41	8301	168075	918522

表 I-3 骨角器出土点数一覧

	盛土遺構ほか	竪穴住居跡	土坑	焼土	遺構計	総計
銚頭	29	4	1		5	34
釣針	39	2	1	1	4	43
刺突具	48	5	1	2	8	56
骨鏟	3					3
骨篋	3					3
骨針	22	2		3	5	27
剝離具	1					1
髪針	1					1
管玉		1		1	2	2
垂飾	1					1
器種不明	18	6	1		7	25
鯨骨製品	5	7	2		9	14
未成品	31	2			2	33
残片	43	7	3	1	11	54
総計	244	36	9	8	53	297

表I-4 石器・石製品等出土点数一覧

分類	産土遺 種ほか	竪穴 住居跡	土坑	Tピット	小ピット	焼土	黒石	フレイク 集中	杭列	配石列	壁塚跡	遺構計	総計	
割片石器	石鏃	1036	234	16		6	1	6		1	5	269	1306	
	石槍またはナイフ	371	98	5		1		4		1	5	114	485	
	ナイフ	6											6	
	石鏃	382	93	10		2	1	4		1	2	113	475	
	つまみ付きナイフ	634	184	18		1		2		2	2	210	844	
	鹿状石器	263	72	7				1		3		1	83	346
	スクレイパー	5382	1350	121		6	14	8	33		9	26	1567	6949
	歯面磨盤石器	644	193	21			3	3	35		4	3	262	906
	楔形石器	68	14	2					2			2	20	88
	割片石器片		5						3					8
	Rフレイク	10339	2607	255		9	30	14	125		11	83	3134	13473
石核	3276	787	75		5	9	7	112	1	9	18	993	4269	
割片	126682	79584	3654	1	142	7373	349	155515	1	332	337	247288	373970	
礫石器	石斧	358	113	17		1	3	3			2	3	142	500
	たたき石	1319	561	81		4	5	19		1	15	32	718	2037
	すり石	557	124	18		1		11			12	8	174	731
	扁平打製石器	1503	357	49			3	5	3		8	12	437	1940
	北海道式石冠	357	108	10		4	2	6		11	7	7	148	505
	石鏃	45	9										9	54
	石鏃	6	2									1	3	9
	石鏃	14	5										5	19
	砥石	138	41	11						1	3		56	194
	台石皿	432	166	28		2	2	6		34	15	253	685	
	岩筒	3	1										1	4
	球状耳飾	37	17	1			1						19	56
	腰飾	9	1	1									2	11
玉	4	3										3	7	
三角形石製品	2									1		1	3	
三角石器	3	1										1	4	
四角石器	2											2	2	
円板状石製品	15	3						1				4	19	
異形石器	30	2										2	32	
鳥帽子形石器	9												9	
御椀有溝石器	11										1	1	12	
球状石製品	13	2										2	15	
石棒	11	7	4							1		12	23	
棒刺鏃	7	3										3	10	
石製品	28	6	1					2				9	37	
鉄石製品	63	33	3			1	1					38	101	
加工痕のある礫	140	19	5			1		6		1	4	36	176	
厚石	87	28	4			1		1		1		35	122	
家わり石	15	4						1				5	20	
アスファルト付着礫	2												2	
球状礫	5	2										2	7	
有孔礫	273	72	12				2			7	2	95	368	
鉄石礫	37	21	41			1						63	100	
スコリア礫	15	5	7									12	27	
含珪礫	2	2										2	4	
黒銅原料?	3											3	3	
マンガン?礫	3											3	3	
礫	大礫	14175	9386	695	1	32	354	1110	40		2664	390	14672	28847
	小礫							43656					43656	43656
その他	赤色顔料	4											4	
	遺水溝室	1											1	
総計	168799	96297	5172	2	207	7813	45200	155898	3	3131	961	314684	483483	
近代遺物	鏡片												14	
	鏡片												3	
	瓦												1	
	一銭アルミ貨												3	
計												21		

II 遺跡の位置と環境

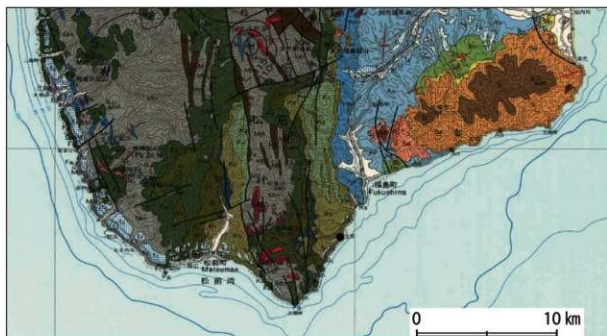
1 遺跡の位置と地質・地形

遺跡は、北海道最南端・白神岬から北東約6kmの地点に位置する。立地は、標高約24mの海岸段丘上。この海岸段丘は、北側が吉岡川に開析され、海岸線に沿って舌状となるが、舌の根元を区切るように無名の沢が開析している。また、段丘面と吉岡川の間には丘陵部が縁取るように延びる。館崎遺跡は、ちょうど無名の沢を境に、東側に遺されたものとみられる。段丘上は、図Ⅱ-2の空中写真を見ると、昭和40年代までは自家消費用の畑地として利用されていた。それが、青函トンネル建設に伴って、各種施設が置かれ、その後施設が撤去された部分は、トンネルメモリアルパークや空き地となって現在に至っている。それでも、調査地点は一貫して畑地に利用されてきたことがわかる。

館崎遺跡の所在する福島町は、津軽海峡沿岸にあり、北海道最南部に位置する。西は松前町、北西は上ノ国町、北東は知内町にそれぞれ隣接している。津軽海峡側では、南西部に白神岬、東部に矢越岬があり、両岬によって、松前町、知内町と画されている。内陸部では、大千軒岳を頂点に、前千軒岳、袴腰岳、百軒岳、檜倉岳、七ツ岳、燈明岳など700~1000mの山地となっている。比較的雨量が多く、なかでも山地の千軒地区は、「雨の千軒」と地元では言われている。

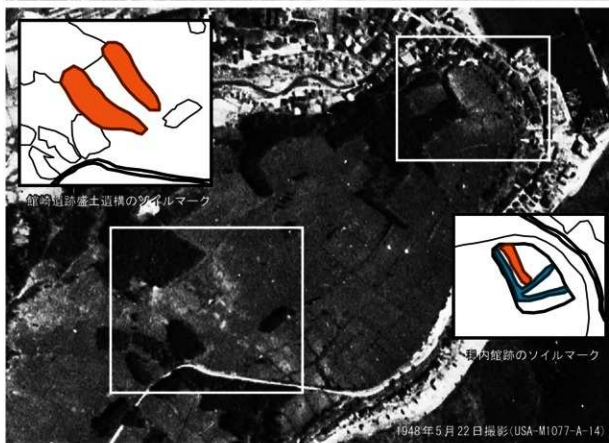
津軽海峡を挟んだところには、竜飛岬がある。白神岬と竜飛岬は、19.2kmと津軽海峡の中で最も距離が近い。調査地点周辺でも、晴れた日の夕方であれば、対岸の建物まではっきり見えるような距離感である。また、下北半島もよく見え、私が浦に夕日が当たって、オレンジ色に輝く様を望むことができた。空気が澄んでいると、岩木山、さらには八甲田山まで望めるため、山あてには事欠かない。本州との距離の近さから、日本有数の渡り鳥の中継地となる。実際、秋になると次々に鳥類の群れが通過していき、種が分かったものではイワツバメが調査区周辺に集結したこともあった。

地質環境を概観すると、遺跡周辺である福島町南部では新第三紀中新世に堆積した礫岩・砂岩・泥岩・頁岩層からなっている (Fa・Fr・Yo・Ks・Kv・Oa・Ym・As・Tm)。そして、遺跡より西側



図Ⅱ-1 遺跡の位置と周辺の地質

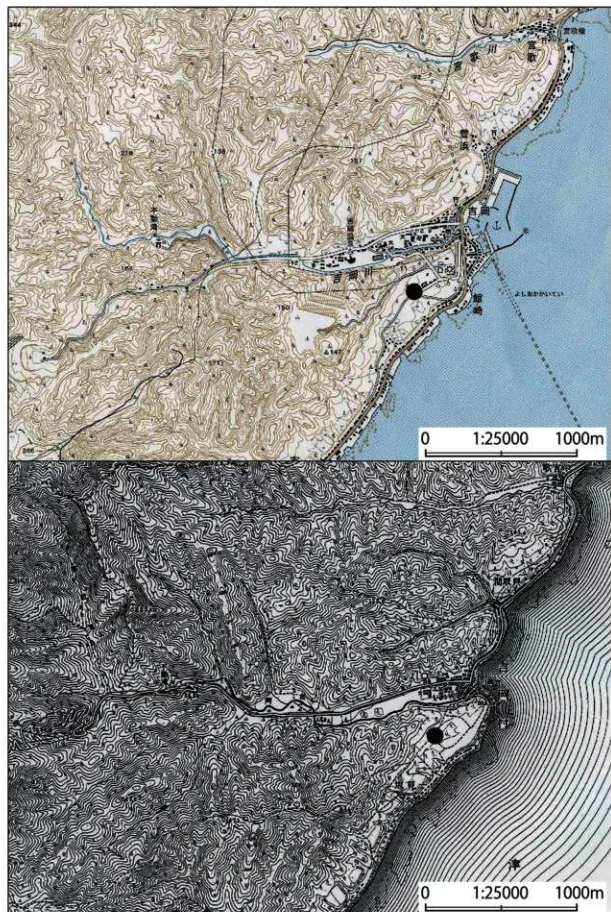
(地質調査所昭和59年発行 1:200,000地質図 函館及び渡島大島の一部に加筆した)



図Ⅱ-2 (1) 館崎遺跡・穂内館跡周辺の空中写真の変遷



図II-2 (2) 館崎遺跡・穂内館跡周辺の空中写真の変遷



図Ⅱ-3 遺跡周辺の現地形と旧地形

14 (国土地理院 上：平成18年 下：昭和22年発行 1：25,000地形図 渡島吉岡に加筆した)

には中生代に堆積した松前層群 (Is・Mb・Mm) と、白亜紀にそこへ嵌入した深成岩類 (G・Md・Sp) がみられる。一方、福島町東部では、知内火山岩類が新第三紀鮮新世に堆積している (Sl・Sa・Sd)。この地質の違いが、地形の違いとなって表れている。

福島町域の山地以外の地形は、福島川流域の市街地が広がる中央部、白符から松浦までの南部、松浦から白神岬までの最南部、塩釜から矢越岬までの東部、知内川流域の北部に区分できる。

東部には、知内火山岩類が分布するため、山地が直接海に接しているが、小河川沿いや海岸に沿って一部にごく小規模な段丘がある。そして、小河川が開析した谷に現在の集落がある。

また最南部には、火山岩・火砕岩からなる新第三紀中新世福山層、そして主に粘板岩からなる松前層群が分布するため、こちらも山地が直接海に接している。ただし、こちらに集落は存在しない。

中央部では、主に軟質の泥岩からなる新第三紀中新世の木古内層・厚沢部層が分布するため、福島川が広がりのある沖積平野を形成している。福島川の両岸には、海岸段丘より一段低い段丘がみられ、福島市街が広がっている。

一方、南部では、主に泥岩や砂岩、凝灰岩の互層からなる新第三紀中新世調練層が分布し、海岸段丘が発達している。また、中規模河川によって開析された沖積地も存在する。現在の集落はいくつかある沖積地に形成されるが、さらに海岸に沿った低位の海岸段丘にも存在する。館崎遺跡が存在する地域がこの環境で、高位の海岸段丘上は、各家の自家消費用の畑地となっている。高位の海岸段丘の奥行きは、最も広い地点である館崎で270m程、白符で200m程のほかは、130m程と非常に狭い。

遺跡の北側を東流する吉岡川は、流路延長5km以下と短く、河口から2kmほど上流には不動滝がある。河原に、玄武岩がみられたが、館崎遺跡では礫石器の素材に利用している。この玄武岩は、砕石や生コンクリート用骨材として現在も採掘されている。ほかに、耐火粘土・油母頁岩も分布している。耐火粘土は、白色～灰色を呈する厚さ4～6mの粘土層が露出している部分があり、良質な部分ではカオリンを主成分鉱物にしているという。

海岸は、河川の河口では礫浜ないし砂浜であるが、館崎前浜はじめ松浦～浦和では平磯、それ以外は主に岩礁となっている。ただし、平磯はかなりが埋め立てられている。

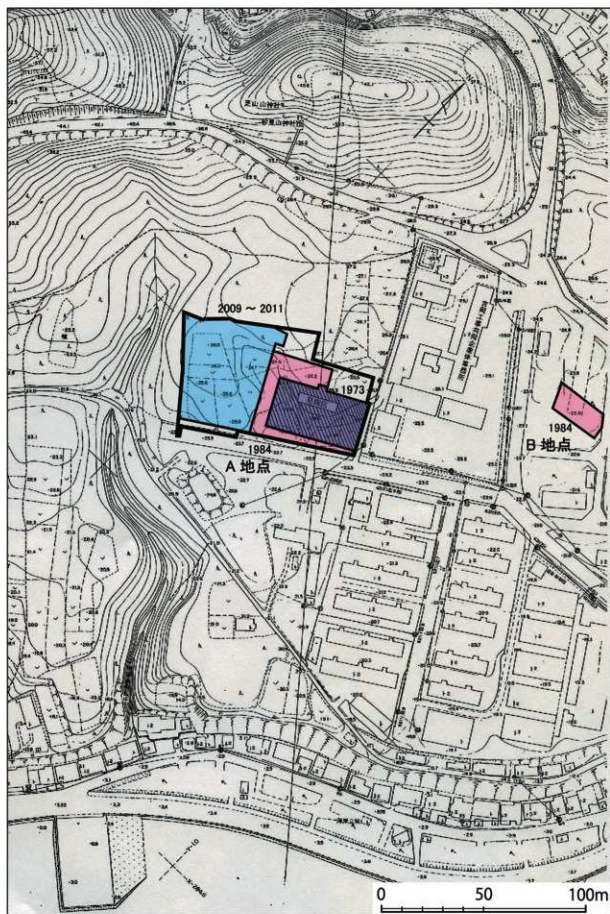
2 周辺の遺跡

(1) 館崎遺跡の過去の調査と穂内館跡 (図II-2(2)下)

館崎遺跡は、福島町教育委員会により、過去複数回の調査がなされている。段丘突出部の基部周辺はA地点、段丘突出部中央はB地点、段丘突出部北側の一画はC地点とされた。なお、旧報告では「ATEZAKI」とされたが、地名としては「たてさき」であるので、本報告ではそのようにした。

A地点は、昭和48年と昭和59年に今調査区の北東側に隣接する部分が調査された。縄文時代前期末葉～中期中葉の盛土遺構(東盛土)が検出されているが、昭和48年では「再堆積層・埋め戻し層・土器集積址」とされ、昭和59年では「土器塚」とされた。なお、1948年の空中写真には、盛土遺構のソイルマークがみえる(図II-2(1)下)。また、堅穴住居跡は縄文時代中期のもの1軒、縄文時代後期前葉のもの2軒があり、縄文時代後期前葉の土坑18基も検出されている。B地点は、昭和59年に調査された。縄文時代後期前葉の堅穴住居跡1軒が検出されている。C地点は、昭和60年に調査された。縄文時代後期前葉の堅穴住居跡2軒、土坑5基が検出されている。また、後述の穂内館跡に関連するかもしれない溝4本、柱穴が確認された。

海岸段丘突出部東端は、中世の穂内館跡とされた。1948年の空中写真には土壘?のソイルマークがみえる。また、1970年の空中写真には、国道改良工事によって南から掘削が始まった状況がみられる。



図Ⅱ-4 調査区周辺の地形と調査範囲
(福島町教育委員会 (1975) 第2図に加筆した)

穂内館跡の本体部分は昭和46年に調査され、中世の塚が確認されたが、現在は、完全に削平されている。遺物としては、青磁、陶器、須恵器、土師器・鉄製品が出土した。また貝層が僅かに残っており、クボガイ、エゾアワビ、ヒメエゾボラ、フサカサゴ科、蜻蛉類などが同定されている。ほかに縄文時代中期～後期の土器片も採集されている。昭和61年には館崎遺跡C地点の東に隣接した地点も調査された。中世の遺構としては、溝1本、柱穴11本、大形土坑1基、墓2基が検出された。遺物は、青磁、播鉢、数珠、木棺、釘があった。ほかに縄文時代後期前葉の堅穴住居跡2軒、土坑5基が検出され、土器・石器が出土した。

これまでの調査成果を総合すると、館崎の海岸段丘突出部には縄文時代後期前葉および中世の遺構群が散在しており、縄文時代前期～中期の遺構群は館崎遺跡A地点に集中したことが推定される。

(2) 先史時代の館崎周辺

福島町では、33か所の遺跡が登載されている。海岸段丘が分布する白符から松浦に至る福島町南部で多く確認され、中央部、東部、さらに北部の知内川流域では確認されている遺跡数は少ない。時期別では、縄文時代早期1か所、前期10か所、中期19か所、後期11か所、晩期4か所、続縄文時代2か所、擦文時代8か所、中世2か所、アイヌ文化期1か所が確認されている。しかし、調査が行われたのは、上述の館崎遺跡と穂内館跡のほかは、豊浜遺跡と吉岡遺跡に限られている。

豊浜遺跡は、豊浜地区の海岸段丘上に立地し、標高20m前後のA地区、標高25m前後のB地区が調査された。A地区では、擦文文化後期の堅穴住居跡1軒、土坑1基、縄文時代前期後葉（円筒土器下層c式）の斜面盛土遺構（捨て場）、縄文時代後期前葉（トリサキ式）の盛土遺構・配石遺構、堅穴住居跡2軒、土坑7基が検出された。B地区では、縄文時代前期末葉（円筒土器下層d式）の堅穴住居跡1軒、縄文時代中期後葉（見晴町式）の堅穴住居跡1軒、堅穴状ピット2基、詳細不明の土坑1基が検出された。

吉岡遺跡は、吉岡地区の海岸段丘上に立地し、標高21m前後のA地区、標高20m前後のB地区が調査された。A地区では、縄文時代後期初頭（天祐寺式）の堅穴住居跡1軒、詳細不明の土坑、近世の一字一石塚が検出された。包含層からは、縄文時代中期、後期前葉、晩期中葉、擦文文化前期の土器のほか、石器が出土している。また、この遺跡付近には、幕末期に台場があったとされる。

未調査遺跡で採集された資料の詳細は、福島町教育委員会（1986）に既に報告されている。その一つである吉野遺跡は、館崎遺跡の立地する段丘の南西側の延長にある。登載範囲に複数の小沢を挟むため、いくつかの遺跡に区分される可能性があるが、擦文土器、土師器、須恵器、円筒土器下層式が採集されている。また、鉄滓が採集されたことから製鉄遺構の存在が推定された。

吉野遺跡と館崎遺跡の間では、館崎2遺跡が確認されている。円筒土器は採集されず、縄文時代後期と擦文文化期の土器が得られている。

蝦夷館山チャシ跡は、蝦夷館山と呼ばれてきたもので、標高147mほどある。山頂が平坦な富士山様の山容となっている。福島町唯一のアイヌ文化期の遺跡とされている。

なお、館古遺跡は、福島町教育委員会（1975）によれば、昭和13年の土取り、昭和39年の宅地造成によって、全く調査の手が及ぶことなく壊滅したとされる。かなりの遺物が残された遺跡だったらしく、円筒土器下層d式、上層式、榎林式、ノダップⅡ式、涌元式などの土器が採集されている。また、昭和13年の工事の際に目撃された土器出土状況からすると、廃絶された堅穴住居跡に多数の土器が廃棄された状態が数か所みられたようで、あるいは、館崎遺跡並みの遺跡であった可能性も考えられる。

このように福島町域の遺跡の内容は不明なものが多いが、少なくとも館崎遺跡周辺の吉岡地区では、縄文時代早期以降、あまり広くはない海岸段丘上に集落を設け、周辺の環境を利用していたと考えられる。そして、周辺環境への負荷が高まった段階で、沢を挟んで近接する海岸段丘上へ移動するという生活を送っていたものとみられる。このような状況は、縄文文化期まで継続したと考えられる。

(3) 中・近世の館崎周辺

中世になり、和人が「進出」して来た後は、現在の市街地が存在する段丘崖下の低位段丘に集落を営み、段丘上は館や神社、畑地として利用されたものとみられる。このころは、ランナイという地名であった。この地名は、アイヌ語で、川尻が塞がる川とされる。その当て字として、穂内の字を用いたとみられる。長禄元(1457)年に津軽海峡沿岸から上ノ国にかけて点在した和人の館が、コシヤマインらに「襲われた」とする記事が、『新羅之記録』・『福山秘府』にあり、穂内館が記録に現れる。穂内館の館主は、蔭土甲斐守季直とされ、詳しい出自は不明であるものの、安藤氏の武将であった可能性が考えられている。蔭土氏は、天文年間(1532～54)、二世の兵庫之介季成に継がれるが、その後中絶する。しかし娘が、蠣崎氏三代義広の夫人となり、その息子は蠣崎氏四代季広となっている。

穂内は、寛永年間(1624～45)には「よしおか」と改称されており、以後の地図には吉岡と書かれるようになっている。吉岡八幡神社の沿革によると、その前身である館神社の創建が寛永2年(1625)で、吉岡八幡神社が翌3年(1626)である。戸数も30軒ばかりはあり、この頃には村としての構成がまとまったとみられている。

その後、寛文6(1666)年に円空が巡錫したとされ、吉野には円空仏(来迎観世音菩薩像)が残されている。この頃の戸数を記したのとして、『津軽一統志』があるが、吉岡村は50軒ほど、福島村が120軒ほどとある。松前より東では亀田の200軒を除き、別格の戸数を誇っていたことが分かる。

文化4(1807)年に、幕府直轄の松前奉行が置かれると、吉岡村沖之口番所が設置され、松前に着くことができなかつた船舶を正式に受け入れる様になった。また、松前復領後の天保15(1844)年までに沿岸警備のための吉岡砲台も設けられている。この頃の戸数は120軒とされる。

なお、福島町域には砂金地が存在したため、知内川上流や松浦川上流には採取痕跡が残るものとみられる。特に知内川上流には砂金掘りに従事した集落や番所もあったとされる。(福井)

(4) 福島町埋蔵文化財調査報告書一覧

千代肇・清水和男・石川政治・永田富智・宮下正司 1972『穂内館：北海道中世館跡調査報告書』福島町教育委員会

佐藤忠雄・清水和男・山田忍 1975『館崎：青函トンネル工事吉岡基地拡張に伴う北海道松前郡福島町吉岡館崎遺跡発掘調査報告書』福島町教育委員会

佐藤忠雄・佐藤訓敏・清水和男・瀬川秀良・泰光男・棟方明陽・佐藤芳子・山口昇一 1985『館崎遺跡：円筒土器文化における「土器塚」の調査』福島町教育委員会

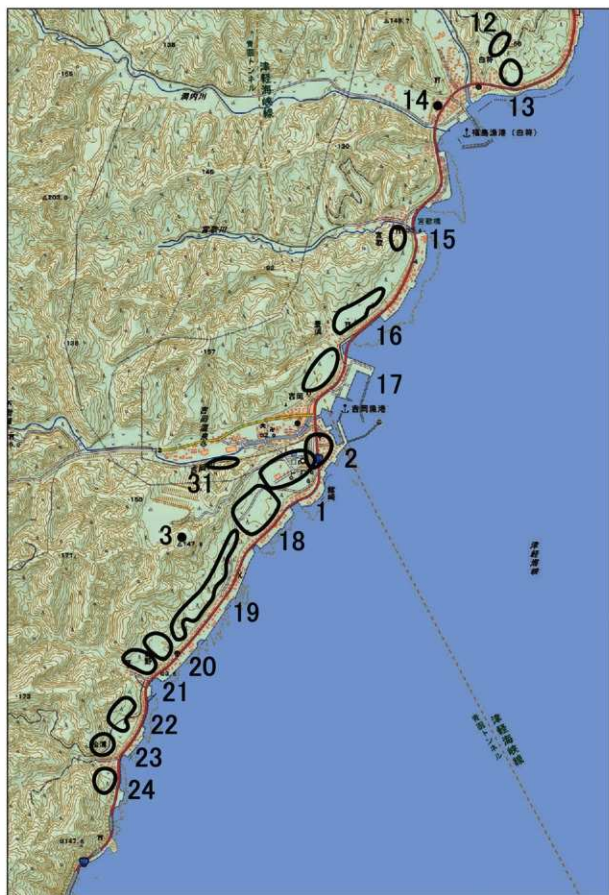
佐藤忠雄・佐藤芳子・川内谷修・山田悟郎 1986『館崎遺跡：続』福島町教育委員会

佐藤忠雄・千代肇・佐藤芳子・鈴木正語・川内谷修 1986『穂内館遺跡』福島町教育委員会

久保泰 1997『福島町吉岡遺跡：木村地先予防山事業に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書』福島町教育委員会

山田央 2003『豊浜遺跡：豊浜地区急傾斜工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』福島町教育委員会

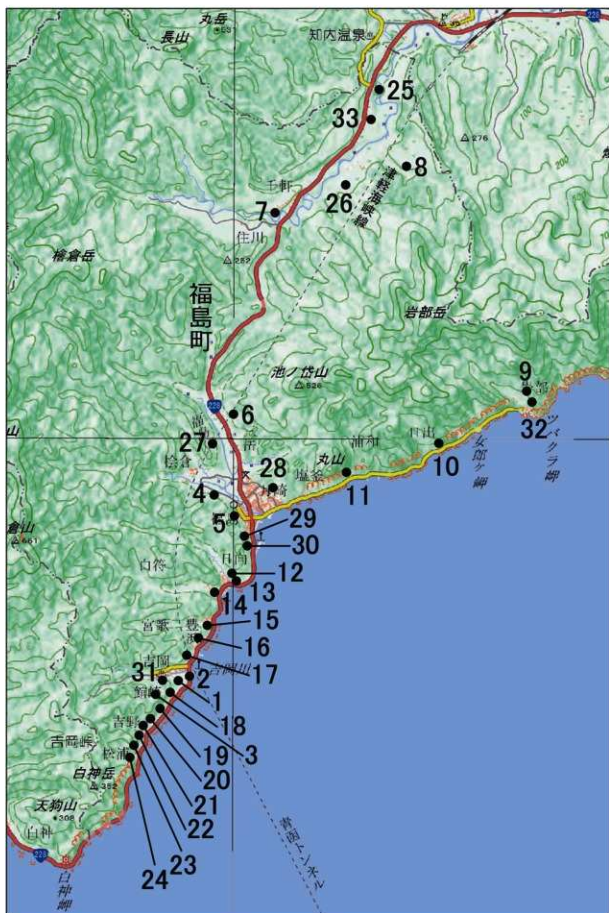
小柳リラ子・盛川哲・阿部大孝・山田悟郎・新美倫子 2004『豊浜遺跡：豊浜地区急傾斜工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』福島町教育委員会



図Ⅱ-5 福島町域南部の遺跡

1 : 25000

(国土地理院平成28年調製 電子地形図25000に加筆した)



図Ⅱ-6 福島町域の遺跡

1 : 100000

(国土地理院平成27年調製 電子地形図20万 函館に加筆した)

表II-1 福島町域の遺跡

no.	登録番号	名称	種別	所在地	時代	立地	高さ	出土遺物
1	B.03.002	鯉崎遺跡	遺物包含地	福島町字鯉崎337-1・6・11、453-1・8、456-4、461-1~3、709	縄文(前期、中期、後期、晩期)	海岸段丘上、東北方向(海に向かって)緩やかな傾斜。	19~26m	土器、土製品、石鏃、鉄状瓦器、岩鏡、青銅器
2	B.03.001	稲内城	城跡跡	福島町字鯉崎370~381-2	縄文、縄文、中世	吉田川河口右岸、津軽海峡に突出したようにある海岸段丘	20m	土器、青磁、陶器、土師器、須恵器、石製、鉄製
3	B.03.003	蛸巻館山チャーン跡	チャーン跡	福島町字吉野513-1・2	アイヌ	津軽海峡を見下ろす山頂	47m	
4	B.03.004	権倉川右岸遺跡	遺物包含地	福島町福島720-1-2725-1・2	縄文(中期)、縄文(後期)	権倉川河段丘上	18m	
5	B.03.005	館古遺跡	遺物包含地	福島町福島271-54~58-60~73-79~86.802.803.804.805	縄文(前期、中期、後期、晩期)	福島川右岸台地先端部	10m	土器
6	B.03.006	権西船沢遺跡	遺物包含地	福島町地点不明	不明	福島川左岸低地奥	10m	
7	B.03.007	網配野遺跡	遺物包含地	福島町字千軒355-2・3.473.474.480.481-1	縄文(中期)	知内川左岸台地	100m	土器
8	B.03.006	船辺川遺跡	遺物包含地	福島町字千軒678.679-1	縄文(中期、後期)	船辺川右岸腹面西斜面	120m	土器
9	B.03.009	岩部川左岸遺跡	遺物包含地	福島町岩部61~183.164-1-2.185-1-2.166-1-2.167-1-2.168-1-2.170~173.184.185	縄文(中期)	岩部川左岸南向緩斜面	30~40m	土器
10	B.03.010	日出小学校遺跡	遺物包含地	福島町日出185	縄文(中期)	津軽海峡に面した段丘上	50m	土器
11	B.03.011	津和小学校遺跡	遺物包含地	福島町塩釜319~323.329-1・2	縄文(中期(後期)、縄文)	津軽海峡に面した段丘上緩斜面板橋川右岸	40m	土器
12	B.03.012	坊主沢遺跡	遺物包含地	福島町字白符94.95.109~116.116-1.117~120	縄文(前期)	坊主沢沿いの段丘岸部	20~30m	
13	B.03.013	白符遺跡	遺物包含地	福島町字白符26-1~4.29.50.51-1-2.52.53-1-2.54-1-2.55-1-2.56.57-1・2.58~65.67-1・2.68~72.84.85.86-1-2.87-1・2	縄文(前期)	270.72~273.78に面した台地上緩斜面	10~20m	土器
14	B.03.014	白符倉所遺跡	遺物包含地	福島町字白符556.565-1-2-3.566.567	縄文(中期)	溝内川左岸丘状台地先端部	5m	土器
15	B.03.015	宮歌遺跡	遺物包含地	福島町字宮歌259.260.263	縄文(中期)	舌状台地先端緩斜面	20~40m	
16	B.03.016	豊浜遺跡	集落跡	福島町字宮歌163ほか、字豊浜150ほか	縄文(前期、後期)、縄文	台地上平坦部、緩斜面	20~30m	土器、石製、土製品、石製品、鉄製品、青銅器
17	B.03.017	吉岡遺跡	遺物包含地	福島町字吉岡350~365.366-1-2.367.369~374.375-1.376.377.378~382.391.400.405.406.407-1・2.408~414.414-1.415~417.417-1.418.419.419-1.420.420-1.421~426.432.433	縄文(中期、後期、晩期)、縄文	台地上平坦部、緩斜面	20~30m	土器、石製、石鏃
18	B.03.018	鯉崎2遺跡	遺物包含地	福島町字鯉崎194.195.207.208.211-1~3.212.213-1.214~221.223.226.227-1・2.228~236.238.240~242.244.245.248~263.265~270.272~273.278~291.292-1・2.293.294.294-1.295.296.298.299.307.464~473.474-1・2・475~477	縄文(後期)、縄文	台地上平坦・緩斜面	20~30m	
19	B.03.019	吉野遺跡	遺物包含地	福島町字鯉崎482~487.488-2-6.491.492.字吉野265~286.288~306.307-1-2.308.311~313.315-1・2・5~7・11~13・19~21・29~31・39~41・48~50・52.316-1~6.317-1・2.318.319.337-1・2.338.340	縄文(前期、中期、後期)、縄文	台地上平坦・緩斜面(海岸段丘)	20~30m	土器、清灰器、鉄鏃
20	B.03.020	吉野墓地遺跡	遺物包含地	福島町吉野233.254~258	縄文(晩期)、縄文(前半期)、縄文	台地上平坦・緩斜面	20~30m	
21	B.03.021	礼釜遺跡	遺物包含地	福島町字吉野215~218.220~229.237~241	縄文(前期)、縄文、中世	台地上平坦・緩斜面	20~30m	土器、清灰器
22	B.03.022	与兵衛遺跡	遺物包含地	福島町字松浦119.120.126~134.136.137.141	縄文(中期)	台地上平坦・緩斜面	20~30m	
23	B.03.023	松浦遺跡	遺物包含地	福島町字松浦52.53.55~58.94.95-1-2.96~99.100-1・2	縄文、続縄文	台地上平坦・緩斜面	20~30m	土器
24	B.03.024	折戸沢遺跡	遺物包含地	福島町字松浦315~324.325-1~3.327.334~339	縄文(前期、中期)	台地上平坦・緩斜面	20~30m	
25	B.03.025	松倉遺跡	遺物包含地	福島町字千軒36	縄文(前期、中期)	知内川左岸の丘状先端部	30m	
26	B.03.026	二部沢遺跡	遺物包含地	福島町字千軒639-1・2・4・5・6	縄文(中期、後期)	二部沢沿いの狭い平坦面	70m	
27	B.03.027	福島川右岸遺跡	遺物包含地	福島町字福島201~204	縄文	福島川右岸	30m	
28	B.03.028	赤川奥沢遺跡	遺物包含地	福島町字月崎342~347	縄文(後期)	白川左岸の山裾及びその前面平坦部	10m	
29	B.03.029	福島大神宮遺跡	遺物包含地	福島町字福島239・240	縄文(中期)	田原川沿い台地(現在埋まっている)	30m	
30	B.03.030	日向遺跡	遺物包含地	福島町字日向378~384.386~388	縄文	台地上、平坦な緩斜面	10~20m	
31	B.03.031	吉岡実業所遺跡	遺物包含地	福島町字鯉崎587-6.591・591-2・3	縄文(前期、中期)	吉岡川右岸の狭い平坦部	18m	
32	B.03.032	岩部川右岸遺跡	遺物包含地	福島町字岩部61-1~6.62.63.64-1-2.65-1~5.66-1・2	縄文	岩部川右岸河口付近の平坦部	10m	
33	B.03.033	瀬の野遺跡	遺物包含地	福島町字千軒73-1-4.74.75-1-4.76-1	縄文(中期、後期)	知内川左岸の河岸段丘上	70m	土器、石製

Ⅲ 調査の方法

1 調査区の設定と座標値

調査区設定には、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局の「埋蔵文化財発掘調査箇所（用地実測図）」（松前郡福島町字館崎所在、縮尺1,000分の1）を使用した。用地東境界線上の杭であるC1とC4の2点間を結んだ縦線を、調査区西端からの逆算で12ラインとし、C4においてその線と直交して通る横線を基軸のBラインとして、4m方眼を設定した。この方眼は西交点をアルファベット（横線）とアラビア数字（縦線）の組み合わせで呼称する（例：E4区、G5区、M8区等）。C4はB12杭にあたる。

この方眼の平面直角座標系は第X I系で、以下のとおりである。

C1	X = -284.169.145	Y = -1.407.408
C4	X = -284.114.721	Y = -1.437.703

なお、緯度、経度については、C1は、北緯41°26'30.0221"、東経140°13'59.3669"。C4は、北緯41°26'31.7862"、東経140°13'58.0612"となっている。

2 発掘調査の方法

表土除去・測量杭打設

調査に先立ち、表土除去を行った。表土除去では表土のI層を建設機械により除去した。東西両盛土間のくぼ地に比較的厚く埋め土がなされていて、近現代の生活用品も多数投棄されていたので、この部分に関しては排水量が多くなったが、下面まで掘削した。盛土の稜線付近は、表土下5cmほどで盛土面が現れたため、表面を薄く削って現生の植物を除去した程度にとどめた。盛土の稜線付近は、畑の耕作等によって、多少削平されている可能性が否定できないものの、表土除去が完了した段階で、調査範囲全域に極めて良好な状態で盛土遺構が残っていることが明らかとなった。

表土除去後に、測量杭の打設を行った。基準杭は、D・I・Nラインと4・8・12ラインが交差する点に9本設定した。D12杭のみ、現代のゴミ穴があり、基準杭の打設位置としては不適切であったため、E12杭に振りかえている。その他の方眼杭は112本を数える。（影浦）

盛土調査

表土（I層）を除去した段階で、地形の凹凸が確認された。盛土遺構の存在は、過去の調査から明らかであったので、土手状に伸びる盛土遺構の尾根部分にトレンチを一本、またそれに直交するように二本のトレンチを設定した。トレンチを掘り進めていくと、盛土層は、m1層（暗褐色土、後期前葉、中部Ⅲ層・C盛土・D盛土）・m2層（黄褐色土と黒褐色土の互層、黄褐色土、前期末葉～中期前半、B盛土・C盛土）・m3層（黒褐色土、前期末葉、A盛土）があり、その下に自然堆積の黒色土Ⅲ層（下部Ⅲ層）があることが認識された。ただし、自然堆積のⅢ層黒色土も部分的に攪乱を受けていたために、m3層と混雑する部分もあった。また、J～O3～9区の住居跡以外では、下部Ⅲ層黒色土上に数十cmの人為堆積層がみられた。これについては、大型住居の周辺に広がることから掘り上げ土（P盛土・P'盛土）と認識した。

その後、上記の認識で、グリッドごとに掘り下げを行った。調査を進める中で、最終的にはP盛土・P'盛土・A盛土・B盛土・C盛土・C'盛土と整理をし、詳しく記載した。しかし、調査時はこのような区分で取り上げをできていないので、グリッド別に取り上げ土層ごとの対応表を表IV-6で示している。ここでは調査時の取り上げ層の概要を記しておく。

m 2層のうち、互層に堆積したB盛土の範囲では、比較的明瞭に層が認識できたため、上位からm 2(1)、(2)、(3)・・・という具合に層名を付した。調査時は、これによって層区分が可能と考えていたが、調査が進むに従い、全ての調査区で同じ堆積をしているとは言えなくなってきた。そのため、上記の層区分は、各グリッド内で完結しているものと考えていただきたい。

そしてm 2層のうち、黄褐色土からなるC盛土が堆積した範囲では、おおまかに上下に分け、m 2上層・m 2下層として遺物を取り上げた。なお、B盛土範囲でも、m 2上層・m 2下層として取り上げている場合があるが、これについては、そのグリッドの分層の中での上下を示している。

m 3層として取り上げたものは、A盛土分布範囲においては下部Ⅲ層も含めて取り上げた可能性がある。A盛土分布範囲外のm 3層は、下部Ⅲ層である。

m 1層は、当初は全て後期前葉か中期前半の盛土層と考えていたが、地点によって上部Ⅲ層（特にⅢ-2層）、D盛土、C盛土についても命名していた。詳しくは、基本層序、遺構記載で述べてある。

遺構調査

竪穴住居跡は、ほとんどが盛土層によって埋没していた。窪みなどで、ある程度プランが確認できたものは、トレンチで範囲を確認し、ベルトを残しながら掘り下げることができた。しかし、ほとんどの竪穴住居は複雑に切り合っており、数軒が重複していたため、複数のサブトレンチを最下部まで掘り下げ、断面で範囲を確認しながら掘り広げるといった方法を採用した。特にE-H 5～9区での重複関係は著しく、調査は難航した。ごく一部の床や壁しか残っていない住居もあったとみられ、認識しきれない可能性がある。また、複数の住居を1軒として調査を進め、途中で気づいた例が複数あり、その場合は（新）・（旧）のように枝番を振ることで対応した。

土坑・小ピットは、検出した時点で半載して、確認した。住居の柱穴も含む小ピットについては、単独のものか、住居に伴うか判断に迷うものが多かった。したがって、帰属を明らかにできていないものもある。人骨が検出された土坑が少なからずあったが、断面を必ず記載するようにした。

焼土は、検出した時点で半載し、記録したが、焼土ブロックの集合といった異地性焼土の多くは、焼土として認定せず、一般土層と同様に扱った。

集石は、ごく集中して出土したものは記載したが、盛土層中には全般に礫が多く含まれ、必ずしも実態が記録できていないかもしれない。フレイク集中についても、同様なことが言える。（福井）

遺物の取り上げ

遺物包含層・盛土遺構の遺物は、遺跡名・発掘区・層位・日付を記録し、適当なまとまりごとに取り上げた。基本的にはグリッド単位で完結するようにしたが、個体の形状を伴った土器などで、複数のグリッドにまたがって出土したものに關しては、グリッドを併記した。遺構出土の遺物、ならびに倒立・正立状態、埋設状態で出土した個体土器については、状況に応じて実測図を作成、標高等の記録を取って取り上げた。また、土偶、土製品、石製品、玉類などに関しては、原則的に他の遺物と分けて1点取り上げの扱いとした。微細遺物の密集部分では遺物を土壌ごと採取して、自然乾燥させた後に、浮遊水洗選別を行った。

個体土器の取り上げ

形状を保った土器が、盛土遺構の上部から下部に至るまで多数出土した。これらの土器は、個体土器番号を付した上で、位置情報の記録と出土状況の写真撮影をおこない、随時取り上げていくことにした^{註1}。最終的に3か年で626番までが数えられたが、一つの番号で複数個体が取り上げられたものもあれば、内容的にまったく個体ではないものに個体番号が付されたものもあり、実態として番号は個体数というより土器の位置情報を計測した地点数という意味のほうが強い。また、形状を良好に保っているが、個体土器として取り上げられなかった土器も相当数存在する。接合作業の結果、盛土遺構から出土して4割以上^{註2}が残存する個体土器は1,448個体が数えられた(表X-1)。堅穴住居や土坑等の覆土内から出土した土器で2割以上^{註3}が残存する個体土器は502個体(4割以上残存では474個体)が数えられている。館崎遺跡における4割以上残存の個体土器実数は1,933個体である。

(影浦)

註1・個体土器の中には、数個体で配列をなしていたものや、倒立・正立のもの、円礫が伴っていたものなどがあった。

註2・盛土出土の個体土器の対象範囲を4割以上にすると、盛土ごとの出土土器型式の傾向が現れた。4割未満を取り込むと、他型式の混在が顕著になってわかりにくいものになる。また、堅穴住居跡等、遺構の覆土出土の土器に関して、2割以上を対象にした理由は、覆土の埋積過程を明らかにする上で個体数が多い方が有効であると判断したことや、覆土内の土器集中層における密閉性を考慮してのことである。なお、個体土器の一覧表中では70%残存と記載しているが、復元個体ではなく、破片掲載にとどまったものもいくつかある。これは破片が粉々であるなど状態が悪いため復元には至らなかった個体である。

現場写真撮影

中判フィルムカメラを中心に、適宜大判カメラ、デジタルカメラを併用した。撮影時は常に三脚を用いている。完掘撮影等高度の必要な場合には3段足場、剪定用の三脚を使用した。影の多く出る遺構はレフ板・ストロボを使用して黒潰れを減らしている。フィルム撮影時はモノクロ、カラーリバーサル²の2種類のフィルムを使用し、同一露出で2コマ撮影して1セットとした。モノクロフィルムは自家現像し、カラーリバーサルフィルムは外注現像している。

(中山)

調査最終面地形測量

遺構調査・包含層調査の終了後、V層上面の精査を行い、遺物・遺構がないことを確認して、調査終了とした。終了面において測量を行い、調査最終面の地形図を作成した。しかし、2011年度調査範囲のB地区(100m)に関しては、工事上の理由から、掘削深度は工事掘削面のレベルまでという制約があり、遺構確認面が調査最終面となっている。

(影浦)

3 整理の方法

(1) 一次整理作業

遺物は取り上げ後、水洗、乾燥、分類を行い、遺物台帳・遺物カードを作成した。台帳記載は、遺構出土のものは遺構ごと、それ以外のものは土器・石器等に分け、グリッドごとに分けて行った。遺物台帳はパーソナル・コンピューターによりマイクロソフト・エクセルに入力して管理・集計を行っ

た。その後、台帳記載が終わったものから順次注記作業に着手した。注記は、遺跡名「館崎」の略称「タテ」、発掘区・遺構名、遺物番号、出土層位の順に記した。注記対象は主に土器・土製品で、石器については必要に応じて行った。

なお、現場段階で個体土器として番号を付して取上げた土器に関しては、台帳の備考欄に個体土器番号を付し、注記についても出土層位のあとに個体土器番号を記載した。また、遺構名を付して調査したが、精査の結果、盛土遺構の一部として扱うこととした（TH-57・58・63・60・63・65、TP-124）出土遺物については、遺物台帳上は遺構名を維持している。出土遺物一覧（表V-7・VI-10）においては、発掘区の記載のあるものは発掘区に含め、発掘区の記載のないものは末尾に掲載した。

注記例

1. 遺構出土の場合（遺跡名・遺構名・遺物番号・層位の順）
 - タテ・TH-5・15・フク1
 - タテ・TP-20・9・フク2
 - タテ・TS-6・2・m2(4)
2. 盛土層出土の場合（遺跡名・グリッド・遺物番号・層位の順）
 - タテ・D4・32・m2(2)
 - タテ・G9・11・m1a
3. 個体土器の場合（遺跡名・遺構名ないしグリッド・遺物番号・層位・個体土器番号の順）
 - タテ・TH-14・227・フク1c・コタイ140
 - タテ・J2・34・m2(6)・コタイ138

原則的に2cm以上の土器に注記を行ったが、パーツが揃ってすぐに復元可能な個体土器に関しては、個体に対して1、2か所の注記にとどめたケースもある。

(2) 二次整理作業

土器の整理

遺物台帳および遺物カードの点検、台帳補正、接合、復元、実測図・拓影図作成、断面実測、属性の観察および計測を行った。接合作業にあたって、出土した盛土の層位、盛土と遺構出土土器、遺構間、遺物包含層との接合関係に注意して作業を進めた。中でも個体の形状を保って出土した土器の復元について重点的に努めた。個体数が非常に多いため、一次的に、まずは全体の5割以上が揃っているもの、なおかつ口縁から底部まで繋がっている土器を優先的に復元した。復元対象としなかった土器に関しても、同一個体片でまともまっているものについては、後から追加で復元する場合や、盛土内の出土傾向をいつでも見直せるように、同一個体片と袋に記載してまつまりごとで同じ袋に収納した。またその他の破片についても口縁部片、底部片、胴部片を分けて収納した。

調査段階において盛土遺構中や、堅穴住居跡や土坑の覆土中において、土器を中心とした遺物集中層が確認されていたが、接合を通じて、同一型式の土器だけでほぼまともまっているもの、複数の型式が混在しているものなど、内容がまちまちであることが明らかになった。また、個体の形状を良好に保った土器が多数出土する遺物集中層もあれば、まったく個体復元できないバラバラの土器片からなる遺物集中層もあることがわかってきた。さらに場所によって下位から上位までの盛土堆積と、出土

した個体土器の型式の前後関係が矛盾しないところのあることも確認された¹¹⁾。

また、異なる土器型式が同一盛土層の見目上の同一面で重なり合って出土していることに関しては、傾斜して堆積した層を水平に掘削して出土した可能性とともに、堅穴住居等の構築過程で既存の盛土遺構を掘削したときに古い型式の土器が掘り出され、それを廃棄したことも想定された。その際に、廃棄時の生活に使用して破損した土器もほぼ同時に投棄したとすれば、同じ面で新旧の土器が一緒に出土することになる。この観点で、既に復元された土器を再度見直ししていくと、同じ場所で出土した土器について、残存率や摩耗度や器表面の傷のあり方に差があることが認められた。そこで、改めて復元した土器と復元しないで収納した同一個体土器片、およびすべての口縁部破片を再観察した。基本的には出土状況のまともりから型式細分を進めたが、型式の異なる土器が、ほぼ同時に廃棄されたとみられる出土状況もあったことから、同時期の、なおかつ同タイプと見られる、諸特徴の近似したまともりを抽出し、共通する属性を一つ一つ整理した。土器のグループ化が進んだところで、今度はグループ間での属性の共通項を検証し、出土した盛土層位とグリッドを同時に照合しながら、それらの前後関係を慎重に勘案していった。掲載土器だけではなく、未掲載のもの、復元対象にしなかった同一個体のまともりや、特徴の観察できる口縁部片、底部片についても属性記録をとった。細分型式を判断できるものについて、型式名を付けた上で、グリッド、層位とともに一つ一つ属性のメモを取り、必要に応じて一部はデッサンや写真も撮った。また、型式のわからないものでも、属性にある傾向が窺われるものはそのまま書き留めた。たとえば、あるグリッドのある層位で「ケズリ調整で周縁が無文化し、くびれのある底部片が多くみられる」といった記録である。表記した属性の件数は、掲載土器を対象に数え上げたものであるが、その属性が型式判定に有効であるか否かの選別と抽出については、全ての土器観察記録から判断したものである。

さらに属性抽出の作業に際しては、復元土器を計測して極力数値化することにもつとめた。可塑性のある土器を計測することに対しては、計測方法や計測位置によって、数値的な幅が生じることは承知しているが、多くを計測すれば（多少の型式誤認があるとしても）、平均的な傾向が具体的に見出されるはずである。また、属性の抽出や数値化は、第三者が客観的に検証しうる材料を豊富にすると

いう観点においても有意であると考えた。掲載土器について、口縁部から底部まであり、なおかつ約8割以上が残存しているものについては重量と体積を計った（残存率と併記）。重量は、未破損の完品ならびにほぼ100%が残っているもの以外は、補填材の重量が含まれることになるが、液体を入れる容器ということ考えた時に、属性として有意であると判断した。体積は、実測図の正面図を元に、内底面から口唇のものも低いラインまでを対象とし、器壁の屈曲点など傾斜角が大きく変化するところで分断、円錐台の体積の総和とした。計算は、http://www.benricho.org/calculate/Runcated_cone.htmlの自動算出ソフトを使用し、分断線の半径および高さなど必要な数値を入力した。土器の形状の歪み等を補正しているわけでもなく、あくまで正円の円錐台を積み重ねた単純計算ではあるが、おおよそのものであれ、煮炊きという土器の用途からみて有意であると判断した。

他に、器表面の磨減度合い、古い傷跡等の観察記録も表の項目に加えた（第2分冊・表V-4）。原位置を保っていると判断される個体土器がある一方、複数次の掘り返しと廃棄が繰り返されたと思定される土器もあると考えられる以上、盛土の形成過程を類推する上で有意と判断した。

図面掲載を想定した復元作業に際しては、残存状態の良いなもの、個体土器として取り上げたもの、正立、倒立、埋設状態で出土した土器、遺物集中層等で型式にまともりがあるもの、確実に遺構に伴うもの、本州北部の影響を強く受けたもの（あるいは搬入品）、類似の特徴を持つものが他にないも

の等を優先した。次に、盛土の形成過程を説明する上で、副次的に有意と考えられる土器を追加復元して加えた。追加復元した土器については、残存率や磨減等の状態にまったくこだわっていない。その盛土の形成過程と土器型式の変遷を説明する上で必要かどうかの観点に基づいて抽出した。(影浦)

註1・盛土遺構出土の土器接合に際しては、破片の細かさ、磨減の度合い、型式の混在状況、接合の割合などが必要不可欠な情報になると考える。接合作業が終了した土器片の状況について、デジタルカメラで記録しておくという方法も有効であろう。

石器の整理

器種に分類し、形態や製作方法によって細分類を行った。また、石材、長さ、幅、厚さ、重量、被熱の有無、使用痕の有無、付着物の有無などの属性を観察し、遺物台帳に記録した。接合作業は同一器種の破片について行い、剥片集中の接合作業は行っていない。

器種とその細分類を代表するものを選択して図化した。石製品については、形態の分かるものはほぼすべて図化した。実測・トレースの一部は、株式会社トラスト技研・株式会社シン技術コンサルに委託した。なお、掲載番号2001以降の石器は、写真と一覧表のみを掲載したものである。

石材に関しては、全点について肉眼・ルーペでの簡易的な同定を行った。代表的なものの一部については、アースサイエンス株式会社に石材同定を依頼した。また、黒曜石製の代表的な石材の一部について、有限会社 遺物材料研究所に原産地同定を依頼した。礫の円磨度の表記は、『新版地学ハンドブック』(大久保・藤田1984)に拠った。

脆弱であった凝灰岩製の岩偶(掲載番号1325)とコハク製の玉(掲載番号1391)については、強化処理を行った。岩偶はOH-100を、コハク製の玉はパラロイドB72を含浸した。

礫については、調査段階で遺物として取り上げたものは、台帳に記載し、石質と重量を記録した。その後、形態や石質、出土状況から、有意ではないと判断されたものについては、現地に残置した。代表的な石質のものは一部保管している。

なお、今回の石器の整理については、現地での一次整理から報告書刊行に至るまで、8年の間に複数人が携わることとなった。報告書の取りまとめにあたって、器種分類・石材の確認や細分類を行い、分類基準の統一に努めたが、出土量が膨大なこともあり、すべてを確認することはできなかった。そのため、分類の基準や石材の同定に幅が生じてしまった部分があり、また、実測図の表現にも統一できなかった部分がある。

(柳瀬)

骨角器・動植物遺存体の整理

調査中に目についた骨角器や動物骨、炭化物は直接採取したが、土層中に炭化物や焼骨片が多く含まれる場合は土層ごと取り上げ、土壌サンプルとし、試料Noを2480番まで付した。取り上げた土壌は、浮遊水洗選別及び単純水洗選別を行った。骨混じり土層や個体土器内土層など609試料は、単純水洗選別したが、焼骨が特に多く含まれる場合4mm篩と1mm篩を使用し、微小骨に限られる場合は1mm篩のみを使用した。灰層や炭化物集中、焼土層、フレイク集中など164試料は浮遊水洗選別を行った。選別後は、骨角器、動物骨、炭化材、炭化種実、土器、石器に大別した。

骨角器は、分類を行い、各器種の特徴を残すものについては、ほぼ全点図示し、断片的なものは図化しなかった。ただし、属性については、全てについて記載し、一覧表とした。素材については、ルーペや実体顕微鏡によって詳細に観察したところ、緻密質部分に骨の微細構造を観察することができた

ため、澤田純明氏に同定を依頼した。

自然遺物は、予備的に同定を行った後、動物遺存体については、金子浩昌氏に最終的な同定を依頼した。動物遺存体については、個別に遺物番号を付してある。また炭化種実については、株式会社 古環境研究所に最終的な同定を委託した。種実には、同定依頼したサンプル№にのみ、試料№を付してある。

人骨の調査・整理

土坑などから検出した人骨については、実測、写真撮影の後、おおまかな部位ごとにブロック状にして取り上げた。当初は石膏によって補強を行ったが、土層が縮まっていたことからブロック状に切り取ったままで取り上げることとした。結果的に、後者の方が取り扱いがしやすくなった。取り上げたのちは、クリーニングを行い、土壌ごと屋内で自然乾燥させた。カビはほとんど生えなかったが、もともと残存状況が悪かったため、崩壊した部分もあった。なお、歯は、エナメル質がかろうじて残っている状態で、さらにその表面に溶け出したカルシウム分が固着していた。したがって、この部分をクリーニングしようとするので砕けてしまうような残存状況であった。そのような状況であったが、人骨の鑑定を澤田純明氏に行っていた。鑑定後は、必要なクリーニングを行い、パラロイドB72によって処理を行った。(福井)

室内写真撮影

光源はストロボを使用し、土器・石器等の集合写真及び土器の立面撮影では大判フィルムカメラを、その他の撮影ではデジタルカメラを用いて撮影した。フィルム撮影時は現場撮影同様モノクロ、カラーリバーサル2種類のフィルムを使用し、同一露出で2コマ撮影して1セットとした。カラーリバーサルフィルムは外注現像後フィルムスキャナーでデジタル化し、アドビフォトショップCCで調整した。デジタルカメラ撮影はRAWデータをシグマプロフォトでTIFFに変換し、フォトショップCCで調整した。

撮影機材

現場

酒井マシンツール トヨフィールド45A

ウイスタ WISTA45 SP (2010年度)

ニコン ニッコールSW65mm F4S、ニッコールSW90mm F4.5S、富士フィルム フジノン SW125mm F8
マミヤ RZ67Pro II

セイコー セコール50mm F4.5W、セコール65mm F4L-A、セコール90mm F3.5W、セコールマクロM140mm F4.5M/L-A

ニコン F3 (2009年度)

ニコン Aiニッコール 28mm F2.8S、Aiマイクロニッコール105mm F2.8S

シグマ DP1S (2010年度)

ニコン D3000 (2011年度)

ニコン AFS DXニッコール18-55mm F3.5-5.6G VR

クイックセット ハスキー 4段三脚

室内

酒井マシンツール トヨビュー 45G II

ニッコール AM ED210mmF5.6

シグマ DP3 Merrill, dp3 Quattro

コメット CS-2400 T II, CL 25 H, CLX-25miniH

酒井マシンツール トヨ 無影撮影台、トヨ ウェイトスタンド - 101

ハッセルブラッド フレックスタイト X 5

(中山)

記録類・遺物の収納保管

遺物は、掲載遺物と未掲載遺物に分け、掲載遺物は報告書図版に対応するように収納した。

掲載土器のうち復元個体は、1点ずつエアキャップで梱包し、隙間に緩衝剤や古新聞紙を充填した上で、折り畳み式の大型コンテナに収納した。使用したコンテナは三甲社の135 BならびにW95aである。なるべく報告書の掲載順、型式ごとにまとまるように留意したが、一つ一つの土器のサイズや形状がさまざまであるため、前後しているものも多い。入れ子状態で収納したものもある。破片は、1点ずつ小袋に入れて掲載番号を記載し、図版ごとに中袋にまとめた。未掲載土器は、分類ごとに、遺構・発掘区に大別し、遺構ごと・発掘区ごとに収納した。2009・2010年調査分と2011年調査分とで分かれている。また、現場段階で個体と認識されNaが付された「個体土器」、接合作業の結果、個体にまとまった土器に関しては、それらで別にまとめて収納している。なお、部位（口縁部、胴部、底部）、文様で細分している場合がある。

石器・骨角器の収納は、掲載遺物は挿図に対応するように、1点ずつ小袋に入れた後、挿図ごとに中袋に収納した。未掲載の石器については、狭義の石器は1点ずつ遺物カードと共に小袋に入れ、器種ごとに、遺構順・発掘区順にコンテナに収納した。剥片は、遺物番号ごとに遺物カードと共に小袋に入れ、石材ごとに、遺構順・発掘区順にコンテナに収納した。礫は、遺物番号ごとに遺物カードと共に小袋に入れ、遺構順・発掘区順にコンテナに収納した。なお、大形の石器はコンテナに遺物カードと共に直接収納したものがあつた。未掲載の骨角器は、1点ずつ小袋に入れた後、発掘区数字ラインごとに中袋に収納した。

動物遺存体の収納は、写真掲載と未掲載に分け、1点ずつ小袋に入れた後、種毎・部位毎に収納した。袋に入らないものについては、小ケースに載せたまま便宜的に収納したものもある。

なお、未掲載土器・石器のうち、盛土遺構の一部として扱った（TH-57・58・63・60・63・65、TP-124）の出土遺物については、発掘区出土遺物の次に収納した。

これらの遺物は、遺跡の所在地である福島町教育委員会に搬送し、保管される。また、現地調査および整理作業で作成した各種図面、写真フィルム、遺物整理台帳は、道立北海道埋蔵文化財センターで保管される。

(影浦・福井・柳瀬)

4 基本層序

調査区は、北西-南東方向へ、緩やかに傾斜した段丘面である。基本的な土層は、調査区全域で大きく変化していないとみられるが、縄文時代前期末葉～中期中葉、後期前葉の人類活動によってほとんどの地点で人為改変を受けており、連続した自然堆積は認められない。土層の記載には、『土壌調査ハンドブック』（日本ペトロロジー学会編2000）を参考にし、土色、土性、粘性性、堅密度、含有物とその含有率について記載した。土色については『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）を用いた。層厚については、削平を受けるなどし、地点によって大きく異なるために、ここに記載しなかった。

I層 表土：現代の耕作による堆積。黒色（10YR2/1）～黒褐色（10YR2/2）。ローム粒含む。道路跡部分では、現代の「盛土」もみられた。

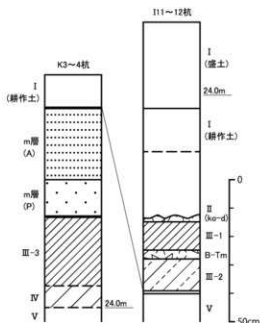
II層 Ko-d（胸ヶ岳d降下軽石層）。1640年降下。にぶい黄褐色（10YR7/3）。道路跡部分の一部で確認された。

III層 黒色土～黒褐色土

- ・ III-1層（上部III層）：黒色（10YR1/1）。火山ガラス含有。道路跡部分に厚く堆積していた。
- ・ B-Tm：白頭山苦小牧火山灰層。10世紀降下。上部が褐色（10YR4/4）。下部がにぶい黄褐色（10YR5/4）。道路跡部分に厚く堆積していた。ほかは、住居跡の窪みに僅かに堆積していた。
- ・ III-2層（上部III層）：黒褐色（10YR3/2）。調査時は、m1a層とした。土色が明るかったため、後期の盛土層とも考えたが、精査の結果、自然堆積層と判断した。道路跡部分に厚く堆積していた。ほかは、住居の窪みに僅かに堆積していた。道路跡の一部では、下部でやや黒味が強い部分があった（10YR3/1）。

m層：主要な遺物包含層。P盛土～C盛土は、縄文時代前期末葉～中期中葉の遺物、D盛土は、縄文時代後期前葉の遺物を包含する。

- ・ P盛土：おもにV層のローム由来土（10YR3/3）からなる二次堆積土。
- ・ P'盛土：III層より明るい色調の褐色土（10YR4/4）からなる二次堆積土。
- ・ A盛土：主に暗褐色土（10YR3/3）からなる二次堆積土。
- ・ B盛土：にぶい黄褐色土（10YR4/3）と暗褐色土（10YR3/4）の互層からなる二次堆積土。
- ・ C盛土：主ににぶい黄褐色土（10YR4/3）からなる二次堆積土。
- ・ C'盛土：主に黒褐色土（10YR3/2）からなる二次堆積土。
- ・ D盛土：主に暗褐色土（10YR3/3）からなる二次堆積土。
- ・ III-3層（下部III層）：黒褐色（10YR2/2）。上部は部分的にローム粒を含んだため、調査時は、一部でm3層とした。部分的にローム粒を含むのは、人為攪乱を受けた層が存在したためと考えている。このローム粒含有層が斑に分布し、自然堆積層と区別しにくかったため、取り上げ層位としてはIII層一括している。C盛土分布範囲および道路跡では削平されて残さ



図Ⅲ-1 土層柱状図

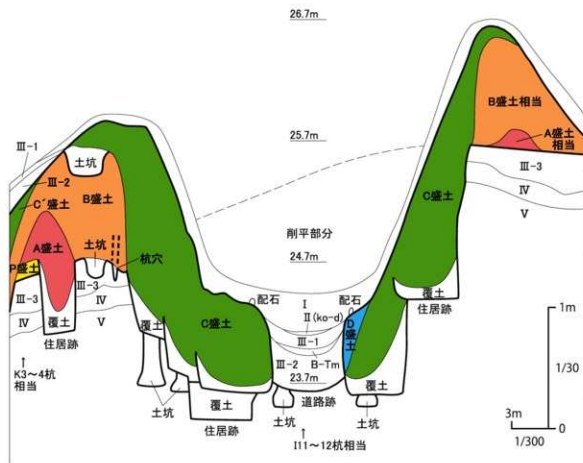
れていなかった。縄文時代早期後葉と前期末葉の遺物包含層。

IV層 漸移層：暗褐色（10YR3/3）。C盛土分布範囲および道路跡では削平されて残されていないかった。

V層 ローム層：明黄褐色（10YR6/8）。

土層堆積模式図は、K3杭～E12杭～1984年調査成果をもとに作成したものである。ほとんどの部分を土層断面①をもとに作成しているため、スケールを付した。土層堆積状況は、地点によって複雑であるが、この断面によって、おおよその堆積順を表現することができている。

Ⅲ-3層が堆積した段階で、縄文時代早期後葉に土坑が構築された。その後時間を置いて、縄文時代前期後葉から集落が営まれるようになった。前期末葉では、継続して住居が構築され、P盛土・P'盛土が堆積した。その後、中期中葉まで、集落の継続とともに、A盛土、B盛土、C盛土の順で堆積していった。また、盛土の堆積とともに、削平も行われた。最も低いところはV層を1m以上削平し、結果的に道路として利用された。集落は一時断絶し、縄文時代後期前葉に再度営まれ、D盛土が堆積した。その後は、目立った利用はされず、Ⅲ-2層が道路跡を中心に堆積した。その後、10世紀にB-Tmが降下し、さらにⅢ-1層が道路跡を中心に堆積した。1640年には、Ko-dが降下し、その上にI層が堆積した。どの時代からかは不明であるが、I層は耕作によって攪乱された。近代には、何らかの軍事施設に利用され、塹壕と防空壕が構築された。第二次大戦後は、畑地に利用されたほか、青函トンネル関連施設が構築されている。（福井）



図Ⅲ-2 土層堆積模式図

5 遺物の分類

(1) 土器・土製品

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、統縄文時代をⅥ群、擦文時代をⅦ群とした。各群について、Ⅰ群からⅢ群では前半をa類、後半をb類と2細分、Ⅳ群・Ⅴ群では前葉をa類・中葉をb類、後葉をc類と3細分した。なお、類まで特定しえなかったものに関しては、群までの分類にとどめている。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

- a類 貝殻文が施されるもの。
- b類 縄文、捺糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などが施文されるもの。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

- a類 縄文の施された丸底・尖底を特色とするもの。
- b類 円筒土器下層式に相当するもの。下層c式、d1式、d2式が出土している。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

- a類 円筒土器上層式に相当するもの。上層a1式、a2式、b式、サイベ沢Ⅷ式、見晴町式が出土している。
- b類 複林式、大安在B式、ノダツⅡ式、煉瓦台式に相当ないし並行するもの。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

- a類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当ないし並行するもの。出土しているⅣ群a類の99%以上が涌元式相当の土器である。
- b類 ウサクマイC式、手稲式、鮎淵式に相当ないし並行するもの。
- c類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当ないし並行するもの。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群

- a類 大洞B式、大洞BC式に相当ないし並行するもの。
- b類 大洞C₁式、大洞C₂式に相当ないし並行するもの。
- c類 大洞A₁式、大洞A₂式に相当ないし並行するもの。

Ⅵ群 統縄文時代に属する土器群

Ⅶ群 擦文時代に属する土器群

近世陶磁器

土製品：土偶・円板状土製品・錐形土製品・耳栓・土製品・焼成粘土塊等が出土している。

特記事項として、顔を表現したとみられる土器が、中期前半の円筒土器上層a式段階から見晴町式にかけて各型式で出土した。円筒土器上層a2式で人体文の可能性のある土器、生殖行為を表現した可能性のある土器(図V-239-594)も出土している。また、灯明に使用した可能性の窺われる土器が、円筒土器上層a2式で1個体(図V-251-628)確認されている。

館崎遺跡で掲載した円筒土器(特に円筒土器上層式)の分類について、円筒土器を出土した他遺跡の通例的な分類基準と異なる部分があるので、それについて述べる。

遺物集中層のまとめり、そこから抽出されたさまざまな属性に着目し、型式細分の作業を進めて

いったが、その過程において、他遺跡の報告書で示されてきた土器の新旧関係ならびに従前より示されてきた型式分類の定義とは合致しないところもあった。最終的に型式細分は館崎遺跡での出土状況と、二次整理を通じて行った属性分析の結果を反映させたものになっているため、同一型式名であっても、他遺跡のものとは必ずしも合致していない。下層d1式～上層a1式（以下原則「円筒土器」を略す）は対岸の津軽半島の円筒土器を分類した三宅徹也氏の分類案（三宅1974）におおむね対応しているが、上層a2式は館崎遺跡での出土状況と属性分析の結果による部分が大きい。代わりに第三者が客観的に検証できるよう、事実記載として、属性の抽出と計測および数値化をできるだけ行い、併せて分類・細分の根拠を極力明示するよう努めた。

大きな相違点について。現在、多くの遺跡で、下層d2式の後半段階とされている土器を、上層a1式とした。斜行縄文を基調地文とする土器であるが、出土土器の属性を整理した結果、文様帯から幾何的なモチーフがなくなり、それとはほぼ連動して胴部地文が絡条体の縦位回転施文から斜行縄文に置き換わる変化が窺われた。これは、かつて三宅徹也氏が、津軽半島の遺跡から出土した円筒土器の分析から、下層式は縦方向の回転施文、上層式は横方向の回転施文であると言及したこと（三宅1974）と一致するものである。また、下層d1式からd2式にかけての地文の変化についても、中の平遺跡や石神遺跡の出土土器を対象として、三宅氏が示した「津軽第1地域における変遷」と、館崎遺跡で検討した変遷とはおおむね合致する結果となった。こうしたことを踏まえて、下層d1式から上層a1式にかけては、三宅氏が提示した、津軽第1地域における土器変遷案に準拠することにした。そして、これと連動する形で、多くの遺跡で上層a1式とされているものについても、上層a2式とすることにした（上層a2式はほぼそのままである）。館崎遺跡の当該期の属性を整理した結果、三内丸山遺跡などで上層a1式と上層a2式とされているものについて、明確に分けることができなかったからである。

円筒土器上層b式と見晴町式との間を埋める土器についても、従来の分類定義と微妙に異なったものになっている。周知のとおり、円筒土器上層式の後半段階は、東北地方では上層e式～d(e)式という型式名が用いられ、北海道ではサイベ沢Ⅷ式が用いられているのが通例である。サイベ沢Ⅷ式が用いられるようになったのは、高橋正勝氏が「北海道と東北との円筒土器の細分型式名は、異なるべきであろうと考えている」（高橋1972）と提言されたことを嚆矢とする。しかし、館崎遺跡がもっとも青森県（北東北）に近いところに位置するからかもしれないが、館崎遺跡で出土したいわゆるサイベ沢Ⅷ式相当の土器と、青森県内（一部は岩手県や秋田県の北部）で出土しているサイベ沢Ⅷ式併行の円筒土器上層式とを比較する限り、大きな違いは見いだされなかった。

円筒土器上層b式と見晴町式との間を埋める土器について、サイベ沢Ⅷ式（古）、サイベ沢Ⅷ式（新）と二分したが、従前に示された細分定義に必ずしも依拠したものにはなっていない。他型式同様、館崎遺跡での出土状況のまとまりと属性の検討結果に基づいて、新旧を勘案した。サイベ沢Ⅷ式（古）は、サイベ沢Ⅷ式、Ⅷ式の一部、円筒土器上層c式の一部、上層d式の一部にほぼ相当する。サイベ沢Ⅷ式（新）は、サイベ沢Ⅷ式の一部、円筒土器上層d式の一部、上層e式の一部にほぼ相当する。

(2) 石器・石製品等

石器は、剥片石器、剥片、礫石器、石製品、有意の礫、礫に大別し、さらに後述の基準で器種分類を行った。また、必要に応じて、形態、製作方法による細分類を行った。

計測に関しては、大きさはmmを単位とした。重量はgを単位とし、おおむね、剥片石器は0.1g単位、礫石器は1g単位、5000gを超えるものは100g単位で計測した。()は現存の値を示した。

図の縁辺に付した記号は、|←→|はすり痕・摩耗痕、∨-∨はたたき痕・敲打痕を示す。スクリーントーンについては、剥片石器では使用による明瞭な光沢のみられる部分を、礫石器では使用により摩耗・磨滅した部分を示している。黒塗りはアスファルトの付着を示している。斜線は、磨滅により剝離稜線が消失した範囲を示す。また、使用光沢・アスファルト以外の付着物や器表面の変化については、必要に応じてスクリーントーンで示し、内容を文中に記載した。

展開面の呼称は図正面・裏面としたものがある。なお、「裏面」には、通常「表面」が対応するが、「表面」と区別する必要から「正面」を用いた。形態の特殊なものについては、図VI-180に示す部位名称を使用した。

以下、文中で石器と記載する場合は、剥片・礫を除く狭義の石器を示すこととした。

剥片石器

石錐：押圧剝離により両面が調整され、尖頭形を呈する5cm未満のもの。

石槍またはナイフ：押圧剝離により両面が調整され、尖頭形を呈する5cm以上のもの。

ナイフ：両面が調整された石器で、左右非対称で尖頭部をもたず、側縁が刃部状のもの。

石錐：素材の端部に突出部が作り出されたもの。

つまみ付きナイフ：素材の端部に一对の抉入部を加工することで、つまみ部が作り出されたもの。

筒状石器：両面が調整された石器で、一端に直線状ないし弧状の刃部が形成されるもの。

スクレイパー：素材の縁辺に連続的に剝離を加え、刃部とするもの。

両面調整石器：素材の両面に粗い剝離が施され、尖頭形をなさないもの。

楔形石器：素材の両端部に対向する小剝離があるもの。

剥片石器片：調整された剥片石器とみられるが、小片であるため器種が特定できないもの。

Rフレイク：散漫な剝離が加えられた不定形のもの。部分的な微細剝離痕のみられるいわゆるUフレイクもここに含めた。

剥片（フレイク）：石核、石器から剝離されたもので、二次的な剝離が確認されないもの。

石核：石器素材となりうる大きさ・形状の剥片を剝離した痕跡が複数あるもの。

礫石器

石斧（磨製石斧）：打ち欠き・敲打・研磨により整形され、研磨による刃部をもつもの。

たたき石：礫にたたき痕があるものうち、能動的と考えられるもの。

すり石：礫にすり痕があるものうち、能動的と考えられるもの。

扁平打製石器：扁平な礫を素材とし、側縁を打ち欠いて先鋭な刃部状の機能部を作り出すもの、あるいは、板状節理などの縁辺の先鋭な礫を素材とし、先鋭な側縁に使用痕のみられるもの。機能部は使用により磨滅して平坦～やや凸形の使用面が形成される。

北海道式石冠：主に敲打による整形で、上部に握り部、下面に使用面が作り出されるもの。

石錘：扁平～やや厚みのある礫を素材とし、長軸・短軸の対向する位置に抉入部を作り出すもの、および、礫に貫通孔をもち、結索が想定されるもの。

礫器：扁平な礫の主に短辺を打ち欠いて、刃部状に作り出すもの。片刃状のものが多い。

石鋸：扁平な礫の縁辺に、断面U字形のすり痕が形成されるもの。

砥石：礫にすり痕があるもののうち、受動的と考えられるもので、使用面が明瞭な溝状となるもの、凝灰岩などの石材で使用面の肌理が非常に細かいもの。

台石・石皿：礫に敲打痕・すり痕があるものうち、受動的と考えられるもので、砥石を除いたもの。加工痕のある礫：礫に何らかの加工が散漫にみられるもの。

有意の礫：形態や材質が特徴的で、意図的に持ち込まれたと考えられる礫。原石・変わり石・軽石礫・有孔礫など。

礫：加工痕・使用痕のみられない自然の礫。

その他：赤色顔料・寛永通宝がある。

石製品

岩偶：人形に成形されるもの。

球状耳飾：主に三角形を呈する板状で、上部に貫通孔と、そこから下部へ開口する切目をもつ、装身具と考えられるもの。

垂飾：穿孔されており、垂下する装身具と想定されるもの。

玉：穿孔されており、主に連をなす装身具と想定されるもの。

円板状石製品：板状で円形に成形されるもの。

三角形石製品：板状で三角形に成形されるもの。

三脚石器・四脚石器：剝離により素材の縁辺を内湾あるいは扶入させることにより、3か所ないし4か所の脚部を作り出すもの。

異形石器：両面調整によって成形されたものうち、機能部を想定し難いもの。

鳥帽子形石器：石冠椀石器とも呼ばれるもので、主に研磨により三角錐状～三角柱状に成形されるもの。

側縁有溝石器：扁平な礫の側縁に敲打による溝ないし平坦な面をもつもの、および平坦面に敲打による円形～楕円形の窪みをもつもの。

「長板状石製品」：主に扁平な板状節理の礫を素材とし、長辺の一方をやや先鋭に、もう一方を平坦に幅広く加工するもの。類例が少なく、今回は形態から「長板状石製品」と仮称した。

石棒：棒状に成形された石製品。棒状の礫の一部に加工があるもの、被熱したものも含めた。

線刻礫：礫に線刻が施されたもの。

軽石製品：軽石を素材とした石製品。滑車形のもの、北海道式石冠形のものなどがある。

石製品：上記に分類されない石製品を一括した。

石材

石材の同定は、肉眼とルーペおよび20倍の実体顕微鏡により簡易的に行った。考古学的な慣例による名称や、特徴的な石材について今回に限定して使用した名称もあり、岩石学的な名称とは一致しない場合がある。詳細についてはⅥ章に記載する。

剝片を除いた剝片石器の石材は88%が頁岩、10%が珪質砂岩である。珪質砂岩は、褐灰色(10YR5/1～4/1)を呈し石英の結晶を多く含む石材である。他には、黒曜石・珪化岩・チャートが0.5～0.8%、玉髓・珪質岩・白色泥岩・粘板岩・泥岩・緻密安山岩・ホルンフェルス・凝灰岩・流紋岩・玄武岩などが少数みられる。

石斧の石材は、アオトラ石と呼ばれる緑色泥岩が主体で、青色片岩・ドレライトがやや多い。他には安山岩・泥岩・砂岩・黒色片岩などが少数、玄武岩・斑輝岩・閃緑岩・緑色片岩・ロジン岩などがわずかにある。

礫石器の石材は、器種による偏りがあるが、砥石以外は安山岩が主体であることは共通する。安山岩以外には、玄武岩・砂岩・チャートがやや多く、凝灰岩・粘板岩・白色泥岩・花崗岩・閃緑岩・ひん岩・片麻岩・斑糲岩・泥岩・頁岩・ホルンフェルス・ドレライト・流紋岩・石英岩・珪質砂岩・礫岩などが少数みられる。安山岩と玄武岩は、円磨されたものと板状節理のものがある。砥石は砂岩・凝灰岩が主体である。

剥片は、88%を頁岩、11%を珪質砂岩が占め、他には、黒曜石・珪化岩・チャート・玉髓・安山岩が0.1～0.5%、粘板岩・玄武岩・緻密安山岩・花崗岩・泥岩・珪質岩・礫岩・白色泥岩・凝灰岩・ホルンフェルスなどが少数みられる。球状耳飾に関連するとみられる滑石の剥片が3点出土している。

礫の石質は、安山岩が約半数を占め、種類も礫石器とほぼ共通するが、安山岩以外の組成はやや異なっている。礫石器が玄武岩・砂岩が多いのに対し、礫はチャート・泥岩が多くみられる。チャートの礫は被熱したものも多い。

使用光沢

スクレイパー、つまみ付きナイフ、Rフレイクの長辺にみられることが多い。イネ科植物の刈取りなどに伴って形成されたものとみられる。詳細については『野田生4遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター1992）を参照願いたい。また、石槍またはナイフや石斧の体部にみられるものは、着柄や鞘の装着の痕跡と考えられる。（柳瀬）

（3）骨角器

下記の認定基準を設定して、器種分類を行った。

銛頭：繫留、着柄、柄からの離頭のための構造を有する刺突具。

釣針：繫留の機能を有する刺突具で、単体ないし2点以上の組み合わせで鉤状を呈するもの。

刺突具：一端が尖鋭となるものの内、銛頭、釣針、骨針などには明瞭に分類できないもの。

骨錐：一端に突出した機能部を有し、その先端が断面角形のもの、摩耗するもの。

骨篋：短冊状の薄手素材の短辺を両面から加工して機能部とするもの。

骨針：直径0.5cm以下の棒状を呈し、針先を先鋭に、針頭には糸を通したり、絡めたりする孔や抉りをもつもの。

刺離具：短冊形ないし棒状で、一端に摩耗した機能面をもつもの。棒状製品と呼ばれるものを含む。

髪針：器体部は棒状であるが、一端を肥厚させ、装飾が付されるもの。

管玉：管状骨を輪切りにし、表面を磨いたもの

垂飾：孔や糸掛けによって垂下したもので、装身具と考えられるもの。

鯨骨製品：鯨骨を加工したもので、何らかの機能性があつたと推定されるもの。

未成品：骨角器の製作にあたって、意図的な加工痕跡は見いだせるが、最終形態に至っていないもの。

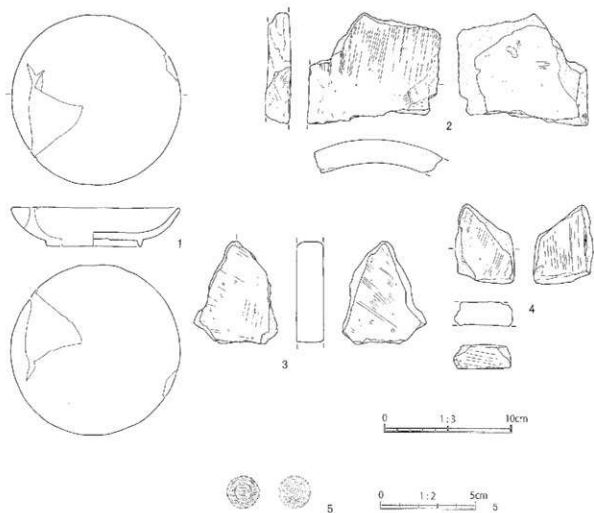
残片：骨角器の製作にあたって、手持ち部分などにされ、加工途中で切り取られ、不要にされたとみられるもの。（福井）

6 近代の遺物 (図Ⅲ-3、表Ⅲ-1、図版366)

近代のものとみられる遺物は、磁器片7点、瓦片3点、硯片? 3点、鉄片14点、古銭2点が出土した。磁器1個体(1)、瓦片3点(2~4)、古銭1点(5)を掲載した。

1は磁器。高台付の皿。コバルトを使用した銅版摺りで、近代のもの。見込みに菊花、胴に流水菊が施されている(図版366-1参照)。2~4は素焼きの瓦片。おそらくは近代のものとみられる。

5は一銭アルミ貨(品位 アルミニウム1,000)。背面の刻印は鳥。昭和十五年製。いわゆる「臨時補助貨幣」の一つ。(影浦)



図Ⅲ-3 近代の遺物

表Ⅲ-1 近代の遺物

図版号	機軸No.	図版番号	復元・破片	復元・破片No.	大分類	型式名	遺構名	調査区	層位	点数	合計	同一個体破片	サイズ	量g	備考
図版-2	1	366	復元	891	磁器(明治)	磁器(明治)	D06	フウダ カクラン	6 1	7	無	無	口径13.0cm・高台径1.4cm・器高3.0cm	153g	銅版摺り
図版-3	2	366	破片	318	瓦片(近代)	瓦片(近代)	G01	1層カクラン	1	1	—	—	厚さ17~19mm	(160g)	
図版-3	3	366	破片	318	瓦片(近代)	瓦片(近代)	E01	1層カクラン	1	1	—	—	厚さ20~21mm	(100g)	
図版-3	4	366	破片	317	瓦片(近代)	瓦片(近代)	H01	1層カクラン	1	1	—	—	厚さ19mm	(50g)	
図版-3	5	366	—	—	古銭	一銭アルミ貨	不明	カクラン	1	1	—	—	直径17.00mm・厚さ1.5mm	0.9g	昭和十五年製造

Ⅳ 館崎遺跡の遺構

1 遺構の概要（図Ⅳ-1～17、表Ⅳ-1～4）

平成21～23年度の調査で、盛土遺構2条10種、竪穴住居跡53軒、土坑119基、Tピット1基、焼土118か所、集石27か所、フレイク集中48か所、小ピット369基、埋設土器1か所、配石列3条、杭列2条57基、道路跡1条を検出した（図Ⅳ-1～17）。遺構は、縄文時代前期後葉～中期中葉のものが主体で、一部が縄文時代早期後葉、後期前葉に形成されたものである。具体的には、早期後半の遺構は、土坑7基、後期前葉の遺構は、盛土遺構（D盛土）、住居跡3軒、土坑21基、焼土12か所、集石2か所、小ピット1基、配石列2条が確認されている。また、近代の戦争遺構である塹壕跡1条、防空壕跡4基も確認された（便宜上、この章に含めた）。

館崎遺跡は福島町教育委員会により、過去複数回の調査がなされている。遺跡は、津軽海峡と吉岡川に挟まれるようにある段丘の突出部に形成されたが、そのうち段丘突出部の基部周辺はA地点とされ、今調査区に隣接した。また、段丘突出部中央はB地点、段丘突出部北側の一画は、C地点とされた（図Ⅱ-2(2)・4）。

A地点は、昭和48年と昭和59年に今調査区の北東側に隣接する部分が調査された。縄文時代前期末葉～中期中葉の盛土遺構（東盛土）が検出されているが、昭和48年では「再堆積層・埋め戻し層・土器集積址」とされ、昭和59年では「土器塚」とされた。また、竪穴住居跡は縄文時代中期のもの1軒、縄文時代後期前葉のもの2軒があり、縄文時代後期前葉の土坑18基も検出されている。

B地点は、昭和59年に調査された。縄文時代後期前葉の竪穴住居跡1軒が検出されている。

C地点は、昭和60年に調査された。縄文時代後期前葉の竪穴住居跡2軒、土坑5基が検出されている。

なお、段丘突出部東側は、中世の穂内館跡とされる。本体部分は昭和46年に調査され、縄文時代中期～後期の土器片も採集されている。また、館崎遺跡C地点の東に隣接した地点が昭和61年に調査がなされ、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡2軒、土坑5基が検出された。

このように、今調査と既調査の成果を総合すると、段丘突出部には縄文時代後期前葉の遺構群が散在しており、縄文時代前期～中期の遺構群はA地点周辺に集中したことが推定される。

盛土遺構は土手状に遺されており、東西2条が並列して確認される。調査区外の北西側にも広がりを持っており、現地表面においても、高まりとして認識できる。西側の盛土は形成時期と堆積土の特徴から、P盛土（年報などで「掘り上げ土」とした、前期後葉～末葉）、A盛土（前期末葉）、B盛土（前期末葉～中期前葉）、C盛土（中期前葉）、D盛土（後期前葉）の大きく5つに分類された。堆積状態から、P盛土は桶状盛土、A・B盛土は土手状盛土、C盛土は斜面盛土と考えられる（福井2015）。なお、『調査年報24』において、「大形廃棄土坑」として報告された部分は、精査の結果B盛土の一部と判断された。

竪穴住居跡は、Ⅰ類：楕円形～隅丸方形で、ベンチ状構造をもたないもの、Ⅱ類：楕円形～隅丸方形で、ベンチ状構造をもつもの、Ⅲ類：長楕円形～隅丸長方形で、ベンチ状構造をもたないもの、Ⅳ類：楕円形で、ベンチ状構造をもたないもの、4形態に区分できた。Ⅰ類は前期後葉～中期初頭、Ⅱ類は前期末葉～中期前葉、Ⅲ類は中期前葉～中葉、Ⅳ類は後期前葉に、それぞれ顕著な住居型式である。したがって、この住居型式が住居群の変遷を考える基になりうる。なお、ベンチ状構造については、

略してベンチと呼称している場合がある。

また、住居跡は、その長軸方向によって大きく2群に分けられた。住居Ⅰ群は、長軸が海岸線に平行する住居群で、縄文時代前期後葉～末葉に構築された。一方、住居Ⅱ群は、長軸が海岸線に直交する住居群で、縄文時代前期末葉～中期中葉に構築された。この長軸の変更は、盛土遺構形成の度合いによって決定づけられたものとみられる。

個々の住居の記載では、他の住居との切り合いを観察できた範囲で述べているが、調査の過程で認識困難であった部分がある。また、自然堆積のローム層を掘り込まないで構築された住居が、建て替えを繰り返すので、その範囲を平面で把握しにくく、複数の住居を1軒として調査してしまった例が多くある。さらに重複関係を正確に認識できなかった例もある。しかしながら、極力個々の住居へ分離するよう努めた。

竪穴住居跡の覆土は、大きく覆土上層と覆土下層に区分された。上層は、人為堆積物が盛土遺構に連続している。また、一時期に堆積したというよりは、小単位の堆積物が累積した場合がほとんどとみられる。一方、下層は、比較的短期間に堆積した場合が多いとみられる。床面を平凹レンズ状に覆う、いわゆる三角堆積となっている。ロームブロックの角状偽礫を多く含むのが特徴。状況から、住居を覆っていた屋根土由來の堆積物と考えられる。角状偽礫は、屋根に塗りこめられ、硬化していたロームが、打ち崩されたために形成されたと推測している。角状偽礫と「土」からなるため、屋根土も複層であったことが分かる。また、住居主柱穴とみられる主要なHPの覆土は、住居の覆土下層が入りこむもののほかに、締まりなくソボロ様の覆土が目立った。後者の状況は、樹木の根跡の状況に類似しており、柱がその場で腐朽した結果を示すとみている。ただし、腐朽のタイミングが住居廃絶後か、それ以前の居住時かは判然としない。

住居跡のうち、TH-5とTH-9の床面付近から人骨が検出された。これらは、住居跡覆土に掘り込みが確認できなかったことから、廃屋葬されたものと考えられる。特にTH-5では、しまりの極めて弱い覆土が堆積した主柱穴跡に頭が流れ込むように遺体が検出された。埋葬姿勢は、TH-5は恐らく側臥状態の強屈葬、TH-9は仰臥状態の膝屈葬であった。

土坑は、フラスコ状土坑と、楕円形土坑があり、ほかに円形、隅丸方形などの形態があった。土坑のうち、人骨が検出された土坑墓は6基確認された。平面形態では、フラスコ状土坑が2基、楕円形が4基ある。楕円形のうち1基は小型竪穴住居様で、8体の多遺体埋葬墓であった。多遺体の埋葬は、人骨の位置が解剖学的位置を保っていない可能性があり、柱穴を持つことから、小屋掛けされた小竪穴に、複数回にわたり埋葬がなされたことが推測される。ほかの土坑墓は、単埋葬。膝を強く曲げ、側臥となる強屈葬例が2基、膝を軽く曲げ、仰臥となる膝屈葬例が2基、埋葬姿勢の不明なもの1基であった。

フラスコ状土坑は57基検出され、時期毎では縄文時代前期末葉23基、前期末葉～中期前葉13基、中期前葉15基、後期前葉6基となる。楕円形の土坑は28基検出され、時期毎では縄文時代前期末葉8基、前期末葉～中期前葉2基、中期前葉3基、後期前葉8基、その他7基となる。

Tピットは、N・O9区で長楕円形のもの1基を検出した。縄文前期末葉の住居跡廃絶後、その窪みに盛土層が堆積し、埋まりきった後に掘削されている。しかし、断面観察面でも、時期不詳の土坑2基に切られており、構築時期は縄文中期前葉～後期前葉と推定される。

焼土は、盛土層や住居跡覆土で検出した例と、Ⅲ層黒色土上面で検出した例がある。また、焼成されたまま残された現地性のものと、二次的に移動された異地性のものがある。時期が判明しているものでは、前期末葉で異地性19基、現地性11基、前期末葉～中期前葉で異地性11基、現地性2基、中

期前葉で異地性9基、現地性2基、中期前葉～中葉で異地性11基、現地性3基、後期前葉で異地性3基、現地性9基となる。前期～中期に関しては異地性焼土の方が多く、焼土として認定しなかった例も含めると、膨大な量の焼土ブロック、焼成残渣が盛土層や住居跡覆土に含まれていたとみられる。また、現地性焼土では、上位に灰層が残されるものが目立っていた。

集石は、細礫(0.2～1cm)、小礫(1～5cm)、中礫(5～10cm)、大礫(10～20cm)、巨礫(20～30cm)、巨岩(30cm以上)の各大きさの礫から構成されていたが、細～小礫、中～大礫からなるものが多く、ある程度大きさを揃えている状況が感じられた。集石は、住居跡の覆土層を含む盛土層で確認されたが、細～小礫からなるものは、中期前葉のC盛土の範囲に多かった。海岸の砂利をひとまとまりに置いたような印象を受けた。中～大礫は、B盛土やC盛土で多く出土したが、所々で集中する状態をTS-17の出土状況で確認できる。

フレイク集中は、盛土や遺構覆土などで検出した。中期前葉の例は少なく、前期末葉に属するものの方がより多く検出された。ただし、遺構・遺物に追われた調査であったので、全てを記録できていない。なお、集石やフレイク集中は図化したものも僅かで、位置情報と写真で記録したものがほとんどであるので、その場合は全体図にのみ位置を落とした。そして、記載したものの以外にも存在していた可能性はある。

杭列は、Ⅲ層黒色土上面で列をなす柱穴群が2列確認されたものについて命名した。「杭穴」は、盛土層中から掘り込まれたもので、杭列1はA盛土、杭列2はB盛土の長軸に沿っていた。このような状況から土留めの機能を持っていたと推定している。また、TH-37ベンチ状構造床面で検出された柱穴列も、同様なものであったと考えられる。

小ピットは、I 6・7区とその周辺に集中した。ここでは1グリッドあたり10基以上、最多45基が確認された。一方、ほかでは、各グリッドとも10基未満が確認されたに過ぎない。これら小ピットは、6割以上が自然堆積層で確認されたものであるが、残りは堅穴住居跡の覆土や床面、盛土層などで確認された。後者は、住居との関係を掴むことができなかったものではあるが、その規模や形状について、住居の柱穴と大きな違いは認められなかった。

配石列は、3条認められたが、後述する道路跡を挟むように構築されていた。ほとんど不明瞭であったが、部分的に礫が列状に分布するものがあり、一部は立石とされたようであった。また、配石列の一面では、扁平な凝灰岩礫が列状になるように埋め込まれた部分があった。配石列のうち、1・3は、共存した土器から、後期前葉に構築されたものとみている。

道路跡は、東西盛土遺構に挟まれた地点で確認された。道路跡では、V層が1m前後削られていた。路面は住居跡床面同様に踏み固められ、斑状の汚れた面となり、他の遺構や遺物はほとんど分布していなかった。盛土遺構形成のための掘削が、結果的に道路状になったのか、意図した結果なのかは、判断としない。

戦跡遺構として、壘壕跡と防空壕跡が確認された。中世の壕跡の可能性も疑ったが、土層観察の結果、ごく新しい時期の構築と判明した。そして、地元の方には、津軽海峡警備のため監視哨が設けられていた、と聞かされた。施設設置にあたっては、縄文時代の盛土遺構によって形成された地形を利用したとみられる。壘壕跡は、ごく僅かにジグザグに掘削され、その排土を海側に盛っていたようであった。北西の調査区外へ延びており、施設を囲うためのものであったとみられる。一方、防空壕跡は5基確認されたが、壘壕跡よりも南東側で、間隔を置いて散在していた。防空壕跡の一部は、盛土遺構によって形成された斜面部分を利用して構築されていた。

各遺構出土遺物のうち、土器・土製品は第2分冊土器編、石器・石製品は第3分冊石器編、骨角器・

動物遺存体・植物遺存体は第4分冊総括編で詳述してある。遺構編では、その記載に基づき、遺構調査時の所見も踏まえて、概要を記した。時期については、円筒土器下層式では、c式が出土した場合は前期後葉、下層d1・2式では前期末葉とした。また、円筒土器上層式では、a1・2式が出土した場合は中期初頭とし、上層b式では中期前葉、サイベ沢Ⅶ式・見晴町式では中期中葉とした。

mが付された層の出土品は、盛土遺構出土のものである。取り上げ層位と盛土区分の対応関係については、一覧表を作成した(表Ⅳ-6)。層名と盛土区分がグリッド間で一致していない。これは、グリッドごとに掘り下げる過程で、周辺も水平に堆積していると仮定して、上位から層名を付したためである。しかし、精査した結果、層堆積が複雑であったため、同一層名であっても、グリッドが異なる場合、異なる時期の層である場合が多い。したがって層名は、ごく限られた範囲での遺物のまとまりと前後関係を示しているものである。

遺構覆土として取り上げたものについても、遺構を盛土層が覆っている例が多く、堅穴住居跡の場合、覆土上層ないし覆土1層から出土したものは、実際には盛土遺構に含まれるものである。さらに、各遺構が著しく重複しており、調査時にも他の遺構を含めて取り上げてしまった例が多数存在する。住居跡覆土上層の盛土区分についても一覧表にしている(表Ⅳ-6)。

なお、遺物は、住居跡床面や土坑底面から出土したものはごく少なく、住居跡覆土中位からまともに出土する状況が多かった。そのため、遺物のまとまりは、廃棄段階でのまとまりを示しており、直接遺構の時期を決定できる遺物やそのまとまりはごく少ないと判断され、遺構と遺物は分けて報告することにした。

以上のように、遺構と遺物の関係には十分な注意が必要であることを明記する。(福井)

2 盛土遺構(図Ⅳ-18~53、表Ⅳ-1)

盛土遺構は、東西2条ある。東盛土は、確認した長さ36m、最大幅37m、最大厚1.4mで、推定長76m。西盛土は、確認できる長さ62m、最大幅30m、最大厚1.9mで、推定長87m。現状では2条が並列していたことが確認される。盛土遺構には、遺物、土壌、焼成残渣などの廃棄物が集積されているが、盛り上げられるだけでなく、窪みを埋める場合もあり、堆積物として両者を区別することはできない。ここでは凸状に土層主体で堆積するものを盛土、凹地を埋める土層主体の堆積を埋土として、記述していく。盛土遺構を構成する土層には、土壌主体の二次堆積土層のほか、遺物主体の遺物集中層、焼成残渣層、混貝土層などがある。堆積状況から西盛土は、P盛土、A盛土、B盛土、C盛土、D盛土に区分した。東盛土は、観察された断面からA盛土相当、B盛土相当、C盛土からなるとみられる。なお、A盛土、B盛土、C盛土には稜線が認められたので、おおよその位置を・・・で示した(図Ⅳ-18~23)。

西盛土

P盛土(図Ⅳ-19・26・30・33・34、表Ⅳ-1、図版6~9・12・13・154)

位置 H-N1~8

立地 標高24.4~25.6mの平坦地 **規模** 確認長約30m×確認幅約21m×厚さ0.1~0.2m

確認・調査 TH-11・14・17を調査する過程において、その周囲に主にV層：ローム由来土からなる人為堆積土が確認された(土層断面⑩)。当初は、住居跡の周囲で、数十cmのやや均質な厚さで堆積する状況が確認されたため、住居掘削時に周囲に堆積させる「掘り上げ土」との認識で調査を行った。しかし、その広がりが住居跡周辺に限らないこと、後述のP'盛土との関連性から、盛土遺構の一つ、

「楯状盛土」と認識するに至った。広がりについては、P'盛土と合わせ、長軸が海岸線に平行する住居群Ⅰの分布範囲に一致している。なお、同様な盛土遺構は、木古内町大平遺跡、釜谷遺跡、札苅8遺跡、北斗市館野6遺跡、函館市ハマナス野遺跡などで確認されている。このP盛土は、TH-11・24では一部覆土を覆うように堆積していたとみられるが、ほかの住居には切られている。したがって、P盛土はTH-11・24住居廃絶後までは一部継続して堆積されたものと推定される。

土 層 土層断面②・⑪・⑯・⑰などを記録した。自然堆積の黒色土Ⅲ-3層直上に、ローム層由来土と漸移層由来土の混土が堆積しているのが特徴。厚さも均質で、平板に堆積している。目立った混入物もみられない。後述のP'盛土とは、土色の黄色味の強弱で区別されるものであったが、堆積状況の類似性から同一のものと考えられる。

遺物出土状況 調査時の印象では、盛土中の遺物は多いものではなかった。むしろ、直下において個体土器が横倒しの潰れた状態で出土した例が複数確認された。したがって、「掘り上げ土」出土として取り上げられた遺物には、その上下出土のものが含まれているとみなせる。ここでは、H-NⅠ～7区で「掘り上げ土」として取り上げられたものを、P盛土出土代表資料として示す。土器は、Ⅰ群b4類2点、Ⅱ群b類1,930点、Ⅲ群a類504点、Ⅳ群a類4点。土製品等は、円板状土製品2点、焼成粘粘土塊1点出土。石器は、剥片石器192点、フリイク2,009点、礫石器37点、石製品2点（塊状耳飾）、有意の礫・礫115点。フリイク以外では、Rフリイク、石核、スクレイパーが各30点以上出土。なお、「掘り上げ土下」として取り上げられた土器は、P盛土直下のものとみられ、Ⅱ群b類629点がある。

時 期 出土した遺物から、縄文時代前期末葉、円筒土器下層dⅠ式期とみられる。（福井）

P'盛土（図Ⅳ-19・25・28・29・33、表Ⅳ-1、図版7～9）

位 置 K-P3-11

立 地 標高23.6～24.4mの平坦地 **規 模** 確認長約33m×確認幅約23m×厚さ0.1～0.2m

確認・調査 TH-2・4・5・15（土層断面①）を調査する過程において、その周囲に自然堆積の黒色土より明るい色調の黒褐色土からなる人為堆積土が確認された。当初は、住居跡の周囲で、数十cmのやや均質な厚さで堆積する状況が確認されたため、住居掘削時に周囲に堆積させる「掘り上げ土」との認識で調査を行った。しかし、その広がりが住居跡周辺に限らないこと、前述のP盛土との関連性から、盛土遺構の一つ、「楯状盛土」と認識するに至った。広がりについては、P盛土と合わせ、長軸が海岸線に平行する住居群Ⅰの分布する範囲に一致している。なお、同様な盛土遺構は、木古内町大平遺跡、釜谷遺跡、札苅8遺跡、北斗市館野6遺跡、函館市ハマナス野遺跡などで確認されている。

土 層 土層断面①・④～⑧・⑯などを記録した。自然堆積の黒色土Ⅲ-3層直上に、黒褐色土が堆積しているのが特徴的。厚さも均質で、平板に堆積している。ローム粒を少量含むほかは、目立った混入物もみられない。

遺物出土状況 調査時の印象では、盛土中の遺物は多いものではなかった。むしろ、直下において個体土器が横倒しで潰れた状態でもって出土した例が複数確認された。したがって、「掘り上げ土」出土として取り上げられた遺物には、その上下出土のものが含まれているとみなせる。ここでは、L-O2～11区で「掘り上げ土」として取り上げられたものを、P'盛土出土代表資料として示す。土器は、Ⅰ群b4類1点、Ⅱ群b類2,098点、Ⅲ群a類565点、Ⅳ群a類22点。土製品等は、円板状土製品3点、焼成粘粘土塊1点。石器は、剥片石器172点、フリイク1,909点、礫石器35点、石製品2点（塊状耳飾）、有意の礫・礫106点。フリイク以外では、Rフリイク、石核、スクレイパーが各30点以上出土。なお、M-N6区で「m3層」出土として取り上げた土器は、P'盛土直下から出土したもので、Ⅰ群b4類48点、

II群b類974点、III群a類4点、IV群a類1点がある。

時 期 出土した遺物から、縄文時代前期末葉、円筒土器下層d 1式期とみられる。(福井)

A盛土 (図IV-20・27・30・33・34・36・40~42、表IV-1、図版10~15・18)

位 置 C~L 0~5

立 地 標高24.1~24.5mの平坦地 規 模 確認長約30m×確認幅約15m×最大厚0.8m

確認・調査 トレンチ調査する過程において、盛土遺構の存在が確認されたが、F 4区で暗黄褐色土と暗褐色土の互層からなるB盛土の下位に、主に暗褐色土からなる人為堆積土として確認された。また、TH-10を埋土していることも土層断面①により判明した。後に、土層断面⑨や⑩において、短軸断面が山状になることが確認され、北西-南東方向に土手状に堆積していることから、「土手状盛土」と認識された。なお、トレンチで確認したこともあって、これを当初はm 3層とし、似た色調であることから自然堆積のⅢ層と混乱している部分もある。ただし、自然堆積のⅢ-3層は、黒色土であるが、部分的に、特にその上部で、ローム粒を僅かに含む攪乱された層相がみられた。これも調査時はm 3層とした。こちらの成因は盛土ではなく、盛土堆積前に、それ以前の遺物を除去するような行為がなされたものと推測される。

土 層 土層断面③・⑪・⑬~⑰・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔などを記録した。自然堆積の黒色土直上に、黒褐色土やにぶい黄褐色土が堆積しているのが特徴的。ローム粒や炭化物も含むが、B盛土に比較するとごく僅かである。地点によるが、m 3層、m 2(9)層として、遺物を取りあがっている。

遺物出土状況 調査時の印象では、A盛土中の遺物が多いものではなく、個体土器もほとんど検出されなかった。ここでは、C~J 0~4区で「m 3層」として取り上げられたものを、A盛土出土代表資料としておく。土器は、I群b類1点、II群b類4類38点、III群b類8,225点、IV群a類495点、IV群a類17点。土製品等は、円板状土製品5点、焼成粘土塊2点。石器は、剥片石器263点、フレイク1,993点、礫石器44点、石製品2点、有意の礫・礫178点。フレイク以外では、Rフレイク、石核、スクレイパーが各40点以上出土。

時 期 出土した遺物から、縄文時代前期末葉、円筒土器下層d 1~d 2式期とみられる。なお、年代測定したところ、以下の結果がでた。D 3区A盛土最下部：4,700±30 yr B.P. (IAAA-112592)。(福井)

B盛土 (図IV-21・25~30・33・34・36・40~42、表IV-1、図版8・10~23・25・26)

位 置 B~O 0~11

立 地 標高24.8~23.6mの平坦地 規 模 確認長約62m×確認幅約23m×最大厚0.8m

確認・調査 トレンチ調査する過程において、盛土遺構の存在が確認されたが、F 4区などで暗黄褐色土と暗褐色土の互層からなる人為堆積土として確認された。また、TH-2・3・4・5を埋土していることも土層断面①・②などにより判明した。後に、土層断面⑪や⑫において、A盛土を覆っており、結果的に断面山状になることが確認された。そして、北西-南東方向に土手状に堆積していることから、「土手状盛土」と認識された。A盛土との関係は、その中軸北東側から覆い始めているが、最終的に全体を覆ってしまっている。

なお、2011年度の調査では、南西側の沢に向けて傾斜した盛土層と多量の土器などが出土した。その状況から、住居と想定され、TH-57・58・63と命名された。しかし、調査の過程で「壁」・「床」とも軟らかく、「床」も平坦ではなく、炉跡や柱穴なども確認されなかったために、同年度発行の「調

査年報24]において、「大形廃棄土坑」として報告された。しかし、改めて精査したところ、これらについては、B・C'盛土層の堆積であって、掘り込まれた遺構ではないと判断した。

土 層 土層断面①～③・⑥・⑦・⑪・⑫・⑬～⑯・⑲～⑳・㉑～㉒・㉓～㉔などを記録した。一部自然堆積の黒色土Ⅲ-3層上に、黒褐色土や暗黄褐色土が互層状に堆積しているのが特徴的。特に黒褐色土に、ローム粒や炭化物、焼土粒、焼骨などを多く含む。一方、暗黄褐色土には、炭化物などが含まれる例と、ほぼ純粋なローム層由来土の人為堆積からなるものがある。層位がよく観察されたグリッドでは、上位よりm2(2)～(8)のように、枝番号を付して層認識し、遺物を取り上げた。そしておおむね偶数が黄褐色土層で、奇数が黒褐色土層となっている。ただし、同一グリッド内では、上下関係を示しているが、グリッドが離れるにつれて、同一層名でも関連していない場合が多くなるので、注意が必要である。その要因は、調査時はおおむね水平堆積に見えたために、各グリッドで上位から取り上げ層名を付していったが、調査が進行し、土層断面を精査したところ、必ずしも水平に堆積層が連続していないことが明らかになったためである。

遺物出土状況 調査時の印象では、B盛土中の遺物は大変多いものであった。個体土器も数が多く、横倒し状態で潰れたもののほか、正立状態、倒立状態で出土した例もあった。ここでは、「m2層」に()付の枝番号層名が付されて取り上げられたものを、B盛土出土代表資料として示しておく。土器は、I群a類1点、I群b類6点、I群b4類16点、II群a類11点、II群b類98.320点、II群b類～III群a類425点、III群a類130.142点、III群b類8点、IV群a類4362点。土製品等は、土偶23点、円板状土製品86点、擦り切り土製品36点、耳栓2点、土玉1点、土製品2点、焼成粘土塊43点。石器は、剥片石器6.958点、フリイク55.105点、礫石器1.200点、石製品67点(うち球状耳飾15点)、有意の礫・礫3.603点。フリイク以外では、Rフリイク、石核、スクレイパーが各1,000点以上、石鏃、つまみ付ナイフ、たたき石、扁平打製石器が各200点以上出土。

時 期 出土した遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉、円筒土器下層d1～上層b式期とみられる。なお、年代測定したところ、以下の結果がでた。E2区B盛土m2(9)層出土炭化材：4.780 ± 30 y r B.P. (IAAA-112599)。E2区B盛土m2(5)層出土炭化材：4.760 ± 30 y r B.P. (IAAA-112596)。G5区B盛土下部出土個体土器No.277内土壌中炭化材：4.750 ± 30 y r B.P. (IAAA-103312)。F2区B盛土m2(7)層出土炭化材：4.700 ± 30 y r B.P. (IAAA-112597)。F2区B盛土m2(8)層出土炭化材：4.710 ± 30 y r B.P. (IAAA-112598)。I6区B盛土下部出土個体土器No.233直下炭化材：4.670 ± 30 y r B.P. (IAAA-92325)。F1区B盛土最下部層出土炭化材：4.630 ± 30 y r B.P. (IAAA-112595)。F3区B盛土m2(5)層出土炭化材：4.490 ± 30 y r B.P. (IAAA-112601)。F1区B盛土m2(3)相当層出土炭化材：4.490 ± 30 y r B.P. (IAAA-112594)。F3区B盛土m2(5)層出土炭化材：4.500 ± 30 y r B.P. (IAAA-112593)。 (福井)

C盛土 (図IV-22・25・29～31・37・38・40、表IV-1、図版18・23～25)

位 置 B～L2～10

立 地 標高23.7～23.4mの廃絶遺構上 **規 模** 確認長約46m×確認幅約23m×最大厚1.1m

確認・調査 トレンチ調査する過程において、盛土遺構の存在が確認されたが、G8区などで黄褐色土からなる人為堆積土として確認された。当初は、B盛土と区別していなかったが、遺物を含む量が少なく、いずれも住居跡を埋土していることから、B盛土とは別のものと認識した。土層断面⑪・⑫において、B盛土の北東側を覆うように堆積しており、短軸断面は三角堆積状であるため、「斜面盛土」と認識された。

土 層 土層断面⑦・⑧・⑩・⑪・⑫・⑮～⑳などを記録した。自然堆積土上に堆積した例はなく、B盛土か住居跡覆土の上位に堆積している。黄褐色土主体で堆積しているのが特徴。混入物はB盛土と比較するとごく僅かである。部分的に、薄い炭化物層、貝層をみることができる。下部では複雑に堅穴住居が重複しており、埋没後の土層収縮による層面擾乱が確認された。遺物は、おおむねm2上層・下層として取り上げた。なお、2011年度に調査を行った0～2ラインのm2下層については、B盛土である。

遺物出土状況 調査時の印象では、C盛土中の遺物は多いものではなかった。個体土器は少なく、あっても横例して検出される例であった。ここでは、B～L5～10区で「m2上層」として取り上げられたものを、C盛土出土代表資料として示す。土器は、Ⅱ群b類3,899点、Ⅱ群b類～Ⅲ群a類2点、Ⅲ群a類20,041点、Ⅲ群b類18点、Ⅳ群a類2,233点、Ⅳ群b類1点。土製品等は、円板状土製品6点、すり切り土製品1点、焼成粘土塊4点、土製品1点。石器は、剥片石器1,313点、フレイク9,700点、礫石器378点、石製品24点（うち烏帽子形石器4点）、有意の礫・礫1,020点。フレイク以外では、Rフレイク、石核、スクレイパーが各200点以上、石鏃が87点出土。

時 期 出土した遺物から、縄文時代中期前葉～中葉、円筒土器上層b～見晴町式期とみられる。なお、年代測定したところ、以下の結果がでた。TH-22覆土中部（C盛土層）炭化材集中層（1）出土炭化材：4,500 ± 30 y r B.P. (IAAA-92321)。TH-22覆土中部（C盛土層）炭化材集中層（2）出土炭化材：4,550 ± 30 y r B.P. (IAAA-92322)。 (福井)

C'盛土 (図IV-39～42、表IV-1、図版8・14～17・25・26)

位 置 C-G0～2

立 地 標高23.9～23.7mのB盛土上 **規 模** 確認長約23m×確認幅約13m×最大厚1.1m

確認・調査 2011年度の調査で確認されたが、調査時は「TH-58」（B盛土層）の西側を覆うように堆積しており、短軸断面は三角堆積状であることから、「覆土」と認識された。しかし、改めて精査したところ、これらについては、C'盛土層の堆積であって、B盛土の堆積を覆う「斜面盛土」と判断された。

土 層 土層断面㉔などを記録した。B盛土を覆うように堆積するが、B盛土堆積先端ではそれを越え、自然堆積土上にも堆積している。C盛土と異なり、黒褐色土～にぶい黄褐色土主体で堆積しており、遺物も比較的多く含むのが特徴的。ローム粒や炭化物なども含むが、B盛土と比較するとごく僅かである。

遺物出土状況 ここでは、G1区で「TH-58覆土」出土として取り上げられたものを、C'盛土出土代表資料として示す。土器は、Ⅰ群a類1点、Ⅰ群b4類5点、Ⅱ群b類5,78点、Ⅲ群a類7,232点、Ⅳ群a類385点。土製品等は、土偶1点、すり切り土製品1点。石器は、剥片石器79点、フレイク131点、礫石器26点、石製品2点、有意の礫・礫61点。フレイク以外では、Rフレイク、石核、スクレイパー、扁平打製石器が各10点以上出土。

時 期 出土した遺物から、縄文時代中期前葉～中葉、円筒土器上層b～サイベ沢Ⅶ式期とみられる。 (福井)

D盛土 (図IV-32、表IV-1、図版27)

位 置 B-E10～12

立 地 標高23.9～24.3mのV層上 **規 模** 確認長約10m×確認幅約6m×最大厚0.4m

確認・調査 トレンチ調査する過程において、盛土遺構の存在が確認され、そのうち最も上位に堆積する暗褐色土をm1層と認識し、掘り下げていた。しかし、C10・11区の調査区境界断面を観察すると、後期涌元式の半完形土器が含まれたことから、縄文時代後期の盛土層であることを確認した。後期土器の分布と、m1層と認識していた土層の広がりから、当初はB～L3～13まで広がっていたと想定したが、精査したところ、B～E10～11及びTH-7覆土上層、TH-(113)(TH-12・35覆土上位)のごく狭い範囲に顕著に堆積していたものとの判断に至った。なお、B～D10～11区以外に堆積したm1層は自然堆積層である上部Ⅲ層(B～Tm下位の暗褐色土)と判断した。

その形成過程を推定すると、後期前葉の段階で、中期以前の人為によってできた凹凸を利用して、配石列を構築しようとした。その際、道路跡を挟んで南西側は中期のC盛土による盛り上がり顕著であったが、道路跡を挟んだ北東側では南西側程の盛り上がりにはなっていなかった。配石列を構築するには、左右対称の凹凸を必要としたため、そのバランスをとるために、後期前葉段階で地形改変を行った。その結果がD盛土と考えられる。

土層 土層断面⑤などを記録した。自然堆積土上には堆積しておらず、削平されたV層上位に不整合に堆積する。暗褐色土主体で堆積しているのが特徴。炭化物も含むが、B盛土と比較するとごく僅かである。縄文時代後期の住居跡覆土も類似している。

遺物出土状況 印象では、D盛土中の遺物は多くなかった。個体土器も少なく、横倒して検出される例があった。ここでは、C～D10～11区で「m1層」として取り上げられたものを、D盛土出土代表資料として示す。土器は、Ⅱ群b類36点、Ⅲ群a類381点、Ⅲ群b類6点、Ⅳ群a類12,086点、Ⅳ群b類1点。土製品等は、円板状土製品1点、すり切り土製品1点、耳栓1点、焼成粘土塊50点、土偶1点、土製品2点。石器は、剥片石器143点、フレイク199点、礫石器43点、石製品1点、有意の礫・礫137点。フレイク以外では、Rフレイク、石核、スクレイパー、たたき石、すり石が各10点以上出土。

時期 出土遺物から時期は、縄文時代後期前葉、涌元式期である。なお、年代測定したところ、以下の結果が得た。E11区m1a層出土炭化材：3,370±20y r B.P.(PLD-25670)。この測定値は、想定される時期より新しいので、D盛土上位に堆積した層から混入したものと評価できる。(福井)

東盛土

A盛土相当(図Ⅳ-39・40、表Ⅳ-1、図版26・28)

位置 A～B14～16 **立地** 標高26.1m前後の平坦地 **規模** 最大厚0.4m

確認・調査 2011年度調査開始後、隣接地法面に盛土断面が現れていたため、確認、記録を行った。

土層 おもに黒褐色土層からなり、一部ほぼ純粋なロームからなる黄褐色土層や焼土層を含む。それぞれの層境は不明瞭で、水平堆積が主体となっている。なお、1985年報告の土器塚V・VI層に対比される。

時期 時期は、縄文時代前期末葉とみられる。(福井)

B盛土相当(図Ⅳ-39・40、表Ⅳ-1、図版28)

位置 A～K14～18 **立地** 標高26.1m前後の平坦地 **規模** 最大厚0.9m

確認・調査 2011年度調査開始後、隣接地法面に盛土断面が現れていたため、確認、記録を行った。

土層 炭化物の多い層、黒褐色土層、黄褐色土層の薄層が、交互に堆積している。また、その堆積は小マウンドを形成するようになされ、一定程度堆積した後は北西側に移動し、さらに堆積した

後移動しという堆積を繰り返している。ある程度堆積が進行した後は、小マウンドの連続を覆うように、水平堆積がなされている。なお、1985年報告の土器塚Ⅳ層に対比される。

時 期 時期は、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。(福井)

C盛土 (図Ⅳ-39・40、表Ⅳ-1、図版29)

位置 A～E 10～14 **立地** 標高25.5m前後の廃絶遺構上 **規模** 最大厚0.4m

確認・調査 おもに2011年度調査において存在が確認された黄褐色土からなる人為堆積土。土層断面②において、B盛土相当を覆うように堆積している。

土 層 土層断面②・③・④などを記録した。B盛土が住居跡覆土の上位に堆積しており、黄褐色土主体で堆積しているのが特徴。炭化物も含むが、B盛土と比較するとごく僅かである。なお、1985年報告の土器塚Ⅲ層に対比される。

時 期 時期は、縄文時代中期前葉とみられる。(福井)

3 竪穴住居跡 (図Ⅳ-54～213、表Ⅳ-1)

竪穴住居跡は、ほぼ盛土層によって覆われていた。したがって、覆土は土層細別とは別に、大きく上層と下層に区分できた(中太線で区分)。覆土上層は、竪穴住居跡を覆う盛土層で、地点によって、P盛土、A盛土、B盛土、C盛土などが堆積していた。覆土下層については、角状の偽礫(ロームブロック)を多く含むもので、屋根を覆っていた住居構造物(屋根土)が主な由来と考えられる。この上層と下層については、遺物取り上げ時に、覆土1層・覆土2層とした例と、覆土上層・覆土下層とした場合がある。

TH-2 (図Ⅳ-55～57、表Ⅳ-1、図版43)

位置 N・O 9～11 **立地** 標高239m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類) **規模** (-)×(5.6)／(5.4)×1.4m

確認・調査 表土除去後メンテナンスを掘削した結果、Ⅲ層黒色土を切る落ち込みを検出した。その範囲を確認するためトレンチを入れたところ、隣接した2軒の住居であることを確認した。そこで、当初確認した方をTH-2、新たなトレンチによって確認した方をTH-15とした。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。その上部はローム層由来土を主体としておりC盛土、下部はB盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックを多く含むのが特徴で、ほとんどが暗褐色土からなる。

形 態 ベンチを持っており、ベンチと床が接する部分に主柱穴を掘り込む。ベンチには、貼床がされていた。主柱穴は3本確認された(HP3～5)。壁の立ち上がりは明瞭。床中央には、柱穴を伴う浅い掘り込み中央ビットHP1があり、炭が含まれていた。なお、北西側壁の上部Ⅲ層が部分的に削れており、ステップ状を呈していた。重複する遺構にTH-15があるが、切り合い関係からTH-2の方が新しい。

付属遺構 HP:7基をHPとした。HP3～5が主柱穴とみられる。HP1は中央ビットの一面で、さらに調査区外に広がっている。

遺物出土状況 覆土上層からI群b類4点、II群b類171点(大半が磨減小片)、Ⅲ群a類262点(上層a1式1個体、a2式2個体、サイベ沢Ⅷ式(古)1個体、サイベ沢Ⅷ式(新)1個体、破片はa～d式)、IV群a類4点、円板状土製品2点、剥片石器34点、フリイク78点、礫石器30点、有意の礫・

礫41点、獣骨14点が出土。覆土下層からはⅠ群b類22点、Ⅱ群b類445点（大半が磨滅小片）、Ⅲ群a類91点（上層式1個体、口縁部破片ほとんど上層a式）、Ⅳ群a類2点、円板状土製品6点、割片石器52点、フレイク319点、礫石器30点、有意の礫・礫63点が出土。覆土上層下部には、礫が集中しており、TS-7とした。中央ピットからはすり石と北海道式石冠が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。 (福井)

TH-3 (図Ⅳ-58-60、表Ⅳ-1、図版44・45)

位置 I～K 5・6 **立地** 標高24.6m付近
平面形 ほぼ円形(Ⅱ類) **規模** 4.6/4.1×4.6/4.0×0.9m

確認・調査 北東-南西方向に設定したメイントレンチの調査により断面形を確認した。断面形は明瞭で、精査の結果V層中に形成される平坦な床面と、掘り込み面が盛土層中であることを認識した。

周囲で確認された遺構との先後関係を確かめるため、西方に位置するTH-10、南西に位置するTH-11の方向にベルトを残し、ベルトに沿ってトレンチを設定しⅢ層まで掘り下げた。結果、平面形がほぼ円形であることを確認した。さらに住居の内側をトレンチ部分のみ床面まで掘り下げ観察し、掘り込みはm2(3)～(6)層間であることを確認した。入れ子状の重複の可能性を考え、断面を精査したが、中央の段差に伴う立ち上がりや、段差に対応する床面がないこと。さらに出土遺物に大きな差がないことから、段差は一連のいわゆるベンチ構造と想定した。周囲の土層を検出面まで掘り下げ、ベルトを記録し床面を露出させた。出土遺物は土器のまとまりと床面のものについて記録し、そのほかは後述する土層毎に取り上げを行った。

土層の記録を作成した後ベルトを除去し、遺物を残して床面を露出させた。出土遺物の地点記録を行った後、精査し柱穴の探索を行った。柱穴を半載して記録を作成した後、完掘とした。

覆 土 南西-北東方向に設定したベルトにおいて土層を観察し18層に区分した。ほぼ全てが暗褐色を呈する盛土層で占められるが、間層として炭化物、遺物を多く含む黒褐色土、ほぼ純粋なV層由来の黄褐色土がある。土層断面図の1層はm1b層、2～4層はm2(2)層、6層はm2(3)層に相当する。

形 態 平面形はほぼ円形。2段のベンチ構造で、中央が隅丸方形に掘りくぼめられている。壁の立ち上がりは急であるが、西側の一部に緩やかな部分がある。

付 属 遺 構 柱穴は18基検出した。下段の四隅に対応するHP3・4・12・13はその位置から支柱穴であるとみられる。ベンチ構造下段の東側壁に接してわずかにくぼみ範囲があり、くぼみから大小5基の小ピットを確認している。そのうちHP1はくぼみのほぼ中央に位置し、森田知忠のいう「中央ピット」にあたるものである。HP1の南に隣接するHP8は、検出面でHP1との間に灰色の淘汰の良いシルト～砂の堆積を確認しているが、堆積が薄く精査時に失ってしまった。住居北側のメイントレンチ上の柱穴のうちHP18・19の2基は、実測図を作成する前に複数回の精査を行っており、実際より大きくなっている可能性がある。南東側のベンチ上に、倒立状態の土器1個体が出土した(掲載番号324)。覆土2層の堆積時に遺棄されたものとみられる。口縁部は著しく損傷している。

遺物出土状況 土層の観察の結果、複数の復元個体を含む多量の遺物を包含する層を2枚確認していた。土層断面A-Bラインの6・7層と9～12層である。前者はメインセクションから敷衍してm2(3)層とし、後者との間を覆土1層、9層から床面までの18層までを覆土2層として区別した。m2(3)層とその上位のm2(2)層からは掲載番号541、162、532、291が、覆土1層からは、掲載番号365、

360、覆土2層からは、掲載番号221、352、285が、床面からは掲載番号324が得られている。覆土2層と床面出土土器は焼成や文様構成、器形が類似しているものがあり、時期差はないと等しいとみられるが、これと覆土1層、およびm2(2)・(3)出土のもの間には、若干の時期差があるものとみられる。なお、I5区とJ5区には、本遺構が掘り込まれたm2(3)～(6)層に相当する堆積中に、敷かれたように平面に分布する個体番号152～155が出土している。

これらの出土状況は、下層d式の堆積を掘り込んで上層a1期の本遺構が作られ、上層a2式の土器がくぼみから出土するという様相を示しており、構築時期と住居の形態、土層の観察結果とも合致する。

時 期 床面に倒立状態で出土した土器から、円筒土器上層a1式期とみられる。 (立田)

TH-4 (図IV-61～65、表IV-1、図版46・47)

位 置 L～N8～10 **立 地** 標高23.7m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類) **規 模** 8.0/7.6×6.2/6.0×1.1m

確認・調査 表土除去後メイントレンチを掘削した結果、Ⅲ層黒色土を切る落ち込みとして検出した。メイントレンチと直行するようにトレンチを入れ、範囲を確認した後、ベルトを残して、残りを掘り下げた。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。暗褐色土～ローム層由来土を主体としており、B盛土とみられる。下部に遺物や礫が集中する。礫の一部は、TS-4として記録した。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックを多く含むのが特徴で、ほとんどがにぶい黄褐色土からなる。

形 態 短辺にベンチを持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチは、掘り残すのではなく、貼床で形成されていた。中央に礫を含む中央ビットHP1がみられた。TH-5との新旧関係は、はっきりしなかったが、TH-4の方が新しい可能性が高い。

付属遺構 灰集中：床面に近くに炭化材の集中として確認したもの。ごく浅いくぼみとなっていた。**HP**：38基をHPとした。HP1は中央ビットで、一度深く掘り込んでから、ローム層由来土で埋めて浅い掘り込みとし、炉にしたようである。ただし、焼土はみられず、掘り込みの下部に薄い炭層が一枚入り、その上を覆うようにローム層由来土を貼っている。廃棄にあたっては、拳大から石皿の大きさまでの扁平礫を10数点入れ込んであった。一部には被熱痕もあった。HP2・4・10・18・20・30は、規模から主柱穴とみられる。また、HP26・27は、TH-4よりは古いか、同時に存在したものとみられるTP-28を挟んで同規模で掘り込まれていた。ほかに、HP23～25・32・33・36・38は、壁に掘り込まれていた。HP39に代表されるように、一部の垂木尻が壁に斜めに入っていたことが分かる。**ステップ**：北東壁上には、張り出しがあり、覆土下層と同様の土層に覆われていた。住居に切られた土坑の可能性もあるが、住居壁沿いにあるHP26・27の関係も含め、出入口として機能したと想定しておく。

遺物出土状況 覆土上層からI群b4類7点、II群b類2,510点(下層d1式、d式各1個体)、III群a類1,753点(上層a1式5個体、b式1個体、b式～サイベ沢Ⅶ式(古)1個体、破片a1式主体)、III群b類12点、IV群a類86点、円板状土製品8点、焼成粘土塊3点、剥片石器253点、フレイク2,366点、礫石器57点、石製品10点(うち球状耳飾4点)、有意の礫・礫103点、獣骨1点が出土。覆土下層からはI群b4類3点、II群b類863点(下層d2式2個体、d式1個体、破片はd1式・d2式)、III群a類121点、IV群a類3点、剥片石器262点、フレイク6,150点、礫石器48点、石製品4点(う

ち丸状耳飾1点)、有意の礫・礫302点、骨角器3点、床面からは剥片石器1点、フレイク5点、礫石器12点、有意の礫・礫5点、獣骨1点が出土。なお、覆土からはもう2点丸状耳飾が出土。覆土上層下部には、横転して潰れた個体土器5個体以上(下層d2式、上層a1式、上層b式)と礫が集中していた。また、同層位の一角には剥片も集中していた。中央ピットからは、石鏃・スクレイパー・石斧・北海道式石冠各1点、石錐・両面調整石器・有意の礫・礫各2点、Rフレイク6点、フレイク553点、すり石3点、たたき石・扁平打製石器各9点、台石石皿5点が出土した。

なお、HP4に半ば入り込むようにして人骨が検出された。HP4内に入り込んでいたのは頭部と上腕の一部で、検出状況からは床面より上位の覆土下層中に含まれたものが、HP4覆土が雨水等によって締まることで落ち込んだものと考えられる。住居覆土に掘り込みが確認できなかったことから、廃屋葬されたものと考えられる。残存部位からは、右下側臥屈葬であったとみられる。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。炉跡HF1採取炭化材を年代測定したところ、 $4,720 \pm 30$ yr B.P. (IAAA-92313)の測定値が得られた。(福井)

TH-5 (図IV-66~71、表IV-1、図版46~49)

位置 K~M6~8

立地 標高24.2~24.4m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類)

規模 8.0/7.4×6.7/6.0×1.0m

確認・調査 表土除去後メイントレンチを掘削した結果、Ⅲ層黒色土を切る落ち込みとして検出した。メイントレンチと直行するようにトレンチを入れ、範囲を確認した後、ベルトを残して、残りを掘り下げた。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の溜みに堆積した盛土層。暗褐色土とローム層由来土が互層となっており、B盛土とみられる。下部に遺物や礫が集中する。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックをやや多く含むのが特徴で、ほとんどがにぶい褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチを持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。後述のように、改築されたこととみられ、主柱穴が2本近接している部分が3か所ある。ベンチは、掘り残すことで形成されていた。中央には、中央ピットHP1がみられた。TH-4との新旧関係は、はっきりしなかった。

付属遺構 HP:32基をHPとした。HP1は中央ピットで、一度深く掘り込んでから、ローム層由来土などで埋めて浅い掘り込みとし、炉にしたようである。ただし、覆土に焼土ブロックがみられる以外に、焼土はみられず、掘り込みの下部に薄い炭層が一枚入るだけである。HP2~4・8・9・13・14・18・20は、規模から主柱穴とみられる。恐らく、HP2・3・4・9・14・20で構築したものを、後にHP9・14・20をHP8・13・18の位置に移して新たに構築したものとみられる。ほかに、HP26~28・30~32は、壁に掘り込まれていた。HP26に代表されるように、一部の垂木尻が壁に斜めに入っていたことが分かる。また、HP10・11は、トンネル状に繋がっていた。これについては、部分的な貼りベンチが柱穴様にみえたものと考えている。

周溝:ベンチ上のごく一部で確認された。

遺物出土状況 覆土上層からI群b4類4点、II群b類1,617点(下層d式1個体、破片は大半が磨滅小片)、III群a類930点(上層a1式2個体、a2式1個体、b式1個体、破片a1式主体)、IV群a類38点、円板状土製品2点、剥片石器235点、フレイク825点、礫石器81点、石製品3点、有意の礫・礫141点、魚骨120点、鳥骨2点、獣骨130点が出土。覆土下層からはII群b類5,061点(下層d1式9個体、d2式9個体、d式4個体、口縁破片は下層d1式とd2式が半々)、III群a類611点(上層a1式2個体、サイベリⅧ式1個体)、IV群a類14点、円板状土製品1点、焼成粘土塊22点、剥片

石器224点、フレイク5,069点、礫石器74点、石製品5点（うち球状耳飾3点）、有意の礫・礫169点、魚骨486点、鳥骨23点、獣骨232点が出土。床面からはⅡ群b類3点、フレイク2点、礫石器3点、有意の礫・礫1点が出土。なお、覆土上層下部には、横転して潰れた個体土器5個体以上（下層d1式、下層d2式）と礫が集中していた。また、同層位の一角には剥片も集中していた。中央ピットからは、たたき石1点、北海道式石冠1点、フレイク124点、礫3点が出土した。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。年代測定したところ、炉跡HF1採取炭化材では $4,540 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-92316)、土層40層採取炭化材では $4,630 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-92315)、土層26層採取炭化材では $4,700 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-92314)の測定値が得られた。炉跡採取試料の測定値は新しすぎるので、コンタミの可能性がある。 (福井)

TH-7 (図IV-71~73、表IV-1、図版50・51)

位置 C・D4~6 **立地** 標高24.8m付近
平面形 楕円形 (Ⅳ類) **規模** (6.6)×(5.8)×0.3m

確認・調査 調査当初一部で行った25%調査でグリッドを面で掘り下げていったところ、落ち込みとⅣ群a類土器の集中が確認された。住居か盛土層か判断がつきにくかったが、ベルトを残して掘り下げていった。最終的に石囲炉が検出されたことによって、堅穴住居であることが判明した。

覆 土 攪乱が多いため分りにくい部分もあるが、全体に黒褐色の覆土からなる。上半は、D盛土ないし自然堆積層。遺物は比較的覆土下部に多かった。

形 態 中央に石囲炉をもち、床に支柱穴を掘り込んでいたとみられる。西側の壁はしっかりと掘り込まれるが、東側では浅くなっている。炉の東側には袖石とみられる埋設された礫1点が検出された。本来は対になっていたとみられるが、抜根などによって攪乱されたようである。

付 属 遺 構 HF1：住居推定範囲中央で焼土を円形に礫で囲繞した石囲炉を確認している。礫は長手方向が地面に出るように埋め込まれ、その上半部はよく被熱していた。焼土も厚く形成されており、その上位には焼骨や炭化材小片を含む層が堆積していた。

HP：2基をHPとした。ただし、比較的明瞭なのはHP1のみしか確認できなかった。

遺物出土状況 覆土上層からⅢ群a類68点、Ⅳ群a類412点、陶磁器2点、剥片石器4点、フレイク13点、礫石器2点、有意の礫・礫13点、魚骨5点が出土。覆土下層からはⅡ群b類37点、Ⅲ群a類282点、Ⅲ群b類1点、Ⅳ群a類4,421点、円板状土製品1点、剥片石器72点、フレイク129点、礫石器32点、有意の礫・礫90点が出土。床面からはⅡ群b類5点、Ⅲ群a類10点、Ⅲ群b類1点、Ⅳ群a類402点、剥片石器9点、フレイク18点、礫石器9点、有意の礫・礫27点が出土。Ⅳ群a類土器が21個体復元された。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代後期前葉である。 (福井)

TH-8 (新) a・TH-8 (新) b・TH-8 (旧) (図IV-74~85、表IV-1、図版51~55・112・120・121・143・145)

これらの住居に関しては、2009年度にメイントレンチで検出した。しかし、その年度はI~Oラインについて調査を行ったため、翌年度に持ち越した。2010年度、改めて調査をしたところ、TH-8とした落ち込みは、複数の住居からなることが分かった。その中の1軒について、TH-8と命名して調査を行ったが、2010年6月さらに新旧2軒に分離されることが判明し、TH-8 (新)、TH-8 (旧)と呼称した。その後、調査が終わり、図面を整理する過程で、TH-8 (新)が、さらに2軒

に分離されるものと判断した。したがって、TH-8は、TH-8(旧)、TH-8(新)a、TH-8(新)bに分離される。なお、TH-8(新)覆土出土個体土器には、円筒土器上層式a1式2個体がある。破片は上層d式～さいべ沢Ⅶ式が多い。また、TH-8(新)とTH-30(新)の覆土出土土器同士が接合した見晴町式1個体、円筒土器上層式a2式1個体がある。これについても、両住居が重複しており、取り上げ時に混乱している可能性もある。

TH-8(新)a(図Ⅳ-74~79、表Ⅳ-1、図版52・54・55・112・143)

位置 E・F7~9

立地 標高23.6m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類)

規模 (6.0)×(4.6)×(0.4)m

確認・調査 8ラインより9ライン側1m部分と、9ライン側2m部分にトレンチを設定し、確認された。調査が終わり、図面を整理する過程で、TH-8(新)が、さらに2軒に分離されるものと判断した。したがって、TH-8(新)は、TH-8(新)a、TH-8(新)bに分離される。

覆土 全体にローム層由来土を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、上位重複住居覆土下層やC盛土からなる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含んだ褐色土からなる。

形態 全辺にベンチを持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。後述のように、改築されたこととみられ、主柱穴が2本近接している部分が2か所ある。ベンチは、掘り遺すことで形成する部分と、貼床して作出した部分がある。中央には、炉跡HF1があり、中軸に沿って海側に中央ビットHP27がみられた。TH-8(新)bとの新旧関係は、状況からTH-8(新)aが新しいとみられる。

付属遺構 HF1：住居推定範囲のほぼ中央で焼土を確認している。浅い楕円形の掘り込みがあり、その底面に薄い焼土が形成され、その上位に薄い炭層が堆積していた。

HP：26基をHPとした。HP27は中央ビットで、一度深く掘り込んでから、埋められたようである。HP12・19・22・23・25・26・34・37は、規模から主柱穴とみられる。恐らく、HP12・19・34・37とHP23・25で構築したものを、後にHP23・25をHP22・26の位置に移して新たに構築したものとみられる。

内縁杭列：ベンチの段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっていた。一部、床面でも確認されたが、これがこの住居に伴うものか、別の住居に伴うものかは不明である。

遺物出土状況 Eラインの覆土からⅡ群b類34点、Ⅲ群a類63点、Ⅳ群a類7点、剥片石器2点、フレイク5点、礫石器2点、有意の礫・礫4点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期初頭である。

(福井)

TH-8(新)b(図Ⅳ-74~79、表Ⅳ-1、図版52・54・55・112・143)

位置 F・G8・9

立地 標高23.7m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類)

規模 (5.1)×(4.9)×(0.4)m

確認・調査 設定されたメイントレンチと、その反対面の断面で、確認された。調査が終わり、図面を整理する過程で、TH-8(新)が、さらに2軒に分離されるものと判断した。したがって、TH-8(新)は、TH-8(新)a、TH-8(新)bに分離される。

覆土 全体にローム層由来土を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、上位重複住居覆土下層やC盛土からなる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックを多く含んだ褐色土からなる。

形 態 少なくとも三辺にベンチを持っており、床に主柱穴を4本掘り込む。ベンチは、掘り残すことで形成する部分と、貼床して作出した部分がある。中央には、炉跡HF2がある。TH-8(新)aとの新旧関係は、状況からTH-8(新)bが古いとみられる。

付属遺構 HF2 (HP18): 住居推定範囲はほぼ中央で確認している。浅く掘り込まれた底に、やや厚い炭層が堆積していた。

HP: 17基をHPとした。HP3・12・19は、規模から主柱穴とみられる。もう1基は、TP-77に破壊された可能性がある。HP6も主柱穴と同規模である。

遺物出土状況 Gラインの覆土からⅡ群b類3点、Ⅲ群a類39点、Ⅳ群a類1点、剥片石器4点、フレイク3点、有意の礫・礫5点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期初頭である。 (福井)

TH-8 (旧) (図IV-80~85、表IV-1、図版51~54・112・120・121・145)

位 置 F~H 7~9 **立 地** 標高238m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類) **規 模** (7.4)×(5.6)×(0.7)m

確認・調査 設定されたメイントレンチと、その反対面の断面で、確認された。

覆 土 全体にローム層由来土を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、上位重複住居覆土下層やC盛土からなる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックを多く含んだ黄褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチを持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。後述のように、改築されたとみられ、主柱穴が2本近接している部分が1か所ある。ベンチは、掘り遺すことで形成する。中央には、中央ピットHP18がみられた。この周囲は、多くの住居跡が重複するが、比較的古く、TH-8(新)a・8(新)b・25・30(新)・35・40に覆われる。ただし、TH-22・29よりは新しいとみられる。

付属遺構 HP: 24基をHPとした。HP18は中央ピット。HP13・15・19・20・21・22・23は、規模から主柱穴とみられる。恐らく、HP13とHP15は、どちらかが改築にあたって位置を移したものとみられる。

内縁杭列: ベンチの段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっていた。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類151点(破片下層d1式主体だが磨滅小片)、Ⅲ群a類99点(上層b式1個体、破片上層a1式目立つ)、Ⅳ群a類12点、剥片石器33点、フレイク188点、礫石器7点、有意の礫・礫29点、魚骨11点、獣骨3点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉~中期初頭である。 (福井)

TH-9 (図IV-86~90、表IV-1、図版60~64・138・139・145)

位 置 G・H 6・7 **立 地** 標高24.4m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類) **規 模** 6.6/(6.4)×(5.6)×0.7m

確認・調査 2009年度にメイントレンチで検出した。しかし、その年度はI~Oラインについて調査を行ったため、翌年度に持ち越した。2010年度、改めて調査を行ったところ、当初TH-9とした落ち込みは、複数の住居からなることが分かった。そこで、複数のトレンチを入れ、改めて範囲を確認した後、掘り下げた。

覆 土 全体にローム層を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積したC盛土層や、新しい時期の住居跡覆土。覆土下層は、屋根土を含むとみられる

三角状堆積。ロームブロックをやや多く含むのが特徴。

形態 全辺にベンチを持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチは、貼床して作出している部分もあった。中央には、中央ピットHP29がみられた。TH-22・37・40・47より古い。

付属遺構 HP：TH-9としては47基をHPとしたが、重複した住居のものなどを含んでいた。図上で整理したところ、まだ重複した住居のものも含むが、33基がTH-9のHPと考えられた。HP29は中央ピットとみられるが、一度深く掘り込んでから、埋められた痕跡は確認されなかった。HP23・33・41・45・TH-47HP23・TH-22HP43は、規模から主柱穴とみられる。TH-47HP6・10も改築後の主柱穴かもしれない。

内縁杭列：ベンチの段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっていた。

周溝：床のごく一部で確認された。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類864点（磨減小片で、下層d1・d1式混在）、Ⅲ群a類1,389点（上層a2式3個体、b式2個体、サイベ沢Ⅶ式（古）1個体、上層式1個体、破片はほとんど上層a式）、Ⅲ群b類1点、Ⅳ群a類43点、円板状土製品1点、剥片石器112点、フレイク410点、礫石器37点、石製品2点、有意の礫・礫158点、貝類、魚骨37点、獣骨44点が出土。床面からはⅡ群b類2点、Ⅲ群a類2点、有意の礫・礫2点が出土。中央ピットからはたつき石2点、スクレイパー1点、Rフレイク6点、フレイク36点が出土した。

なお、TH-9のベンチ状構造床面直上から人骨が検出された。仰臥状態の膝屈葬であるが、両腕が左に倒れていた。住居覆土に掘り込みが確認できなかったことから、廃屋葬されたものと考えられる。検出状況からは、ベンチ状構造床面に安置し、その上からベンガラ混じりの土壌をマウンド状に被せた可能性が推定される（写真参照）。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。年代測定したところ、HP29覆土出土炭化材で 4640 ± 30 yr B.P. (IAAA-103303)の測定値が得られた。（福井）

TH-10（図Ⅳ-91・92、表Ⅳ-1、図版64・65）

位置 H・I 4・5 **立地** 標高248m付近

平面形 楕円形（Ⅰ類） **規模** 5.1/4.7×4.5/4.1×0.7m

確認・調査 2009年度にメインレンチで検出した。しかし、その年度は調査を行わず、翌年度に持ち越した。上位に堆積している盛土層を掘り下げ、範囲が確認できた段階でベルトを残しながら、掘り下げた。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積したA盛土層。A盛土中位の北西側にはほぼローム純層（土層12）が堆積していた。さらに、その上位にはB盛土層が堆積していた。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックを多量に含むのが特徴。

形態 楕円形を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。中央には、やや規模の小さな柱穴がある。北西角には、杭状の小柱穴がまとまって検出された。

付属遺構 HP：壁外の3基を含め、18基をHPとした。HP1・2・3・4は、規模から主柱穴とみられる。HP5が床中央から検出されたが、規模は中程度であった。HP9～18は、北西角にまとまっていた小柱穴群。2本一組で機能したとすれば、5回作り変えられたと推定される。ほかに、HP19は、壁に掘り込まれていた。一部の垂木尻が壁に斜めに入っていたことが分かる。

遺物出土状況 覆土上層からⅡ群b類203点（下層d2式1個体、破片はd1・d2式混在）、Ⅲ群a類1点、剥片石器12点、フレイク82点、礫石器1点、有意の礫・礫3点、魚骨6点、獣骨34点が出土。

覆土中層からⅡ群b類11点、剥片石器3点、フレイク21点、有意の礫・礫4点が出土。覆土下層からはⅡ群b類17点、剥片石器1点、フレイク15点、有意の礫・礫5点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。年代測定したところ、HP9 覆土出土炭化材で $4,720 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-103304)の測定値が得られた。(影浦・福井)

TH-11 (図IV-93~96、表IV-1、図版65~68)

位 置 J・K4・5

立 地 標高24.7~24.4m付近

平面形 楕円形(1類)

規 模 7.6/6.5×6.3/5.3×1.9m

確認・調査 本遺構周辺は大きく北西-南東方向に広がる不整形の暗褐色土の落ち込みであった。K5 杭を中心に十字、北方向に幅1mのトレンチが設定されて部分的に掘削されており、TH-11と命名されていた。さらに周囲がm2層としてまだらに掘り下げられている状態で調査を引き継いだ。落ち込みの形状から比較的大きな住居の重複が予想された。周囲とトレンチを精査し、2軒の竪穴住居の重複を想定した。確認のために5ラインをベルトとし、幅を50cmに狭めて掘り下げた。結果1.5m下げてようやく床面の一部を確認した。床面までの堆積を確認し、周囲のトレンチを改めて精査すると、深く掘られた1軒と、その埋没途中に構築されたもう1軒の住居跡を確認した。古く深いものが本遺構で、新しいものをTH-17とした。この確認以前にトレンチ上にあった個体番号62~65の土器を取り上げている。覆土2層とされるが、層位とレベルを改めて確認すると、m2(2)下層相当であることがわかったので、ここに訂正する(復元土器12、230、933)。

TH-17の調査終了後、本遺構の調査にかかったが、TH-17の構築面からの深さは2mを超えており、垂直に掘ることはできない状態であった。そのため、TH-17で記録を作成した部分を掘り下げ、本遺構の掘り込み面まで周囲の土層を掘り下げた。K4・5区において、m2(2)下a層で一括取り上げられているものはこの掘削時のもので、TH-11を覆う土層から出土している遺物の最も上位に位置するものである。個体番号148~150がそれに当たる。この土層の堆積時には、本遺構はほぼ埋められて平らな土地となっていたようである。さらにローム質の土(断面図中の2層にあたる)をはがすと、まとまった土器が出土している。m2(2)下b層とした。個体番号183~185がこれにあたる。

5ラインをベルトにして南側を半軌しようとして覆土の掘り下げを行ったが、南西側からは遺物が大量に出土し、南東側からは焼土が検出された。ベルトを残しながら両者を調査することは困難だったので、グリッドごとにK4・K5・J4・J5の順に4分の1ずつ調査し、層位を確認しながら掘り下げることにした。K4区を最初に掘り下げた。土層断面図17~18層の上面において、土器が敷き詰められたかのように堆積する部分があった。土器の記録を終えた後、覆土を掘り下げて床面を露出させた。5ラインの土層を記録したのちK5区を掘り下げ、焼土TF-10を検出した。また当区の24層から、ほぼ円形を呈するベンガラ集中域を検出している(図IV-94)。K4・5区の調査が終わるとKラインの土層断面を記録した。次にJ5グリッドを掘り下げ、土層断面を記録した後J4グリッドを掘り下げ、床面と床面出土物を検出した。床面出土物を記録した後、柱穴の調査を行った。なお床面でTP-40を確認した。フラスコ状ピットと想定し、検出面の輪郭を記録し、西側の柱穴がない部分を箱掘りした。50cmほど下げた時点で覆土にピンボールを差し込むと、1mの長さのものが抵抗なく頭まで入る状態であった。この時点で調査日数は残り数日となり、遺構の深さや脆弱遺物などが出土した場合を考慮すると終了日までに調査を完了できない可能性があった。当初はIラインまで調査を終わらせるという目標であったので、調査員全員と打ち合わせた後、無理して掘らずに次年度に持ち越すべきとの結論であった。箱掘りした分の記録を取り、土糞で埋めて越冬し、その

後を2010年度に引き継いだ。土層断面図7～14層の土層の乱れは、TP-40上位で検出された空洞と対応しており、埋設後の土層の乱れと解釈できる。土層断面17～18層の土器群も、この空洞の部分にはなく、この堆積より上位はm2(2)下層のローム質土で覆われていることから、円筒下層d1式期に構築されたことを限定できるものである。

床面出土遺物の位置を記録し、柱穴、側面の壁柱穴を調査してすべての調査を終了した。

覆土 44層に区分した。大きく区分すると、暗褐色土を主とし、ロームブロック、炭化物、焼土粒等を含む層(1～16層)、黒褐色土を主とし、黄褐色土の薄層や焼土が部分的に挟まれる層(17～26層)、にぶい黄褐色を呈し、黒色土の薄層が挟在する層(27、33、34、42、43層)、黄褐色土ブロックを主とし、やや硬い層(30、44層)の4層となる。この上位2層の間に前述したTP-40に係る層位がある(7～14層)。遺物の取り上げにあたっては、最も上位の1～16層について、メインセクションを敷衍して、m2(2)下層に相当するものとした。断面図の3層は、焼土粒を混じる黄褐色土であるが、これに相当する層位はK4区にも連続しており、この層より上位をm2(2)下a層、下位をm2(2)下b層とした。17～26層を覆土1層とした。覆土1層は細分した部分があり、41層としたTF-10を境に上位を覆土1a、下位を1bとした。1a層はこのほかロームブロック、炭化物が混じり、他と明瞭に区別できた19層を境に覆土1a1層、下位を覆土1a2層とした。より下位の土層は覆土2層とした。

これらの土層は、m2(2)下層と覆土1層は住居跡のくぼみに堆積した土層、覆土2層は過去の調査例から屋根土等の住居構造に係る堆積とみられる。

形態 平面形は概ね楕円形であるが、北側の一端がやや直線状となっている。長さ7.6m、深さ1.9mで、本遺跡の堅穴住居で最大の容積となっている。平面形が直線となる北側の床面に、ベンチ状にロームを張り付けた部分がある。

付属遺構 HP:床面で32基、壁際に巡る小柱穴53基、壁柱穴23基の柱穴を確認した。床面の柱穴は上面にロームが貼られたもの(HP2・4・7・10・11・14・17・21・24～28)が12基ある。建て替えに際する痕跡とみられる。このことから、本住居の廃絶時の柱穴配置は、HP1・5・6・13・22・29の6本を主柱穴とするものであるとみられる。ロームが貼られたものの中では、HP4・7・14・27が同様な規模で概ね方形を呈する。またHP3・10・21・26もやや浅く規模の小さな方形を呈する。このことから、4本→4本→6本へと拡大し、住居も深くされた可能性が指摘できる。または住居中央に位置するHP15～18・20は不規則で小規模なものである。HP15・16・20に暗灰色を呈する砂の堆積が認められる。HP11・12は後半2時期の中心軸上に乗っている。棟持柱かもしれない。ベンチ状の構造物、直立する壁柱穴の位置とも対応しているため、煙出し、または出入口であるかもしれない。なおベンチ状構築物の延長には、TP-29が位置している。本遺構に伴う可能性がある。

遺物出土状況 覆土1層上面において、土器が敷き詰められたように堆積する部分があった(口絵5)。個体番号212をつけ、図IV-93のように1mメッシュで14か所に分け、取り上げを行った。復元土器64、75、80、84、102、103、106、108、213、260、272、970、973、976の14個体がこれにあたる。また北側のトレンチから出土した個体番号127、128、129は、この212の上位、土層断面の5層中のものとみなせる。調査した時期が離れているため、明確ではないが、m2下b層とした183～185と同一層であろう。

覆土1b層の下面から20～40cm上位で、やや小規模な土器のまとまりが検出された。個体番号225～227がそれで、225は焼土TF-10(土層断面41層)の上面に、226、227はその下位である土層断面24層、焼骨片集中域と同一層である。これらは復元土器81、82、83、85、101、318となった。

これらの層位別に取り上げた復元個体は下層c～d1式に至るもので、層位に従い順に出土している。土器の集中、床面から出土した以外の遺物については、覆土の項に記載した毎に取り上げを行い、不明なものについては単に覆土として取り上げている。なお立田が調査を引き継いだ8月25日以前の遺物については、先に訂正した個体番号62～65を除いてこれ以外の表現がなされている可能性がある。

時期 覆土1b層出土の土器から、円筒土器下層c式ないしその直前のものとみられる。なお土層17層、30層から採取した炭化材を年代測定したところ、それぞれ $4,630 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-92317)、 $4,630 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-92318)の測定値が得られた。(立田)

TH-12 (図IV-97-99、表IV-1、図版68-70・136・137)

位置 E・F6・7

立地 標高24.4m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類)

規模 6.7/6.6×5.7/5.6×0.9m

確認・調査 2009年度表土除去した段階で、黒色土の落ち込みが確認された。上位では、IV群a類土器がみられ、縄文時代後期の住居跡か窪みの廃棄層か判断がつかかねていた。2010年度、さらに落ち込みがあることから、ベルトを残して、トレンチを掘り下げていったところ、床と壁が確認され、堅穴住居であることが分かった。

覆土 覆土下部は全体にローム層を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなり、ロームブロックを多量に含んでいる。覆土上部は、土層30～35が該当し、B盛土に類似していた。さらに上位には、TH-35が掘り込まれていた。

形態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成する。中央には、中央ピットHP16がみられた。また、中軸上に主柱穴規模のHP2もあった。TH-33・35・37・47・49より古い。

付属遺構 HP:19基をHPとしたが、重複した住居のものなどを含んでいる可能性はある。HP16は中央ピットで、一度深く掘り込んでから、埋められていた。また、埋め戻し後の上面には、青灰色の砂と炭層が堆積していた。また、さらに中央には砂層と砂ピットが残されていた。HP1・4・5・10・11・15は、規模から主柱穴とみられる。また、中央ピットに隣接した中軸上にHP2があった。中央ピット同様、一度深く掘り込んでから埋め戻したものとみられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類347点(破片下層d1・d2式混在で磨滅)、Ⅲ群a類107点(サイベツ式多い)、Ⅳ群a類30点、剥片石器58点、フレイク279点、礫石器12点、有意の礫・礫52点、獣骨30点が出土。中央ピットからは、たたき石3点、スクレイパー3点、Rフレイク6点、石核1点、フレイク50点、有孔礫1点、礫1点が出土している。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。年代測定したところ、炉跡HF2出土炭化材で $4,510 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-103305)の測定値が得られた。(福井)

TH-13 (図IV-100・101、表IV-1、図版71・72)

位置 C～E11・12

立地 標高24.0m付近

平面形 隅丸長方形(Ⅲ類)

規模 5.6/5.3×(-)×0.6m

確認・調査 2009年度の調査で検出された。D12杭付近の藍染跡壁面を精査中、V層中に形成される床面を確認した。周囲を精査すると、他住居と重複のないものであることがわかった。住居は北側の調査区外に続いていたため、調査区境界を土層断面として記録することにし、覆土を床面まで掘り

下げた。硬化面を検出したので、掘削を止めて広がりを確認した。この時点で2009年度調査を1ラインで終えるとの決定がなされたため、調査を中断した。その後、硬化面で検出されたHP1～4と、HF1を調査した。床面には遺構の重複とみられる汚れた色調の堆積が複数認められたが、2010年度の調査に継続することとなった。2010年度には調査範囲の精査によって約1m北東側部分についても調査を行った。

覆 土 覆土上層は、D盛土層。一部、近代の塹壕跡によって切られていた。また、調査時には認識できなかったが、北東壁にみられた攪乱は、断面形態から防空壕跡であったと考えられる。覆土下層は、褐色土からなる。C盛土とみられる。

形 態 隅丸長方形を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。後述のように、改築されたとみられ、主柱穴が2本近接している部分が2か所あり、炉跡も2基確認された。中央には、やや規模の小さな柱穴がある。長軸上には、中央ビットHP15、地床炉跡HF1・2があった。

付属遺構 HF1：住居中央よりやや北西寄りの床で確認した。トレンチを入れたところ、厚さ10cm弱の焼土が形成されていた。上位には薄く灰層も確認された。

HF2：住居のほぼ中央の床で確認した。トレンチを入れたところ、焼土は数cmほどしか形成されていなかった。上位には、炭化物や焼骨を含む灰層が良く遺されていた。状況から、こちらの方が新しいとみられる。

HP：10基をHPとした。HP10は中央ビット。南西側から南東にかけてビットの周囲に土手状の盛り上がり形成された。HP1・3・4・9は、規模から主柱穴とみられる。恐らく、HP1・3と調査区外の2基で構築したものを、後にHP4・9の位置に移して、調査区外の別の2基とともに新たに構築したものとみられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類8点(磨滅した下層d式)、Ⅲ群a類57点(破片は上層b式、上層d式～サイベ沢Ⅲ式が目立つ)、Ⅳ群a類48点、剥片石器12点、フリイク62点、礫石器7点、有意の礫・礫36点、獣骨2点が出土。床からⅢ群a類4点、Ⅳ群a類13点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。年代測定したところ、炉跡HF2出土炭化材で 4.550 ± 30 yr B.P. (IAAA-103306)の測定値が得られた。(立田・福井)

TH-14 (図Ⅳ-102～104、表Ⅳ-1、図版72～74)

位 置 L～N3・4

立 地 標高24.5m付近

平面形 楕円形(Ⅱ類)

規 模 (-)×(72)／(6.9)×12m

確認・調査 調査区南側のM4杭付近を中心に広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心からTH-11周辺の黒褐色土の落ち込みに向けてベルトを、調査区境にトレンチを設定した。ベルトとトレンチの交点を残してトレンチを掘り下げた。南北方向とベルトにおいて段差のある明瞭な床面と、住居の北側の覆土に土器を多く含む堆積があることがわかった。段差は住居の平面形に従い同心円状であり、下段の段差に対応する立ち上がりを確認できなかったため、1軒の住居と判断した。

ベルト部分も含め3方向で壁の立ち上がりを認めたため、土器のまともをを残しながら覆土を掘り下げ、床面を露出させた。概ね半円形を呈する壁をほぼ全周で確認したが、北側のみ輪郭を超えて黒褐色土が広がっていた。ステップ状の構造物を考慮し掘り進めたが、住居とは角度の異なる急に立ちあがる壁を確認し、床面付近に炭化材が出土した。土層断面7層にも不自然な層位の高まりがあることから、住居とは別の遺構と考えTP-14とした。この検出状況から、本遺構より新しいものとみられる。

土器に番号を付けて層位のまとまりごとに取り上げたのち、ベルト部分の層位を記録した。周囲の包含層を掘り込み面まで掘り下げ、床面の遺物を残してベルトを除去した。柱穴を調査して調査を終了した。

覆 土 B-Tmより下位を35層に分層した。これらは大きく5グループに分かれる。土層断面1～3層はⅢ層に相当する堆積で、遺物がほとんど出土しない黒～黒褐色土である。覆土1 a層として取り上げた。4～12層は10mm以下のローム粒、炭化物が10%程度混じる堆積である。覆土1 b層とした。13～16、25、26層は、30～20mm以下の黄褐色土ブロック、焼土粒、炭化物を10～20%混じる、黒褐色～暗褐色の堆積である。覆土1 c層とした。17、18、20、28～30、32層は褐色～暗褐色土で、ロームブロックがモザイク状に混じる堆積。覆土1 d層とした。19、31はいわゆる三角堆積。黒褐色土である。覆土1 e層とした。21～23はベンチ状構造部分に貼られたロームを主とする堆積である。出土した遺物は床下とした。このほか所属が限定できないものは単に覆土として取り上げている。

上記以外の覆土1層(上層)は上記覆土1 a～c層に相当する。そのうち、覆土1 a・b層は上層a、覆土1 cは上層b。また、覆土2・3層(下層)はロームブロックを多く含む上記覆土1 d層におおむね相当する。

形 態 検出できた部分の平面形はやや歪な半円形である。床は2段になっており、1段目は幅1mで平面形に対応する。東～北にかけてのベンチ状構造はロームが貼り付けられて平坦にされている。

付属遺構 HP: 床面で4基、外側に9基の柱穴を検出した。床面で検出されたもののうち、HP3・4は段差の縁で検出された比較的大きなものである。いずれも住居内側の壁が内側に傾斜しており、覆土もボソボソしたしまりのない土であった。柱は抜き取られた可能性がある。HP2は上面にロームが貼られた柱穴である。ベンチが一部貼られていることもあり、建て替えが行われているのであろう。西側のベンチ上で台石石皿1点、礫1点が据えられた状態で出土している。

遺物出土状況 覆土1 b層はⅢ群A類、Ⅳ群a類土器などが出土している。覆土1 c層からはⅡ群b類土器がまとめて出土しており、11個体が復元されている。個体番号74番は倒立状態で、HP2の上位で出土している(掲載番号119)。個体番号72はHP3よりやや南東のベンチ上で、やや形を保った横倒しの状態で出土している(掲載番号57)、個体番号94は、HP4の上位で形を保って横倒しの状態で出土している(未掲載)。個体番号73、75、78～86、138～143は住居のくほみ中央につぶれた状態でまとめて出土している(掲載番号22、53、54、56、61、64、85、92、140)。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。(立田)

TH-15 (図IV-105・106、表IV-1、図版75)

位 置 O 7～9 **立 地** 標高24.2～24.0m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類) **規 模** (9.1)×(-)×0.7m

確認・調査 表土除去後メンテナンス掘削した結果、Ⅲ層黒色土を切る落ち込みを検出した。その範囲を確認するためトレンチを入れたところ、隣接した2軒の住居であることを確認した。そこで、当初確認した方をTH-2、新たなトレンチによって確認した方をTH-15とした。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。暗褐色土～ローム層由来土を主体としており、BないしC盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積。ロームブロックを多く含むのが特徴で、ほとんどが暗褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を6本掘り込むものとみられる。ベンチ

状構造は、掘り残すものと、貼床して形成するもの両方がみられた。重複する遺構にTH-2があるが、切り合い関係からTH-2の方が新しい。

付属遺構 HP：12基をHPとした。HP4・5が主柱穴とみられる。HP2も主柱穴の規模がある。HP6～9・10は壁沿いにみられた小ピットで、後述のステップと関係するものかもしれない。

ステップ1：北西壁に突出した掘り込みを確認した。住居に切られた土坑の可能性もあるが、先の住居壁沿いの小柱穴列との関係も含め、出入口口として機能したと想定される。覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土。

ステップ2：ステップ1同様、北西壁に突出した掘り込みとした確認した。

遺物出土状況 覆土上層からI群b類2点、II群b類519点（破片は下層d1・d2式混在）、III群a類101点（破片は上層a式、d式～サイベ沢Ⅵ式）、IV群a類2点、剥片石器45点、フレイク410点、礫石器16点、有意の礫・礫18点、獣骨1点が出土。覆土下層からはI群b類1点、II群b類4点（個体土器は、下層d1式とd2式各1個体）、剥片石器1点出土。遺物は覆土上層下部にやや集中していた。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。 (福井)

TH-16 (図Ⅳ-107、表Ⅳ-1、図版76)

位置 K・L11・12 **立地** 標高232m付近

平面形 楕円形 (Ⅳ類) **規模** 4.1/3.8×(-)×0.4m

確認・調査 表土除去後、調査時は後期の盛土層と考えていたB-Tm層下位の黒褐色土 (Ⅲ-2層) を掘り下げたところ、縄文時代に削平されたV層面において、暗褐色土の落ち込みとして検出した。いくつかトレンチを掘って、範囲を確認しながら掘り下げた。

覆土 覆土は上位が暗褐色土、下位が褐色土からなる。上位層にややロームブロックが多い。

形態 壁が不明瞭ながら、楕円形を呈する。柱穴は検出できなかったが、床中央より北西寄りに炉跡HF1を検出した。それよりさらに北西側の床面は、硬く貼床されていた。

付属遺構 HF1：住居中央よりやや北西寄りの床で、焼土を検出した。床が明瞭に焼けていた。

遺物出土状況 覆土からII群b類17点、III群a類844点、IV群a類78点、剥片石器4点、フレイク9点、礫石器3点、有意の礫・礫11点出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代後期前葉である。 (福井)

TH-17 (図Ⅳ-108・109、表Ⅳ-1、図版77・78)

位置 K・L4・5 **立地** 標高24.7～24.4m付近

平面形 楕円形 (Ⅲ類) **規模** 6.8/6.4×5.4/4.8×0.7m

確認・調査 本遺構周辺は大きく北西-南東方向に広がる不整形の暗褐色土の落ち込みであった。K5杭を中心に十字、北方向に幅1mのトレンチが設定されて部分的に掘削されており、さらに周囲がm2層としてまだらに掘り下げられている状態で調査を引き継いだ。落ち込みの形状から比較的大きな住居の重複が予想された。周囲とトレンチを精査し、2軒の竪穴住居の重複を想定した。確認のために5ラインをベルトとし、幅を50cmに狭めて掘り下げた。結果1.5m下げたようやく床面の一部を確認した。床面までの堆積を確認し、周囲のトレンチを改めて精査すると、深く掘られた1軒と、その埋没途中に構築されたもう1軒の住居跡を確認した。古く深いものがTH-11で、新しいものが本遺構である。

5ラインのベルト、L6区Lラインに設けたベルト、南西方向のTH-14との間に設けたベルトの3か所で、壁の立ち上がりを確認した。覆土を掘り下げ床面を露出させた。土層断面の記録を作成し、ベルト部分を掘り下げた。床面で柱穴7基と炉跡1か所の調査を行い、記録し調査を終了した。

覆土 最も上位にⅢ層中位とみられる黒褐色土が堆積しているが、後世の植生の影響とみられる攪乱を受ける部分が多い。このⅢ層以下から床面までの層位を8層に分層した。1層はⅢ層とみられる堆積。2～7層は黄褐色土ブロックが混じる暗褐色土の堆積である。なお、本遺構は円筒下層d1式のTH-14の堀土上、円筒上層a1式の堆積土であるm2(2)層を切って掘り込まれている。

形態 平面形は南西～北東方向に長軸のある楕円形を呈する。床面南半分に柱穴に沿って段差がある。南側の壁は緩やかであるが、他方ではやや急である。

付属遺構 8基の柱穴、1か所の炉跡を確認した。HP2～6・8は明瞭で、深さも床面から70cm前後である。平面形に対応する配置状況から主柱穴とみられる。HP8は、TH-11との重複を確認するトレンチにおいて隣接する柱穴を2基確認している。規模と検出位置から見て本遺構のものともみられる。HF1は小規模であるが中心軸上に位置しており、伴う炉跡とみられる。

遺物出土状況 覆土からI群b類2点、II群b類3,003点、III群a類315点、III群b類1点、IV群a類8点、円板状土製品4点、焼成粘土塊1点、剥片石器217点、フレイク4,066点、礫石器53点、石製品2点、有意の礫・礫86点、獣骨7点が出土。床面からはII群b類8点、フレイク1点、礫石器6点、有意の礫・礫1点、骨角器1点、獣骨7点が出土している。

時期 掘り込み面からは円筒上層a1式期以降である。住居形態からすると、円筒上層b～サイベツⅦ式段階のものである可能性もある。(立田)

TH-18(新)・TH-18(旧)・TH-112(図Ⅳ-110～115、表Ⅳ-1、図版78～81)

これらの住居に関しては、K・L10区北東側の攪乱を除去した段階で、平面的に検出し、TH-18とした。その後、直交する形でベルトを残しながら掘り下げたが、連続的に重複していたもう1軒の住居も同時に掘り下げてしまった。そのため、気づいた時点で、TH-18(新)、TH-18(旧)と命名した。その後、調査が終わり、図面を整理する過程で、TH-18(新)の覆土中に、もう1軒住居が存在した可能性を見出した。図上からの復元ではあるが、この住居についてはTH-112と命名した。

遺物出土状況 覆土上層からII群b類821点(下層d2式2個体、破片は磨滅著しい)、III群a類97点(上層a1式主体)、円板状土製品1点、土偶1点、剥片石器67点、フレイク590点、礫石器16点、石製品1点、有意の礫・礫75点が出土。覆土下層からはII群b類745点(破片は下層d式で磨滅著しい)、III群a類8点、円板状土製品1点、剥片石器96点、フレイク380点、礫石器35点、石製品2点(うち塊状耳飾1点)、有意の礫・礫81点が出土。床面からは剥片石器2点、フレイク3点、礫石器10点、有意の礫・礫8点、獣骨21点が出土。

TH-18(新)(図Ⅳ-110～115、表Ⅳ-1、図版78～81)

位置 K～M9・10

立地 標高24.4m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ型)

規模 (5.8)×(4.8)×1.1m

確認・調査 表土・攪乱除去後、削平されたK・L10区北東側で平面的に検出した。ベルトを残し、掘り下げた。

覆土 覆土上層は、TH-112廃絶後の窪みに堆積した盛土層。主にローム層由来土からなっており、C盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックをや

や多く含むのが特徴で、ほとんどが暗褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成された部分と、貼床して形成した部分があった。中央には、焼土HP12がみられ、中軸南東側に中央ピットHP1がみられた。

付属遺構 HP：20基をHPとした。HP1は中央ピット。石鏃1点、石核1点、フレイク10点、敲き石1点、礫3点が出土している。HP12は炉。HP2・6・33・40・42は、規模から主柱穴とみられる。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。 (福井)

TH-18 (旧) (図IV-110~115、表IV-1、図版79・81)

位 置 K・L9・10 **立 地** 標高24.4m付近

平面形 隅丸方形 (Ⅱ類) **規 模** (5.8)×(4.8)×0.9m

確認・調査 表土・攪乱除去後、削平されたK・L10区北東側で平面的に検出したTH-18 (新)の延長として、ベルトを残し、掘り下げた。ベルト除去後、重複した住居であると認識した。

覆 土 覆土上層は、TH-18 (新)の覆土下層やTH-112廃絶の窪みに堆積した盛土層。主にローム層由来土からなっており、C盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックをやや多く含むのが特徴で、ほとんどが暗褐色土からなる。

形 態 三辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を4本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成されている。中央には、中央ピットHP26がみられた。また、床には据え付け台石が2か所確認された。TH-18 (新)のほか、TH-21にも切られる。

付属遺構 HP：35基をHPとした。HP26は中央ピット。つまみ付ナイフ1点、スクレイパー3点、Rフレイク1点、フレイク1564点、礫61点が出土している。HP10・13・30・32は、規模から主柱穴とみられる。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。なお、年代測定したところ、覆土2層炭化物集中出土炭化種子では $4,500 \pm 25$ y r B.P. (PLD-28794)、床面据え付け台石直下採取炭化材では $4,470 \pm 30$ y r B.P. (IAAA-92319)の測定値が得られた。 (福井)

TH-19 (図IV-116~118、表IV-1、図版80・82)

位 置 L~N10・11 **立 地** 標高24.0~23.9m付近

平面形 楕円形 (Ⅰ類) **規 模** (-)×(6.3)×0.7m

確認・調査 L~N10・11区の攪乱を除去した段階で、平面的に検出した。覆土はごく僅かにしか残存しておらず、ほぼ床がみえていた状態であったので、そのまま掘り下げ床を検出した。

覆 土 覆土下層はロームブロックをやや多く含む暗褐色土。覆土上層にはロームブロック・ローム粒を僅かに含む暗褐色土が堆積する。覆土上層は、A盛土に類似する。

形 態 楕円形を呈し、床に主柱穴を6本掘り込む。後述のように、改築されたとみられ、主柱穴が2本近接している部分がある。中央には、中央ピットHP29がある。床には、据え付け台石が6か所検出された。

付属遺構 HP：27基をHPとした。HP29は中央ピットで、深く掘り込まれている。覆土には、大小の礫が含まれていた。HP1・3・4・5・6・7・22・23・24は、規模から主柱穴とみられる。未調査部分にもう1本あり、6本一組みになる可能性がある。また、各主柱穴は同規模の2本が隣接して

おり、改築のため、後に位置に移して新たに構築したものとみられる。HP11～15・20の6基は、据え付け台石が設置されていた。床を浅く掘り込み、台石の厚さの半分ほどを埋め込んでいた。なお、HP10やHP16は、掘り込みが極めて浅く、据え付け台石を抜き取った痕跡と考えられる。

遺物出土状況 覆土上層からⅡ群b類102点（下層d 2式多い）、Ⅲ群a類2点、円板状土製品2点、剥片石器20点、フレイク80点、礫石器2点、有意の礫・礫15点が出土。覆土下層からはⅡ群b類13点、剥片石器7点、フレイク40点、礫石器2点、有意の礫・礫2点が出土。中央ビットからは、Rフレイク8点、フレイク31点、たたき石2点、すり石・石錘各1点、台石石皿2点、礫8点が出土した。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。 (福井)

TH-20 (図IV-119、表IV-1、図版83・84)

位 置 O3・4 **立 地** 標高234m付近

平面形 楕円形 (Ⅰ類) **規 模** 4.0/3.8×(-)×(0.1)m

確認・調査 Ⅳ層上面で遺構確認していたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは南東側を攪乱されており、残存部分は半円形を呈していた。輪郭は明瞭であったので、落ち込みの中心から北西方向の壁際に伸びるベルトを設定し、ベルトを残して覆土を掘り下げた。結果平坦な床面、中心付近に焼土を確認したため、住居跡とした。土層断面の記録を作成し、精査して柱穴、焼土の調査を行った。床面出土遺物の記録を行い、取り上げて調査を終了した。

覆 土 20mm以下のロームが混じる黒褐色土の単層である。

形 態 確認できた部分ではほぼ円形を呈する。ほぼ中心にあたる位置に地床炉を検出している。

付属遺構 柱穴6基、焼土2か所を確認した。柱穴はいずれも浅く、小規模であるが、壁と接するHP1・6は後述する炉跡の長軸の延長線上に位置している。炉跡はV層が明瞭に焼成しており、中心を避けてHF1・2の2か所に分かれている。東側のHF2に接して、V層が盛り上がる部分が認められる。北西側の壁際に溝が検出されている。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類3点、Ⅲ群a類4点、剥片石器1点、有意の礫・礫1点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。 (立田)

TH-21 (図IV-120～123、表IV-1、図版84～86・88・89・100)

位 置 I～K9・10 **立 地** 標高244m付近

平面形 隅丸方形 (Ⅱ類) **規 模** (8.2)×(6.1)×0.8m

確認・調査 B調査試掘坑と、防空壕跡内の土層を除去した結果、堅穴住居の壁や床を検出した。その後、推定される範囲に合うように十字にトレンチを入れて確認し、ベルトを残して掘り下げた。

覆 土 覆土上層は、TH-23(新)などの廃絶住居の窠みに堆積した盛土層。ローム層由来土を主体としており、C盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積。ロームブロックを多く含むのが特徴で、暗褐色土～褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成されている。中央には、中央ビットHP1がみられた。TH-18(旧)よりは新しいが、TH-23(新)のほか、未命名住居にも切られる。未命名住居は、E-F断面で確認されたもので、TH-21より新しく、TH-23(新)より古いもの。ただし、一断面のみでの確認のため、未命名とした。

付属遺構 HP:27基をHPとした。HP1は中央ビット。HP15・27は、規模から主柱穴とみられる。HP8・19・29・30は位置から主柱穴と推定した。

遺物出土状況 覆土上層からⅡ群b類204点、Ⅲ群a類4点、剥片石器19点、フレイク125点、礫石器6点、石製品1点、有意の礫・礫17点が出土。覆土下層からはⅡ群b類153点、Ⅲ群a類7点、剥片石器33点、フレイク122点、礫石器6点、有意の礫・礫16点、骨角器2点、魚骨1点、獣骨8点が出土。Ⅱ群b類は、磨滅した小片が多いが、ほとんどが下層d1式。中央ピットからは、石鏃3点、石槍2点、石錐2点、スクレイパー5点、Rフレイク9点、フレイク54点、たたき石4点、台石石皿2点、礫器1点、礫92点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。 (福井)

TH-22 (図Ⅳ-124~130、表Ⅳ-1、図版87~92・120・121)

位 置 G~I 7~9 **立 地** 標高24.5m付近
平面形 隅丸方形 (Ⅱ類) **規 模** (7.8)×(6.3)×0.9m

確認・調査 2009年度は、Iラインより海側を調査したため、当初はI7区での壁の立ち上がり、B調査試掘坑での壁の立ち上がりが、同一の堅穴住居と考えていた。その後、TH-25と重複していることが判明した。2010年度は、TH-25を調査してから、掘り下げた。

覆 土 覆土上層は、廃絶後の窪みに堆積した盛土層。ローム層由来土を主体としており、C盛土とみられる。その上位には複数の住居跡の覆土が堆積している。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積。ロームブロックを多く含むのが特徴で、暗褐色土~黄褐色土からなる。セクションA-Bでは、覆土中層に黒褐色土~暗褐色土からなる土層がマウンド状に堆積していた。壁際の中層上位には、著しく融解が進んだ貝層を確認することができた。アワビ類とコボガイ類からなるとみられる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成されているが、一部ロームを貼っている部分もある。四隅の主柱穴の内側には、1基ずつ同規模の柱穴がみられ、中軸両端及び中央ピットの南東側にも主柱穴と同規模の柱穴が並ぶ。中央には、中央ピットHP1がみられた。TH-8 (旧)・25・30 (新)・40に切られる。なお、TH-9・24よりは新しい。

付属遺構 HP:65基をHPとした。HP1は中央ピット。HP7・20・21・22・TH-8 (旧)HP13は、規模から主柱穴とみられる。HP5・6・19・49は四隅の主柱穴の内側に掘り込まれた同規模の柱穴。HP2・4・54は中軸上に並ぶ主柱穴規模の柱穴。住居壁沿いのHP40・56は出入り口と関係したと想定される。

内縁杭列:ベンチ状構造の段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっており、ほぼ一巡していた。一部ごく浅い溝によって連結した状況もみられ、ごく細い棒と板状の部材による周壁で段差を覆っていた様子が推測される。

遺物出土状況 覆土上層からⅡ群b類119点 (d2式がほとんどだが、磨滅した小片多い)、Ⅲ群a類11点 (上層a2式1個体)、焼成粘土塊1点、剥片石器9点、フレイク67点、礫石器8点、有意の礫・礫14点、魚骨2点、獣骨6点が出土。覆土下層からはⅡ群b類118点、Ⅲ群a類4点、剥片石器6点、フレイク61点、礫石器3点、有意の礫・礫4点が出土。床面からはⅡ群b類71点、Ⅲ群a類2点、剥片石器9点、フレイク7点、有意の礫・礫3点、魚骨5点、獣骨5点が出土。床面出土個体土器は、円筒土器下層d1式。中央ピットからは、石鏃・両面調整石器各4点、石錐・スクレイパー・Rフレイク各7点、石核6点、フレイク93点、たたき石9点、楔形石器・北海道式石冠・砥石各1点、台石石皿2点、礫12点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。 (福井)

TH-23 (新)・TH-23 (旧) (図IV-131~136、表IV-1、図版86・88・89・93~96)

これらの住居に関しては、2009年度にTH-21を切る住居として検出し、TH-23とした。さらに、ベルトで土層を観察し、掘り下げた。しかし、調査は翌年度に持ち越した。2010年度、改めて調査をしたところ、TH-23とした落ち込みは、2軒の住居からなることが分かった。住居が著しく重複する地点であり、盛土遺構で埋土されていたので、捉えきれなかったためである。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類284点、Ⅲ群a類214点、Ⅳ群a類43点、円板状土製品2点、剥片石器49点、フレイク144点、礫石器8点、有意の礫・礫33点、魚骨1点、獣骨7点が出土。覆土下層からはⅡ群b類12点、Ⅲ群a類139点、剥片石器12点、フレイク83点、礫石器3点、有意の礫・礫9点が出土。床面からは礫石器2点、石製品1点(石棒)、有意の礫・礫1点が出土。覆土出土個体土器は、上層a1式2個体。

TH-23 (新) (図IV-131~133、表IV-1、図版86・88・89・93・94・96)**位置** I~K9・10**立地** 標高24.0m付近**平面形** 隅丸方形(Ⅱ類)**規模** (6.3)×(5.2)×0.6m

確認・調査 2009年度にTH-21を切る住居としてベルト断面で検出し、さらに追加のトレンチで範囲を確認した。

覆土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。主にローム層由来土からなっており、C盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積であるが、ごく薄い。ロームブロックをやや多く含むのが特徴で、ほとんどが褐色土からなる。

形態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を4本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すものと、貼床して形成するもの両方がみられた。中央には、埋設土器とその上位に焼土からなる炉が残されていた。また、中軸上南東側には中央ピットHP1・2がみられた。TH-21より新しく、未命名住居より古い。未命名住居は、E-F断面のみで確認されたもので、TH-21より新しく、TH-23(新)より古いもの。

付属遺構 HF:3か所検出した。埋燬炉と、その上位の地床炉からなる。埋燬炉HF3は床面、地床炉HF1・2は床面よりやや浮いた位置での検出である。地床炉HF1・2とも住居中軸に沿っており、厚い焼土とそれを巡る炭化層からなる。HF3の焼土も床面が焼けたものではなく、埋設土器内の窪みに堆積した土層が焼けて形成されたものである。埋設土器中には、炭混じりのロームブロックが充填されていた。他の住居跡で、床面で焼土が検出されないものは、HF1・2のように床に土を貼り、その上で焼成を行っていたためともみられ、通常はある程度の段階で除去してしまうものと推察される。

HP:13基をHPとした。HP1・2は中央ピット。HP5・10・13・15は、規模から主柱穴とみられる。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期初頭とみられる。

(福井)

TH-23 (旧) (図IV-134~136、表IV-1、図版93~95)**位置** H~J9・10**立地** 標高24.0m付近**平面形** 隅丸方形(Ⅱ類)**規模** (6.8)×(5.5)×(0.5)m

確認・調査 2009年度にTH-21を切る住居としてベルト断面で検出し、さらに追加のトレンチで範囲を確認した。2010年度、改めて調査をしたところ、TH-23とした落ち込みは、2軒の住居からなることが分かった。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。主にローム層由来土からなっており、C盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含むのが特徴で、ほとんどが褐色～にぶい黄褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで構築している。中央には、中央ピットHP1がみられた。TH-21・25より新しく、TH-23(新)・31、未命名住居より古い。未命名住居は、A-B断面で確認されたもの。

付属遺構 HP:32基をHPとした。HP1は中央ピット。HP2・3・4・14・27・29・31は、規模から主柱穴とみられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類56点、Ⅲ群a類134点、Ⅳ群a類4点、円板状土製品1点、剥片石器27点、フレイク39点、礫石器9点、有意の礫・礫23点、魚骨10点、獣骨57点が出土。中央ピットからは、つまみ付きナイフ・両面調整石器が各1点、スクレイパー2点、Rフレイク3点、フレイク11点、たたき石7点、扁平打製石器2点、礫11点が出土した。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。(福井)

TH-24 (図IV-137~141、表IV-1、図版88・89・97・100~102・172)

位 置 I~K7~9 **立 地** 標高243m付近

平面形 隅丸方形(1類) **規 模** (6.2)×6.1/5.9×0.8m

確認・調査 当初は盛土層の堆積と考えていたが、トレンチによる土層観察によって、住居であることを確認し、TH-24と命名した。

覆 土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。さらに上下に分けられ、上層上部はC盛土層とみられる。上層下部の最上層はP盛土の一部の可能性があるほぼローム純層(C-Dの土層4、I-Jの土層3)と、その下位に盛土層が堆積していた。この盛土層は、A盛土に部分的に類似していた。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。ロームブロックを多量に含むのが特徴。盛土下層直上には炭化物層が薄く堆積していた。これについて、フローテーション法にて炭化種実を抽出したところ、タテア属1091点、タテア属サナエタテ節43点(別に破片8点)、イネ科416点、アカザ属237点(別に破片26点)が得られた。この点数は、今回採取した試料中最大のものである。草取りしたものを、集積して干されたものが、燃やされた可能性が考えられる。

形 態 隅丸方形～楕円形を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。後述のように、改築されたと思われる、主柱穴が2本近接している部分が2か所ある。中央には、中央ピットHP1がある。TH-21・22・23(旧)、TP-26より古い。

付属遺構 HP:22基をHPとした。HP1は中央ピットで、深く掘り込まれている。HP2・7・18・19・22・23は、規模から主柱穴とみられる。HP18・19及びHP22・23は同規模の2本が隣接しており、改築のため、位置を移して新たに構築したものとみられる。

遺物出土状況 覆土上層からⅡ群b類1,075点(下層d2式3個体)、Ⅲ群a類1点、Ⅳ群a類1点、剥片石器42点、フレイク404点、礫石器8点、有意の礫・礫66点、貝類(アワビ類)、魚骨2点、獣骨45点(焼けていない海獣骨含む)が出土。覆土下層からはⅡ群b類1,058点(下層d1式4個体、d2式2個体、破片は下層d式)、円板状土製品1点、剥片石器32点、フレイク161点、礫石器8点、有意の礫・礫17点、骨角器1点、魚骨1点、獣骨27点が出土。床面からは、剥片石器1点、礫石器4点が出土。個体土器は、下層d1式5個体、d2式3個体が覆土下層の直上から出土。下層d2式は覆土上層から4個体出土。中央ピットからは、Rフレイク1点、フレイク129点、たたき石6点、

礫3点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から、縄文時代前期末葉とみられる。年代測定したところ、覆土上層下部炭化物層出土炭化材では4,760 ± 30 y r B.P. (IAAA-92320)の測定値が得られた。(福井)

TH-25 (図IV-142~147、表IV-1、図版88~90・103~105・120・121)

位 置 G-17~9

立 地 標高24.8m付近

平面形 楕円形(Ⅱ類)

規 模 (9.4)×(6.6)×0.6m

確認・調査 2009年度の調査最終段階で、TH-22の調査の過程で確認された。最も多くの住居跡が重複する地点であったので、2010年度に持ち越した。複数のトレンチを入れて、周囲の住居跡との前後関係に留意しながら、掘り下げた。

覆 土 全体にローム層を由来とする、におい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積したC盛土層や、新しい時期の住居跡覆土。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積だが、ほとんど確認できない。ロームブロックをやや多く含むのが特徴。

形 態 部分的にしか確認できなかったが、恐らく全辺にベンチ状構造を持っており、床に支柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成されている。中央には、地床炉があり、中軸上南東側には中央ビットHP1がみられた。中央ビットの周囲には周堤が構築されていた。TH-23(旧)・30(新)・40に切られる。なお、TH-8(旧)・22・29よりは新しい。

付属遺構 HF1：住居のほぼ中央で厚い焼土を検出した(HF1-1)。焼土の上位には、炭化材・焼骨・焼土粒を含む灰層が堆積し、さらに上位に薄い炭層が堆積していた。炭層と焼土の間には砂層が堆積している部分もあった。なお、HF1には、新旧があり、その北西側に不明瞭な焼土とそれを覆う炭層があった(HF1-2)。

HF2：HF1が形成された貼床より下位で、住居中央より南東寄りで厚い焼土を検出した。焼土の上位には薄い炭層が堆積していた。隣接してHP29・30があり、その上位には炭化材片や砂を含む土層が薄く堆積していた。

HP：40基をHPとした。HP1は中央ビットで深く掘り込まれる。坑底付近には、礫が20数点含まれていた。HP8・13・16・23・25・26、SP-81は、規模から支柱穴とみられる。ほかに、支柱穴規模のものにHP6・22・14・31がある。なお、HP29・32は、HF2に伴う中央ビットの可能性があり、TH-25直前の別の住居のものである可能性も考えられる。

周溝：ベンチ状構造のごく一部で確認された。

遺物出土状況 覆土からI群b4類1点、II群b類268点(破片は下層d式で、磨滅)、III群a類268点(上層b式1個体、破片はa2式多いが磨滅)、IV群a類20点、円板状土製品1点、剥片石器53点、フレイク202点、礫石器12点、石製品1点、有意の礫・礫43点、魚骨2点、獣骨21点が出土。貼床中からはII群b類16点、III群b類7点、剥片石器5点、フレイク11点、礫石器1点、有意の礫・礫5点、獣骨1点が出土。中央ビットからは、両面調整石器・石核・加工痕のある礫・北海道式石冠各1点、Rフレイク3点、フレイク16点、すり石3点、たたき石14点、礫17点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期初頭～前葉である。

(福井)

TH-27 (図IV-148・149、表IV-1、図版106～109・127)

位置 H・I 6・7 立地 標高242～24.4m付近
 平面形 隅丸五角形 (Ⅱ類) 規模 (5.6)×(4.6)×(0.4)m

確認・調査 I 6・7区は盛土層が厚く堆積していると認識していたので、Ⅲ層黒色土上面付近まで掘り下げた。Iラインにベルトを残し、同様にH 6・7区のメイントレンチより東側にⅢ層黒色土上面付近まで掘り下げ、精査したところ、Ⅲ層上面付近で複数の土坑や柱穴、焼土が検出され、個別に遺構名をつけて調査を行った。2010年度、改めて精査した結果、ベンチ状構造と床の段差を面的に確認し、前年度に残したベルトの下部で立ち上がりを認識したため、TH-27と命名した。なお、改めてIラインの土層断面のスナップ写真を確認したところ、I 7杭とI 8杭のほぼ中間に立ち上がりを確認できた。

覆土 床を覆うのはロームブロックを含む暗褐色土～褐灰色土の覆土下層。堆積は薄いものであったとみられる。覆土上層には、周囲より僅かに暗色な黄褐色土が堆積していた。断面写真からは、B盛土上部から掘り込まれたとみられる。床はロームに達しているが、ベンチ状構造部分はB盛土下部までの掘り込みとみられる。

形態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を4本掘り込む。ベンチ状構造は五角形を呈していた可能性があり、掘り残すことで形成されていた。中央には、埋設土器を伴うがHF1 (旧TP-20)があり、中軸上の東側には中央ビットSP-19・20・21がみられた。

付属遺構 HF1 (TP-20)：底部と口唇を欠いた土器が埋設されていた。埋設にあたっては、土器が入る大きさの穴を掘り込んだ後、土器を設置したとみられる。土器内部には下位から、ロームブロック主体層、炭化物層、ローム粒主体で締まりの弱い暗褐色土、しまりの弱い暗褐色土が焼けて形成された焼土、薄い炭層と灰層が堆積していた。埋設土器の周囲は、浅く掘り窪められており、覆土下層と同様な堆積で覆われていた。

HP：11基がHPと考えられるが、多数の小柱穴が検出されており、恣意的にTH-27HPとせず、主柱穴規模のSPだけ抜き出した。SPの図を参照していただきたい。SP-19・20・21が中央ビット、SP-82・94・110・179が主柱穴とみられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類77点、Ⅲ群a類54点、円板状土製品1点、剥片石器10点、フレイク35点、礫石器4点、有意の礫・礫3点が出土。埋設土器は、円筒土器上層a 1式。中央ビットからは、スクレイパー・石核・すり石・たたき石・北海道式石冠が各1点、礫が2点出土している。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。なお、年代測定したところ、以下の結果がでた。埋設土器土層6出土炭化炭化材：4485±25 y r B.P. (PLD-25668)。

(福井)

TH-28 (図IV-150～152、表IV-1、図版109～111)

位置 F～H 9・10 立地 標高239m付近
 平面形 隅丸方形 (Ⅱ類) 規模 (7.1)×(5.2)×0.8m

確認・調査 F～H 7～10区の遺構密集地区において、各遺構の範囲を確認するためのトレンチを設定した結果、確認した。もっとも重複をほとんどしていなかったため、ベルトを残して掘り下げた。

覆土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。主にローム層由来土からなっており、C盛土とみられる。部分的に灰黄褐色土や、ローム純層が含まれる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含むのが特徴で、ほとんどがにぶい黄褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に支柱穴を6本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで構築している。中央南東側には、中央ビットHP1がみられた。TH-29より新しい。

HP：14基をHPとした。HP1は中央ビットで深く掘り込まれる。住居中央側に炭化物が集中した層がみられた。HP2・3・4・5・6・7・10・13は、規模から支柱穴とみられる。HP3・7及びHP4・10、HP5・13は同規模の2本が隣接しており、改築のため、位置を移して新たに構築したものとみられる。

遺物出土状況 覆土からI群b4類1点、II群b類156点（磨滅小片）、III群a類103点（破片は上層b主体）、IV群a類25点、円板状土製品1点、焼成粘土塊6点、剥片石器41点、フレイク87点、礫石器11点、有意の礫・礫58点、獣骨6点が出土。中央ビットからは、スクレイパー・石核各1点、Rフレイク5点、フレイク4点、たたき石10点、礫2点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。 (福井)

TH-29 (図IV-153~155、表IV-1、図版91・112~115・120・121)

位 置 F~H 8・9 **立 地** 標高23.7m付近

平面形 隅丸方形形 (II類) **規 模** (5.3)×(4.4)×0.7m

確認・調査 F~H 7~10区の遺構密集地区において、各遺構の範囲を確認するためのトレンチを設定した結果、確認した。外周の壁の残存状況は悪かったが、ベンチ状構造内側の壁と床はよく残っていた。

覆 土 覆土上層は、新しい時期の住居跡覆土下層や、それら廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックを多く含む褐色土からなる。

形 態 全辺にベンチ状構造を持っており、床に支柱穴を4本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成されている。中軸南東側には、中央ビットHP1がみられた。TH-8(旧)・8(新) a・25・28・30(新)・31に切られる。

付属遺構 HP：14基をHPとした。HP1は中央ビット。一度深く掘り込んで、埋め戻している。その中に炭化物のやや多い土層を挟み、下位はロームブロック主体の埋土、上位はローム主体の貼り土となっている。HP2・3・5・15は、規模から支柱穴とみられる。HP6では、上部から北海道式石冠が出土した。

内縁杭列：ベンチ状構造の段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっており、ほぼ一巡していた。

周溝：ベンチ状構造上のごく一部で確認された。

遺物出土状況 覆土からII群b類87点、III群a類37点、剥片石器27点、フレイク60点、礫石器13点、石製品1点、有意の礫・礫44点、獣骨44点が出土。床面からは円板状土製品4点、獣骨1点が出土。中央ビットからはフレイク4点、たたき石・礫各1点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉~中期初葉である。 (福井)

TH-30(新)・TH-30(旧) (図IV-156~163、表IV-1、図版51・52・91・116~122・145)

これらの住居に関しては、2010年度にメイントレンチ南東側で検出した。メイントレンチ北東側でも確認され、当初大きな住居跡を想定していたが、改めて範囲を確認したところ、TH-30とした落ち込みは、新旧2軒に分離されることが判明し、TH-30(新)、TH-30(旧)とした。住居が著しく重複する地点であったので、捉えきれなかったためである。

TH-30 (新) (図IV-156~160、表IV-1、図版51・52・118~122・145)

位置 F~H 7~9

立地 標高24.0m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)

規模 (7.0)×(4.8)×0.7m

確認・調査 2010年度にメイントレンチ南東側で検出した。メイントレンチ北東側でも確認され、当初大きな住居跡を想定していたが、改めて範囲を確認したところ、TH-30とした落ち込みは、新旧2軒に分離されることが判明し、TH-30(新)、TH-30(旧)とした。

覆土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。褐色土~にぶい黄褐色土からなる部分が多い。ただ、その下半ではセクションA-Bの土層16・19・20・25・27のように、にぶい黄褐色~暗褐色で、炭化物を多く含む層を複数挟む。覆土上層上部は窪みが維持されたようで、黒色土が堆積していた。覆土下層は、屋根土を含むとみられる褐色土からなる。

形態 楕円形~隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を6本掘り込む。中軸中央よりやや南東側には、地床炉跡HF2があった。

付属遺構 HF1:住居の北側角付近で、焼土を検出した。二次的に堆積した異地性のものとみられる。

HF2:住居中央より南西側の床で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が8cmほど形成されており、その上位には、炭化物や焼骨を含む灰層も8cmほど遺っていた。

HP:25基をHPとした。HP2・7・11・26・27は、規模から主柱穴とみられる。ほかに主柱穴と同規模のものに、HP1・5・8・10・12・13・20・22があったが、他の重複住居などのものと考えられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類22点(下層d式の磨滅小片)、Ⅲ群a類1,332点(上層a1式1個体、a2式1個体、b式1個体、b末~サイベ沢Ⅷ式(古)2個体、サイベ沢Ⅷ式(古)13個体、サイベ沢Ⅷ式(新)5個体、サイベ沢Ⅷ式5個体、サイベ沢Ⅷ式~見晴町式1個体、上層1個体、破片は上層b主体)、Ⅳ群a類1点、剥片石器25点、フレイク73点、礫石器6点、有意の礫・礫20点、魚骨2点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期中葉である。

(福井)

TH-30 (旧) (図IV-161~163、表IV-1、図版52・116・117)

位置 E~G 8・9

立地 標高23.9m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)

規模 (6.5)×(4.5)×(0.3)m

確認・調査 2010年度にメイントレンチ南東側で検出した。メイントレンチ北東側でも確認され、当初大きな住居跡を想定していたが、改めて範囲を確認したところ、TH-30とした落ち込みは、新旧2軒に分離されることが判明し、TH-30(新)、TH-30(旧)と命名した。

覆土 覆土は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。褐色土を主体としており、C盛土とみられる。

形態 楕円形~隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を恐らく6本掘り込む。床面ほぼ中央には、地床炉跡HF1があった。TH-30(新)に切れ、TH-8(新)・8(旧)よりも新しい。

付属遺構 HF1:住居のほぼ中央の床で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が8cmほど形成されており、その上位には、炭化物や焼骨を含む灰層も3cmほど遺っていた。

HP:10基をHPとした。HP2・5・9は、規模から主柱穴とみられる。ほかに主柱穴と同規模のものに、HP1・5・7があったが、他の重複住居などのものと考えられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類22点(下層d式の磨滅小片)、Ⅲ群a類670点(上層b式3個体、破

片も上層 b 主体)、IV 群 a 類 7 点、剥片石器 34 点、フレイク 104 点、礫石器 8 点、有意の礫・礫 27 点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。

(福井)

TH-31 (図IV-164・165、表IV-1、図版91・112・123)

位 置 H 9・10

立 地 標高 24.0 m 付近

平面形 不明

規 模 (-) × (-) × (0.3) m

確認・調査 H 9 区において遺構の重複関係を迫るようにベルトを残しながら掘り下げていた。その過程で、床面を検出したことで確認した。ただし、TH-31 四方には、TH-23 (旧)・25・28・29 が V 層ローム層を掘り下げて構築されており、断面以外で TH-31 の広がりをとらえることができなかった。

覆 土 主な覆土は、褐色土～暗褐色土で、ロームブロックや炭化物を含んでいた。C 盛土とみられる。

形 態 床だけが確認されているので、全く不明。断面からは、TH-23 (旧)・28・29 よりは新しいとみられる。なお、北西側では段が確認されるので、複数の住居の床である可能性も残る。

付 属 遺 構 HP：1 基を HP としたが、ごく浅いもの。

遺物出土状況 覆土から II 群 b 類 4 点、III 群 a 類 424 点 (上層 b)、IV 群 a 類 3 点、剥片石器 21 点、フレイク 93 点、礫石器 13 点、有意の礫・礫 14 点、獣骨 1 点が出土。貼床から II 群 b 類 2 点、IV 群 a 類 1 点、剥片石器 3 点、フレイク 5 点、有意の礫・礫 1 点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。

(福井)

TH-32 (図IV-166~168、表IV-1、図版123~126・133)

位 置 C~E 5・6

立 地 標高 23.9 m 付近

平面形 隅丸方形 (II 類)

規 模 (6.9) × (6.1) × 0.5 m

確認・調査 塹壕跡の壁を精査したところ、確認した。直交するように北西側にトレンチを入れ、TH-34 (旧) との重複関係を確認した。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積した C 盛土層。暗褐色土～いぶい黄褐色土からなる部分が多い。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックを多く含んだ褐色土からなる。

形 態 恐らく全辺にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を 6 本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成する部分と、貼床して作出した部分がある。ほぼ中央には、中央ビット HP23 がみられた。TH-7・34 (新)・34 (旧)・48 に切られる。

付 属 遺 構 HP：22 基を HP とした。HP23 は中央ビット。覆土はロームブロックを多く含む。最上部に貝層が残る。HP6・14・16・19・20・24 は、規模から主柱穴とみられる。HP14・20 には隣接して主柱穴と同規模の柱穴 HP21・22 が検出された。HP15 に隣接して検出された焼土は、住居覆土に遺された異地性の焼土。

遺物出土状況 覆土から II 群 b 類 1,364 点 (下層 d 2 式 1 個体、破片は磨滅小片)、III 群 a 類 362 点 (破片は磨滅小片)、IV 群 a 類 313 点 (涌元 1 式 1 個体)、円板状土製品 2 点、剥片石器 85 点、フレイク 178 点、礫石器 17 点、石製品 2 点 (うち珠状耳飾 1 点)、有意の礫・礫 74 点、獣骨 34 点が出土。床から獣骨 1 点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉～中期初頭である。

(福井)

TH-33 (図Ⅳ-169～171、表Ⅳ-1、図版127・128・138・139)

位 置 E～G 4～6

立 地 標高24.7m付近

平面形 楕円形 (Ⅲ類)

規 模 (6.2)×(4.6)×0.4m

確認・調査 C盛土をⅢ層黒色土上面レベルまで掘り下げた段階で、TH-33南側の輪郭を検出した。トレンチにより、その広がりや周囲の住居との重複関係を確認し、ベルトを残して掘り下げた。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。E～Fの土層25は、ほぼローム層の純層。また、HP5は埋没後覆土が締まったようで、覆土上層が落ち込んでいる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックを多く含んだ暗褐色土～にぶい黄褐色土などからなる。

形 態 楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を6本掘り込む。床面ほぼ中央には、地床炉跡HF1があり、中軸南東側に中央ピットHP5があった。また、北側に張り出すような壁 (TH-33b) とそれに伴う周溝もみられたが、当初の住居 (TH-33a) が拡張されたものかもしれない。TH-12・37よりも新しい。

付 属 遺 構 HF1：住居ほぼ中央で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が4cmほど形成されており、その上位には、炭化物や焼骨を含む灰層がごく薄く遺されていた。

HP：23基検出した。HP5は中央ピット。覆土にはロームブロックを多く含む。HP1・2・3・4・16・21は、規模から主柱穴とみられる。ほかに主柱穴と同規模のものに、HP10・13・14があった。HP10・14はTH-33bに関係するかもしれない。HP13は覆土上半が黒褐色土で、下部ににぶい黄褐色土が堆積していた。また、上面に貼り床がなされることから、TH-33構築以前に掘り込まれたものとみられる。

周溝：TH-33bのごく一部で確認された。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類660点 (破片は磨滅小片)、Ⅲ群a類374点 (上層a～c式)、剥片石器42点、フレイク243点、礫石器9点、有意の礫・礫32点、魚骨23点、獣骨47点が出土。床面からはⅢ群a類40点が出土。中央ピットからは、Rフレイク・たたき石・石斧各1点、フレイク6点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。

(福井)

TH-34 (新)・TH-34 (旧) (図Ⅳ-172～177、表Ⅳ-1、図版124・129～133・143)

これらの住居に関しては、2010年度にCラインより1mDライン側に設定したトレンチで検出した。当初大きな住居跡を想定していたが、改めて範囲を確認したところ、TH-34とした落ち込みは、新旧2軒に分離されることが判明し、TH-34 (新)、TH-34 (旧) とした。住居が著しく重複する地点であったので、捉えきれなかったためである。

TH-34 (新) (図Ⅳ-172～174、表Ⅳ-1、図版130・132・133・143)

位 置 B～D 6・7

立 地 標高23.7m付近

平面形 楕円形 (Ⅲ類)

規 模 (7.0)×(4.7)×0.4m

確認・調査 Cラインより1mDライン側に設定したトレンチで確認し、当初は1軒の住居として調査を開始した。ベルトによって、土層を確認したところ、新旧2軒に分離されることが判明し、

TH-34 (新)、TH-34 (旧) と命名した。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。褐色土〜にぶい黄褐色土などからなる。

形 態 楕円形〜隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。床面ほぼ中央には、地床跡HF1があり、中軸南東側に中央ビットHP6があった。また、中軸北西側にHP21が検出されたが、土坑として独立して構築されたものかもしれない。

付属遺構 HF1：住居ほぼ中央で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が4cmほど形成されており、その上位には、炭化物や焼骨を含む灰層がごく薄く遺っていた。

HP：21基検出した。HP6は中央ビット。覆土にはロームブロックを多く含む。HP1・2・3・4・16・21は、規模から主柱穴とみられる。ほかに主柱穴と同規模のものに、HP5・23・24があった。HP15は年代測定値からすると、より古い時期のもの可能性がある。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類25点(下層d式の磨減小片)、Ⅲ群a類460点(サイベ沢Ⅶ式(新)1個体、サイベ沢Ⅶ式1個体、見晴町式1個体、破片はほとんどサイベ沢Ⅶ式)、Ⅳ群a類196点、剥片石器52点、フリイク87点、礫石器13点、石製品1点(管玉状軽石製品)、有意の礫・礫37点、魚骨3点、獣骨20点が出土。床面からはⅢ群a類62点(サイベ沢Ⅶ式(新)1個体)が出土。中央ビットからは礫3点が出土している。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期中葉である。年代測定したところ、HP15覆土出土炭化材で4.610 ± 30 y r B.P. (IAAA-103307)の測定値が得られた。(福井)

TH-34 (旧) (図IV-175~177、表IV-1、図版124・129~132)

位 置 B-D 5・6

立 地 標高24.1m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)

規 模 (6.2)×(4.2)×0.5m

確認・調査 Cラインより1mDライン側に設定したトレンチで確認し、当初は1軒の住居として調査を開始した。ベルトによって、土層を確認したところ、新旧2軒に分離されることが判明し、TH-34(新)、TH-34(旧)と命名した。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含んだ暗褐色土などからなる。

形 態 楕円形〜隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。床面ほぼ中央には、地床跡HF1があり、中軸南東側に中央ビットHP1があった。

付属遺構 HF1：住居ほぼ中央で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が4cmほど形成されており、その上位には、砂利含む砂層が薄く遺されていた。砂層と焼土の間には、焼け骨を含む灰層がごく薄くみられた。

HP：21基検出した。HP1は中央ビット。覆土にはロームブロックを多く含む。HP4・7・17・20・23は、規模から主柱穴とみられる。ほかに主柱穴と同規模のものに、HP2があった。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類99点(下層d式の磨減小片)、Ⅲ群a類229点(サイベ沢Ⅶ式1個体、破片は上層b〜サイベ沢Ⅶ式)、Ⅳ群a類53点、剥片石器3点、フリイク19点、礫石器6点、石製品2点(うち球状耳飾1点)、有意の礫・礫4点、魚骨2点が出土。中央ビットからはRフリイク2点、フリイク・礫各1点が出土した。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉〜中葉である。年代測定したところ、跡HF1出土炭化材で4.450 ± 30 y r B.P. (IAAA-103308)の測定値が得られた。(福井)

TH-35 (図IV-178~182、表IV-1、図版69・134~137・152)

位置 D~F 5~7

立地 標高24.1m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)

規模 (8.6)×6.2/5.6×0.6m

確認・調査 TH-12を調査する過程で、トレンチ断面で確認した。トレンチを延長、追加し、範囲を確認して掘り下げた。

覆土 覆土は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックを含んだ褐色土~にぶい黄褐色土などからなる。

形態 楕円形~隅丸長方形の中間形態を呈し、床に支柱穴を6本掘り込む。床面はほぼ中央には、地床跡HF1があり、中軸南東側に中央ビットHP7があった。また、西側に張り出すような壁(TH-35b)とそれに伴う周溝もみられたが、当住居(TH-35a)より古い住居の一部が残存した可能性がある。TH-8(旧)・12・49よりも新しく、TH-113より古い。

付属遺構 HF1:住居ほぼ中央で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が4cmほど形成されており、その上位には、炭化物や焼骨を含む灰層がごく薄く遺っていた。

HP:23基検出した。HP7は中央ビット。覆土下部ではロームブロックを多く含む。HP1・2・3・4・5・6は、規模から支柱穴とみられる。ほかに支柱穴と同規模のものに、HP19があった。

周溝:TH-35bのごく一部で確認された。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類169点、Ⅲ群a類1,024点(上層b式3個体、サイベ沢Ⅶ式(新)1個体、見晴町式1個体、破片は上層bが多い、上層d~サイベ沢Ⅶ式が次ぐ)、Ⅳ群a類48点、焼成粘土塊1点、剥片石器77点、フレイク980点、礫石器36点、有意の礫・礫102点、魚骨12点、鳥骨1点、獣骨22点が出土。HF1からRフレイク1点、フレイク20点、骨角器1点が出土。中央ビットからはスクレイパー・たたき石各2点、北海道式石冠1点、フレイク20点、礫1点が出土している。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉~中葉である。

(福井)

TH-37 (図IV-183~187、表IV-1、図版138~141・145)

位置 F~H 5~7

立地 標高25.3m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類)

規模 (7.3)×(6.7)×1.0m

確認・調査 2009年度にメイントレンチで検出し、TH-9とした。しかし、その年度はI~Oラインについて調査を行ったため、翌年度に持ち越した。2010年度、改めて調査を行ったところ、当初TH-9とした落ち込みは、複数の住居からなることが分かった。そこで、複数のトレンチを入れ、改めて範囲を確認した後、掘り下げた。

覆土 全体にローム層を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積したC盛土層や、新しい時期の住居跡覆土。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積。ロームブロックを含むのが特徴で、主ににぶい黄褐色土からなる。

形態 恐らく全辺にベンチ状構造を持っており、床に支柱穴を4本掘り込む。中軸南東側には、中央ビットTH-9HP30・31、TH-47HP12がみられた。TH-9より新しく、TH-33・47に切られる。

付属遺構 HP:TH-37としては38基をHPとしたが、重複した住居のものなどを含んでいた。図上で整理したところ、まだ重複した住居のものも含むが、32基がTH-37のHPと考えられる。なお、TH-37HPとした、HP1~38は、いずれもベンチ状構造上に構築されたもので、列状に並んでいる。これらは、後述する杭列と同様の機能的意味を持ったものとみられる。また、HP5・6・8・9・15・17は床面で確認されたものであるが、やはり列状に同規模のものが並んでおり、ベンチ状構

造上杭列と関連して構築されたものと考えられる。TH-9HP30・31、TH-47HP12が中央ビットとみられる。TH-9HP4・16・18・19・50、TH-47HP1は、規模から主柱穴とみられる。

内線杭列：ベンチ状構造の段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっていた。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類309点（下層d1式1個体、破片は磨滅小片）、Ⅲ群a類187点（磨滅小片だが、上層a式含む）、Ⅳ群a類2点、剥片石器42点、フレイク175点、礫石器3点、有意の礫・礫22点、魚骨5点、獣骨15点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期初頭である。 (福井)

TH-39 (図IV-188-192、表IV-1、図版142-144)

位置 C～E7～9 **立地** 標高240m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類) **規模** 8.8/8.6×5.3/5.0×0.6m

確認・調査 8ラインより1m9ライン側のトレンチや、塹壕跡の壁面で確認した。当初は、2軒以上の住居からなると想定したが、最終的に1軒の住居跡として調査した。

覆土 覆土は、主にいぶい黄褐色土と褐色土からなる。住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層を主体とする。一部砂利がまとまって堆積した部分があった(セクションM-N)。

形態 楕円形-隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を8本掘り込む。住居のほぼ中央には、地床跡HF1があった。また、中軸中央よりやや南東側には、中央ビットHP8が確認された。

付属遺構 HF1：住居のほぼ中央の床で確認した。トレンチを入れたところ、焼土が4cmほど形成されており、その上位には、炭化物や焼骨を含む灰層も4cmほど遺されていた。

HF2・3：HF2は住居の中軸北西側の床で、HF3はHF1の東側の床で確認した。

HP：34基をHPとした。HP1・2・3・4・5・6・17・27は、規模から主柱穴とみられる。ほかに主柱穴と同規模のものに、HP28・31があった。また、柱穴が埋められており、貼床によって上面が硬化していたものにHP10・16・18・21・25・28・29があった。いずれも他の重複住居などのものと考えられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類81点（下層d式の磨滅小片）、Ⅲ群a類1,643点（サイベ沢Ⅶ式(古)2個体、サイベ沢Ⅶ式(新)6個体、サイベ沢Ⅶ式1個体、破片は上層d式-サイベ沢Ⅶ式)、Ⅳ群a類280点、剥片石器78点、フレイク151点、礫石器25点、石製品1点、有意の礫・礫78点、魚骨2点、獣骨102点が出土。床からⅡ群b類9点、Ⅲ群a類661点（サイベ沢Ⅶ式(古)2個体、見晴町式1個体）、剥片石器1点が出土。HF1からⅡ群b類1点、焼成粘土塊42点、フレイク8,803点（水洗選別による微細剥片）、礫1点、骨角器1点が出土。中央ビットからは、Rフレイク・すり石・有孔礫各1点、フレイク4点、礫2点が出土している。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期中葉である。年代測定したところ、炉跡HF1出土炭化材で4,520±30 y r B.P. (IAAA-103309)の測定値が得られた。 (福井)

TH-40 (図IV-193-196、表IV-1、図版61・88-90・120・121・144・145)

位置 G・H7～9 **立地** 標高244m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)? **規模** (-)×(-)×0.6m

確認・調査 2010年度にTH-9とTH-30(新)の間で検出した。断面では明瞭に確認できたが、断片的な残存状況のため、平面では部分的に壁と周溝を検出したに過ぎない。なお、周溝は2本検出されたこと、壁の延長が長すぎることから、2軒以上の住居を混同しているとみられるが、分離不可

能のため、便宜的に1軒としておく。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。褐色土～暗褐色土からなる部分が多い。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含んだ褐色土からなる。

形 態 楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈したとみられるが、不明。

付属遺構 HF1：床が僅かに被熱していた。

HP：2基をHPとしたが、主柱穴と呼べるものではない。TH-30（新）のHP5・8・12・20は当住居の主柱穴であったかもしれない。

周溝1：壁際のごく一部で確認された。

周溝2：床面のごく一部確認された。延びる方向は壁に沿っていた。

遺物出土状況 覆土からⅡ群B類112点（磨滅小片）、Ⅲ群A類72点（破片は上層a式、b式、サイベ沢Ⅶ式で磨滅する）、剥片石器13点、フレイク46点、礫石器1点、有意の礫・礫6点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉～中葉である。 (福井)

TH-42 (図Ⅳ-197、表Ⅳ-1、図版146)

位 置 B・C4・5 **立 地** 標高24.1m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)？ **規 模** (-)×(-)×0.4m

確認・調査 2009年度にB5区は掘り下げられ、さらにB4区に掛かる掘りも掘り上げられていた。また、Cラインよりも南東側に1mにはトレンチを入れていた。そのような状況の中で、B・C4区を掘り下げたところ、黒色土への掘り込みを確認し、検出した。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したBないしC盛土層。黄褐色土～いぶ黄褐色土からなる。覆土下層は、主に黒褐色土からなる。

形 態 楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈したとみられるが、不明。

遺物出土状況 覆土からⅢ群a類95点（磨滅小片、上層b式含む）、Ⅳ群A類11点、剥片石器3点、フレイク2点、有意の礫・礫1点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。 (福井)

TH-44 (図Ⅳ-198・199、表Ⅳ-1、図版147・148)

位 置 F・G3・4 **立 地** 標高25.5m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類) **規 模** 4.8/4.5×3.9/3.6×0.3m

確認・調査 F4区を通るメイントレンチの断面で検出した。掘り下げたところ、床面と壁を確認した。トレンチなどで床や壁を掘り下げてしまった部分があったので、床面を検出したのは全体の半分以下となった。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したBないしC盛土層。含有物の少ないいぶ黄褐色土からなる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含んだいぶ黄褐色土などからなる。

形 態 楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を恐らく4本掘り込む。HF1としたものは、二次的な異地性の焼土とみられる。B盛土上部から掘り込まれた住居で、床面をB盛土中位まで掘り込み、貼床をしている。

付属遺構 HP：8基をHPとした。HP5・7・8は、規模から主柱穴とみられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類781点(下層d 2式1個体)、Ⅲ群a類4,580点(上層a 1式1個体、a 2式3個体、a式1個体、a～b式1個体、b式8個体、破片も上層a～b式)、Ⅳ群a類5点、剥片石器108点、フレイク221点、礫石器21点、有意の礫・礫56点、魚骨18点、鳥骨11点、獣骨114点が出土。床からⅡ群b類78点、Ⅲ群a類30点、有意の礫・礫2点、魚骨3点、獣骨9点が出土。調査時床と考えた部分で円筒土器下層d 2式が出土しているが、住居下位の盛土層中のものとみられる。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。

(影浦)

TH-45 (図IV-200・201、表IV-1、図版149・150)

位 置 B・C 3・4

立 地 標高24.6m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)

規 模 (6.1)×(-)×0.4m

確認・調査 Cラインよりも南東に1m部分に遺構確認用のトレンチを掘り下げた。そうしたところ、C 3区南西側で遺構の立ち上がりが見られ、別に焼土を検出した。

覆 土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したB盛土層。褐色土～黒褐色土からなる。覆土下層は、主に黒褐色土からなる。ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。

形 態 楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈したとみられるが、不明な壁が多かった。A盛土を掘り込んで構築しており、床はA盛土中～Ⅲ層中にあたる。TH-42に切られる。

付属遺構 HF1：床住居の中央よりも南西側に寄る。明瞭に被熱しており、焼土の厚さは10cmほど。上面に僅かに灰層も残されていた。

HP：5基をHPとした。主柱穴と呼べるものは、HP3・4があるが、HP4は位置から別の目的を持って掘り込まれたものとみられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類619点(磨滅小片)、Ⅲ群a類649点(磨滅小片、上層a 2式～サイベ沢Ⅶ式)、Ⅳ群a類128点、剥片石器41点、フレイク300点、礫石器15点、有意の礫・礫73点、魚骨6点が出土。

時 期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前半である。

(福井)

TH-47 (図IV-202～204、表IV-1、図版60・61・138～140・150)

位 置 F～H 6・7

立 地 標高25.3m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)？

規 模 (-)×(-)×0.5m

確認・調査 2009年度にメイントレンチで検出し、TH-9とした。しかし、その年度はI～Oラインについて調査を行ったため、翌年度に持ち越した。2010年度、改めて調査を行ったところ、当初TH-9とした落ち込みは、複数の住居からなることが分かった。そこで、複数のトレンチを入れ、改めて範囲を確認した後、掘り下げた。

覆 土 全体にローム層を由来とする、にぶい黄褐色を呈した覆土からなる。覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積したC盛土層。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積。ロームブロックを含むのが特徴で、主ににぶい黄褐色土からなる。

形 態 壁が不明瞭であったが、恐らく楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を6本掘り込む。C盛土層中に掘り込んだため、埋没後に下部層が締まり、床面が不安定になったとみられる。TH-9・37より新しい。

付属遺構 HP：8基をHPとした。HP2・5・TH-9HP13・20・22が、規模から主柱穴とみられ

る。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類557点（下層d2式1個体、破片は磨減小片）、Ⅲ群a類438点（上層a2式2個体、破片は磨減小片で上層a～b式）、Ⅲ群b類2点、剥片石器44点、フレイク216点、礫石器20点、石製品2点、有意の礫・礫60点、魚骨2点、獣骨17点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉である。 (福井)

TH-48 (図Ⅳ-205・206、表Ⅳ-1、図版125・150・151)

位置 C・D4・5 **立地** 標高24.2m付近

平面形 隅丸長方形 (Ⅲ類) **規模** (4.4)×(3.3)×0.3m

確認・調査 竈跡跡の壁を精査したところ、確認した。直交するように北西側にトレンチを入れ、さらに竈跡跡に並行するトレンチによってTH-32との重複関係を確認した。

覆土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。褐色土からなる部分が多い。覆土下層は、におい黄褐色土～黒褐色土。ロームブロックをやや多く含む。なお、南西壁外側に堆積しているのはA盛土とみられるが、その下位に黒色土の堆積はみられず、直接Ⅳ層上に堆積していた。

形態 楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。住居のほぼ中央に地床炉HF1があり、中軸中央より南東側には、中央ピットHP2があった。TH-7より古く、TH-32を切る。

付属遺構 HF1：住居のほぼ中央で、焼土を検出した。焼土は2か所で、厚さ数cmあった。その上位には、焼け骨を含む灰層が堆積していた。

HP：24基をHPとした。HP1・14・18・24は、規模から主柱穴とみられる。HP2は浅いもので、中央ピットに関連するものと考えられる。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類19点、Ⅲ群a類752点（サイベ沢Ⅶ式（古）2個体、サイベ沢Ⅶ式2個体、見晴町式1個体、上層式1個体、破片も上層c～サイベ沢Ⅶ式）、Ⅳ群a類77点、焼成粘土塊1点、剥片石器18点、フレイク99点、礫石器4点、有意の礫・礫9点、魚骨1点、鳥骨1点、獣骨2点が出土。床からⅢ群a類34点（サイベ沢Ⅶ式（古）1個体、サイベ沢Ⅶ式（新）1個体）が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉～中葉である。ただし、年代測定したところ、炉跡HF1出土炭化材で3,860±30 y r B.P. (IAAA-103310)の測定値が得られた。重複した後期前葉の住居跡TH-7の影響が及んでいたものと考えられる。 (福井)

TH-49 (図Ⅳ-207・208、表Ⅳ-1、図版143・152・153)

位置 E・F7・8 **立地** 標高24.0m付近

平面形 隅丸方形 (Ⅱ類) **規模** (4.9)×(4.6)×0.5m

確認・調査 TH-12・35を調査する過程で、トレンチ断面で確認した。トレンチを延長、追加し、範囲を確認して掘り下げた。

覆土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積した盛土層。ローム層由来土を主体としており、C盛土とみられる。一部断面A-Bの土層8のような黒褐色土も堆積する。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積。ロームブロックを多く含むのが特徴で、褐色土からなる。

形態 全週にベンチ状構造を持っており、床に主柱穴を4本掘り込む。ベンチ状構造は、掘り残すことで形成されている。壁は一部でロームを貼ることで形成している。TH-8 (旧)・TP-76より新しく、TH-8 (新)・35・39・TP-48に切られる。

付属遺構 HP:13基をHPとした。HP7・TH-8(新)HP24・TH-39HP3・SP-335が、位置と規模から主柱穴とみられる。HP2・9には据え付け台石が設置されていた。またHP5付近は浅く窪んでおり、中央ピットがあったものとみられる。

内縁杭列:図示されていないが、ベンチ状構造の段差に沿って、棒状のものを差し込んでいた杭穴が列となっており、ほぼ一巡していた。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類138点(磨減小片)、Ⅲ群a類70点(磨減小片だが、上層a2式~b式)、Ⅳ群a類10点、焼成粘土塊1点、剥片石器19点、フレイク49点、礫石器6点、有意の礫・礫12点、魚骨5点、獣骨1点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期初頭~中期前葉である。(福井)

TH-54 (図IV-209・210、表IV-1、図版152・154~156)

位置 I~K2・3 **立地** 標高24.8m付近

平面形 楕円形(I類) **規模** (-)×5.7/5.4×1.0m

確認・調査 2009年度北東側のごく一部を検出し、調査した。2011年度、その延長を検出し、範囲が確認できた段階でベルトを残しながら、掘り下げた。

覆土 覆土上層は、廃絶住居の窪みに堆積したAないしB盛土層が堆積していた。覆土下層は、屋根土を含むとみられる三角状堆積。にぶい黄褐色土~明黄褐色土からなり、ロームブロックを多量に含むのが特徴。

形態 楕円形を呈し、床に主柱穴を4本掘り込む。中央には、やや規模の小さな柱穴がある。

付属遺構 HP:4基をHPとした。HP1・2・3は、規模から主柱穴とみられる。HP4が床中央から検出されたが、規模は中程度であった。

遺物出土状況 覆土上層からⅠ群b類7点、Ⅱ群b類4,377点(下層d1式4個体、d2式2個体、破片は小片でd1式主体)、Ⅲ群a類1545点(上層a1式2個体、b式4個体、サイベ沢Ⅶ式(新)1個体、破片もa式~サイベ沢Ⅶ式まで)、Ⅳ群a類20点、擦り切り土製品1点、剥片石器250点、フレイク608点、礫石器11点、石製品4点、有意の礫・礫18点、魚骨8点、鳥骨3点、獣骨285点が出土。覆土中層からⅠ群a類107点(1個体)、Ⅰ群b類5点、Ⅱ群b類5,180点(下層d1式12個体、破片はd1式主体)、Ⅲ群a類147点(サイベ沢Ⅶ式(古)1個体)、Ⅳ群a類1点、円板状土製品2点、剥片石器198点、フレイク649点、礫石器23点、石製品2点、有意の礫・礫27点、魚骨26点、鳥骨2点、獣骨83点が出土。覆土下層からはⅠ群b類32点、Ⅱ群b類10,366点(下層d1式29個体、d2式3個体、破片は小片でd1式主体)、Ⅲ群a類2点、円板状石製品1点、焼成粘土塊1点、剥片石器142点、フレイク416点、礫石器17点、石製品5点、有意の礫・礫18点、骨角器3点、魚骨19点、鳥骨9点、獣骨194点が出土。床面からフレイク1点、礫石器4点、有意の礫・礫1点が出土。なお、当住居覆土ベルト部分から大型岩偶(石器掲載番号1325)が出土しているが、調査時は気付かず礫として取り上げてしまった。凝灰岩の板状礫は調査区全域で出土しており、なおかつ全体が泥に覆われて線刻の大半が確認できない状態だったからである。しかし、取り上げ後に、改めて検分した結果、線刻が確認されたものである。出土層位は不明ではあるが、ほかの遺物の出土状況から、覆土中層であったと推定される。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代前期末葉である。なお、年代測定したところ、覆土下層出土炭化種実では4,720±30y r B.P.(IAAA-112600)の測定値が得られた。(影浦・福井)

TH-55 (図Ⅳ-211、表Ⅳ-1、図版155)

位置 C 7・8

立地 標高239m付近

平面形 楕円形(Ⅲ類)

規模 (-)×(-)×(0.3)m

確認・調査 Cラインより1m南東側に設定したトレンチ断面で確認し、掘り下げた。

覆土 覆土上層は、住居廃絶後の窪みに堆積したC盛土層。覆土下層は、屋根土を含むとみられる堆積である。ロームブロックをやや多く含んだ黄褐色～にぶい黄褐色土からなる。

形態 恐らく楕円形～隅丸長方形の中間形態を呈するとみられるが、一部しか調査できず、大半は調査区外へ広がっていた。

付属遺構 HP：2基検出した。

遺物出土状況 覆土からⅢ群a類2点、Ⅳ群a類4点、礫石器1点、有意の礫・礫4点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代中期前葉～中葉である。(福井)

TH-61 (図Ⅳ-212・213、表Ⅳ-1、図版156・157)

位置 C・D 4～6

立地 標高248m付近

平面形 楕円形(Ⅳ類)

規模 (4.7)×(-)×(0.2)m

確認・調査 グリッドを面掘り下げていったところ、不明瞭な落ち込みとⅣ群a類土器の集中が確認された。住居か盛土層か判断がつきにくかったが、ベルトを残して掘り下げていった。最終的に石囲炉が検出されたことによって、竪穴住居であることが分かった。柱穴等は確認できていない。

覆土 黒褐色～暗褐色の覆土からなる。遺物は比較的中位に多かった。

形態 中央に石囲炉をもち、楕円形の浅い掘り込みからなる。

付属遺構 HF1：住居推定範囲中央で焼土を円形に礫で囲繞した石囲炉を確認している。焼土も厚く形成されていた。

遺物出土状況 覆土からⅡ群b類11点、Ⅲ群a類58点、Ⅲ群b類129点、Ⅳ群a類911点、焼成粘土塊2点、剥片石器27点、フレイク29点、石製品1点、有意の礫・礫9点が出土。

時期 出土遺物と住居形態から縄文時代後期前葉である。(影浦)

TH-112 (図Ⅳ-110～115、表Ⅳ-1、図版79)

位置 K・L 9・10

立地 標高242m付近

平面形 隅丸方形(Ⅱ類)

規模 (5.1)×(4.7)×0.8m

確認・調査 図面を整理する過程で、TH-18(新)の覆土中に、もう1軒住居が存在した可能性を見出した。

覆土 覆土上層は、主にローム層由来土からなっており、C盛土とみられる。覆土下層は、屋根土を含むとみられる。ロームブロックをやや多く含むのが特徴で、ほとんどが褐色土からなる。

形態 全辺にベンチ状構造を持っていたとみられる。床は、貼床して形成した部分が確認できる。柱穴は、不詳。

時期 縄文時代前期期末葉～中期前葉とみられる。

(福井)

4 竪穴状遺構ほか(図Ⅳ-214～218)

調査の過程で、一時的に竪穴住居跡としたが、その後、住居跡と確定できなかつたものや、単なる窪みであったものなどについて、ここでまとめて記載する。著しく遺構が重複していたこと、盛土遺

構の土層堆積が複雑であったこと、盛土遺構下位の自然堆積層上部に層界不明瞭な人為攪乱がみられたことなどから、竪穴住居跡については欠番が非常に多い。

(TH-1)

位置 E10・11

確認・調査 顕著な黒色土の落ち込みをTH-1として調査したが、結果道路跡の一部と確認された。

(TH-36)

位置 E7・8

確認・調査 精査後、TH-49として調査した。

(TH-38)

位置 C・D6・7

確認・調査 精査後、TH-34新として調査した。

(TH-41)

位置 D・E3

確認・調査 D3区のメインベルト北東壁で検出した。盛土上部に窪みを埋める堆積がみられ、その右側ではA盛土を掘り込んだ立ち上がり、その上位にあたる盛土層が不明瞭ながら断絶していたために、盛土上位から掘り込まれた竪穴住居と考え、TH-41と命名した。しかし、精査したところ、フラスコ状土坑が盛土層上部から掘り込まれ、後に覆土が締まることによって空間が開き、盛土層が沈み込んだものと判断し、TP-136に振り直した。

(TH-43)

位置 G3・4

確認・調査 A盛土の土層堆積を覆土と誤認していたため、欠番とした。

(TH-46)

位置 F・G7・8

確認・調査 トレンチで確認した立ち上がりをTH-46としたが、精査した結果TH-8（新）に統合された。

(TH-50)

位置 H・I3

確認・調査 A盛土・P盛土の土層堆積を覆土と誤認していたため、欠番とした。

(TH-51) (図IV-214~216、表IV-1)

位置 G・H3・4 **立地** 標高24.7m付近

平面形 不定形（不明） **規模** (-)×(-)×0.3m

確認・調査 調査区境界での土層断面を観察するためのトレンチ断面で確認した。盛土遺構より下位に存在するため、盛土遺構調査後、直交するようにトレンチを入れたところ、立ち上がりが確認された。

覆土 B盛土層直下にごく薄い黒色土を挟み、ローム粒・炭化物を僅かに含む黒褐色土が堆積している。ただし、下位層である漸移層やローム層とは、層界が漸移的な部分がほとんど。また、漸移層はほかの地点より厚みがある。

形態 竪穴状ではあるものの、不定形で、明瞭な柱穴もない。壁の立ち上がりは比較的明瞭であるが、床は下位層と漸移的な部分も目立ち、安定的でない。遺構として取り上げたが、斜面に掛かり始める地点でもあり、自然の堆積作用による可能性が高い。重複する遺構にTH-56・TP-130~133がある。TH-56・TP-133よりは古いとみられる。

付属遺構 HP：3基をHPとしたが、断面にみられた上位からの柱穴状の掘り込みからすると、当遺構に伴うかは不明。

遺物出土状況 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代早期とみられる。 (福井)

(TH-52)

位置 G・H4・5

確認・調査 III層に掘り込まれた土坑などを認定違いのため、欠番とした。

(TH-53)

位置 C7

確認・調査 削平されたV層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。当初TH-53として認識していたので、上半はTH-53として掘り下げてしまったが、結果フラスコ土坑であったため、TP-80に振り直した。

(TH-56) (図IV-214~216、表IV-1)

位置 G・H3・4 **立地** 標高24.7m付近

平面形 不定形(不明) **規模** (-)×(-)×0.3m

確認・調査 調査区境界での土層断面を観察するためのトレンチ断面で確認した。盛土遺構より下位に存在するため、盛土遺構調査後、直行するようにトレンチを入れたところ、立ち上がりが確認された。

覆土 B盛土層直下にごく薄い黒色土を挟み、ローム粒・炭化物を僅かに含む黒褐色土が堆積している。ただし、下位層である漸移層やローム層とは、層界が漸移的な部分がほとんど。また、漸移層はほかの地点より厚みがある。

形態 竪穴状ではあるものの、不定形で、明瞭な柱穴もない。壁の立ち上がりは比較的明瞭であるが、床は下位層と漸移的な部分も目立ち、安定的でない。遺構として取り上げたが、斜面に掛かり始める地点でもあり、自然の堆積作用による可能性が高い。重複する遺構にTH-51・TP-133がある。TH-51より新しく、TP-133よりは古いとみられる。

付属遺構 HP：2基をHPとしたが、断面にみられた上位からの柱穴状の掘り込みからすると、当遺構に伴うかは不明。

遺物出土状況 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代早期とみられる。 (福井)

(TH-57・58・63)

位置 F~I1~3

確認・調査 2011年調査時にB盛土南西部の緩斜面で落ち込みが認められた。調査時にはこれを住居と考え、調査を行った。調査した結果、「床面」「壁面」が軟らかく、安定的でないことから「大形廃棄土坑」と認識した時期もあったが、精査した結果、盛土層の一部であると考えに至った。詳しくは、B盛土層に記載してある。

(TH-60・65・101~111)

位置 B・C10~13

確認・調査 C盛土下部で平面観察の後、遺構プランとみられる層の変化で遺構名を付したが、遺構である確証がないため、保留とした。

(TH-113) (図IV-217・218、表IV-1)

位置 E・F5・6 **立地** 標高24.7m付近

平面形 楕円形 (IV類) ? 規模 (6.5) × (5.1) × 0.6m

確認・調査 2009年度調査時、黒色土の窪みを検出し、TH-12として調査を行った。しかし、中途で下位に存在する住居の窪みと判断し、その下位に存在した住居に名前を振り替えた。

覆土 オリブ黒色～黒褐色土からなる。土層4～6は土器を主体とする遺物が多く含まれていた。D盛土とみられる。

形態 全体に不明瞭な立ち上がりを持っており、部分によってその傾斜も変異する。

時期 縄文時代後期前葉とみられる。 (福井)

5 土坑 (図IV-219～265、表IV-2)

TP-1 (図IV-220、表IV-2、図版162)

位置 G 4・5 立地 標高25.6m付近のB盛土上

平面形 円形 (フラスコ状土坑) 規模 2.66/1.50 × 2.09/1.40 × 0.82m

特徴 初期に設定したメイントレンチ断面において確認した。B盛土上位から掘り込まれている。上半は皿状に大きく開く。下半はオーバーハングしてフラスコ状になる部分と、鍋底状の部分からなる。盛土層中に掘り込まれたため、壁面はいびつになっている。土圧によって、層厚が収縮したためと推定される。底部は平坦で、Ⅲ層黒色土上面まで達していない。覆土にはロームブロックや炭化材を含み、比較的均質のため埋め戻し土と考えられる。ただし、ロームの純粋な人為堆積層も多く含むB盛土を掘り込んでいるにもかかわらず、ロームブロックの含有は少ない。土坑墓の可能性もある。当土坑出土として取り上げた土器には、円筒土器下層c式～サイベ沢Ⅵ式まで含まれる。

時期 出土遺物と構築面から縄文時代中期中葉と考えられる。 (影浦)

TP-2 (図IV-221、表IV-2、図版162)

位置 E・F・9・10 立地 標高23.6m付近の道路跡隣接地

平面形 円形 (フラスコ状土坑) 規模 (1.64)/1.82 × (1.54)/1.78 × (0.23)m

特徴 初期に設定したメイントレンチ掘削時に確認した。上半は、中期に道路跡等の掘削で削平され、オーバーハングした部分が残る。底部はほぼ平坦。Ⅲ層に覆われる。覆土はロームブロックを多く含む褐色土が山状に堆積し、その上位にロームブロックを少量含むにぶい黄褐色土が堆積している。崩落土の堆積はみられない。遺物は、Ⅱ群b類円筒土器下層c～d 1式の磨滅破片が含まれた。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-3 (図IV-222、表IV-2、図版162)

位置 J・K 11 立地 標高23.0m付近の道路跡隣接地

平面形 長楕円形 規模 (1.8)/(1.5) × 1.20/0.96 × 0.31m

特徴 Ⅲ-2層中で暗黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土は下半でロームブロックを多く含む埋め戻し土である。坑底は平坦で、壁はやや外側に広がる。土坑墓の可能性もある。TP-19との関係ははっきりしない。遺物は、Ⅳ群a類涌元式の小片が含まれた。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-4 (図IV-222、表IV-2、図版162)

位置 K 11・12 立地 標高23.0m付近の道路跡隣接地

平面形 不整楕円形 **規模** 2.85/2.72×1.12/0.90×(0.22)m

特徴 削平されたV層上面で暗黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土は均質で埋め戻し土とみられる。坑底は平坦で、壁はやや外側に広がる。規模から合葬墓の可能性もある。TP-5より古い。TP-19との関係ははっきりしない。遺物は、IV群A類が含まれた。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-5 (図IV-222、表IV-2、図版162)

位置 K11 **立地** 標高230m付近の道路跡隣接地

平面形 楕円形 **規模** (1.40)/(1.20)×1.01/0.68×(0.32)m

特徴 削平されたV層上面で暗黄褐色土の落ち込みとして確認した。3点の扁平な礫が重なって立った状態で埋設されていた。礫は個性的で、礫石器によく使用される安山岩の扁平楕円礫、扁平打製石器に用いられる板状節理した安山岩、タマネギ状風化した褐色の安山岩からなる。V層を掘り込んでいる。覆土は均質で埋め戻し土とみられる。TP-4より古い。遺物は、IV群A類が含まれた。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-6 (図IV-221、表IV-2、図版163)

位置 I・J8・9 **立地** 標高235m付近のTH-24床面

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.54)/1.86×(1.42)/1.84×(0.59)m

特徴 TH-24床面で円形の落ち込みとして確認した。上半は、前期末葉にTH-24の構築で削平され、オーバーハングした部分が残る。底部はほぼ平坦。上面はロームで貼床をすることで、蓋をされている。覆土はロームブロックを多く含み、埋め戻し土とみられる。土坑墓の可能性はある。ただし、一部崩落土と、ローム粒を僅かにしか含まない土層があることから、雨水や腐食などの理由で覆土の密度が締まったものとみられる。坑底に小土坑があり、土坑覆土と同様の土層で埋積されていた。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代前期後葉～末葉と考えられる。(福井)

TP-7 (図IV-223、表IV-2、図版163)

位置 M11 **立地** 標高230m付近のTH-19床面

平面形 楕円形 **規模** 1.78/1.49×1.08/0.98×0.25m

特徴 TH-19床面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は均質でロームブロックを含む埋め戻し土。長軸両端に礫があり、1点は花崗岩製台石で、もう1点は安山岩製台石。花崗岩製台石は、一段低く掘り込んだ部分に埋設されていた。覆土と形態からは土坑墓の可能性はあるが、もともとは住居の附属施設であったかもしれない。遺物は、II群b類が含まれた。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-8 (図IV-223、表IV-2、図版163)

位置 H10 **立地** 標高234m付近の道路跡隣接地

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** 2.19/1.50×1.46/1.58×1.62m

特徴 削平されたV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。上半は皿状に大きく開く。下半は末広がりになっている。壁は一部崩落でいびつになっている。土層1、2は落ち込み上位に堆

積した土層で、IV群 a 類壺型土器口縁～頸部が正立状態で出土した。覆土中位の土層 8 からは底部部分が出土。覆土はロームブロックを多く含む、埋め戻し土とみられる。土坑墓の可能性はある。ただし、下位に一部崩落土と、しまりの弱い土層があることから、掘削後暫くは開口状態の時期があったとみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-9 (図IV-224、表IV-2、図版164)

位置 M10・11 **立地** 標高230m付近のTH-19床面

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** 0.80/1.10×0.64/1.12×0.80m

特徴 TH-19床面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。上半は皿状に開き、下半はオーバーハンクしてフラスコ状になる。土坑上部に貼土はされておらず、住居構築以降に掘り込まれたものとみられる。覆土はロームブロックを多量に含む。下部のマトリックスは暗褐色土であるが、上部のマトリックスは黒褐色土となっている。ロームブロックは、大小あり、角も取れていないので、掘り込み後速やかに埋め戻されたものとみられる。土坑墓の可能性はある。遺物は、II群 b 類が含まれた。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-10 (図IV-224、表IV-2、図版164)

位置 N7 **立地** 標高236m付近の平地

平面形 楕円形 **規模** (1.00)/0.75×(0.61)/0.48×(0.14)m

特徴 IV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。小型楕円形の土坑で、覆土は僅かにローム粒を含む程度。V層を掘り込んでいる。

時 期 不明であるが、検出状況と層位から、縄文時代前期後葉とみられる。(福井)

TP-11 (図IV-225、表IV-2、図版164)

位置 N・O9 **立地** 標高239m付近の平地

平面形 円形 **規模** (0.54)/0.48×(0.50)/0.42×(0.70)m

特徴 初期に設定したメイントレンチ掘削時に確認した。上位にやや大きな土坑(土層1、2)があったが、盛土層と隣接するTH-2覆土と平面的に区別できずに掘り下げてしまった。TP-11はその土坑に切られている。また、TP-12とは切り合い関係があるように現地では観察した。

時 期 検出状況から縄文時代中期前葉以降と考えられる。(福井)

TP-12 (図IV-225、表IV-2、図版164)

位置 N・O9 **立地** 標高239m付近の平地

平面形 円形 **規模** (0.70)/0.50×(0.58)/0.45×(0.98)m

特徴 初期に設定したメイントレンチ掘削時に確認した。上位にやや大きな土坑(土層1・2)があったが、盛土層と隣接するTH-2覆土と平面的に区別できずに掘り下げてしまった。TP-12はその土坑に切られている。また、TP-11とは切り合い関係があるように現地では観察した。TP-12に関しては、TTP-1を切って構築していた。覆土下位にはロームブロックを多く含むため、埋め戻し土とみられる。

時 期 検出状況から縄文時代中期前葉以降と考えられる。(福井)

TP-13 (図IV-225、表IV-2、図版164)

位置	O 3	立地	標高232mの平坦地
平面形	円形	規模	(0.50)/(0.50)×0.98/0.58×0.58m
特徴	調査区南端、南西側に設けたトレンチにより検出した。全体の半分以上が調査区外にあるため、不明であるが、検出できた部分では半円形を呈する。坑底はやや丸みを帯び、壁は急である。土層は3層に分層した。上位の1層は、TH-14の掘上土とみられる堆積。2、3層はローム粒が若干混じる黒褐色土である。		
時期	土層の状況から、円筒下層 d 1 式以前の可能性がある。		(立田)

TP-14 (図IV-225、表IV-2)

位置	L 3・4	立地	標高24.1mの平坦地・TH-14覆土中
平面形	楕円形	規模	1.76/1.19×(0.74)/(0.66)×(0.52)m
特徴	TH-14の覆土調査中に検出した。土器のまとまりを残しながら覆土を掘り下げ、概ね半円形を呈する壁をほぼ全周で確認したが、北側のみ輪郭を超えて黒褐色土が広がっていた。ステップ状の構造物を想定し掘り進めたが、住居とは角度の異なる急に立ちあがる壁を確認し、坑底付近に炭化材が出土した。土層断面7層にも不自然な層位の高まりがあることから、住居とは別の遺構と考えTP-14とした。この検出状況から、TH-14より新しいものとみられる。確認できた部分では隅丸方形を呈し、壁際は周溝が巡っている。床面の直上からは炭化木片が数条出土している。遺物は覆土から、Ⅱ群b類土器、フレイクが出土した。		
時期	検出状況から、前期後半以降である。		(立田)

TP-15 (図IV-226、表IV-2、図版165)

位置	K 3	立地	標高24.5m付近の平坦地
平面形	楕円形	規模	(3.40)/2.52×(3.60)/1.84×0.70m
特徴	K 4 区付近のm 2 層を調査中、壁面に倒立したⅢ群a類土器を検出した。壁に沿ってトレンチを設定し、Ⅲ層まで掘り下げた。結果、土器は単体の埋設土器(個体番号190)で、下位にはTH-11の掘上土を掘り込み別の遺構を確認した。		

周囲を掘り込み面であるTH-11の掘上土まで掘り下げると、楕円形を呈し、調査区外に伸びる平面を確認した。平面の中心からTH-11側の北東に向けてトレンチを追加して坑底まで掘り下げると、先行する壁際のトレンチと同様な坑底、壁を確認したので土坑とした。土層断面の記録を作成した後、覆土を掘り下げた。

土層は20層に分層している。1～3層は倒立して出土した掲載番号860、サイベ沢Ⅷ式の時期の堆積とみられる。5～8層は他遺構の掘上土かとみられる堆積で、本遺構のくぼみを埋めるように堆積している。9層は流れ込んだ炭化物層で多くの遺物が含まれる層で、フレイク・チップ集中域FC-18もこの面で検出されている。4層、9層で土器のまとまり5か所を検出した。4層で掲載番号51、個体番号174を、9層で掲載番号46、個体番号189、197を得ている。13層は埋戻しもしくは屋根土等の人為堆積土であるとみられる。18層は三角堆積、14、15、19層は掘り込み面であるTH-11の掘上土とみられる堆積である。

時期 出土した遺物に混入があり不明であるが、個体土器はサイベ沢Ⅷ式が最上位に、人為堆積土の上に円筒下層 d 1 式がまとまる出土状況である。このことを重視し、円筒下層 d 1 式期もしくは

はその直前の時期のものと想定される。

(立田)

TP-16 (図IV-227、表IV-2、図版165)

位置 L 10 **立地** 標高23.6m付近のTH-18 a床面
平面形 楕円形 **規模** (1.60)/1.48×(1.10)/0.92×(0.18)m
特徴 TH-18(新)覆土中で隅丸方形の落ち込みとして確認した。覆土はロームブロックをやや多く含み、均質であるので、埋め戻し土とみられる。土坑墓の可能性はある。坑底には拳大の礫集中がみられた。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉と考えられる。(福井)

TP-17 (図IV-227、表IV-2、図版165)

位置 K 10 **立地** 標高23.6m付近のTH-18 a床面
平面形 隅丸方形(フラスコ状土坑) **規模** (1.12)/1.28×(0.96)/(0.99)×(0.32)m
特徴 TH-18(新)床面で隅丸方形の落ち込みとして確認した。上半は、前期後葉にTH-18(新)の構築で削平され、オーバーハングした部分が残る。底部はほぼ平坦。覆土はロームブロックをやや多く含み、均質であるので、埋め戻し土とみられる。土坑墓の可能性はある。ただし、入れ子になっており、ロームブロックをやや多く含む土層1が別の土坑構築に伴うものとみられる。あるいは、TH-18(新)ベンチ状構造構築時の造作かもしれない。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-18 (図IV-228・229、表IV-2、図版165～169)

位置 J・K 7・8 **立地** 標高24.9m付近のB盛土上
平面形 楕円形 **規模** 3.82/3.41×3.10/2.70×0.62m
特徴 小竪穴状の8体合葬土坑墓。B盛土を掘り下げていたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭な楕円形を呈していたため、南側を半載した。その結果、ノリ状の人骨を確認した。土坑は、B盛土を掘り込み、坑底はⅢ層直上となっていた。坑底は平坦で、壁は外側に開く。覆土上部は、盛土層によって埋積されている。覆土下部は、ロームブロックを多く含む暗褐色土で、均質であり、埋め戻し土とみられる。

坑底で確認された人骨は、歯の確認された位置から8体と推定された。骨№4・5・10・13・14は、解剖学的位置を保っていると思われるが、骨№16・17では、四肢骨や頭骨がまとめられているようにみられた。なかでも骨№2・5・7は、右下側臥膝屈(屈股)葬とみられる。各取り上げ№の内容は以下の通り。骨№1：頭骨の一部分で、歯が確認された。骨№2・3・4・9：四肢長骨などの一部分。骨№5：左右寛骨および大腿骨、骨№6：頭骨の一部分で、歯が確認された。骨№7：頭骨と左上腕骨・橈骨、骨№8：頭骨、骨№10～14：四肢長骨、骨№16：頭骨2体分と四肢長骨、骨№15・17：頭骨2体分と四肢長骨、椎骨、肋骨。

人骨以外には、床面から石鏃、石斧、たき石、有孔礫、礫、鯨骨製品?が出土。なお、骨№16の直下3mmほどの間隙を開けて円筒土器上層a式の個体土器が横位置で潰れた状態で出土。ただし、これは埋葬時のものではなく、土坑を掘り込むことによって露出した盛土層中の遺物とみられる。また、坑底および土坑外近接地で小柱穴を検出している。PP2は土坑中央、PP4は土坑長軸の一端に位置しており、上屋があった可能性も考えられる。

時 期 検出状況から縄文時代中期前葉と考えられる。なお、年代測定したところ、人骨横から採取した炭化材では $4,570 \pm 30$ yr B.P. (IAAA-92324)、覆土上部の炭化材では $4,440 \pm 30$ yr B.P. (IAAA-92323)の測定値が得られた。(福井)

TP-19 (図IV-222、表IV-2、図版170)

位置 K11 **立地** 標高23.0m付近の道路跡隣接地
平面形 楕円形 **規模** (1.56) / (1.23) × (1.02) / (0.78) × (0.22)m
特徴 削平されたV層上面で暗黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土は均質で埋め戻し土とみられる。坑底は平坦で、壁はやや外側に広がる。土坑墓の可能性もある。TP-3・4・5との関係ははっきりしない。
時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-21 (図IV-227、表IV-2、図版170)

位置 I7 **立地** 標高24.3m付近の平地
平面形 楕円形(フラスコ状土坑) **規模** (0.74) / 0.86 × (0.70) / 0.71 × (0.46)m
特徴 V層中で確認した。I7区周辺は、上位にB盛土が堆積しており、それを掘り下げたのち、遺構確認を行った。多数の落ち込みがある中で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はロームブロックを含む埋め戻しである。坑底は平坦。覆土中位からは粘板岩の扁平な楕円礫が出土した。土坑墓の可能性はある。
時 期 検出状況から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-22 (図IV-227、表IV-2、図版170)

位置 I7 **立地** 標高24.3m付近の平地
平面形 不整形 **規模** (0.76) / 0.62 × (0.63) / 0.54 × (0.18)m
特徴 V層中で確認した。I7区周辺は、上位にB盛土が堆積しており、それを掘り下げたのち、遺構確認を行った。多数の落ち込みがある中で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はロームブロックを含む埋め戻しである。坑底は平坦。土坑墓の可能性はある。
時 期 検出状況から縄文時代前期末葉～中期初頭と考えられる。(福井)

TP-23 (図IV-230、表IV-2、図版170)

位置 I・J7 **立地** 標高25.2m付近のB盛土上
平面形 楕円形 **規模** (1.85) / 1.54 × (1.54) / 1.19 × (1.04)m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。土坑は、B盛土を掘り込み、坑底はV層中となっていた。坑底は段差があり、覆土下部には暗褐色土層が複数堆積しているので、数度掘り返された可能性がある。覆土上部は、盛土層によって粗積されている。覆土下部は、暗褐色土層以外は、ロームブロックを多く含む褐色土で、均質であり、埋め戻し土とみられる。土坑底には円筒土器下層d1式の、口縁側と底部が欠く胴部が潰れた状態で出土。
時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-24 (図IV-230、表IV-2、図版170)

- 位置** K 8・9 **立地** 標高242m付近の平地
平面形 不整三角形 **規模** 1.80/1.28×(1.22)/(1.04)×0.32m
特徴 Ⅲ層上面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上位はロームブロック・ローム粒を含む埋め戻し土である。覆土中位にフレイク集中が2か所確認された。覆土下位は黒褐色土で、ローム粒を含む。掘り込みが不明瞭であったので、窪みにフレイク集中が形成され、その上部を盛土層が覆ったものとも考えられる。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-25 (図IV-231、表IV-2、図版171)

- 位置** J 5 **立地** 標高248mのTH-11覆土
平面形 楕円形 **規模** 1.24/1.00×(1.10)/0.88×0.28
特徴 TH-11の調査中に確認した。5ラインに設定したベルトのJ 5区において、壁面を精査していたところ、斜位に埋設された土器片の集落と伴う土坑の輪郭を検出した。精査するとm 2(3)～(5)層中から掘り込まれる土坑であることがわかった。ベルト部分を掘り込み面まで掘り下げて調査を行った。
 TH-11の調査によりトレンチ部分の坑底と、北東側の坑口部分を失っているが、平面形は概ね不整な楕円形を呈するとみられる。坑底は平坦で壁は急である。覆土中の土器は個体番号214である。図示されていないが、円筒土器下層d 2式とされ、掘り込み面の状況と整合する。
時期 覆土中に埋設される土器から、縄文時代前期後半円筒土器下層d 2式期のものである可能性が高い。 (立田)

TP-26 (図IV-231、表IV-2、図版88・89・100・171・172)

- 位置** J 8・9 **立地** 標高243m付近のB盛土上
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.80)/(1.75)×(1.04)/(0.98)×0.63m
特徴 TH-24覆土を掘り下げの中で、左下側強屈葬人骨を確認した。ベルトで土層を確認したところ、TH-24埋積後にB盛土上から掘り込まれたことが確認できた。覆土にはロームブロックを多く含み、比較的均質のため埋め戻し土と考えられる。ただし、盛土層中に掘り込まれていたため、人骨が確認されなければ、土坑としての認定は難しかったと言える。遺物は、Ⅱ群b類・球状耳飾(掲載番号1369)が含まれた。人骨は小振りであったため、現場段階では「めんこちゃん」の愛称を付けた。
時期 出土遺物と検出状況から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-28 (図IV-232、表IV-2、図版172)

- 位置** L・M 9 **立地** 標高239m付近のTH-4床～壁
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (0.93)/1.71×(0.82)/1.70×(1.21)m
特徴 TH-4の床面～壁にかけてで、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は黒褐色で、ローム粒の含量や微妙な色調で区分される層が、僅かに山状を呈しながらも、平行堆積している。覆土上位からは、アウトセイ右上腕骨と橈骨が検出された。TH-4よりは古いか、同時に存在したものとみられる。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-29 (図IV-232、表IV-2、図版172)

位置 J 5 立地 標高24.5mの平坦地
平面形 楕円形 規模 1.58/0.88×1.58/0.64×0.18m

特徴 TH-3とTH-10の間に設定したベルトで確認した。TH-11の調査にあたり、ベルトを残して周囲をⅢ層まで掘り下げていたところ、J5区において緩やかな落ち込みを確認した。平面形は楕円形、坑底は概ね平坦で、壁はすべての方向で極めて緩やかである。覆土は硬くしまったにぶい黄褐色土であり、少量の炭化物が混じる。

土層の観察からは周囲で最も古い遺構である。このことに加え、本遺構がTH-11の出入口かとみられる部分の延長線上に位置していること、覆土が硬くしまっていることから、TH-11に伴う遺構であった可能性がある。

時期 切り合いの状況と、TH-11に伴うとみられることから、縄文時代前期後半、円筒土器下層c式のものであるとみられる。(立田)

TP-30 (図IV-232、表IV-2、図版172・173)

位置 L・M10 立地 標高23.9m付近のTH-18床
平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (1.40)/1.61×(1.38)/1.52×(0.16)m

特徴 TH-18(新)の床面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は黒褐色基調であるが、ロームブロックを多く含み、比較的均質のため埋め戻し土と考えられる。土坑墓の可能性もある。覆土には円筒土器下層d2式?が1個体含まれていた。TH-18(新)よりは明らかに古く、削平後に貼床されていた。

時期 出土遺物から縄文時代前期後葉～末葉と考えられる。(福井)

TP-32 (図IV-233、表IV-2、図版173)

位置 K・L10・11 立地 標高23.3m付近の道路跡隣接地
平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (1.48)/2.06×(1.30)/2.12×(0.64)m

特徴 削平されたV層面で黒褐色～暗褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土下半部は山状に堆積するが、均質で埋め戻し土とみられる。上位には主にローム層からなる土層2、4があり、壁の崩落土とみられる。また、土層1、2、5は流入土の可能性もある。坑底は平坦。土坑墓の可能性もある。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-33 (図IV-233、表IV-2、図版173)

位置 K6 立地 標高24.4m付近の平坦地
平面形 楕円形 規模 1.15/1.12×1.08/0.92×0.32m

特徴 Ⅲ層上面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。南側を半截したところ仰臥膝屈(屈肢)衆人骨を確認した。覆土は、やや均質で、ロームブロックを多く含む埋め戻し土である。坑底は平坦。覆土中位からは人骨膝に挟むようにして角柱状礫が出土した。TP-26の後で人骨が見つかったため、現場段階では「もんこちゃん」の愛称を付けた。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-34 (図IV-234、表IV-2、図版174)

位置 I 10 立地 標高234m付近の道路跡隣接地
 平面形 楕円形 規模 1.55/1.04×1.42/0.85×0.38m
 特徴 削平されたV層上面で褐色～黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土下半部はやや均質で、ロームブロックを多く含み、埋め戻し土とみられる。上位には主にローム層からなる土層3があり、土層1は流入土の可能性ある。坑底は鍋底状。土坑墓の可能性ある。
 時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-35 (図IV-234、表IV-2、図版174)

位置 I 10 立地 標高234m付近の道路跡隣接地
 平面形 楕円形 規模 1.32/1.05×1.11/0.69×0.35m
 特徴 削平されたV層上面で褐色～にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。土層3～5はやや均質で、ロームブロックを多く含み、埋め戻し土とみられる。坑底は鍋底状。土坑墓の可能性ある。
 時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-38 (図IV-234、表IV-2、図版174)

位置 M 10 立地 標高239m付近の平地
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 1.26/1.22×(0.90)/(1.02)×(0.20)m
 特徴 III層上面で、にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はロームブロックをやや多く含み、比較的均質のため埋め戻し土と考えられる。土坑墓の可能性もある。TH-18(新)よりは新しいとみられる。
 時期 出土遺物から縄文時代中期初頭～前葉と考えられる。(福井)

TP-39 (図IV-235、表IV-2、図版174)

位置 K 8 立地 標高24.0m付近のTH-5壁際
 平面形 楕円形 規模 (0.60)/0.42×(0.32)/0.42×(0.32)m
 特徴 TH-5壁際で黒褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。住居調査後に確認したので、全貌は不明ながら、残存部はフラスコ状。覆土下半部はロームブロックを多く含む。上半部は、住居跡柱穴によくみられる覆土で、しまりがほとんどない自然堆積土。坑底は平坦。TH-5附属土坑の可能性もある。
 時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉以降と考えられる。(福井)

TP-40 (図IV-235、表IV-2、図版174)

位置 K 3・4 立地 標高22.7m付近のTH-11床面
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (0.82)/1.92×(0.64)/1.82×(1.60)m
 特徴 TH-11の床面で、褐色～黒褐色土の落ち込みとして確認した。掘り込み自体は、TH-11覆土上層から掘り込まれている。覆土のうち、土層1～3は黒褐色基調で、大きな土塊の集

合となっており、TH-11覆土由来とみられる。一方、土層4～6は堅密度が弱く、ロームブロックとクロボクブロックからなり、一気に埋め戻したものとみられる。土層1～3より上位は、覆土下部が締まることによってできた空隙に落ち込んだ土層と考えられ、埋め戻し土の存在からも、土坑墓の可能性はある。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-41 (図IV-235、表IV-2、図版175)

位 置 H・I 10・11 **立 地** 標高230m付近の道路跡隣接地

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規 模** 1.10/1.20×1.04/1.18×0.88m

特 徴 削平されたV層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土下半部は主にローム層からなり、炭化物を少量含むもので、均質で埋め戻し土とみられる。上位はロームブロックを含む暗褐色土が堆積している。坑底は平坦。土坑墓の可能性はある。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-42 (図IV-236、表IV-2、図版175)

位 置 L 9 **立 地** 標高239m付近の平地

平面形 楕円形 **規 模** (1.00)/(0.68)×(0.72)/0.46×(0.26)m

特 徴 TH-18(旧)壁際で黒褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。住居調査後に確認したので、全貌は不明ながら、残存部は鍋底。覆土上半はやや均質で、ローム粒を含む。下半部は主にロームブロックからなる。TH-18(旧)附属土坑の可能性もある。

時 期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉以降と考えられる。(福井)

TP-43 (図IV-236、表IV-2、図版175)

位 置 H 7 **立 地** 標高24.7m付近の平地

平面形 楕円形 **規 模** (1.30)/(1.20)×(0.88)/0.61×(0.26)m

特 徴 C盛土下部層中で確認した。坑底はV層にかろうじて達している。TH-27を切っていた。覆土はロームブロックを含む埋め戻しである。坑底は平坦。

時 期 出土遺物と検出状況から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-44 (図IV-236、表IV-2、図版175)

位 置 J 7 **立 地** 標高24.4m付近の平地

平面形 楕円形 **規 模** 1.02/0.90×0.72/0.64×0.16m

特 徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、均質で、ロームブロックを多く含む埋め戻し土である。ただし坑底は一部が深く、一部が浅くなっている。

時 期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-45 (図IV-237、表IV-2、図版175)

位 置 H 10 **立 地** 標高23.3m付近の道路跡隣接地

平面形 円形? **規 模** (0.70)/(0.64)×(0.20)/(0.16)×(0.12)m

特 徴 TH-28ベンチ状構造上で褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土はやや均質で、ロームブロックを多く含み、埋め戻し土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-46 (図IV-237、表IV-2、図版175・176)

位 置 F・G9・10 **立 地** 標高233m付近の道路跡隣接地

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規 模** (2.25)/2.10×(1.88)/2.02×(0.86)m

特 徴 削平されたV層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土は、土層8~10はロームブロックを含む褐色土であるが、土層3~7は主にローム層からなり、炭化物を少量含むもので、均質で埋め戻し土とみられる。上位の土層1、2はローム粒を少量含む暗褐色土が堆積している。坑底は平坦で、小土坑が掘り込まれていた。覆土から、鹿角片、海獣骨群集が検出された。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-47 (図IV-238、表IV-2、図版176)

位 置 C・D9・10 **立 地** 標高236m付近の道路跡

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規 模** (1.88)/(1.91)×(1.82)/1.74×(0.52)m

特 徴 削平されたV層上面で暗褐色土~に黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土は、主にロームからなり、炭化物を少量含むもので、均質で埋め戻し土とみられる。坑底は平坦。なお、調査時はTP-47とTP-134は、同じ「TP-47」として調査されたが、番号が重複していたので、分離した。TP-47の調査は2010年6月下旬から7月中旬に行っている。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-48 (図IV-238、表IV-2、図版176)

位 置 E7 **立 地** 標高234m付近のTH-35床面

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規 模** (1.26)/(1.38)×(1.00)/(1.10)×(0.32)m

特 徴 TH-35の床面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、土層5が山状に堆積し、ロームブロック・炭化材を含む。それを覆うように、土層3、4が堆積しており、こちらはローム粒を含み、やや均質。坑底は平坦。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-49 (図IV-239、表IV-2、図版176)

位 置 E12 **立 地** 標高239m付近のTH-13覆土上面

平面形 楕円形 **規 模** (0.46)/(0.43)×0.52/0.37×(0.20)m

特 徴 TH-13に隣接した地点のIV層で、黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は、中位に人為堆積焼土が堆積しており、その上下に黒色土が挟む。坑底は斜めに傾く。

時 期 周辺の遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-50 (図IV-239、表IV-2、図版177)

位 置 I6・7 **立 地** 標高24.2m付近の平坦地

平面形 不整形 **規模** (1.28)/1.40×(0.99)/1.10×(0.45)m

特徴 V層上面で、暗褐色土～黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土(土層1、4)、ロームブロックを多く含む暗褐色土(土層2、6)、しまりのない黒色土(土層3、7)からなり、おおむね平堆積する。平面形がアメーバ状の不整形であり、坑底も小土坑の集合ようになる。しかも、各小土坑が斜めになっている。

時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉～中期初頭と考えられる。(福井)

TP-51 (図IV-240、表IV-2、図版177)

位置 G6 **立地** 標高23.7m付近のTH-9・47床面

平面形 楕円形 **規模** 2.18/2.10×1.87/1.82×0.48m

特徴 TH-47覆土中で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土下半(土層9～14)はTH-47覆土が落ち込んだものとみられる。特にTH-47覆土から続く貝層(土層10)やほとんど純粋なロームからなる土層14(TH-47貼床)が、土坑内外を跨いで、土坑断面形に沿うように堆積しており、特徴的である。貝層には、クボガイ類、アワビが含まれたものと観察した。そして覆土上半(土層1～7)は、窪みを埋める様に堆積している。特に土層4～7は、ロームブロックとクロボクブロックが斑状に含まれており、短期間に埋没された状況を示すと考えられる。したがって、本土坑はTH-37床面から掘り込まれたものであり、住居改築時に空間を保持したままTH-47が貼床し、TH-47廃絶後覆土中位まで堆積した段階で落ち込んだものと推定される。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。なお、年代測定したところ、覆土出土の炭化種実(オニグルミ)では 4.540 ± 25 y r B.P. (PLD-25669)の測定値が得られた。(福井)

TP-53 (図IV-239、表IV-2、図版177)

位置 H9 **立地** 標高23.7m付近のTH-31床面

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.12)/1.76×(0.94)/1.72×(0.60)m

特徴 TH-31の床面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上面は、ローム層由来土で整地されていた。床面からは、姿勢は不明ながら、ヒト頭骨、四肢骨を検出した。覆土上半の土層2は、ローム粒を多く含む黒褐色土で、均質である。覆土下半は、ロームブロックを多く含む埋戻し土であるが、黒褐色土基調の部分(土層3、5)と暗褐色土基調の部分(土層6～9)がある。坑底は平坦。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-55 (図IV-241、表IV-2、図版178)

位置 C・D10 **立地** 標高23.8m付近の道路跡隣接地

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (0.68)/1.38×0.68/1.08×0.88m

特徴 削平されたV層上面で焼土及びにおい黄褐色土の落ち込みとして確認した。南東側は壛壕跡で削平されていた。V層を掘り込んでいる。覆土は、上部に人為堆積焼土がレンズ状に堆積していた。覆土上半部は、ロームブロックを多量に含む。下半部は、ロームブロックの量がやや少ない。いずれも均質で埋め戻し土とみられる。坑底は平坦。

時期 周辺の遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-56 (図IV-241、表IV-2、図版178)

位置 C・D11 **立地** 標高23.8m付近の道路跡隣接地
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.30)/2.05×(0.30)/1.62×(0.82)m
特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。南東側は塹壕跡で削平されていた。V層を掘り込んでいる。覆土下半部は、褐色土が山状に堆積している。最下層はロームブロックが多い。上半部の土層7、8は、ほぼローム層の純層からなる。土層1～5は、壁の崩落に伴うものかもしれない。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-58 (図IV-241、表IV-2、図版178)

位置 E9 **立地** 標高23.6m付近の道路跡隣接地
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (2.22)/2.12×(2.00)/1.80×0.70m
特徴 風倒木の落ち込み掘り下げていたところ、褐色土の落ち込みを確認した。V層を掘り込んでいる。掘りすぎたため、不明点が多いが、覆土はロームブロックを多く含み、埋め戻し土とみられる。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-59 (図IV-242、表IV-2、図版178)

位置 F5・6 **立地** 標高24.3m付近のTH-33上位
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.15)/1.58×(1.08)/1.26×(1.05)m
特徴 TH-33覆土上面でぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。TH-33・12覆土を掘り込み、坑底はV層を掘り込んでいる。覆土下半部は、ほとんどローム層由来土からなる褐色土が堆積しており、埋め戻し土とみられる。上半部は、ロームブロックを少量含むぶい黄褐色土が主に堆積している。これも、やや均質で埋め戻し土と考えられる。最上部の土層1～5、皿状に平行堆積しているため、覆土が締まることでできた窪みに流れ込み堆積したものとみられる。坑底は平坦。
時期 出土遺物と検出状況から縄文時代中期前葉と考えられる。(福井)

TP-60 (図IV-242、表IV-2)

位置 I6 **立地** 標高24.4m付近の平地地
平面形 楕円形(フラスコ状土坑) **規模** (0.68)/0.80×(0.58)/0.68×(0.48)m
特徴 V層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層はロームブロックを多く含むが、下層はロームブロックが少なく、炭化材を僅かに含む程度の黒褐色土。フラスコ状を呈するが、小型のもの。
時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉～中期初頭と考えられる。(福井)

TP-61 (図IV-243、表IV-2、図版178・179)

位置 H5 **立地** 標高24.4m付近の平地地
平面形 不整楕円形 **規模** (1.85)/(1.62)×(1.30)/(1.26)×0.93m
特徴 B盛土、その下位のⅢ層黒色土を掘り下げたのち、Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。土坑は入れ子になっており、当初楕円形の土坑があり、ロームブロックを多く含む土層を、

4回以上に分けて丁寧に埋め戻している。後にその土坑の一部を壊すように斜めに掘り込んで、東銅路Ⅳ式土器と礫を納め、ローム粒・ロームブロックを含むやや均質な黒褐色土で埋め戻したとみられる。

時期 出土遺物から縄文時代早期後葉と考えられる。(影浦)

TP-62 (図Ⅳ-242、表Ⅳ-2、図版179)

位置 F・G3・4 **立地** 標高25.2m付近のB盛土上

平面形 隅丸方形 **規模** (1.82)/1.58×(1.72)/1.34×(0.62)m

特徴 B盛土上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。断面鍋底状。底部は平坦で、Ⅲ層黒褐色土上面まで達していない。覆土にはロームブロックや炭化材を含み、比較的均質のため埋め戻し土と考えられる。土坑墓の可能性はある。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉か後期前葉と考えられる。(影浦)

TP-63 (図Ⅳ-243、表Ⅳ-2、図版179)

位置 J7 **立地** 標高24.2m付近の平坦地

平面形 円形 **規模** (0.60)/0.60×(0.58)/0.52×(0.33)m

特徴 B盛土、その下位のⅢ層黒褐色土を掘り下げたのち、Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ロームブロックを含む。壁の一部がオーバーハンクする。

時期 周囲の遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-64 (図Ⅳ-244、表Ⅳ-2、図版179)

位置 H6 **立地** 標高24.3m付近の平坦地

平面形 楕円形(フラスコ状土坑) **規模** (0.90)/1.74×(0.80)/1.88×(1.48)m

特徴 TH-27床面下で暗褐色土・黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層上部は入れ子状になり、①暗褐色土部分(土層1、4~8)と②黒褐色土部分(土層2、3、9、10)からなる。①はロームブロックを多く含み、比較的均質で、埋め戻し土とみられる。その直下からは、海獣骨が検出されている。上層下部も暗褐色土(土層11~13)。ロームブロックを多く含むが、下層ではロームブロックを多く含む暗褐色土と黒褐色土が互層になり、一部水平堆積している。このような例は、時間をかけて堆積したものと推測される。なお、壁の中心でズレを生じていたり、周囲のV層に亀裂が観察されたことから、埋設後覆土が締まり、僅かな空隙ができることで、周囲のV層が崩れたものとみられる。坑底は平坦。

時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-65 (図Ⅳ-244、表Ⅳ-2、図版180)

位置 G8 **立地** 標高23.5m付近のTH-30(新)床面

平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.54)/1.46×(1.36)/1.20×(0.25)m

特徴 TH-30(新)の貼り床面を掘り下げ、TH-8(旧)覆土中で土層の乱れが観察され、サブトレンチを入れたところ確認した。覆土は、ほぼ単層で、ロームブロックを多く含む褐色土。TH-8(旧)廃絶後、盛土層によって埋められ、その上位から掘り込まれたが、埋め戻されとみられる。その後、TH-30(新)構築時に、床面に現れた軟弱部分に貼床によって蓋をしたと推定される。坑

底は平坦だが、TH-8（旧）覆土中に留まる。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-66 (図IV-245、表IV-2、図版180)

位置 D・E10 立地 標高23.6m付近の道路跡隣接地

平面形 円形（フラスコ状土坑） 規模 (1.41)/1.62×(0.88)/1.76×(0.72)m

特 徴 削平されたV層上面でふい黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでい
る。覆土のうち、ふい黄褐色土からなる土層6～9、11～13はロームブロックや炭化材が目立つ。
一方、褐色土からなる土層4、5、10、14は主にロームからなり、炭化物を少量含むもので、壁の崩
落土とみられる。坑底は平坦。覆土から、凝灰岩礫や土器片などが検出された。

時 期 出土遺物から縄文時代中期初頭～前葉と考えられる。 (福井)

TP-67 (図IV-245、表IV-2、図版180)

位置 F6・7 立地 標高23.7m付近のTH-35床面

平面形 円形（フラスコ状土坑） 規模 (1.25)/1.56×(0.94)/1.53×(0.34)m

特 徴 TH-35の床面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上位は貼床されていた（土
層1、2）。覆土上層は黒褐色土で、僅かにローム粒などを含んでいた。覆土下層は、部分的にロー
ムの純層やロームブロックなどを含む暗褐色土で、水平堆積していた。坑底は平坦。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-68 (図IV-245、表IV-2、図版180)

位置 E5 立地 標高24.2m付近の平坦地

平面形 円形（フラスコ状土坑） 規模 (1.38)/1.78×(1.18)/1.80×(1.42)m

特 徴 TH-33に隣接した地点で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。TH-12覆土は切っ
ているが、TH-33との関係は明確ではない。覆土上層（土層1～3）はロームブロックを含みながら、
比較的均質な土層からなる。覆土中層は上部が主に黒褐色土、下部が褐色土～黄褐色土からなる。
下部はロームの純層に近い部分（土層8）や、ロームブロックが多い土層を含み、青い砂層や貝層も含
んでいた（土層9）。上部に流れ込むように堆積していたものが、恐らく下部土層が締まることによ
って空隙ができ、小断層を形成している。覆土下層（土層11～13）は、山状に堆積した暗褐色土で、ロー
ム粒を僅かに含む。坑底は平坦。

時 期 出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。年代測定したところ、覆土出土の炭化材
では4,480±30 y r B.P. (IAAA-103311)の測定値が得られた。 (福井)

TP-70 (図IV-246、表IV-2、図版181)

位置 E・F9 立地 標高23.7m付近の道路跡隣接地

平面形 円形 規模 (0.76)/(0.64)×(0.64)/0.49×(0.18)m

特 徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、比較的均質で、褐色
土にロームブロックや炭化材小片が混じる。下位に行くに従いロームブロックの量が増加する。坑底
は不安定で、半截時には掘りすぎてしまった。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-71 (図IV-246、表IV-2、図版181)

位置 F 5 立地 標高24.3m付近のTH-33床面
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (0.72)/1.65×(0.68)/1.92×(1.39)m

特徴 TH-33床面にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ほとんどしまりのない、均質な土層で、ロームブロックや焼土ブロック、炭化材小片を含み、埋め戻し土とみられる。最上部には、やや大きなロームブロックがみられ、貼床されていたかもしれない。土層断面は、写真撮影後崩落してしまい、図化できなかつた。坑底は平坦。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。(福井)

TP-72 (図IV-246、表IV-2、図版181)

位置 D 6 立地 標高24.7m付近のTH-32上位
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (0.88)/1.58×(0.70)/1.62×(0.90)m

特徴 TH-32覆土中で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上層(土層1~4)は、ロームブロックや炭化材小片を含み、比較的均質で、埋め戻し土とみられる。覆土中層(土層5)は、含有物が少ない。覆土下層(土層6~9、12)は、ロームブロックを多く含む暗褐色土で、水平堆積している。坑底は平坦。

時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-73 (図IV-247、表IV-2、図版181~183)

位置 E 4・5 立地 標高24.4m付近の平坦地
 平面形 楕円形 規模 2.00/1.94×1.48/1.35×0.27m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。南側を半載したところ仰臥膝屈(屈肢)葬人骨を確認した。覆土は、上層にロームブロックを多く含むが、下層の混入物は少なかった。腰の左側からはつまみ付ナイフ1点、左腹部と右肩上、やや離れて上部右付近に握り拳の2倍程度の大きさの礫、右肩上と胸中央には5cm角の大きさの礫が出土した。特に右肩上の礫は、砂利状のものも含め十数点が集積されていた。また、左腕の横からはベンガラを確認することができた。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。(福井)

TP-75 (図IV-248、表IV-2、図版183)

位置 D・E 11 立地 標高23.7m付近のTH-13床面
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (1.66)/1.92×(1.22)/1.68×(0.67)m

特徴 TH-13調査後、床面で確認した。V層を掘り込んでいる。覆土下半部は、ほとんどローム層からなる土層と、ロームブロックを多く含む褐色土が互層状に堆積している。上半部の土層1は、ほとんどローム層からなる土層で、TH-13構築時に埋められ、貼り床されたとみられる。坑底は平坦。覆土下部から出土した骨は、海獣骨であった。

時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-76 (図IV-248、表IV-2、図版183)

位置 E・F 7 立地 標高23.7m付近のTH-12・49床面

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** $(1.06) / 1.02 \times (1.06) / (1.54) \times (0.35) \text{m}$

特徴 TH-12の床面で、暗褐色土～黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、下半にロームブロック・炭化材を含むにぶい黄褐色土の土層6、9～11が山状に堆積する。それを覆うように、土層5、7、8が堆積しており、こちらは暗褐色土～黒褐色土で、ロームブロックを少量含み、やや均質。上位には、TH-12貼床（土層7）、TH-49貼床がみられる。坑底は平坦。中央に小土坑が検出された。また、TP-116との新旧関係は不明確ながら、坑底のレベル差から、TP-116の方が古いと推定される。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-77 (図IV-249、表IV-2、図版183)

位置 F 9 **立地** 標高23.4m付近のTH-8（新）・29床面

平面形 円形 **規模** $(0.90) / 0.86 \times (0.82) / 0.83 \times (0.53) \text{m}$

特徴 TH-29ベンチ状構造上でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土上層の土層1はロームブロックや炭化材小片を多く含んでいた。下層は、ほとんどローム層であった。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-78 (図IV-249、表IV-2、図版184)

位置 D 8 **立地** 標高23.7m付近の道路跡隣接地

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** $(1.40) / (1.56) \times (1.40) / (1.40) \times (0.4) \text{m}$

特徴 TH-39の床面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ほとんどローム層で、僅かに炭化材小片を含む程度。坑底は平坦。

時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-79 (図IV-249、表IV-2)

位置 D・E 6 **立地** 標高23.8m付近のTH-32上位

平面形 不整形 **規模** $(0.80) / 0.76 \times (0.57) / 0.48 \times (0.25) \text{m}$

特徴 TH-32覆土中に暗褐色土の落ち込みとして確認した。上部に礫を含む。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-80 (図IV-250、表IV-2、図版184)

位置 C・D 7・8 **立地** 標高23.8m付近の道路跡隣接地

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** $(-) / (2.00) \times (-) / (1.70) \times (0.32) \text{m}$

特徴 削平されたV層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ロームブロックを多く含む。坑底は平坦。当初TH-53として認識していたので、上半はTH-53として掘り下げってしまった。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-81 (図IV-249、表IV-2、図版184)

位置 F 9 **立地** 標高23.4m付近の道路跡隣接地

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (1.40)/1.88×(1.28)/1.66×(0.51)m

特徴 削平されたV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ロームブロックを含む。坑底は平坦。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-82 (図IV-251、表IV-2、図版184・185)

位置 G4・5 **立地** 標高24.6m付近の平坦地

平面形 楕円形 **規模** (1.20)/(1.12)×0.96/0.86×0.36m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で、黒褐色土～暗褐色土の落ち込みとして確認した。南側を半載したところ左下側臥強屈葬人骨を確認した。覆土は、上層にロームブロックやや少ない黒褐色土（土層7～9、11、12）が、下層にロームブロックが多い黒褐色土（土層1～5）が堆積していた。人骨は全体に土圧で潰れていたが、頭部以外はミイラ様の組織が残存したような状況を呈していた。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-83 (図IV-252、表IV-2、図版184)

位置 C・D8・9 **立地** 標高23.7m付近の道路跡隣接地

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (-)/1.86×(-)/1.82×(0.75)m

特徴 削平されたV層上面で褐色土～いぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層の土層1～3は褐色～いぶい黄褐色土でロームブロックを多く含む。中層の土層4はほとんどロームで、僅かに炭化材小片を含む程度。下層の土層5～7はいぶい黄褐色土で、土層4との層界が明瞭。坑底は平坦。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-85 (図IV-251、表IV-2、図版184)

位置 E5 **立地** 標高24.0m付近の平坦地

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (0.80)/1.58×(0.72)/1.74×(1.14)m

特徴 B盛土を掘り下げ、さらにⅢ層・Ⅳ層を掘り下げたのち、V層上面で、褐色土～暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、全体に水平堆積している。ただし、崩落土とみられるものはなく、比較的短期間で埋没したようである。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-86 (図IV-252、表IV-2、図版185)

位置 E・F10・11 **立地** 標高23.7m付近の道路跡隣接地

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (2.12)/2.22×(2.12)/2.24×(0.36)m

特徴 削平されたV層上面で暗褐色土～褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層の土層7は暗褐色土で、混入物も少なく、流入土とみられる。下層の土層8～10はロームブロックを多く含む。最下層の土層11、12がほとんどローム。坑底は平坦。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-87 (図IV-253、表IV-2、図版185)

位置 D 11 **立地** 標高23.7m付近の道路跡隣接地
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.48)/1.84×(1.16)/1.68×(0.62)m
特徴 削平されたV層上面で明褐色土～褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、最上層の土層1は褐色土で、ローム粒のほか、焼土ブロックが含まれており、TF-3とした。覆土のほとんどを占める土層2はほぼロームからなり、僅かに炭化材を含むものであった。最下層の土層3は焼土粒やローム粒、炭化材片を含む褐色土で、山状に堆積していた。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。(福井)

TP-89 (図IV-250、表IV-2、図版186)

位置 C・D 7 **立地** 標高23.5m付近のTH-34(新)床面
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.20)/2.24×(1.12)/1.94×(0.60)m
特徴 TH-34(新)床面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土下層は、土層6、8のような崖崩落土を含み、山状～水平堆積となる(土層3～9)。一方覆土上層は、やや均質で、ロームブロックを含む褐色土で一気に埋め戻したとみられる。坑底は平坦で、中央からやや外れて浅い小土坑を検出した。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。(福井)

TP-91 (図IV-253、表IV-2、図版186)

位置 D 5 **立地** 標高24.5m付近の平坦地
平面形 楕円形? **規模** (1.10)/0.68×(0.30)/(0.22)×(0.44)m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上位に堆積したローム質の盛土層中で、にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、比較的均質で、暗褐色土にロームブロックや炭化材小片が混じる。坑底は鍋底状。北西側を壘塚跡によって攪乱されていた。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。(福井)

TP-92 (図IV-253、表IV-2、図版186)

位置 C 11 **立地** 標高23.9m付近のTH-13床面
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.15)/1.40×(0.70)/(0.70)×(0.60)m
特徴 TH-13調査後、調査区境界断面で確認した。南東側は壘塚跡で削平されていた。V層を掘り込んでいる。覆土下半部は、均質な褐色土が堆積しており、埋め戻し土とみられる。上部の土層2、3には、ロームブロックを多く含み、TH-13構築時の貼床とみられる。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭～前葉と考えられる。(福井)

TP-93 (図IV-253、表IV-2、図版186)

位置 D 10 **立地** 標高24.5m付近の平坦地
平面形 楕円形? **規模** (1.65)/1.45×(0.52)/(-)×(0.30)m
特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層が褐色土、下層がほとんどロームブロックからなる。上層、下層の境界は不明瞭。坑底は不安定。
時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。(福井)

TP-94 (図IV-252、表IV-2、図版186)

位置 C・D 8 **立地** 標高23.7m付近の道路跡隣接地
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (-)/1.56×(-)/1.53×(0.62)m
特徴 削平されたV層上面でいび黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層の土層2、3は均質で、一気に埋め戻されたものとみられる。下層の土層4～6はロームブロックを多く含む。土層7は、TP-83を切ってしまったために現れた軟弱土壌を覆うための貼り床層とみられる。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-95 (図IV-254、表IV-2、図版186)

位置 E 11・12 **立地** 標高23.6m付近の道路跡隣接地
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (1.55)/1.10×(-)/1.02×(0.70)m
特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層の土層1～3はほとんどローム。中層の土層4～7は、ロームブロックを多く含む褐色土。下層の土層8はロームブロック・炭化材片を含むいび黄褐色土。坑底は平坦。坑底で浅い小土坑を検出した。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-96 (図IV-254、表IV-2、図版187)

位置 D 11 **立地** 標高23.6m付近の道路跡隣接地
平面形 円形? **規模** (0.60)/0.12×(0.30)/(0.14)×(0.22)m
特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、比較的均質で、褐色土にロームブロックや炭化材小片が混じる。下位に行くに従いロームブロックの量が増加する。坑底は不安定で、半截時に掘りすぎてしまった。
時期 周辺の遺物から、縄文時代中期前葉か後期前葉と考えられる。(福井)

TP-97 (図IV-254、表IV-2、図版187)

位置 H 4 **立地** 標高24.5m付近のB盛土上
平面形 円形 **規模** 0.84/0.82×0.65/0.75×0.39m
特徴 下部Ⅲ層中位で褐色土の落ち込みとして確認した。断面鍋底状で、一部オーバーハングしている。覆土には中位に焼土ブロックや炭化材片、ロームブロックを含む褐色土を含むが、その上下にはローム粒を含む黒褐色土が堆積している。底部の層界は不明瞭。
時期 出土遺物から縄文時代早期後葉と考えられる。(影浦)

TP-98 (図IV-254、表IV-2、図版187)

位置 C・D 11・12 **立地** 標高23.5m付近のTH-13床面
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (0.70)/1.80×(0.46)/(0.88)×(0.56)m
特徴 TH-13床面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、おおむね均質で、ロームブロックや炭化材片を含む褐色土からなる。一部崩落土とみられる部分がある(土層4)。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。(福井)

TP-99 (図IV-255、表IV-2、図版187)

位置 D 10 **立地** 標高23.6m付近の道路跡隣接地
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (-)/2.00×(-)/2.00×(0.56)m
特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土下半部は、褐色土が山状に堆積している。中層はほとんどロームで、こちらも山状に堆積していた。最上部の土層2、3は、ロームブロックを含む褐色土。坑底は平坦。TP-66に切られている。また、北西側は一部壛塚跡に攪乱されていた。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。 (福井)

TP-100 (図IV-255、表IV-2、図版187)

位置 F 7・8 **立地** 標高23.5m付近のTH-8 (旧) 床面
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (-)/2.40×(-)/2.00×(0.52)m
特徴 TH-8 (旧)の床面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上位は貼床されていた(土層1)。覆土はほぼ均質で、ロームブロックを多く含む褐色土。覆土下層の方がロームブロックの量が増加する。坑底は平坦。覆土下部からは、海獣肋骨とみられるものが出土した。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-101 (図IV-256、表IV-2、図版188)

位置 F 8 **立地** 標高23.2m付近のTH-8 (新) 床面
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (1.97)/2.05×(1.62)/1.68×(0.17)m
特徴 TH-8 (新)の床面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上位は貼床されていた(土層1)。覆土は、ロームブロックを多く含む褐色土が山状堆積していた。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉~中期初頭と考えられる。 (福井)

TP-102 (図IV-256、表IV-2、図版188)

位置 E・F 8 **立地** 標高23.2m付近のTH-8 (新) 床面
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (1.47)/1.65×(1.39)/1.48×(0.26)m
特徴 TH-8 (新)の床面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土上位は貼床されていた(土層1)。覆土は、ロームブロックを多く含む褐色土と主にロームからなる部分があった
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。 (福井)

TP-103 (図IV-250、表IV-2、図版188)

位置 C 7・8 **立地** 標高23.5m付近の道路跡隣接地
平面形 円形 (フラスコ状土坑) **規模** (0.75)/1.92×(0.90)/1.78×(0.58)m
特徴 削平されたV層上面で黄褐色~褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、均質で、埋め戻し土とみられる。中位に平板な凝灰岩礫が含まれていた。坑底は平坦。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。 (福井)

TP-104 (図IV-256、表IV-2、図版188)

位置 C 5 **立地** 標高23.5m付近のTH-34 (旧) 床面

平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (1.44)/1.78×(1.15)/1.55×(0.36)m
特徴 TH-34（旧）の床面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土や黒褐色土が水平堆積していた。
時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と考えられる。 (福井)

TP-105 (図IV-257、表IV-2、図版188)

位置 H・I 7・8 **立地** 標高233m付近のTH-22床面
平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (1.32)/1.69×(1.05)/1.65×(0.47)m
特徴 TH-22の床面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は主にロームブロックを多く含む黒褐色土が堆積していた。比較的均質であるが、ロームブロックが水平堆積しているの、敷き詰める様に埋め戻したものと推定される。坑底は水平で、中央からやや外れて浅い小土坑が検出された。また、SP-362に切られていた。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-106 (図IV-257、表IV-2、図版188)

位置 H 6 **立地** 標高245m付近の平地
平面形 楕円形？ **規模** (0.65)/0.65×(0.30)/(0.28)×(0.13)m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、IV層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上位がローム粒を含む黒褐色土、下位がロームブロックを多く含む黒褐色土であった。坑底は鍋底状。
時期 周辺の遺物から、縄文時代早期後葉の可能性がある。 (福井)

TP-107 (図IV-257、表IV-2、図版189)

位置 H 6・7 **立地** 標高237m付近のTH-9床面
平面形 円形（フラスコ状土坑） **規模** (1.38)/1.45×(1.32)/(1.39)×(0.18)m
特徴 TH-9の床面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、上層がロームブロックを多く含む黒褐色土、下層がロームブロックを多く含む褐色土で、両層の境界は明瞭であった。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-108 (図IV-257、表IV-2)

位置 H 11・12 **立地** 標高231m付近の道路跡隣接地
平面形 楕円形 **規模** (0.68)/0.61×(0.50)/0.43×(0.19)m
特徴 削平されたV層上面で、黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、下位がロームブロックを多く含む黄褐色土であった。
時期 時期は不明である。 (福井)

TP-109 (図IV-258、表IV-2)

位置 H 11・12 **立地** 標高231m付近の道路跡隣接地
平面形 楕円形 **規模** (0.48)/0.32×(0.41)/0.17×(0.19)m
特徴 削平されたV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、下位がロームブロッ

クを多く含むにぶい黄褐色土であった。

時期 時期は不明である。 (福井)

TP-110 (図IV-258、表IV-2)

位置 H・I 10 立地 標高23.4m付近の道路跡隣接地
 平面形 楕円形 規模 (0.66)/0.64×(0.62)/0.61×(0.08)m
 特徴 削平されたV層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土にはロームブロックを多く含む。
 時期 周辺の遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-111 (図IV-258、表IV-2)

位置 H・I 10 立地 標高23.5m付近の道路跡隣接地
 平面形 楕円形 規模 (0.96)/0.81×(0.57)/0.47×(0.30)m
 特徴 削平されたV層上面で灰黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土下層にはロームブロックを多く含む。
 時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-112 (図IV-258、表IV-2)

位置 H 10 立地 標高23.7m付近の道路跡隣接地
 平面形 楕円形 規模 (1.04)/0.96×(0.85)/0.70×(0.38)m
 特徴 削平されたV層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土下層にはロームブロックを多く含む。
 時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-113 (図IV-258、表IV-2)

位置 G 11 立地 標高23.1m付近の道路跡隣接地
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (1.69)/1.67×(0.90)/1.02×(0.52)m
 特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ロームブロックを多く含む。坑底は平坦で、浅い小土坑を検出した。
 時期 出土遺物から縄文時代前期末葉~中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-114 (図IV-259、表IV-2、図版189)

位置 F 11 立地 標高23.3m付近の道路跡隣接地
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (1.58)/1.79×(1.46)/1.72×(0.34)m
 特徴 削平されたV層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ローム粒と炭化材片を僅かに含む。坑底は平坦。
 時期 出土遺物から縄文時代前期末葉~中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-115 (図IV-258、表IV-2)

位置 G 5 立地 標高24.6m付近の平坦地

平面形 楕円形 **規模** (0.58)／0.13×(0.47)／0.12×(0.17)m
特徴 B盛土、その下位のⅢ層黒色土を掘り下げたのち、Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。
時期 時期は不明である。 (福井)

TP-116 (図Ⅳ-248、表Ⅳ-2、図版189)

位置 E・F7 **立地** 標高23.7m付近のTH-49床面
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.58)／1.42×(1.36)／1.44×(0.40)m
特徴 TH-49の床面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、下半にロームブロック・炭化材を含む暗褐色土の土層3が山状に堆積する。それを覆うように、土層2が堆積しており、こちらは褐色土で、ロームブロックを多量含み、均質。また、TP-76との新旧関係は不明確ながら、坑底のレベル差から、TP-116の方が古いと推定される。坑底は平坦。中央に小土坑が検出された。覆土下部からは、オットセイ左尺骨、左上腕骨、右大腿骨、椎骨などが検出された。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-117 (図Ⅳ-238、表Ⅳ-2)

位置 E7 **立地** 標高23.9m付近のTH-35・49床面
平面形 円形(フラスコ状土坑) **規模** (1.90)／(1.90)×(1.88)／(1.65)×(0.08)m
特徴 TH-35・49の床面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ローム粒を含み、やや均質。坑底は平坦。TP-48を切っている。
時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉と考えられる。 (福井)

TP-118 (図Ⅳ-259、表Ⅳ-2)

位置 F・G4 **立地** 標高24.4m付近の平坦地
平面形 楕円形 **規模** (0.67)／(0.54)×(0.79)／0.57×(0.25)m
特徴 B盛土、その下位のⅢ層黒色土を掘り下げたのち、Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。
時期 時期は不明である。 (福井)

TP-119 (図Ⅳ-259、表Ⅳ-2)

位置 D・E5 **立地** 標高24.2m付近の平坦地
平面形 楕円形 **規模** (1.02)／0.89×(0.74)／0.67×(0.27)m
特徴 B盛土を掘り下げ、Ⅲ層も掘り下げたⅣ層上面で、褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ロームブロックや炭化材小片を多く含む。坑底は鍋底状。上位で石器・礫が出土した。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉か後期前葉と考えられる。 (福井)

TP-121 (図Ⅳ-259、表Ⅳ-2、図版189)

位置 H6 **立地** 標高23.1m付近の道路跡隣接地
平面形 楕円形 **規模** (0.32)／(0.27)×(0.44)／0.34×(0.21)m
特徴 B盛土を掘り下げ、Ⅲ層も掘り下げたⅣ層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

覆土は、全体に均質で、ロームブロックを少量含む。坑底や壁は不明瞭。

時期 時期は不明である。

(福井)

TP-122 (図IV-260、表IV-2、図版189)

位置 G・H 6・7 立地 標高23.5m付近のTH-9床面

平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (0.75)/1.35×(0.65)/1.22×(0.52)m

特徴 TH-9の床面で、にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、ロームブロックを多く含む褐色土で、全体にやや均質。一気に埋め戻されたものとみられる。土坑墓の可能性がある。坑底からは浅い小土坑が検出された。TP-107を切っている。

時期 周辺の遺物から、縄文時代前期末葉と考えられる。

(福井)

TP-123 (図IV-260、表IV-2、図版190)

位置 C・D 2・3 立地 標高25.7m付近のB盛土上

平面形 円形 規模 2.26/1.87×(1.60)/(1.68)×1.46m

特徴 2011年度調査開始時に、過年度の調査区との境界である3ライン上の壁面をメインセクションとし、写真撮影と図化のための清掃を行った際、断面が現れて確認された。掘り込みはI層を除去したm2(2)上面から、m3層の中位にまで達していた。盛土層中に掘り込んだため、壁面はいびつになっているが、おおむね垂直の掘り込みであり、坑口付近が開口形状である。東側6分の1程度を欠失する。覆土は17層に分層された。覆土1～6と7以下で堆積状況が大きく異なる。覆土7以下は灰褐色土、黄褐色土を基調とし、黒褐色土が不規則に混じり込んでいるものが、ブロック状の堆積をなす。いずれも崩落土とみられるが、堆積状況から覆土11以下と7～10の間には時間差があるよう窺われる。覆土1～6は灰黄褐色土層、黄褐色土層、黒褐色土層の互層からなる人為的な盛土堆積である。遺物は、土器がII群A類1点、II群B類196点、III群A類901点、IV群A類2093点の計3,191点、焼成粘土塊が2点、石器が剥片石器56点、フレイク269点、礫石器19点、石製品1点、有意の礫・礫38点の計383点、骨角器が1点出土。

時期 掘り込み面と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(影浦)

TP-126 (図IV-261、表IV-2、図版190)

位置 K 2 立地 標高24.1m付近のB盛土上

平面形 楕円形 規模 (0.55)/(0.46)×(0.47)/(0.38)×0.35m

特徴 TH-54の調査過程で、褐色土の落ち込みとして確認した。調査区境界の西壁面を清掃したところ、掘り込み面から15cmほどが掘り下がっている状態であった。TH-54の範囲確認で周辺を下けている過程で欠失したものである。南側半分も風倒木によって破壊されていた。覆土はロームブロック・ローム粒を含む埋め戻しである。坑底はややいびつ、壁はやや外側に広がりながら立ち上がる。

時期 覆土上にB盛土の堆積があることと、円筒土器下層d1式の住居であるTH-54と掘り込み面に大きな差がないことから、縄文時代前期末葉の可能性が高いと判断される。

(影浦)

TP-127 (図IV-261、表IV-2)

位置 K 7 立地 標高24.2m付近の平地

平面形 楕円形 **規模** $(0.60) / 0.39 \times (0.49) / 0.28 \times (0.23) \text{ m}$
特徴 B盛土を掘り下げ、Ⅲ層も掘り下げたⅣ層上面で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は、下部でロームブロックを含む。
時期 時期は不明である。 (福井)

TP-128 (図Ⅳ-261、表Ⅳ-2、図版190)

位置 N・O 11・12 **立地** 標高233m付近の平地
平面形 隅丸方形 **規模** $1.51 / 1.36 \times (0.37) / (0.32) \times 0.43 \text{ m}$
特徴 m1層直下のⅣ層上面で落ち込みとして確認した。覆土はロームブロックをやや多く含み、均質であるので、埋め戻し土とみられる。土坑墓の可能性もある。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期中葉と考えられる。 (影浦)

TP-129 (図Ⅳ-262、表Ⅳ-2)

位置 E 3 **立地** 標高25.6m付近のB盛土上
平面形 楕円形? **規模** $(1.55) / (1.15) \times (1.34) / (0.92) \times 0.40 \text{ m}$
特徴 初期に設定したメインレンチ断面において確認した。B盛土上位から掘り込まれている。断面形は逆台形で、坑口が皿状に大きく開く。坑底はほぼ平坦。覆土にはロームブロックや炭化材を含み、比較的均質のため埋め戻し土と考えられる。
時期 周辺の出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。 (福井)

TP-130 (図Ⅳ-262・263、表Ⅳ-2)

位置 F・G 3 **立地** 標高24.2m付近の平地
平面形 楕円形? **規模** $(0.96) / (0.88) \times (1.02) / (0.68) \times 0.24 \text{ m}$
特徴 土層断面観察用ベルトにおいて確認した。不明瞭であるが、Ⅳ層相当部分にローム粒を含む土層が確認される。
時期 周辺の遺物から、縄文時代早期後葉の可能性もある。 (福井)

TP-131 (図Ⅳ-262・263、表Ⅳ-2)

位置 F・G 3 **立地** 標高24.2m付近の平地
平面形 楕円形? **規模** $(1.28) / (0.92) \times (1.16) / (0.75) \times 0.24 \text{ m}$
特徴 土層断面観察用ベルトにおいて確認した。不明瞭であるが、Ⅳ層相当部分にローム粒を含む土層が確認される。
時期 周辺の遺物から、縄文時代早期後葉の可能性もある。 (福井)

TP-132 (図Ⅳ-262・263、表Ⅳ-2)

位置 F・G 3・4 **立地** 標高24.2m付近の平地
平面形 楕円形? **規模** $(1.96) / (1.45) \times (1.74) / (1.07) \times 0.32 \text{ m}$
特徴 土層断面観察用ベルトにおいて確認した。不明瞭であるが、Ⅳ層相当部分にローム粒を含む土層が確認される。
時期 周辺の遺物から、縄文時代早期後葉の可能性もある。 (福井)

TP-133 (図IV-262・263、表IV-2)

位置 G 3 立地 標高242m付近の平地
 平面形 楕円形? 規模 (1.64)/(1.28)×(1.40)/(1.21)×0.36m
 特徴 土層断面観察用ベルトにおいて確認した。不明瞭であるが、IV層相当部分にローム粒を含む土層が確認される。
 時期 周辺の遺物から、縄文時代早期後葉の可能性がある。(福井)

TP-134 (図IV-264、表IV-2、図版190)

位置 D 10 立地 標高237m付近の道路跡隣接地
 平面形 長楕円形 規模 (1.35)/1.34×(1.01)/0.80×(0.48)m
 特徴 上位に巨岩があり、その下位にあるにぶい黄褐色の落ち込みとして確認した。V層を掘り込んでいる。覆土下部の壁寄りに巨岩2点(台石石皿2078・石棒1486)が含まれていた。またⅢ群a類土器24点、扁平打裂石器も1点含まれていた。なお、調査時はTP-47として調査されたが、番号が重複していたので、分離した。TP-134の調査は2010年5月下旬から6月上旬に行っている。
 時期 周辺の遺物から、縄文時代中期前葉の可能性がある。(福井)

TP-136 (図IV-265、表IV-2)

位置 D 3 立地 標高25.6m付近の盛土上
 平面形 円形(フラスコ状土坑) 規模 (1.60)/(1.20)×(1.52)/(1.10)×1.05m
 特徴 D 3区のメインベルト北東壁で検出した。盛土上部に窪みを埋める堆積(土層2)がみられ、その右側ではA盛土を掘り込んだ立ち上がりとし、その上位にあたる盛土層が不明瞭ながら断絶していたために、盛土上位から掘り込まれた堅穴住居と考え、TH-41と命名した。しかし、精査したところ、フラスコ状土坑が盛土層上部から掘り込まれ、後に覆土が締まることによって空間が開き、盛土層が沈み込んだものと判断した。遺物はⅡ群b類321点、Ⅲ群a類土器435点、Ⅳ群a類331点、剥片石器26点、フレイク130点、礫石器9点、礫36点、魚骨5点、獣骨15点が含まれていた。なお遺物は、この土坑に含まれたもののほか、B盛土の遺物も混入している可能性がある。
 時期 出土遺物から、縄文時代中期前葉の可能性がある。(福井)

(TP-201~217)

位置 B・C 10~13

確認・調査 C盛土下部で平面観察の後、遺構プランとみられる層の変化で遺構名を付したが、遺構である確証がないため、保留とした。

6 Tピット (図IV-266、表IV-2)

TTP-1 (図IV-266、表IV-2、図版164)

位置 N・O 9 立地 標高238m付近のB盛土上
 平面形 長楕円形(溝状) 規模 (2.68)/2.91×(0.17)/0.14×(1.25)m
 特徴 初期に設定したメインレンチ底面においてに確認した。断面部分でTP-10・11に切られている。覆土は、ロームブロックを多く含む褐色土で、埋め戻されたものとみられる。上位は褐色の盛土層に覆われていた。壁の崩落もみられない。最下層には黒色土層が二枚水堆積していた。

坑底は平坦で、壁は急に立ち上がる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期中葉～後期前葉と考えられる。 (福井)

7 焼土 (図Ⅳ-267～288、表Ⅳ-3)

TF-1・2 (図Ⅳ-268、表Ⅳ-3、図版191)

位置 C 11 立地 標高24.1m付近の平坦地

規模 TF-1 : (0.68) × 0.66m TF-2 : 0.54 × (0.34)m

特徴 TH-13の調査中に確認した。壑壕跡の断面でTH-13を確認した後、周囲の盛土層相当の土層をTH-13の確認面まで掘り下げた結果、TH-13の北西端にあたる部分でTF-1・2を検出した。ともに規模が小さく、不明瞭である。南側を半載して記録を作成した。m1層とみられる堆積中に形成されている。不明瞭ではあるが焼土の層界は漸変しているの、検出した場所で焼けたものであろう。

時 期 確認された層位から、縄文時代後期前葉のものとみられる。 (立田)

TF-3 (図Ⅳ-268、表Ⅳ-3)

位置 D 11 立地 標高23.8m付近のTP-87覆土中 規模 0.65 × 0.61m

特徴 層界は不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-4 (図Ⅳ-268、表Ⅳ-3)

位置 O 9 立地 標高23.4m付近のTH-15覆土中 規模 (0.80) × (0.61)m

特徴 TH-15を覆うm層(覆土1)下部で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-5 (図Ⅳ-268、表Ⅳ-3、図版191)

位置 J 6 立地 標高24.7m付近のTH-3覆土中 規模 0.49 × 0.38m

特徴 TH-3を調査中に確認した。レベルから土層断面図の6層付近のものとみられる。断面は図化しなかったが、10YR3/2黒褐色土に赤褐色土の粒子、炭化物、骨片が混じる最大5cmの堆積である。状況から、形成された場所から移動しているとみられる。

時 期 移動した時期は、層位の状況から、縄文時代中期前半円筒土器上層a 1式であるが、形成された時期は不明である。 (立田)

TF-6-1 (図Ⅳ-269、表Ⅳ-3、図版191)

位置 I 7 立地 標高24.3m付近の平坦地 規模 1.08 × 0.60m

特徴 B盛土を掘り下げているところ、Ⅲ層上面で確認した。層界は不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。厚く灰層も堆積していた。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-6-2 (図IV-269、表IV-3、図版191)

位置 I 7 立地 標高24.3m付近の平坦地 規模 0.54×0.52m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。層界は不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-6-3 (図IV-269、表IV-3、図版191)

位置 I 7 立地 標高24.3m付近の平坦地 規模 0.51×0.34m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、V層上面で確認した。層界は不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。下位には小土坑がある。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-7 (図IV-269、表IV-3)

位置 M10 立地 標高23.8m付近の平坦地 規模 0.42×0.32m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。層界は不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-8 (図IV-269、表IV-3)

位置 M10 立地 標高23.9m付近の平坦地 規模 0.60×(0.2)m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。層界は不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-9 (図IV-269、表IV-3)

位置 L・M4・5 立地 標高24.2m付近の平坦地 規模 0.34×0.22m

特徴 M5杭の部分において、TH-17の掘上土とみられる堆積を掘削中に検出した。焼土粒子が斑状に混じるⅢ層の堆積であるが、層界は不明瞭であるため、検出位置で焼けたものとみられる。

時期 検出状況から、縄文時代中期前半以前とみられる。(立田)

TF-10 (図IV-270、表IV-3)

位置 K5 立地 標高23.3~24mのTH-11覆土中 規模 1.85×1.55m

特徴 TH-11のトレンチで確認した。5ラインに設定したベルトの南東側で焼土を検出した。土層の記録を作成したのち、検出面まで掘り下げ、平面を記録した。覆土1b層の上面にあたる。検出面で土器(個体番号225)が出土している。TH-11のくぼみの北東側斜面に形成されており、明瞭で上面に炭化物が伴う残りの良いものである。個体番号226、227の土器、焼骨片集中域は本遺構の下位で検出されたものである。

時期 検出面の土器から、縄文時代前期後半、円筒土器下層c式期のものとみられる。(立田)

TF-11 (図IV-270、表IV-3、図版191)

位置 I 5 立地 標高24.6mの平坦地 規模 (0.82)×0.56m

特徴 I 5区のⅢ層上面で検出した。不明瞭で斑状の焼土であるが、層界は漸変しているため、検出位置で形成されたものとみられる。

時期 検出層位から、縄文時代前期後半、円筒土器下層c式とみられる。(立田)

TF-12 (図IV-270、表IV-3)

位置 H 7 立地 標高24.7m付近の盛土中 規模 0.38×0.30m

特徴 C盛土中下部で確認した。層界は不明瞭であるが、ブロック状を呈し、異地性の焼土とみられる。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。(福井)

TF-13 (図IV-271、表IV-3)

位置 J 6 立地 標高24.5m付近の盛土中 規模 0.38×0.28m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、下部で確認した。ブロック状のため、異地性の焼土とみられる。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。(福井)

TF-14 (図IV-271、表IV-3)

位置 H 6 立地 標高24.5m付近の盛土中 規模 0.36×0.22m

特徴 C盛土中下部で確認した。北海道式石冠が焼土中に含まれていた。

時期 出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-15 (図IV-271、表IV-3)

位置 J 10 立地 標高23.4m付近のTH-23(新)覆土中 規模 0.82×0.61m

特徴 TH-23(新)覆土を掘り下げていたところ、覆土中位で検出した。厚く焼土が形成され、層界は不明瞭で、焼土の周囲には環状に黒褐色化した土層が巡っていた。現地性の焼土である。また、TF-16より上位に位置することから、こちらの方が新しいとみなせる。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉の時期と考えられる。(福井)

TF-16 (図IV-271、表IV-3)

位置 I・J 10 立地 標高23.4m付近のTH-23(新)覆土中 規模 0.72×0.66m

特徴 TH-23(新)覆土を掘り下げていたところ、覆土中位で検出した。厚く焼土が形成され、層界は不明瞭で、焼土の周囲には環状に黒褐色化した土層が巡っていた。現地性の焼土である。下位に埋設土器を確認したが、これはTH-23(新)の炉跡に伴うものである。

時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉の時期と考えられる。(福井)

TF-17 (図IV-271、表IV-3、図版191)

位置 I 7 立地 標高24.0m付近の平坦地 規模 0.82×0.62m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。厚く焼土が形成され、層界は不

明瞭のため、現地性の焼土である。焼土上面には、厚く灰層が堆積している。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-18 (図IV-271、表IV-3、図版191)

位置 H・I 6・7 立地 標高24.0m付近の平坦地 規模 0.79×0.77m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。厚く焼土が形成され、層界は不明瞭のため、現地性の焼土である。焼土上面には、厚く灰層が堆積している。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-19 (図IV-272、表IV-3、図版191)

位置 H 10 立地 標高23.6m付近のTH-23 (旧) 覆土中 規模 0.54×0.35m

特徴 TH-23 (旧) を覆うm層 (覆土1) で確認した。厚く焼土が形成され、層界は明瞭で、焼土と炭化材が混ざり合っているため、異地性の焼土である。焼土中には、棒状の鯨骨が含まれていた。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-20 (図IV-272、表IV-3)

位置 G 8 立地 標高24.1m付近のTH-30 覆土中 規模 0.63×0.52m

特徴 TH-30 を覆うm層 (覆土1) で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-21 (図IV-272、表IV-3)

位置 G 8・9 立地 標高23.6m付近のTH-8 (旧) 覆土中 規模 0.58×0.45m

特徴 TH-8 (旧) を覆うm層 (覆土1) で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-23 (図IV-272、表IV-3)

位置 G 6 立地 標高24.9m付近のTH-9 覆土中 規模 0.38×0.28m

特徴 TH-9 を覆うm層 (覆土1) で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期初頭～前葉のものとみられる。 (福井)

TF-24 (図IV-272、表IV-3)

位置 G 6 立地 標高25.1m付近のTH-9 覆土中 規模 0.48×0.22m

特徴 TH-9 を覆うm層 (覆土1) で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期初頭～前葉のものとみられる。 (福井)

TF-25 (図IV-273、表IV-3)

位置 G 6 立地 標高25.2m付近の盛土中 規模 0.44×0.35m
特徴 B盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-26 (図IV-273、表IV-3)

位置 F・G 6 立地 標高25.0m付近のTH-47覆土中 規模 0.52×0.48m
特徴 TH-47を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-27 (図IV-273、表IV-3)

位置 F 5 立地 標高25.0m付近のTH-33覆土中 規模 0.58×0.32m
特徴 TH-33を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-28 (図IV-273、表IV-3)

位置 F 5 立地 標高25.1m付近のTH-33覆土中 規模 0.53×0.31m
特徴 TH-33を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-29 (図IV-273、表IV-3)

位置 F 5 立地 標高25.0m付近のTH-33覆土中 規模 0.58×0.42m
特徴 TH-33を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-30 (図IV-273、表IV-3)

位置 F 5 立地 標高24.8m付近のTH-33覆土中 規模 0.43×0.41m
特徴 TH-33を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-31 (図IV-273、表IV-3)

位置 F 5・6 立地 標高24.9m付近のTH-33覆土中 規模 0.63×0.42m
特徴 TH-33を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TF-32 (図IV-273、表IV-3)

位置 F 5 立地 標高24.9m付近のTH-33覆土中 規模 0.48×0.32m

特徴 TH-33を覆うm層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TF-33 (図IV-274、表IV-3)

位置 G 5 立地 標高25.2m付近の盛土中 規模 0.44×0.30m

特徴 C盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-34 (図IV-274、表IV-3)

位置 G 5 立地 標高25.3m付近の盛土中 規模 0.25×0.18m

特徴 C盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-35 (図IV-274、表IV-3)

位置 G 5 立地 標高25.1m付近の盛土中 規模 0.19×0.15m

特徴 C盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-36 (図IV-274、表IV-3)

位置 H 7 立地 標高24.1m付近の盛土中 規模 0.57×0.35m

特徴 C盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-37 (図IV-274、表IV-3)

位置 J 7 立地 標高24.1m付近の盛土中 規模 0.43×0.37m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、最下層で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-38 (図IV-274、表IV-3)

位置 D 10 立地 標高23.8m付近の道路跡隣接地 規模 0.63×0.32m

特 徴 削平されたV層上面で確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。小礫の集積を伴う。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-39 (図IV-274、表IV-3)

位 置 D 11 **立 地** 標高23.7m付近の道路跡隣接地 **規 模** 0.68×0.55m

特 徴 削平されたV層上面で確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-40 (図IV-275、表IV-3)

位 置 E 5 **立 地** 標高23.6m付近のTH-12覆土中 **規 模** 0.73×(0.38)m

特 徴 TH-12を覆うm層(覆土1)下部で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期中葉のものとみられる。 (福井)

TF-41 (図IV-275、表IV-3)

位 置 E 5 **立 地** 標高23.8m付近のTH-12覆土中 **規 模** 0.42×0.32m

特 徴 TH-12を覆うm層(覆土1)下部で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。また、焼骨が多く含まれていた。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期中葉のものとみられる。 (福井)

TF-42 (図IV-275、表IV-3)

位 置 G 5 **立 地** 標高24.5m付近の盛土中 **規 模** 0.35×(0.22)m

特 徴 C盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TF-43 (図IV-275、表IV-3)

位 置 B・C 6 **立 地** 標高24.1m付近のTH-34覆土中 **規 模** 0.49×0.43m

特 徴 TH-33を覆う覆土上面、m1層直下で確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。小礫の集積を伴う。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-44 (図IV-275、表IV-3)

位 置 C 6 **立 地** 標高24.1m付近のTH-34覆土中 **規 模** 0.98×0.73m

特 徴 TH-33を覆う覆土上面で確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。立石1点を伴う。覆土で取り上げられた土器は、TH-33の覆土に伴うもの。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-45 (図IV-275、表IV-3)

位置 C 6 立地 標高24.1m付近のTH-34覆土中 規模 0.48×0.42m
 特徴 TH-33を覆う覆土上面で確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期末葉～中期前葉のものとみられる。(福井)

TF-46 (図IV-276、表IV-3)

位置 C・D 4 立地 標高24.8m付近の盛土中 規模 0.48×0.38m
 特徴 B盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
 時期 出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。(福井)

TF-47 (図IV-276、表IV-3)

位置 D 6 立地 標高24.1m付近のTH-32覆土中 規模 0.43×(0.10)m
 特徴 TH-32を覆う覆土で確認した。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～後期前葉のものとみられる。(福井)

TF-48 (図IV-276、表IV-3)

位置 F 5 立地 標高24.7m付近のTH-33覆土中 規模 0.25×0.22m
 特徴 TH-33を覆う覆土(C盛土)で確認した。
 時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-49 (図IV-276、表IV-3)

位置 F 6 立地 標高24.2m付近のTH-35覆土中 規模 0.55×0.34m
 特徴 TH-35を覆う覆土(C盛土)で確認した。
 時期 出土遺物から縄文時代中期中葉のものとみられる。(福井)

TF-50 (図IV-276、表IV-3)

位置 G 6 立地 標高24.6m付近のTH-47覆土中 規模 0.51×0.16m
 特徴 TH-47を覆う覆土(C盛土)で確認した。
 時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-51 (図IV-276、表IV-3)

位置 G 5 立地 標高24.7m付近のTH-47覆土中 規模 0.23×0.18m
 特徴 TH-47を覆う覆土(C盛土)で確認した。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-52 (図IV-277、表IV-3)

位置 D 4 立地 標高24.7m付近の盛土中 規模 0.87×0.42m
 特徴 B盛土を掘り下げていたところ、下部で確認した。杭列1-杭穴23の覆土上部を構成している可能性が高く、杭列がB盛土層堆積中に存在していたことを示す。焼土ブロックの集合体の

ため、異地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-53 (図IV-277、表IV-3)

位置 H 9 立地 標高23.7m付近のTH-23 (旧) 覆土中 規模 0.65×0.52m

特徴 TH-23 (旧) を覆う覆土 (C盛土) で確認した。層界不明瞭で、断面皿状となるため、現地性の焼土とみられる。骨角器3点出土。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-54 (図IV-277、表IV-3)

位置 F 4 立地 標高25.0m付近の盛土中 規模 1.02×(0.48)m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、下部で確認した。層界不明瞭で、断面皿状となるため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-56 (図IV-276、表IV-3)

位置 C・D 4 立地 標高24.6m付近の盛土中 規模 0.47×0.45m

特徴 B盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-58 (図IV-277、表IV-3)

位置 E 4 立地 標高24.9m付近の盛土中 規模 0.68×0.52m

特徴 B盛土を掘り下げていたところで確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-59 (図IV-278、表IV-3)

位置 F 8 立地 標高23.9m付近の盛土中 規模 0.50×0.31m

特徴 TH-8 (新) を覆う覆土 (C盛土) を掘り下げていたところで確認した。焼土自体は不明瞭であるが、L字形に3点の扁平礫で囲われている。礫には被熱痕があるので、方形の石囲炉であったと推定される。

時 期 出土遺物では縄文時代前期末葉であるが、状況から後期前葉の可能性もある。 (福井)

TF-60 (図IV-278、表IV-3)

位置 D 3 立地 標高24.9m付近の盛土中 規模 0.58×0.57m

特徴 B盛土を掘り下げていたところで確認した。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-62 (図IV-278、表IV-3)

位置 H 8 **立地** 標高23.7m付近のTH-30(新)覆土中 **規模** 0.43×0.32m
特徴 TH-30(新)を覆う覆土(C盛土)で確認した。層界明瞭で、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-63 (図IV-278、表IV-3)

位置 D 4 **立地** 標高24.9m付近の盛土中 **規模** 0.58×(0.20)m
特徴 B盛土を掘り下げていたところを確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-64 (図IV-278、表IV-3)

位置 E 8 **立地** 標高23.9m付近のTH-39覆土中 **規模** 0.68×(0.45)m
特徴 TH-39を覆う覆土(C盛土)で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 出土遺物から縄文時代中期中葉のものとみられる。 (福井)

TF-66 (図IV-279、表IV-3)

位置 E 5 **立地** 標高24.3m付近のⅢ層上面 **規模** 0.72×0.30m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-68 (図IV-279、表IV-3)

位置 E 4 **立地** 標高24.7m付近の盛土中 **規模** 0.37×0.23m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。上位に灰層も堆積する。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-69 (図IV-279、表IV-3)

位置 E 4 **立地** 標高24.6m付近の盛土中 **規模** 0.50×0.41m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。層界明瞭のため、異地性の焼土とみられる。上位に灰層も堆積する。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-72 (図IV-279、表IV-3)

位置 E・F 3 **立地** 標高25.1m付近の盛土中 **規模** 0.53×0.46m
特徴 TP-136を覆う覆土(B盛土)で確認した。層界明瞭のため、異地性の焼土とみられる。焼骨を多く含んでいる。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-73 (図IV-279、表IV-3)

位置 C 3 立地 標高24.5m付近の盛土中 規模 0.42×(0.20)m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-74 (図IV-280、表IV-3)

位置 C 3 立地 標高24.2m付近のⅢ層上面 規模 0.70×0.47m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。上位には灰層も堆積していた。骨角器2点出土。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-75 (図IV-280、表IV-3)

位置 E 6 立地 標高27.3m付近のTH-35覆土中 規模 0.56×0.42m

特徴 TH-35覆土を掘り下げていたところ、確認した。灰層が伴うことから、現地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代後期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-76 (図IV-280、表IV-3)

位置 H 4 立地 標高25.0m付近の盛土中 規模 1.02×0.64m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。骨角器1点出土。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-77 (図IV-280、表IV-3)

位置 H 4 立地 標高24.7m付近の盛土中 規模 0.43×0.33m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭であるが、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-78 (図IV-280、表IV-3、図版192)

位置 H 4 立地 標高24.9m付近の盛土中 規模 0.57×0.43m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。アシカ類尺骨などが伴っていた。厚い純粋な焼土が堆積していたが、掘り下げてしまったので、詳細不明。

時 期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TF-80 (図IV-281、表IV-3)

位置 C・D 8 立地 標高23.9m付近の盛土中 規模 0.72×0.58m

特徴 C盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭で、上位に灰層伴うことから、現

地性の焼土とみられる。

時 期 出土遺物から縄文時代中期中葉のものとみられる。 (福井)

TF-81 (図IV-281、表IV-3)

位置 D 8 立地 標高23.9m付近の盛土中 規模 1.00×0.75m

特徴 C盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭で、厚い焼土が形成されるため、現地性の焼土とみられる。上位に小礫の集中を伴う。

時 期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TF-82 (図IV-281、表IV-3)

位置 G 4 立地 標高24.7m付近のⅢ層上面 規模 0.38×0.23m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面確認した。層界明瞭のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-84 (図IV-281、表IV-3)

位置 G 4 立地 標高24.6m付近のⅢ層上面 規模 0.56×(0.49)m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。上位には灰層も堆積していた。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-85 (図IV-281、表IV-3)

位置 G 4 立地 標高24.7m付近のⅢ層上面 規模 0.31×0.22m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面で確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-86 (図IV-281、表IV-3)

位置 E 3 立地 標高24.8m付近の盛土中 規模 0.52×0.50m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ確認した。層界不明瞭ながら、焼土粒、炭化木片の集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TF-87 (図IV-282、表IV-3)

位置 C 4 立地 標高24.4m付近の盛土中 規模 0.42×0.21m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期初頭のものとみられる。 (福井)

TF-88 (図IV-282、表IV-3)

位置 I 4 立地 標高24.5m付近の盛土中 規模 1.56×0.88m
特徴 A盛土を掘り下げていたところ、確認した。TH-10覆土上層中に堆積している。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-89 (図IV-282、表IV-3)

位置 I 4 立地 標高24.5m付近の盛土中 規模 0.19×0.15m
特徴 A盛土を掘り下げていたところ、確認した。TH-10覆土上層中に堆積している。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-90 (図IV-282、表IV-3)

位置 D 5 立地 標高24.1m付近の盛土中 規模 1.04×0.60m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-91 (図IV-282、表IV-3)

位置 H 4 立地 標高24.6m付近の盛土中 規模 0.36×0.25m
特徴 A盛土を掘り下げていたところ、確認した。TH-10覆土上層中に堆積している。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-92 (図IV-282、表IV-3)

位置 H 4 立地 標高24.6m付近の盛土中 規模 0.62×0.42m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。(福井)

TF-93 (図IV-283、表IV-3)

位置 F 4 立地 標高24.8m付近の盛土中 規模 0.61×0.36m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界明瞭のため、異地性の焼土とみられる。
時期 出土遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-94 (図IV-283、表IV-3)

位置 D 6 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.66×0.61m
特徴 C盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-95 (図IV-283、表IV-3)

位置 G 6 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.48×0.37m
 特徴 C盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。(福井)

TF-96 (図IV-283、表IV-3)

位置 C 4 立地 標高24.3m付近の盛土中 規模 0.40×0.34m
 特徴 A盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-97 (図IV-283、表IV-3)

位置 D 4 立地 標高24.4m付近の盛土中 規模 0.30×0.22m
 特徴 A盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-98 (図IV-284、表IV-3)

位置 E 4 立地 標高24.5m付近の盛土中 規模 0.28×0.28m
 特徴 A盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界明瞭のため、異地性の焼土とみられる。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TF-99 (図IV-284、表IV-3)

位置 E 11 立地 標高23.7mのTH-13覆土中 規模 (1.10)×0.54m
 特徴 南北に設定したメイントレンチの北端で検出した。当初TH-1の炉跡とされたものである。周囲を掘り下げた結果、TH-13の南端覆土上に位置するものであることがわかった。土層は、焼土粒子の混じる黒～暗褐色土であり、移動した焼土とみられる。土層の観察からは、不規則なくほみの覆土中にあたり、自然攪乱にともなう層位の乱れである可能性もある。
 時期 不明であるが、縄文時代のものとみられる。(立田)

TF-100 (図IV-284、表IV-3)

位置 E 2 立地 標高25.5m付近の盛土中 規模 0.36×0.22m
 特徴 B・C盛土を掘り下げていたところ、TF-102・103とともに確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
 時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期円筒上層b式のものとしてみられる。(影浦)

TF-101 (図IV-284、表IV-3)

位置 D 2・3 立地 標高25.7m付近の盛土中 規模 0.68×0.66m
 特徴 B・C盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期円筒上層b式のものと思われる。(影浦)

TF-102 (図IV-284、表IV-3、図版192)

位置 E 2 立地 標高25.45m付近の盛土中 規模 0.41×0.38m

特徴 B・C盛土を掘り下げていたところ、TF-100・103とともに確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期円筒上層b式のものと思われる。(影浦)

TF-103 (図IV-284、表IV-3)

位置 E 2 立地 標高25.45m付近の盛土中 規模 0.52×0.40m

特徴 B・C盛土を掘り下げていたところ、TF-100・102とともに確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期円筒上層b式のものと思われる。(影浦)

TF-104 (図IV-285、表IV-3)

位置 D 2 立地 標高25.45m付近の盛土中 規模 0.72×0.45m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期円筒上層b式のものと思われる。(影浦)

TF-105 (図IV-285、表IV-3)

位置 B 11・C 11 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 1.30×0.66m

特徴 D盛土・Ⅲ層上部を掘り下げていたところ、TF-106・107・109とともに確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものと思われる。(影浦)

TF-106 (図IV-285、表IV-3)

位置 C 11 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.66×0.36m

特徴 D盛土・Ⅲ層上部を掘り下げていたところ、TF-105・107・109とともに確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものと思われる。(影浦)

TF-107 (図IV-285、表IV-3)

位置 C 10 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.74×0.52m

特徴 D盛土・Ⅲ層上部を掘り下げていたところ、TF-105・106・109とともに確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものと思われる。(影浦)

TF-108 (図IV-286、表IV-3)

位置 D 2・E 2 立地 標高25.2m付近の盛土中 規模 2.60×1.43m

特 徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 検出した盛土層位と直上で出土した土器から縄文時代中期初頭の円筒上層 a 式段階のものとみられる。(影浦)

TF-109 (図IV-285、表IV-3)

位 置 B 11 **立 地** 標高24.05m付近の盛土中 **規 模** 1.56×0.70m

特 徴 D盛土・Ⅲ層上部を掘り下げていたところ、TF-105・106・107とともに確認した。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものとみられる。(影浦)

TF-110 (図IV-287、表IV-3)

位 置 B 11 **立 地** 標高24.15m付近の盛土中 **規 模** (0.58)×0.53m

特 徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-111・113・116・119とともに確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。なお、上面に小礫のまばらな散布があったが、焼けているものではなかった。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性がある。(影浦)

TF-111 (図IV-287、表IV-3)

位 置 C 12 **立 地** 標高24.15m付近の盛土中 **規 模** 0.84×0.69m

特 徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-110・113・116・119とともに確認した。近接するTF-113と同じ焼土のまとまりであった可能性が高い。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性がある。(影浦)

TF-112 (図IV-286、表IV-3、図版192)

位 置 E 2 **立 地** 標高24.75m付近の盛土中 **規 模** 0.50×0.27m

特 徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。後世の木の根痕によって一部モザイク化しているが、間に炭層も一枚入っており、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。円筒下層 d 2式段階の可能性が高い。(影浦)

TF-113 (図IV-287、表IV-3)

位 置 C 12 **立 地** 標高24.1m付近の盛土中 **規 模** 0.68×0.46m

特 徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-110・111・114・116・119とともに確認した。近接するTF-111と同じ焼土のまとまりであった可能性が高い。層界不明瞭のため、現地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性がある。(影浦)

TF-114 (図IV-287、表IV-3)

位置 C 12 立地 標高24.2m付近の盛土中 規模 1.64×0.68m
特徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-110・111・113・115・116・119とともに確認した。焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性ある。(影浦)

TF-115 (図IV-287、表IV-3)

位置 B 12 立地 標高24.3m付近の盛土中 規模 (1.10)×0.60m
特徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-110・111・113・114・116・119とともに確認した。焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性ある。(影浦)

TF-116 (図IV-287、表IV-3)

位置 B 12・C 12 立地 標高24.15m付近の盛土中 規模 0.55×0.46m
特徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-110・111・113～115・119とともに確認した。現地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性ある。(影浦)

TF-117 (図IV-286、表IV-3)

位置 E 1・2 立地 標高24.65m付近の盛土中 規模 0.81×0.40m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代中期初頭のものともみられる。(影浦)

TF-118 (図IV-286、表IV-3)

位置 E 2・3 立地 標高24.65m付近の盛土中 規模 0.66×0.64m
特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉、円筒下層d 2式のものともみられる。(影浦)

TF-119 (図IV-287、表IV-3)

位置 C 12 立地 標高24.1m付近の盛土中 規模 0.56×0.21m
特徴 C盛土を掘り下げていたところ、TF-110・111・113～116とともに確認した。焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。
時期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性ある。(影浦)

TF-120 (図IV-288、表IV-3)

位置 D・E 1 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.42×0.38m
特徴 A盛土を掘り下げていたところ、TF-121とともに確認した。堆積状況から現地性の焼土とみられる。骨片が比較的多く入り込んでいた。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(影浦)

TF-121 (図IV-288、表IV-3、図版192)

位置 E 1 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.86×0.52m

特徴 A盛土を掘り下げていたところ、TF-120とともに確認した。上面には灰層が載っていた。堆積状況から現地性の焼土とみられる。骨片が比較的多く入り込んでいた。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。(影浦)

TF-122 (図IV-288、表IV-3)

位置 E 2 立地 標高23.9m付近の盛土中 規模 0.32×0.20m

特徴 III層を掘り下げていたところ、TF-123とともに確認した。堆積状況から現地性の焼土とみられる。焼骨もまとまった量が入っていた。

時 期 検出層位と周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。円筒下層d 1式の可能性が高い。(影浦)

TF-123 (図IV-288、表IV-3)

位置 E 2 立地 標高23.9m付近の盛土中 規模 0.26×0.19m

特徴 III層を掘り下げていたところ、TF-122とともに確認した。堆積状況から現地性の焼土とみられる。焼骨もまとまった量が入っていた。

時 期 検出層位と周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。円筒下層d 1式の可能性が高い。(影浦)

TF-124 (図IV-288、表IV-3)

位置 F 2 立地 標高24.0m付近の盛土中 規模 0.42×0.23m

特徴 III層を掘り下げていたところ、確認した。堆積状況から現地性の焼土とみられる。

時 期 検出層位と周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉のものとみられる。円筒下層d 1式の可能性が高い。(影浦)

TF-125 (図IV-288、表IV-3)

位置 C・D 1 立地 標高24.6m付近の盛土中 規模 0.61×0.32m

特徴 B盛土を掘り下げていたところ、確認した。層界不明瞭ながら、焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲で出土遺物から、縄文時代前期末葉、円筒下層d 2式段階のものとみられる。(影浦)

TF-126 (図IV-288、表IV-3)

位置 B 12 立地 標高24.8m付近の盛土中 規模 1.09×0.86m

特徴 C盛土を掘り下げていたところ、確認した。焼土ブロックの集合体のため、異地性の焼土とみられる。

時 期 周囲の出土遺物から、縄文時代前期末葉～中期前半の可能性がある。(影浦)

8 集石 (図Ⅳ-289~292、表Ⅳ-4)

TS-1 (図Ⅳ-290、表Ⅳ-4)

位置 H 7 **立地** 標高25.0m付近のC盛土中 **規模** 0.71×0.67m
特徴 南北トレンチを調査中に確認した。概ね径7cm以下の砂粒の集中域である。60cm四方の狭い範囲に集中している。約1m北にはTS-3が位置している。
時期 不明であるが、検出層位から縄文時代のもともみられる。 (立田)

TS-3 (図Ⅳ-290表Ⅳ-4、図版192)

位置 G 7 **立地** 標高24.5m付近のC盛土中 **規模** 0.68×(0.52)m
特徴 南北トレンチを調査中に確認した。概ね径2cm以下の砂粒の集中域である。約1m南にはTS-1が位置している。
時期 不明であるが、検出層位から縄文時代のもともみられる。 (立田)

TS-4 (図Ⅳ-290、表Ⅳ-4、図版192)

位置 N 9 **立地** 標高24.0m付近のTH-4覆土中 **規模** (1.00)×0.98m
特徴 メイントレンチのN9区を調査中に検出した。試掘調査により南側を欠失するが、検出できた範囲では東西に帯状に広がる、径20cm以下の円礫の集中である。
時期 不明であるが、検出層位から縄文時代のもともみられる。 (立田)

TS-5 (図Ⅳ-290、表Ⅳ-4)

位置 F 4 **立地** 標高24.7m付近のB盛土中 **規模** 0.49×0.25m
特徴 初期に設定したメイントレンチ掘削時に、B盛土層最下部で礫のまとまりを検出した。礫は扁平な楕円形の中礫。
時期 不明であるが、検出層位から縄文時代前期末葉～中期前葉のもともみられる。 (福井)

TS-6 (図Ⅳ-290、表Ⅳ-4)

位置 D 8 **立地** 標高23.9m付近のD盛土下位 **規模** 0.66×0.48m
特徴 D盛土層を掘り下げたところ、削平されたV層上面で礫のまとまりを検出した。中央にやや巨大な凝灰岩礫が風化したことで大礫の集合となっている。その周囲を、安山岩、砂岩、泥岩の円礫が巡っている。
時期 不明であるが、検出層位から縄文時代後期前葉のもともみられる。 (福井)

TS-7 (図Ⅳ-290、表Ⅳ-4、図版192)

位置 O 10 **立地** 標高23.0m付近のTH-2覆土中 **規模** (1.28)×0.84m
特徴 TH-2覆土掘り下げ中、礫のまとまりを検出した。まとまりは、比較的均質な覆土下層上面に広がっており、B盛土層からなる覆土上層に覆われる。礫は円礫で、小～大礫主体。似たような状況は、TH-4にもみられた。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のもともみられる。 (福井)

TS-8 (図IV-291、表IV-4)

位置 G 8 **立地** 標高24.1m付近のC盛土中 **規模** 0.42×0.31m
特徴 C盛土掘り下げ中、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、小礫主体。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中期中葉のものとみられる。 (福井)

TS-9 (図IV-291、表IV-4)

位置 J・K 4 **立地** 標高24.4m付近のB盛土中 **規模** 0.96×0.32m
特徴 TH-11の覆土上にあたるm 2(2)下b層を掘削中に確認した。概ね径5cm以下の扁平な円礫の集中である。個体番号177番と同一面で検出した。
時期 検出層位から、縄文時代前期後半、円筒土器下層d 1式期とみられる。 (立田)

TS-10 (図版192、表IV-4)

位置 K 5
特徴 住居跡覆土中で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、中礫主体。被熱したものを含む。
時期 周辺の遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。 (福井)

TS-12 (図IV-291、表IV-4、図版192)

位置 J 10 **立地** 標高23.5m付近の道路跡隣接地 **規模** 1.32×0.38m
特徴 削平されたV層上面で、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、大礫主体。掘り込みを伴うことから、TP-5と同様なものと考えた方がよいのかもしれない。また、配石列1の一端であった可能性もある。
時期 出土遺物から縄文時代後期前葉のものとみられる。 (福井)

TS-14 (表IV-4)

位置 F 7
特徴 C盛土上層で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、細～小礫主体。また、周囲には巨礫、巨岩が散在していた。
時期 周辺の遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-15 (表IV-4)

位置 H 8
特徴 C盛土上層で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、細～小礫主体。
時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-16 (表IV-4、図版192)

位置 F 6
特徴 B盛土中で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、小～中礫主体。
時期 周辺の遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-17 (図IV-291、表IV-4、図版193)

位置 D・E3・4 立地 標高25.0m付近のB盛土中 規模 4.42×4.22m

特徴 B盛土掘り下げ中に下部で、礫のまとまりをいくつか検出した。礫は円礫で、中礫主体。B盛土中には、濃集の度合いこそ多様だが、同様な礫が多数含まれていた。この集石については、そのサンプル的なものと考えていただきたい。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TS-18 (表IV-4、図版193)

位置 G8

特徴 C盛土上層で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、小～中礫主体。

時期 周辺の遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-19 (表IV-4)

位置 F8

特徴 C盛土上層で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、小～中礫主体。

時期 周辺の遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-20 (表IV-4、図版193)

位置 D4

特徴 B盛土中で、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、チャートの中～大礫主体。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-21 (表IV-4、図版193)

位置 D12

特徴 TH-13覆土上層で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、細～小礫主体。

時期 出土遺物から縄文時代中期前葉～中葉のものとみられる。 (福井)

TS-22 (表IV-4、図版193)

位置 C4

特徴 TH-45覆土下層で、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、細～小礫主体。

時期 周辺の遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TS-23 (表IV-4、図版193)

位置 C4

特徴 TH-45覆土下層で、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、細～小礫主体。

時期 周辺の遺物から縄文時代前期末葉～中期前葉のものとみられる。 (福井)

TS-24 (表IV-4、図版193)

位置 C7

特徴 TH-34覆土で、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、細～小礫主体。

時 期 周辺の遺物から縄文時代中期中葉のものとみられる。(福井)

TS-25 (表IV-4、図版193)

位置 D 3

特徴 B盛土下部で、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、中～大礫主体。

時 期 周辺の遺物から縄文時代前期末葉～中期中葉のものとみられる。(福井)

TS-26 (図IV-292、表IV-4、図版193)

位置 F 3 立地 標高25.0m付近のB盛土中 規模 0.76×0.55m

特徴 B盛土掘り下げ中に、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、小礫主体。

時 期 周辺の遺物から縄文時代前期末葉のものとみられる。(福井)

TS-27 (図IV-292、表IV-4、図版193)

位置 C・D 7 立地 標高23.7m付近のTH-39覆土中 規模 1.62×0.94m

特徴 TH-39掘り下げ中に、礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、小礫主体。異地性焼土を一部で伴う。

時 期 出土遺物から縄文時代中期中葉のものとみられる。(福井)

TS-29 (図IV-292、表IV-4、図版193)

位置 D 1 立地 標高25.1m付近のB盛土中 規模 3.90×1.00m

特徴 B盛土層を調査中に、礫のまとまりを検出した。礫は扁平な円礫で、小礫主体。異地性焼土粒と焼け礫を一部で伴う。

時 期 出土層位と周辺の遺物から縄文時代中期前葉、円筒上層a式の可能性が高い。(影浦)

TS-31 (図IV-292、表IV-4、図版194)

位置 F 3 立地 標高25.2m付近のB盛土中 規模 0.85×0.65m

特徴 B盛土層を調査中に、検出した。礫のまとまりを検出した。礫は円礫で、小礫主体。

時 期 出土遺物から縄文時代中期前葉のものとみられる。(福井)

9 フレイク集中 (図IV-289・293・294、表IV-4)

TFC-1 (図IV-293、表IV-4)

位置 O 6 立地 標高23.7m付近の平坦地 規模 1.68×0.96m

特徴 P盛土(「類掘り上げ土」・「m3層」)調査中に検出した。大形フレイクと中小フレイク・チップ93点からなる小群(TFC-1-1)、中形フレイクと小形フレイク28点からなる小群(TFC-1-2)、中形フレイク19点が散在し、Rフレイク1点・礫6点・土器小片を含む小群(TFC-1-3)、フレイク4点と礫3点からなる小群(TFC-1-4)が近接して残されていた。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。(福井)

TFC-2 (図IV-293、表IV-4)

位置 O 4 立地 標高23.8m付近の平坦地 規模 0.92×0.88m

特 徴 Ⅲ層上面を精査中に検出した。石核3点、Rフレイク5点、フレイク130点からなり、石材は全て頁岩である。

時 期 不明であるが、縄文時代のものとみられる。 (立田)

TFC-3 (図Ⅳ-293、表Ⅳ-4、図版194)

位 置 N7 **立 地** 標高24mの平坦地 **規 模** 2.12×0.86m

特 徴 Ⅲ層上面を精査中に検出した。頁岩、流紋岩のフレイク、流紋岩の石核等を主とする。

時 期 不明であるが、縄文時代のものとみられる。 (立田)

TFC-4 (表Ⅳ-4、図版194)

位 置 F4

特 徴 初期に設定したメイントレンチ中の、A盛土下部で検出した。大～小型フレイク3094点、Rフレイク3点、石槍又はナイフ1点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-5 (表Ⅳ-4、図版194)

位 置 M8

特 徴 TH-4覆土上部調査中に検出した。石核4点、大～小型フレイク310点、Rフレイク6点が出土。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-6 (図Ⅳ-293、表Ⅳ-4、図版194)

位 置 L6 **立 地** 標高24.5mのTH-5覆土中 **規 模** (0.70)×0.58m

特 徴 m2層調査中に検出した。頁岩のスクレイパー、両面調整石器、Rフレイク、石核、フレイクが出土。

時 期 縄文時代前期後半～中期前半とみられる。 (立田)

TFC-7 (表Ⅳ-4、図版194)

位 置 M7

特 徴 P'盛土層調査中に検出した。石槍又はナイフ1点、Rフレイク3点、石核1点、中～小型フレイク6479点、加工痕のある礫5点、礫4点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-8 (表Ⅳ-4、図版194)

位 置 N8

特 徴 TH-4覆土下層調査中に検出した。フレイク160点、石核2点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-9 (図Ⅳ-293、表Ⅳ-4、図版194)

位 置 J・K8・9 **立 地** 標高24.5～24.9m付近のTH-24覆土中 **規 模** 2.81×2.35m

特 徴 TH-24 覆土上層調査中に検出した。小型を主とするフレイク 29.134 点、石錐・つまみ付ナイフ・扁平打製石器各 1 点、石鏃・石槍又はナイフ・楔形石器・剥片石器片各 2 点、スクレイパー 6 点、両面調整石器 11 点、R フレイク 22 点、石核 24 点、礫 4 点が出土。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-10 (図IV-293、表IV-4、図版194)

位 置 K 8・9 **立 地** 標高 24.2~24.4 m 付近の平坦地 **規 模** 1.34 × 0.61 m

特 徴 B 盛土層下部調査中に検出した。中型を主とするフレイク 1963 点、石錐・R フレイク 各 1 点、両面調整石器 5 点、石核 2 点が出土。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-11 (表IV-4、図版194)

位 置 K 7

特 徴 B 盛土上層調査中に検出した。大~小型フレイク 4387 点、スクレイパー 1 点などからなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉~中期前葉とみられる。 (福井)

TFC-12 (図IV-293、表IV-4)

位 置 K 8 **立 地** 標高 24.3 m 付近の平坦地 **規 模** 0.71 × 0.69 m

特 徴 B 盛土上層調査中に検出した。大~小型フレイク 2398 点、つまみ付ナイフ 1 点、R フレイク 6 点、石核 2 点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉~中期前葉とみられる。 (福井)

TFC-13 (表IV-4)

位 置 K 8

特 徴 B 盛土上層調査中に検出した。大~小型フレイク 103 点、石核 1 点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉~中期前葉とみられる。 (福井)

TFC-14 (図IV-294、表IV-4、図版194)

位 置 J・K 3

特 徴 K 4 杭周辺の m 2 (2) 下層を調査中に検出した。頁岩のフレイク・チップの集中である。

時 期 検出層位から、縄文時代前期後半、円筒土器下層 d 1 式期とみられる。 (立田)

TFC-15 (図IV-294、表IV-4)

位 置 I 8・9 **立 地** 標高 23.7~23.9 m 付近の TH-22 覆土中 **規 模** (0.94) × 0.68 m

特 徴 TH-22 覆土下層調査中に検出した。フレイク 282 点、石核 1 点、スクレイパー 6 点、両面調整石器 1 点、R フレイク 5 点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉~中期前葉とみられる。 (福井)

TFC-16 (表Ⅳ-4)

位置 K 8

特徴 TP-24覆土調査中に検出した。フレイク14740点、石核1点、両面調整石器7点、Rフレイク4点、礫1点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-17 (表Ⅳ-4)

位置 K 8

特徴 TP-24覆土調査中に検出した。フレイク33点、石核1点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-18 (図Ⅳ-294、表Ⅳ-4)

位置 K 3 立地 標高24.3mのTP-15覆土中 規模 0.45×0.34 m

特徴 TP-15の調査中に検出した。土層断面の9層にあたる、廃絶直後のくぼみに形成されるフレイク・チップ集中域である。

時期 同一層の遺物から、縄文時代前期後半、円筒土器下層 d 1 式期とみられる。 (立田)

TFC-19 (図Ⅳ-294、表Ⅳ-4)

位置 I 5

特徴 北西～南東方向に設定されたメインベルトを除去中に検出した。頁岩フレイクの小規模な集中である。詳細な記録を作成しなかったが、検出状況から m 2 (3)～(6) 層中のものとみられる。

時期 検出層位から、縄文時代前期後半円筒土器下層 d 式期とみられる。 (立田)

TFC-20 (図Ⅳ-294、表Ⅳ-4、図版195)

位置 K 6 立地 標高24.7m付近の平坦地 規模 0.95×0.28 m

TFC-21 (図Ⅳ-294、表Ⅳ-4、図版195)

位置 I・J 5・6 立地 標高24.6m付近の平坦地 規模 1.32×0.34 m

特徴 m 2 (3)～(6)層を調査中に検出した。いずれも TH-3 に隣接する頁岩フレイクを主とする集中域である。TFC-20は南東に、21は北西側に住居の輪郭に沿って位置し、1～1.4m程度の帯状に広がっている。

時期 同一層の遺物から、縄文時代前期後半、円筒上層 d 2 式期とみられる。 (立田)

TFC-22 (表Ⅳ-4)

位置 F 4

特徴 B 盛土下部調査中に検出した。大形を主とするフレイク30点、石核1点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-23 (表Ⅳ-4、図版195)

位置 E 7

特 徴 C盛土下層調査中に検出した。中～小型を主とするフレイク1.405点、石核5点、スクレイパー7点、Rフレイク2点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代中期前葉とみられる。(福井)

TFC-24 (表IV-4)

位 置 E7

特 徴 C盛土下層調査中に検出した。中～小型を主とするフレイク4.685点、両面調整石器1点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代中期前葉とみられる。(福井)

TFC-25 (表IV-4、図版195)

位 置 G3

特 徴 B盛土層下部調査中に検出した。中～小型を主とするフレイク27.702点、スクレイパー3点、石鏃1点、両面調整石器4点、石核8点、Rフレイク4点、石斧1点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。(福井)

TFC-26 (表IV-4、図版195)

位 置 G3

特 徴 B盛土層下部調査中に検出した。中～小型主体のフレイク4.492点、Rフレイク1点、扁平打製石器2点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。(福井)

TFC-27 (表IV-4、図版195)

位 置 E3

特 徴 B盛土層下部調査中に検出した。中形主体のフレイク253点、石核3点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。(福井)

TFC-28 (表IV-4)

位 置 F3

特 徴 B盛土調査中に検出した。フレイク102点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。(福井)

TFC-29 (表IV-4、図版195)

位 置 F8

特 徴 C盛土調査中に検出した。小型の黒曜石製フレイク85点が出土。

時 期 検出層位から、縄文時代中期前葉とみられる。(福井)

TFC-30 (表IV-4)

位 置 F4

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。中～小型を主とするフレイク1.058点、石核4点、石鏃

1点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-31 (図IV-294、表IV-4、図版195)

位 置 H・I 4 立 地 標高24.6m付近の平坦地 規 模 1.64×0.98 m

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。中～小型主体のフレイク2,088点、石核6点、石錐1点、スクレイパー2点、両面調整石器3点、Rフレイク8点、石斧1点、礫3点が出土。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-32 (表IV-4、図版195)

位 置 F 3

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク5,922点、石核2点、Rフレイク1点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-33 (表IV-4、図版195)

位 置 E 3

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク687点、石核1点、筈状石器1点、Rフレイク1点が出土。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-34 (表IV-4、図版195)

位 置 F 3

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク1,951点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-35 (表IV-4)

位 置 E 3

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク61点、石核1点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉とみられる。 (福井)

TFC-36 (表IV-4、図版195)

位 置 H 6

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。小型を主としたフレイク169点、石礫1点、スクレイパー2点、Rフレイク2点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。 (福井)

TFC-37 (表IV-4、図版196)

位 置 H 6

特 徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク46点からなる。

時 期 検出層位から、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。 (福井)

TFC-38 (表IV-4)

位置 I 5

特徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク1678点、石錐・Rフレイク各1点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。(福井)

TFC-39 (表IV-4、図版196)

位置 C 3

特徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク2660点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。(福井)

TFC-40 (表IV-4、図版196)

位置 C 4・5

特徴 B盛土下部調査中に検出した。フレイク8点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉～中期前葉とみられる。(福井)

TFC-41 (表IV-4、図版196)

位置 D 2

特徴 A・B盛土層を調査中に検出した。フレイク1,335点、石核2点、スクレイパー1点、両面調整石器1点、原石1点、礫1点が出土。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d 2式のものともみられる。(影浦)

TFC-42 (表IV-4、図版196)

位置 D 2

特徴 A・B盛土層を調査中に、TFC-43とともに検出した。フレイク144点、石核12点、Rフレイク1点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d 2式のものともみられる。(影浦)

TFC-43 (表IV-4、図版196)

位置 D 2

特徴 A・B盛土層を調査中に、TFC-42とともに検出した。フレイク152点、石核2点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d 2式のものともみられる。(影浦)

TFC-44 (表IV-4、図版196)

位置 E 2

特徴 B盛土層を調査中に、TFC-45とともに検出した。フレイク318点、石核2点、Rフレイク2点が出土。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d 2式のものともみられる。(影浦)

TFC-45 (表Ⅳ-4、図版196)

位置 E2

特徴 B盛土層を調査中に、TFC-44とともに検出した。フレイク580点、Rフレイク8点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d2式のものと思われる。(影浦)

TFC-46 (表Ⅳ-4、図版196)

位置 D1

特徴 A・B盛土層を調査中に、検出した。フレイク829点、Rフレイク4点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d2式のものと思われる。(影浦)

TFC-47 (図Ⅳ-294、表Ⅳ-4、図版196)

位置 J2 立地 標高23.7m付近の平坦地 規模 1.20×0.71m

特徴 TH-54覆土下層において検出した。位置的には床面に近く、下部は柱穴痕に接している。フレイク7555点、石核4点、スクレイパー1点、Rフレイク3点、石斧1点、礫5点からなる。

時期 検出住居と層位、周辺の出土遺物から、縄文時代前期末葉、円筒下層d1式のものと思われる。(影浦)

TFC-48 (表Ⅳ-4、図版196)

位置 F2

特徴 B盛土層を調査中に、検出した。フレイク1270点、石核2点、石鏃1点、スクレイパー1点、両面調整石器1点、Rフレイク20点からなる。

時期 検出層位から、縄文時代前期末葉、円筒下層d1式のものと思われる。(影浦)

10 小ピット (図Ⅳ-295~334、表Ⅳ-5、図版197・198)

小ピットは、I6・7区とその周辺に集中する。ここでは1グリッドあたり10基以上、最大45基が確認された。これは、この地点に掘り込みの浅い住居が複数存在したためと考えているが、確認できたのはTH-27に限られ、不明な点が多いことから小ピットとして個別に記録した。一方、ほかでは、各グリッドとも10基未満が確認されたに過ぎない。これら小ピットは、6割以上が自然堆積層で確認されたものであるが、残りは堅穴住居跡の覆土や床面、盛土層などで確認された。堅穴住居の床面で検出したものは、上面にローム土が貼られるなどしていたものがあったことから、直接その住居と関係がないとみられるものである。したがって、掘立柱建物であった可能性も残るが、確認できなかった住居の柱穴を構成していた可能性が高い。つまり、ほとんどが増改築の過程で埋められた住居柱穴跡と考えている。

11 埋設土器 (図Ⅳ-330、表Ⅳ-4)

埋設土器-1 (図Ⅳ-330、表Ⅳ-4)

位置 H6 立地 標高24.6m付近の平坦地 規模 0.20×0.20m

特徴 III層黒色土上面付近まで掘り下げ、精査したところ検出した。IV層上面に達する小規模な土坑掘削後、さらにIV層中に土器が入る大きさの穴を掘り込み、円筒土器下層d1式を埋め込んで

いる。

時期 出土遺物から、縄文時代前期末葉である。

(福井)

12 杭列 (図Ⅳ-295・296・335~337、表Ⅳ-5、図版199)

E3~G4区にかけてのⅢ層上面で検出した列状をなす小ピットを、ほかの小ピットとは区別するため杭列として記載する。検出はⅢ-3層上面で、黒色土に円形をした黒褐色土の列として確認することができた。ただし、掘り込み面は、TF-52断面によって、盛土中からであったことが分かる。また、杭列2や、杭列1の13以降の深さが相対的に浅く、漸移層であるⅣ層に達するか否かの規模であることも、より上層からの掘り込みであることの根拠と言える。また、杭列2の方が、杭列1より相対的に浅く、覆土のしまりも弱いものが目立つことから、盛土層の厚さが増した位置から構築されたと考えることができる。したがって、これら杭列は土留めのような目的を持って構築されたと推定することができる。なお、杭列1-1・6・8・9や杭列2-3などの断面をみると逆台形状を呈しており、これらは打込み柱ではなく、掘立柱であることが分かる。

13 配石列 (図Ⅳ-338~347、表Ⅳ-4、図版200~202)

配石列は、大きくは3条認められた。道路跡を挟むようにして南西側の列を配石列1、北東側の列を配石列3とし、西盛土の肩の部分の列を配石列2とした。ただし、明瞭に列と呼べる部分は、配石列1の一面で、ほかは列状に巨礫・大礫が点在している状況であった。

配石列1のうち、D8・9・E9区では、主に扁平な凝灰岩礫の長辺が露出するように連続的に埋め込まれていた。図や写真を見ると、小片の集合に見えるが、実際にはもともと長さ40cm前後、厚さ20cm前後あったものが、風化によって細かく割れてしまったものと推定される。ほかの部分では、単発的に数個の礫が埋め込まれ、そこに中礫や土石器が伴うような状態であった。また、F9区のように細礫・小礫が集中する地点もあった。

配石列3のE11区杭附近には安山岩の巨礫が散在したが、m1層中に含まれるものがほとんどで、斜斜の状態出土した。したがって、当初は立石であったかもしれない。

配石列2のD4・E4区も似たような状態であった。ただし、こちらの礫はほとんどが「寝た」状態であった。

これら配石列は、中期前葉の盛土上部ないし、中期前~中葉の廃絶住居上位に構築されていた。そのうち、配石列1・3は、縄文時代後期前葉の遺物とともに確認された。したがって、これら配石列は、後期前葉に中期中葉以前に形成された人為的地形を利用して構築されたものとみられる。配石列2に関しては、盛土中に含まれており、土器も中期前葉~中葉のものが伴っている。盛土層中に含まれる礫の状況とを考えていただければと思う。

14 道路跡 (図Ⅳ-338・348・349、表Ⅳ-4、図版200・202)

道路跡は、路面がC9・D9・10・E9・10・F10・G10・11・H10・11・I11・J11区に広がっていた。路面幅はおよそ2~2.5m。当時の地表面とみられるⅢ-3層黒色土上面の標高が約24.3~24.0m、道路跡路面の標高は23.17~23.58mで、0.4~1.13cmの比高がある。海側の方がより深く掘削されているようである。路面は、ローム層を掘り込んだのち、整地しており、黒褐色土のブロックを含んだ土が堆積していた。路面は硬くしまり、住居床面に見られるような斑状構造がみられた。斑状構造は、生物攪乱によって生じたものではなく、繰り返される踏み固めによって生じたものと考えて

いる。その上位には、部分的にローム粒を含んだ人為堆積層やごく少量の遺物小片もみられたが、ほとんどで自然堆積層が厚く堆積していた。しかも、自然堆積層下部では腐植が発達せず、褐色土の状態であった。また、道路面にはっきりと掛かる遺構は少なく、TH-28（前期末葉～中期前葉）やTP-47（後期前葉）がみられた程度であった。TH-28の道路に掛かる壁の高さや主軸方向からみると、前期末葉～中期前葉段階には道路跡は存在したが、まだ確認されたほどの深さはなかったものと考えられる。それが、中期中葉の遺跡断絶直前には、確認された深さまで掘削、整地されていたものとみられる。さらに後期前葉の段階でも、道路面に遺物や土壌の堆積はほとんどなく、路面に至る緩斜面に土坑が構築される。あるいは「清浄地」とされたのは、後期前葉段階かも知れない。（福井）

15 防空壕跡（図IV-350～353、表IV-4、図版203）

防空壕跡-1（図IV-351、表IV-2）

位置 J・K10 **立地** 標高24.9m付近の緩斜面 **規模** 3.10/2.38×1.92/1.75×1.45m
特徴 盛土層上面の傾斜を利用して半掘り込み式の防空壕跡が構築されていた。基本構造は2×2間の6本柱とみられるが、奥側にもう2本柱が追加されている。入り口が北東側にあり、外側に一段のステップが形成されている。柱間は、入り口側で広く、壁に埋め込まれるようになっていた。
時期 太平洋戦争時のものとみられる。（福井）

防空壕跡-2（図IV-352、表IV-4）

位置 G9 **立地** 標高24.4m付近の平坦面 **規模** 2.97/1.92×1.53/1.27×1.45m
特徴 盛土層上面から掘り込み式の防空壕跡が構築されていた。柱は不明瞭で、入り口側にその痕跡がみられた。入り口が北東側にあり、外側に一段のステップが形成されている。
時期 太平洋戦争時のものとみられる。（福井）

防空壕跡-3（図IV-352、表IV-4）

位置 E6・7 **立地** 標高24.3m付近の平坦面 **規模** 2.35/1.65×1.78/1.62×1.15m
特徴 盛土層上面から掘り込み式の防空壕跡が構築されていた。柱は4本確認されたが、その位置から6本柱構造とみられる。しかし、入り口側に柱は確認されなかった。入り口が北東側にあり、外側に大きく一段のステップが形成されている。ステップにはさらに掘り込みを作り、階段状にしている。また、居室入り口部分は一段深く掘り窪められていた。
時期 太平洋戦争時のものとみられる。（福井）

防空壕跡-4（図IV-353、表IV-4）

位置 N・O3・4 **立地** 標高24.6m付近の平坦面 **規模** (3.40)/2.96×2.06/1.94×0.84m
時期 太平洋戦争時のものとみられる。（立田）

防空壕跡-5（図IV-353、表IV-4）

位置 B11・12 **立地** 標高24.7m付近の平坦面 **規模** (2.24)×(0.70)×0.72m
時期 太平洋戦争時のものとみられる。（中山）

16 塹壕跡 (図Ⅳ-350・354・355、表Ⅳ-4、図版203)

塹壕跡(上位幅1.10~1.30m、下位幅0.50~0.60m、深さ約1.10m)は、調査区内においてコの字形(幅約45m)に確認された。この地点には、太平洋戦争時、津軽海峡警備のため監視哨が設けられていたと、地元の方から聞かされた。あるいは、吉岡監視哨であったと考えられる。この施設は、縄文時代の盛土遺構によって形成された地形を利用したとみられる。この塹壕跡は、その監視哨に関連して構築されたものであろう。調査当初、穂内館に関する溝の可能性も考えられたが、表土直下からの掘り込みであることを確認した。

海側の塹壕跡はごく緩くジグザグに掘削されていた。断面をみると、最終的に埋め戻された際の土のうち、海側にローム層由来土が多くあるので、排土をあるいは土嚢に入れて海側に積んでいたようであった。両側の塹壕跡は、北西側の調査区外へ延びていた。いずれも盛土遺構の内側斜面に構築されていた。(福井)

表Ⅳ-3 遺構一覧(焼土)

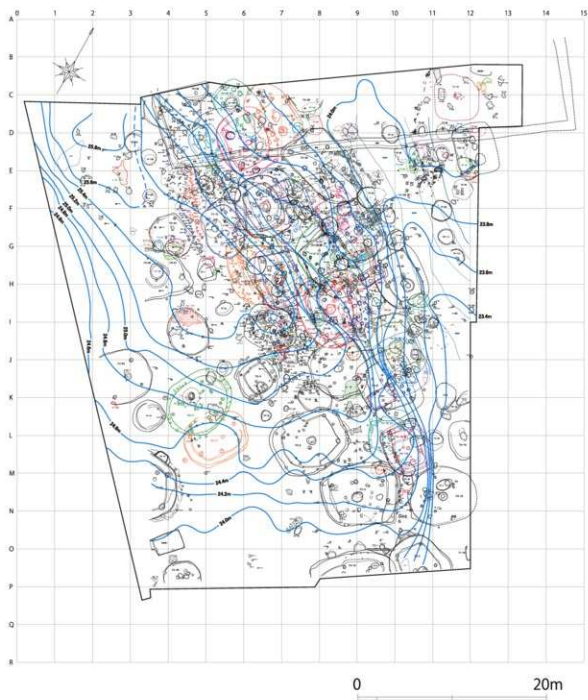
遺構番号	遺構名	調査区	建築形式	10層	焼土	新築時期	真軸	幅軸	位置	調査年
TF-01-011	D形土	焼土	後期前葉			TF-13>*	0.81	0.81	268	881
TF-02-011	D形土	焼土	後期前葉			TF-9>*	0.94	0.82	268	881
TF-03-011	円形土	焼土	前期前葉~中期前葉			TF-8>*	0.63	0.81	268	881
TF-04-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-13>*	0.80	0.81	268	881
TF-05-048	円形土	焼土	中期前葉			TF-3>*	0.49	0.59	268	881
TF-06-117	円形土	焼土	前期前葉			TF-21>*	1.08	0.80	269	881
TF-07-017	円形土	焼土	前期前葉				0.34	0.45	269	881
TF-08-017	円形土	焼土	前期前葉				0.51	0.34	269	881
TF-09-019	円形土	焼土	前期前葉				0.42	0.30	269	881
TF-10-019	円形土	焼土	前期前葉				0.40	0.50	269	881
TF-11-040	円形土	焼土	前期前葉				0.34	0.22	269	881
TF-12-045	円形土	焼土	前期前葉				0.34	0.22	269	881
TF-13-011	円形土	焼土	前期前葉			TF-11>*	1.40	1.55	270	881
TF-14-017	円形土	焼土	前期前葉				0.82	0.82	270	881
TF-15-047	円形土	焼土	前期前葉				0.38	0.30	270	881
TF-16-047	円形土	焼土	前期前葉				0.38	0.30	270	881
TF-17-048	円形土	焼土	前期前葉				0.38	0.30	270	881
TF-18-110	円形土	焼土	前期前葉			TF-23(新)>TF-18>*	0.82	0.81	271	881
TF-19-110	円形土	焼土	前期前葉			TF-23(新)>*>TF-110	0.32	0.80	271	881
TF-19-117	円形土	焼土	前期前葉				0.42	0.42	271	881
TF-19-118+19-2	円形土	焼土	前期前葉				0.76	0.77	271	881
TF-19-119	円形土	焼土	前期前葉			TF-23(新)>*	0.54	0.38	271	881
TF-20-048	円形土	焼土	前期前葉				0.63	0.52	272	881
TF-21-048+9	円形土	焼土	前期前葉			TF-8>*	0.50	0.45	272	881
TF-22-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-9>*	0.38	0.39	272	881
TF-24-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-9>*	0.48	0.22	272	881
TF-25-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-41>*	0.44	0.28	272	881
TF-26-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-41>*	0.52	0.48	272	881
TF-27-019	円形土	焼土	前期前葉				0.58	0.30	272	881
TF-28-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.52	0.31	272	881
TF-29-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.58	0.42	272	881
TF-30-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.43	0.41	272	881
TF-31-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.63	0.37	272	881
TF-32-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.48	0.22	272	881
TF-33-019	円形土	焼土	前期前葉				0.44	0.30	274	881
TF-34-019	円形土	焼土	前期前葉				0.35	0.18	274	881
TF-35-019	円形土	焼土	前期前葉				0.19	0.19	274	881
TF-36-017	円形土	焼土	前期前葉				0.37	0.37	274	881
TF-37-117	円形土	焼土	前期前葉				0.43	0.37	274	881
TF-38-019	V形	焼土	前期前葉				0.61	0.30	274	881
TF-39-011	V形	焼土	前期前葉				0.60	0.30	274	881
TF-40-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-12>*	0.73	0.50	275	881
TF-41-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-12>*	0.42	0.20	275	881
TF-42-048	円形土	焼土	前期前葉				0.49	0.43	275	881
TF-43-048	円形土	焼土	前期前葉				0.49	0.43	275	881
TF-44-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.70	0.35	275	881
TF-45-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.40	0.42	275	881
TF-46-019+04	円形土	焼土	前期前葉				0.40	0.30	276	881
TF-47-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.43	0.33	276	881
TF-48-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.25	0.22	276	881
TF-49-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-33>*	0.55	0.34	276	881
TF-50-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-41>*	0.51	0.31	276	881
TF-51-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-41>*	0.23	0.18	276	881
TF-52-048	円形土	焼土	前期前葉				0.67	0.44	277	881
TF-53-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-23(新)>*	0.40	0.27	277	881
TF-54-048	円形土	焼土	前期前葉				1.02	0.40	277	881
TF-55-048	円形土	焼土	前期前葉				0.47	0.41	278	881
TF-56-048	円形土	焼土	前期前葉				0.48	0.25	277	881
TF-59-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-8(新)>*	0.50	0.31	278	881
TF-60-011	円形土	焼土	前期前葉				0.30	0.30	278	881
TF-62-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-30(新)>*	0.43	0.33	278	881
TF-63-048	円形土	焼土	前期前葉				0.50	0.20	278	881
TF-64-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-39>*	0.63	0.41	278	881
TF-68-019	円形土	焼土	前期前葉				0.32	0.30	279	881
TF-69-048	円形土	焼土	前期前葉				0.37	0.23	279	881
TF-70-048	円形土	焼土	前期前葉				0.50	0.44	279	881
TF-72-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-13&*>*	0.53	0.48	279	881
TF-73-019	円形土	焼土	前期前葉				0.42	0.20	279	881
TF-74-019	円形土	焼土	前期前葉				0.30	0.47	280	881
TF-75-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-39>*	0.56	0.42	280	881
TF-76-048	円形土	焼土	前期前葉				1.02	0.44	280	881
TF-77-048	円形土	焼土	前期前葉				0.43	0.33	280	881
TF-78-048	円形土	焼土	前期前葉				0.37	0.41	280	881
TF-80-019+04	円形土	焼土	前期前葉				0.52	0.50	281	881
TF-81-048	円形土	焼土	前期前葉				1.00	0.75	281	881
TF-82-048	円形土	焼土	前期前葉				0.56	0.42	281	881
TF-84-048	円形土	焼土	前期前葉				0.31	0.22	281	881
TF-86-019	円形土	焼土	前期前葉			TF-49>*	0.42	0.21	282	881
TF-88-048	円形土	焼土	前期前葉				1.26	0.80	282	881
TF-89-048	円形土	焼土	前期前葉				0.53	0.35	282	881
TF-90-048	円形土	焼土	前期前葉				1.04	0.80	282	881
TF-91-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-10>*	0.30	0.25	282	881
TF-92-048	円形土	焼土	前期前葉				0.40	0.42	282	881
TF-93-048	円形土	焼土	前期前葉				0.61	0.30	282	881
TF-94-048	円形土	焼土	前期前葉				0.60	0.40	282	881
TF-96-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-39>*	0.40	0.37	282	881
TF-97-048	円形土	焼土	前期前葉			TF-41>*	0.40	0.34	282	881
TF-98-048	円形土	焼土	前期前葉				0.28	0.29	284	881
TF-99-011	円形土	焼土	前期前葉				1.10	0.54	284	881
TF-100-011	円形土	焼土	前期前葉				0.38	0.22	284	881
TF-101-019+3	円形土	焼土	前期前葉				0.68	0.60	284	881
TF-102-019	円形土	焼土	前期前葉				0.41	0.38	284	881
TF-103-019	円形土	焼土	前期前葉				0.52	0.40	284	881
TF-104-019	円形土	焼土	前期前葉				0.72	0.43	285	881
TF-105-019	円形土	焼土	前期前葉				0.31	0.31	285	881
TF-106-011	円形土	焼土	前期前葉				0.48	0.30	285	881
TF-107-117	D形土	焼土	前期前葉				0.74	0.52	285	881
TF-108-011	円形土	焼土	前期前葉				1.01	0.40	286	881
TF-109-011	V形	焼土	後期前葉				1.56	0.30	285	881
TF-110-011	D形土	焼土	後期前葉				0.50	0.53	287	881
TF-111-011	円形土	焼土	前期前葉				0.84	0.84	287	881
TF-112-019	円形土	焼土	前期前葉				0.50	0.27	288	881
TF-113-019	円形土	焼土	前期前葉				0.80	0.46	287	881
TF-114-012	円形土	焼土	前期前葉				1.64	0.85	287	881
TF-115-012	円形土	焼土	前期前葉				11.03	0.80	287	881
TF-116-019+012	円形土	焼土	前期前葉				0.41	0.40	287	881
TF-117-011	円形土	焼土	前期前葉				0.81	0.40	288	881
TF-118-012+3	円形土	焼土	前期前葉				0.46	0.44	288	881
TF-119-012	円形土	焼土	前期前葉				0.56	0.21	287	881
TF-120-019+03	円形土	焼土	前期前葉				0.42	0.38	288	881
TF-121-011	円形土	焼土	前期前葉				0.30	0.35	288	881
TF-122-011	円形土	焼土	前期前葉				0.32	0.20	288	881
TF-123-011	円形土	焼土	前期前葉				0.28	0.19	288	881
TF-124-012	円形土	焼土	前期前葉				0.42	0.21	288	881
TF-125-019	円形土	焼土	前期前葉				0.41	0.32	288	881
TF-126-012	円形土	焼土	前期前葉				1.09	0.88	288	881

表IV-4 遺構一覧(集石・フレイク集中・埋設土器・配石列・道路跡・防空壕跡・塹壕跡)

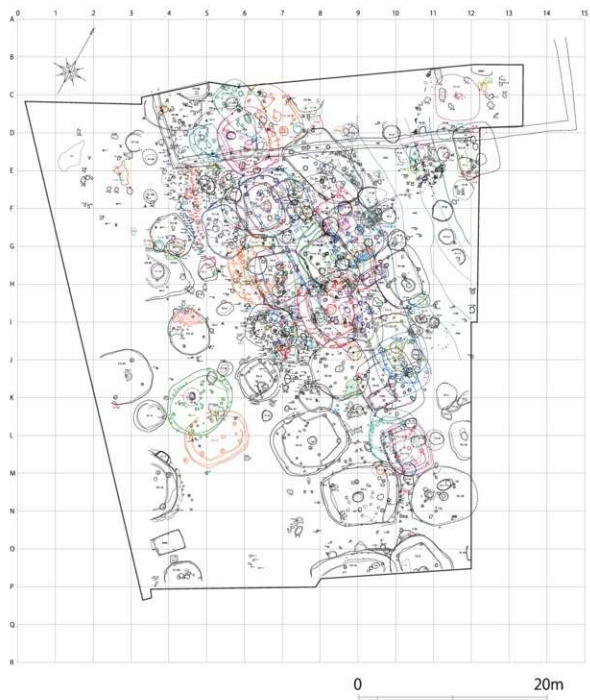
遺構種別	遺構名	調査区	構築層位	分類	説明	備考	長軸	短軸	遺構番号	遺構番号
TS	TS-01	H7	C層土		中前期前～中葉		0.71	0.67	290	
TS	TS-02	F11-10	C層土	楕圓～小楕圓	前期前葉～中葉	長石列10～11				
TS	TS-03	G7	C層土	楕圓～小楕圓	中前期前～中葉		0.68	0.52	290	192
TS	TS-04	H9	TH-4層土	小楕圓～大楕圓	前期前葉～中前期前		1.00	0.58	290	192
TS	TS-05	F4	C層土	楕圓～大楕圓	前期前葉～中前期前		0.40	0.33	290	
TS	TS-06	J8	V層	大楕圓	後前期前		0.60	0.48	290	
TS	TS-07	G10	TH-2層土	小楕圓～大楕圓	中前期前～中葉		1.20	0.84	290	192
TS	TS-08	J8	C層土	楕圓～小楕圓	前期前葉		0.42	0.31	291	
TS	TS-09	L+K4	砂層土	楕圓～小楕圓	前期前葉	m2(2)下層	0.98	0.32	291	
TS	TS-10	J5	TH-11層土	小楕圓～大楕圓	前期前葉					
TS	TS-12	L10	V層	大楕圓	後前期前		1.32	0.38	291	192
TS	TS-14	F7	C層土	楕圓～小楕圓	中前期前～中葉					
TS	TS-15	H6	C層土	楕圓～小楕圓	中前期前～中葉	TH+20上段				
TS	TS-16	F9	C層土	小楕圓～小楕圓	前期前葉～中葉					192
TS	TS-17	G2+3+4	砂層土	中楕圓～大楕圓	前期前葉～前期前葉		4.42	4.22	291	192
TS	TS-18	J5	C層土	小楕圓～小楕圓	中前期前～中葉					193
TS	TS-19	F9	C層土	小楕圓～小楕圓	前期前葉～中葉					193
TS	TS-20	G4	砂層土	中楕圓～大楕圓	中前期前～中葉					193
TS	TS-21	G12	TH-12層土	楕圓～小楕圓	前期前葉					193
TS	TS-22	G4	TH+砂層土下層	楕圓～小楕圓	前期前葉～中前期前					193
TS	TS-23	G4	TH+砂層土下層	楕圓～小楕圓	前期前葉～前期前葉					193
TS	TS-24	G7	TH+砂層土	楕圓～小楕圓	前期前葉					193
TS	TS-25	J03	砂層土	小楕圓～大楕圓	前期前葉～前期前葉	m2(2)下層				193
TS	TS-26	F3	砂層土	小楕圓	前期前葉	m2(5)層	0.76	0.55	292	193
TS	TS-27	C+G7	TH+砂層土	小楕圓	前期前葉		1.62	0.54	292	193
TS	TS-29	J01	砂層土	小楕圓	前期前葉		0.90	1.00	292	193
TS	TS-31	F3	砂層土	小楕圓	前期前葉		0.80	0.65	292	194
TFG	TFG-01	J08	砂層土	小楕圓	前期前葉		1.80	0.66	292	
TFG	TFG-02	J04	瓦葺	瓦葺	前期前葉		0.32	0.50	292	
TFG	TFG-03	J07	F層土	瓦葺	前期前葉		2.12	0.86	292	194
TFG	TFG-04	F4	C層土	大楕圓	前期前葉					194
TFG	TFG-05	J06	TH-4層土上層		前期前葉					194
TFG	TFG-06	L8	砂層土		前期前葉		10.70	0.58	292	194
TFG	TFG-07	M7	砂層土		前期前葉					292
TFG	TFG-08	J06	TH-4層土下層		前期前葉		1.34	0.61	292	194
TFG	TFG-09	L+K3+8	TH+砂層土上層		前期前葉					292
TFG	TFG-10	M8+9	砂層土		前期前葉					194
TFG	TFG-11	K7	砂層土		前期前葉～前期前葉					194
TFG	TFG-12	K8	砂層土		前期前葉～前期前葉		0.71	0.69	292	194
TFG	TFG-13	K8	砂層土		前期前葉～前期前葉					194
TFG	TFG-14	K4F付付録	砂層土		前期前葉	m2(2)下層				294
TFG	TFG-15	J8+9	TH+砂層土下層		前期前葉～前期前葉		10.94	0.68	294	194
TFG	TFG-16	K8	TH+砂層土		前期前葉					294
TFG	TFG-17	K8	TH+砂層土		前期前葉		0.40	0.24	294	
TFG	TFG-18	F3	砂層土		前期前葉					294
TFG	TFG-19	J8	砂層土		前期前葉～前期前葉	m2(2)～(10)層				294
TFG	TFG-20	K8	砂層土		前期前葉～前期前葉	m2(2)～(10)層	0.65	0.29	294	195
TFG	TFG-21	L+K3+8	砂層土		前期前葉～前期前葉	m2(2)～(10)層	1.32	0.24	294	195
TFG	TFG-22	F4	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-23	F7	C層土		中前期前～中葉					195
TFG	TFG-24	L7	C層土		前期前葉～中葉					195
TFG	TFG-25	J5	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-26	J03	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-27	J03	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-28	F3	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-29	F9	C層土		前期前葉					195
TFG	TFG-30	F4	砂層土		前期前葉		1.94	0.38	294	195
TFG	TFG-31	L+3+8	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-32	F3	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-33	F3	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-34	F3	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-35	J3	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-36	H6	砂層土		前期前葉					195
TFG	TFG-37	H6	砂層土		前期前葉～前期前葉					195
TFG	TFG-38	J3	砂層土		前期前葉～前期前葉	m2(2)層				195
TFG	TFG-39	G3	砂層土		前期前葉～前期前葉					195
TFG	TFG-40	G4+5	砂層土		前期前葉～前期前葉					195
TFG	TFG-41	G2	瓦葺		前期前葉					195
TFG	TFG-42	G2	瓦葺		前期前葉					195
TFG	TFG-43	G2	瓦葺		前期前葉					195
TFG	TFG-44	G2	瓦葺		前期前葉					195
TFG	TFG-45	G2	瓦葺		前期前葉					195
TFG	TFG-46	J01	瓦葺		前期前葉		1.20	0.71	294	195
TFG	TFG-47	L7	瓦葺		前期前葉					195
TFG	TFG-48	F1	瓦葺		前期前葉					195
埋設土器	埋設土器1	H6	瓦葺面出		前期前葉	埋設土器2	0.20	0.20	320	195
配石列	配石列1	C+20+11	C層土上層		前期前葉		328+342	290+291		
配石列	配石列2	20+10+8	C層土上層+下層		前期前葉		331+340			292
配石列	配石列3	C+18+11	C層土上層		前期前葉		347	290		
遺構跡	遺構跡1	C+20+11	V層面出		中前期前～中葉					290+291
防空壕跡	防空壕跡1	H+10+18	土層	溝			3.10	1.62	351	202
防空壕跡	防空壕跡2	G+10+9	土層	溝			2.67	1.53	351	202
防空壕跡	防空壕跡3	L+7	土層	溝			2.20	1.78	352	202
防空壕跡	防空壕跡4	H+103+4	土層	溝			15.60	2.06	353	202
防空壕跡	防空壕跡5	J12	土層	溝			12.24	0.70	353	202
塹壕跡	塹壕跡1	A+20+14	土層	溝						202

表Ⅳ-6 盛土層の盛土遺構区分と時期(3)

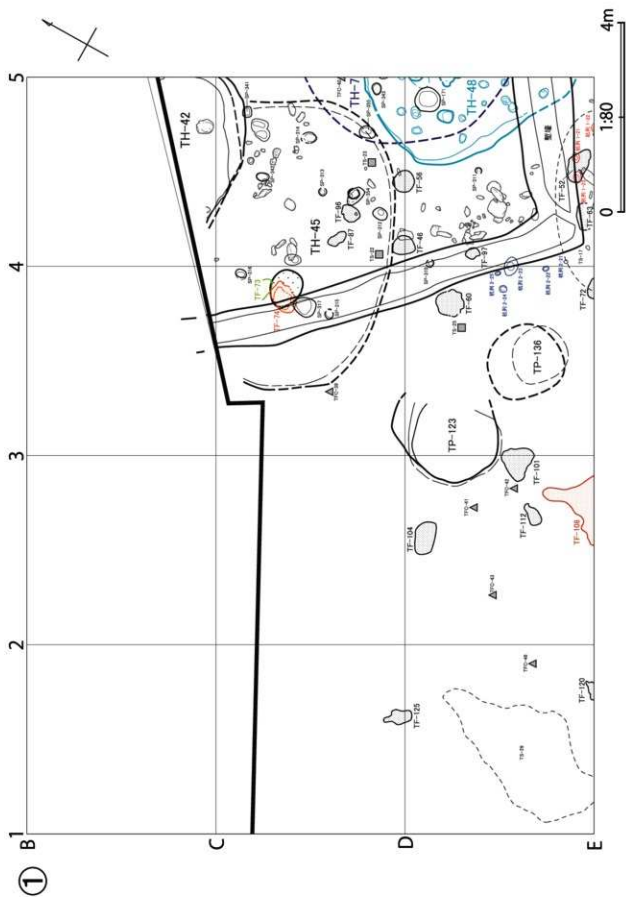
遺構番号	遺構名・盛土区分	土層・土質	層位	時期	土層区分	遺構番号	遺構名・盛土区分	土層・土質	層位	時期	土層区分				
Th-09	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF(直撃)	中前	上層a1~b		Th-23	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前期中						
												追加性原土及び 重機性原土	ベンチ露上	中前	上層a1~b
Th-09-41	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	上層a1~b		Th-24	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層d 下層e					
Th-10	A・B A・B	フクF フクF上層	前中	下層f		Th-25	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	中前	上層a1~f					
												B	フクF上層	前中	下層g
Th-11	A A B A	フクF土層H フクF土層I フクF土層J フクF土層K	前中	下層h 下層i 下層j 下層k		Th-26	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	中前	下層l					
												B	フクF土層L	前中	下層m
												B	フクF土層M	前中	下層n
												B	フクF土層N	前中	下層o
Th-12	追加性原土 追加性原土	フクF	前中			Th-27	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	上層h					
Th-13	A A	フクF フクF上層	前中	下層p		Th-28	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層q					
												B	フクF上層	前中	下層r
Th-14	A A A A	フクF フクF フクF下 フクF	前中	下層s 下層t 下層u 下層v		Th-29	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層w					
												B	フクF	前中	下層x
												B	フクF	前中	下層y
												B	フクF	前中	下層z
Th-15	追加性原土 追加性原土	フクF	前中			Th-30	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層aa					
Th-17	A・B A	フクF フクF	前中	下層aa 下層ab		Th-31	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層ac					
												B	フクF	前中	下層ad
Th-21	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層ae		Th-32	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層af					
												追加性原土	フクF	前中	下層ag
Th-22	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層ah		Th-33	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層ai					
												追加性原土	フクF	前中	下層aj
												追加性原土	フクF	前中	下層ak
												追加性原土	フクF	前中	下層al
Th-22	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF上層	前中	下層am		Th-34	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層an					
												追加性原土	フクF上層	前中	下層ao
												追加性原土	フクF上層	前中	下層ap
												追加性原土	フクF上層	前中	下層aq
Th-22	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF中横土	前中	下層ar		Th-35	○・自然性原土 ▽重機性原土	フクF	前中	下層as					
												追加性原土	フクF中横土	前中	下層at



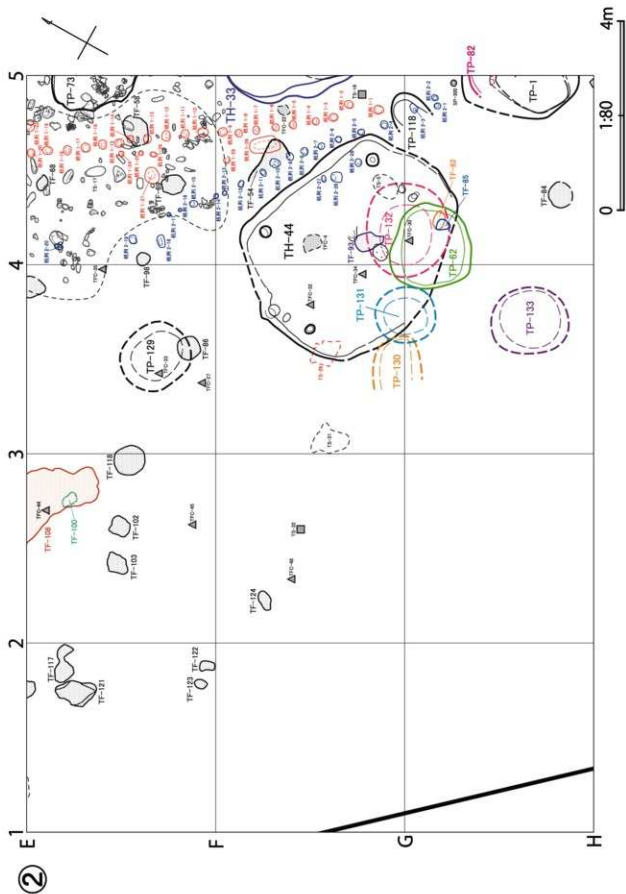
図IV-1 遺構位置図（等高線あり）



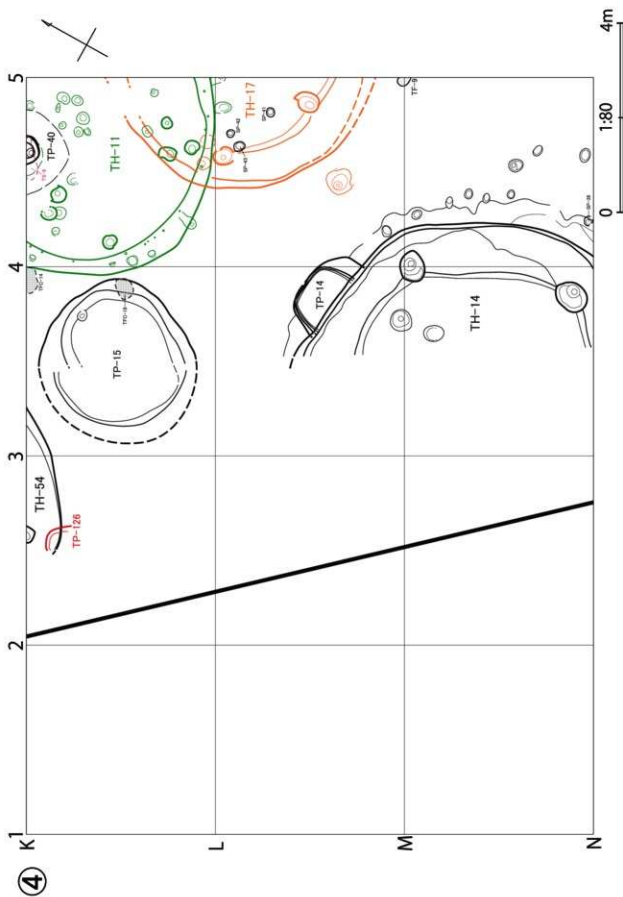
図IV-2 遺構位置図 (等高線なし)



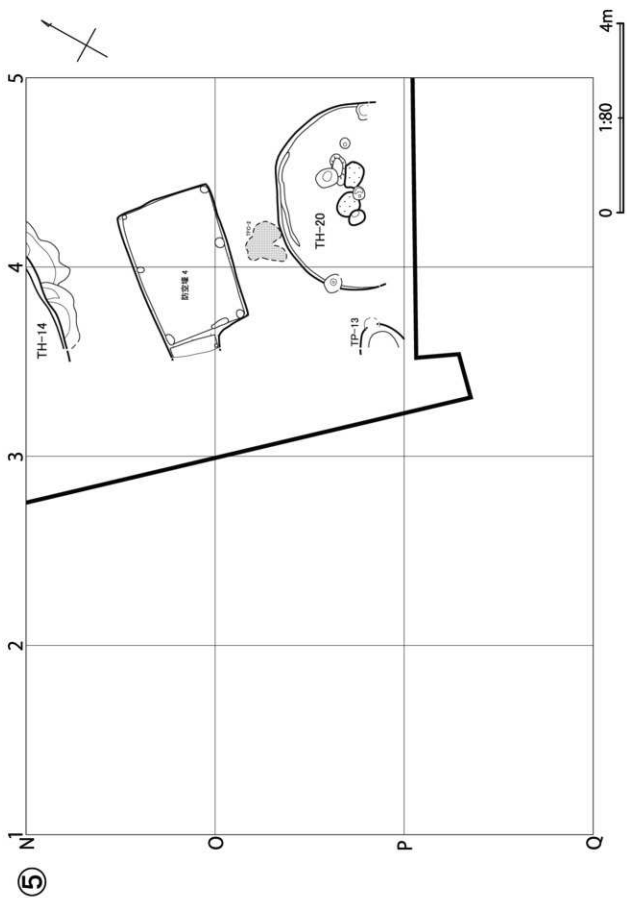
図IV-3 遺構位置図(1): B~D1~4区



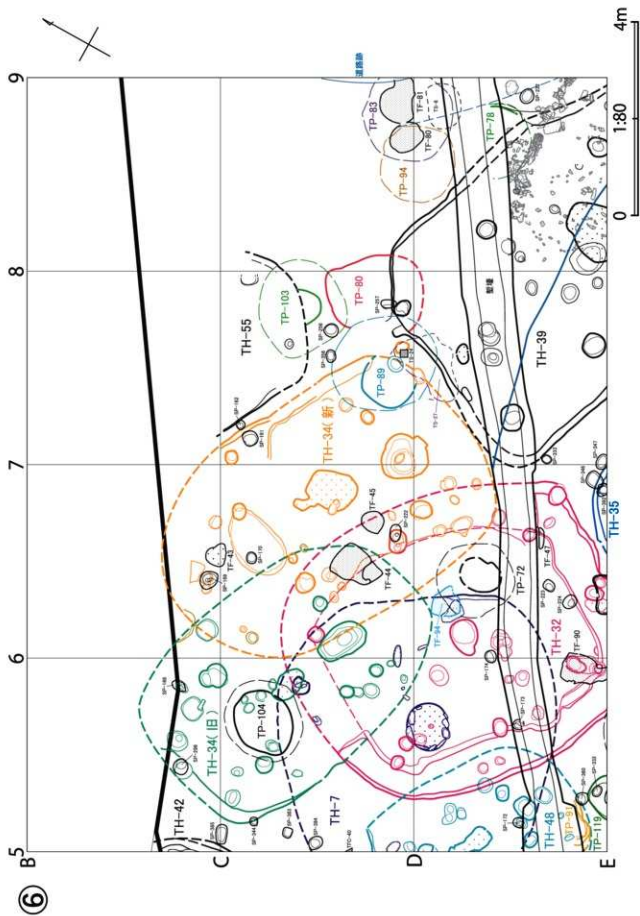
図Ⅳ-4 遺構位置図(2)：E～G1～4区



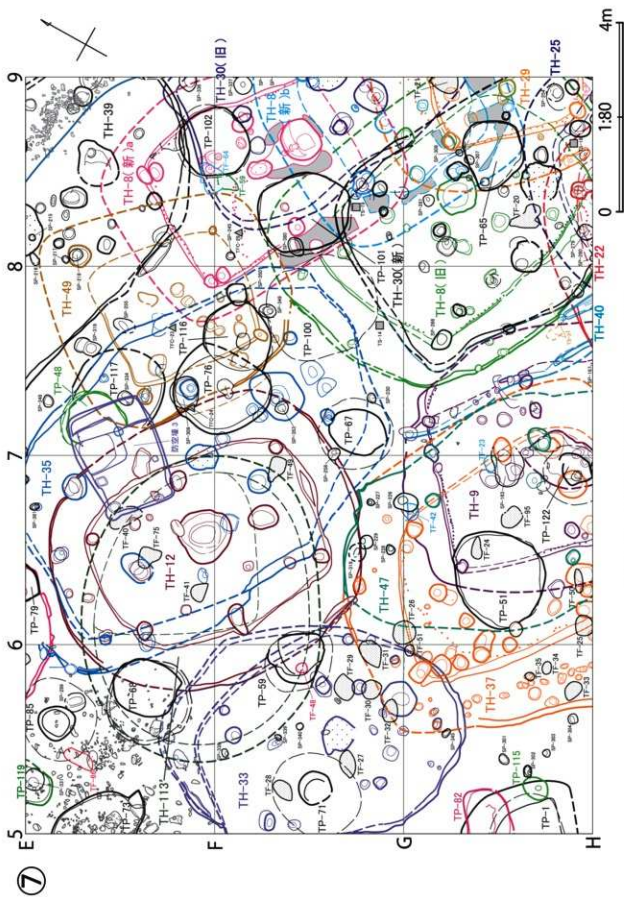
図IV-6 遺構位置図(4): K~M 1~4区

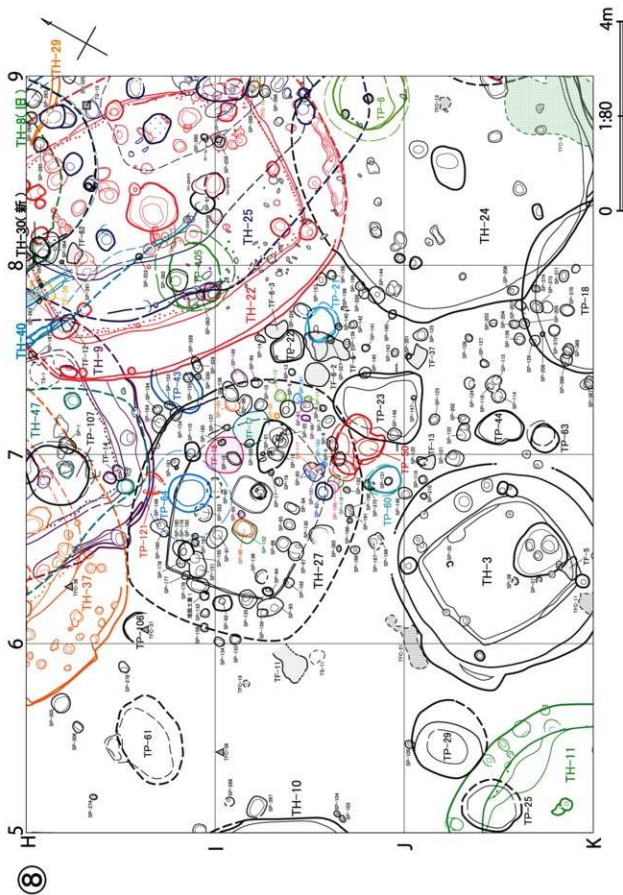


図IV-7 遺構位置図 (5) : N~P 1~4区

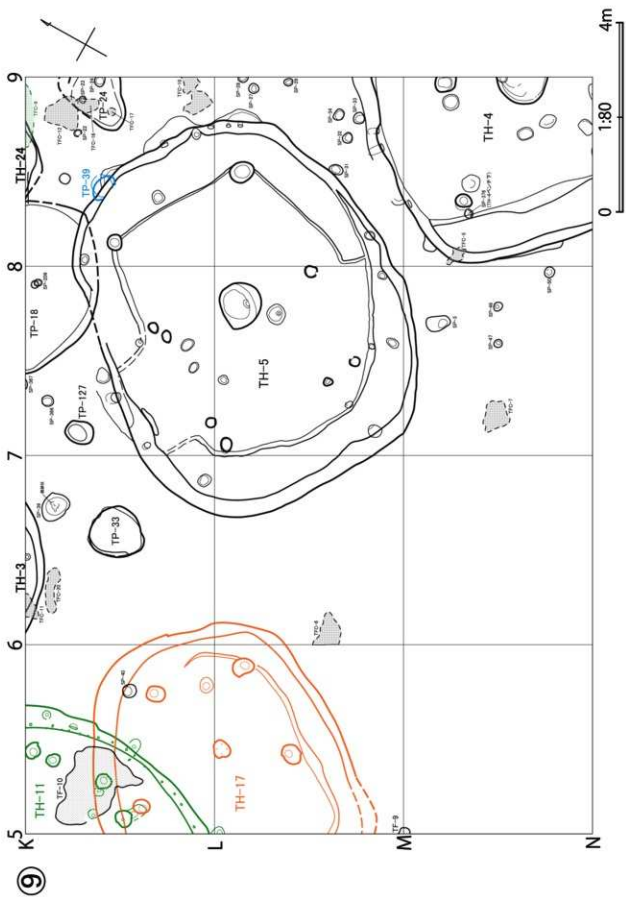


図Ⅳ-8 遺構位置図 (6) : B~D 5~8区

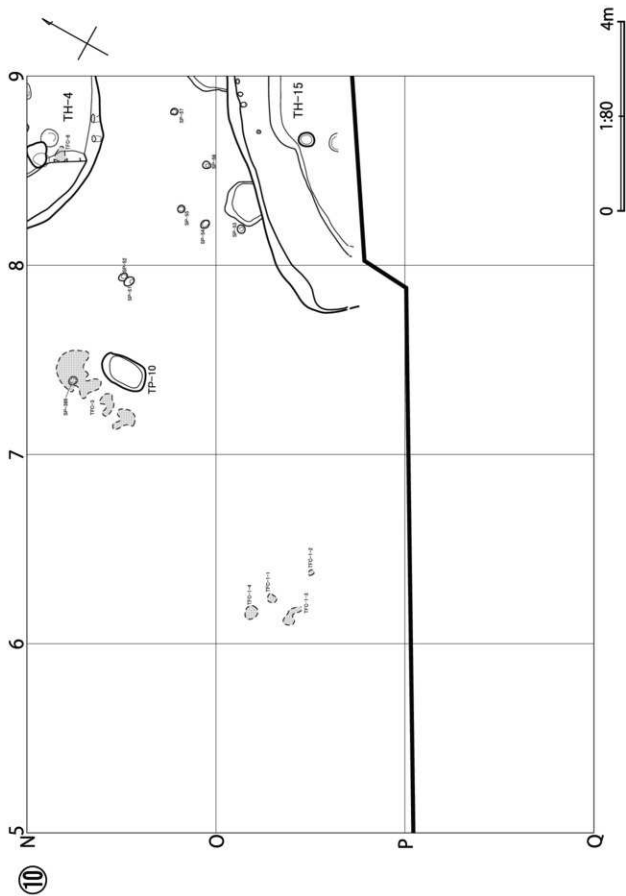




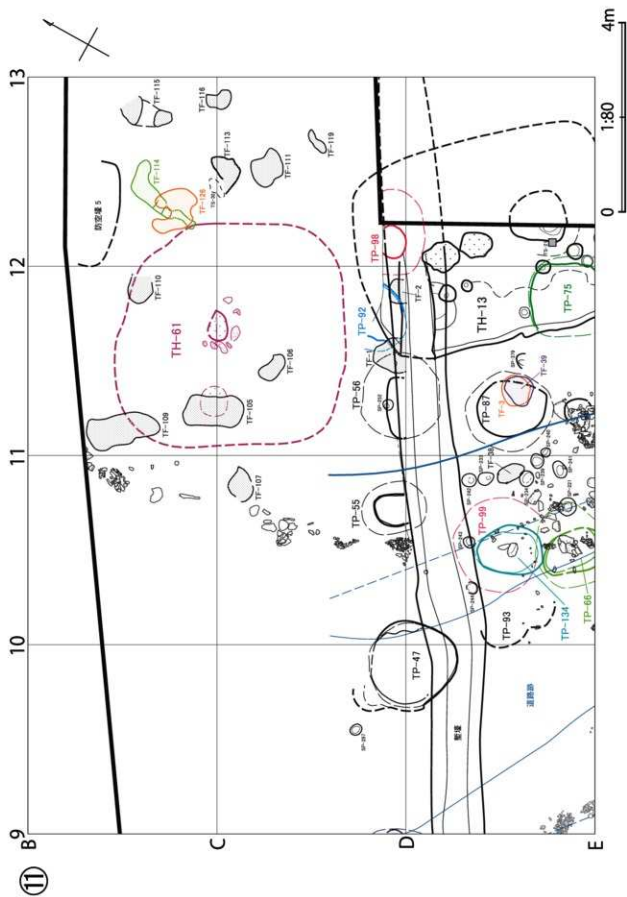
図Ⅳ-10 遺構位置図(8)：H～J 5～8区



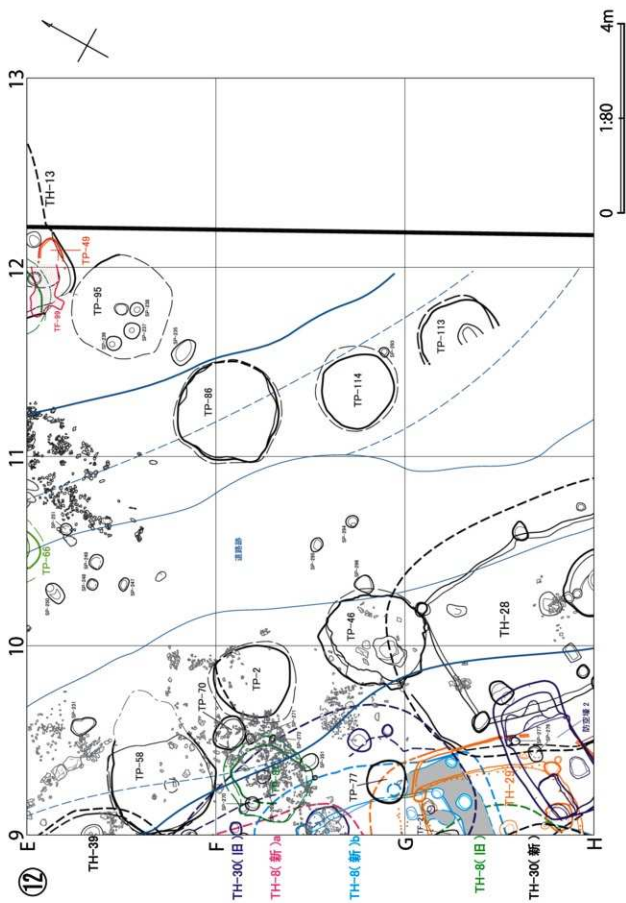
図IV-11 遺構位置図(9): K~M 5~8区



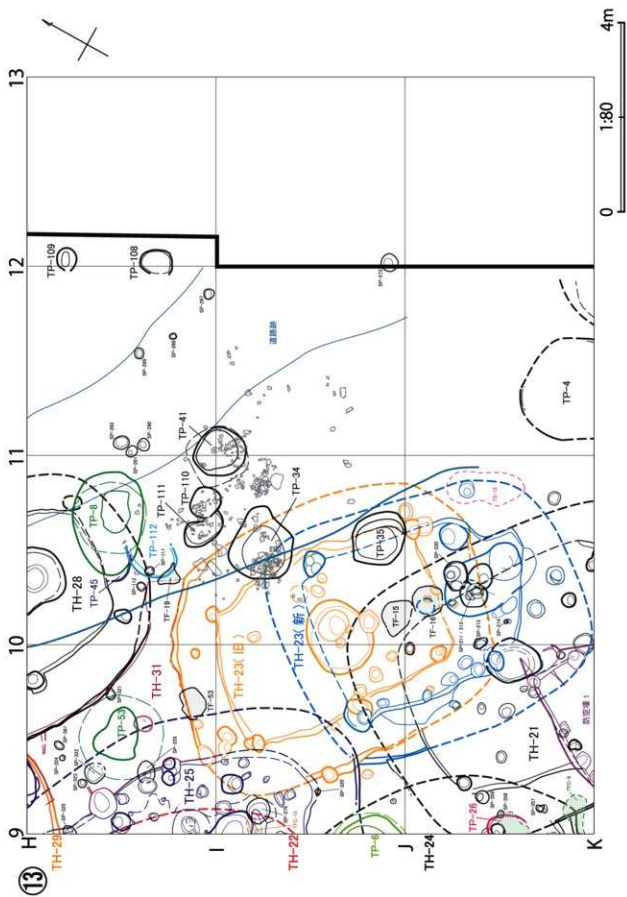
図IV-12 遺構位置図 (10) : N~P 5~8区



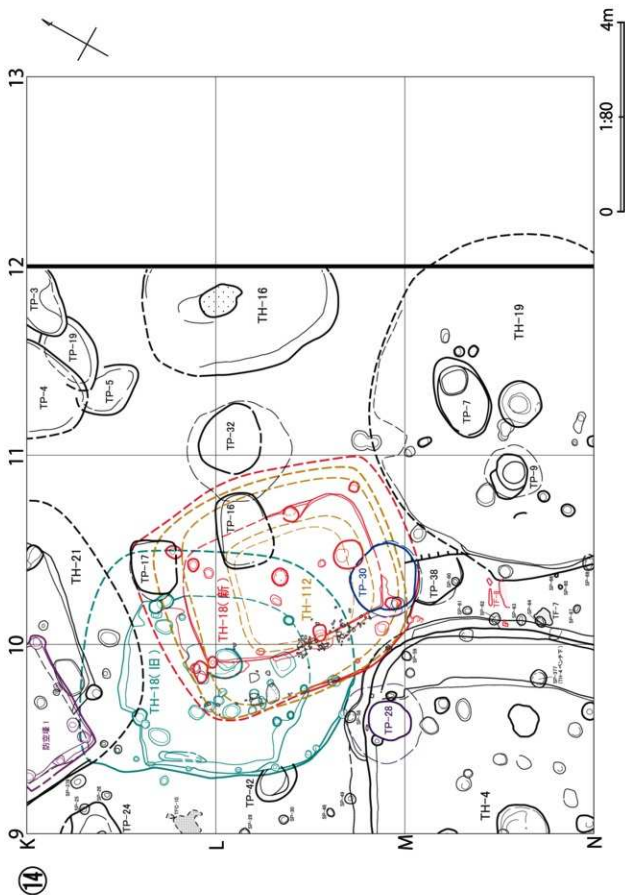
図IV-13 遺構位置図(11): B~D9~12区



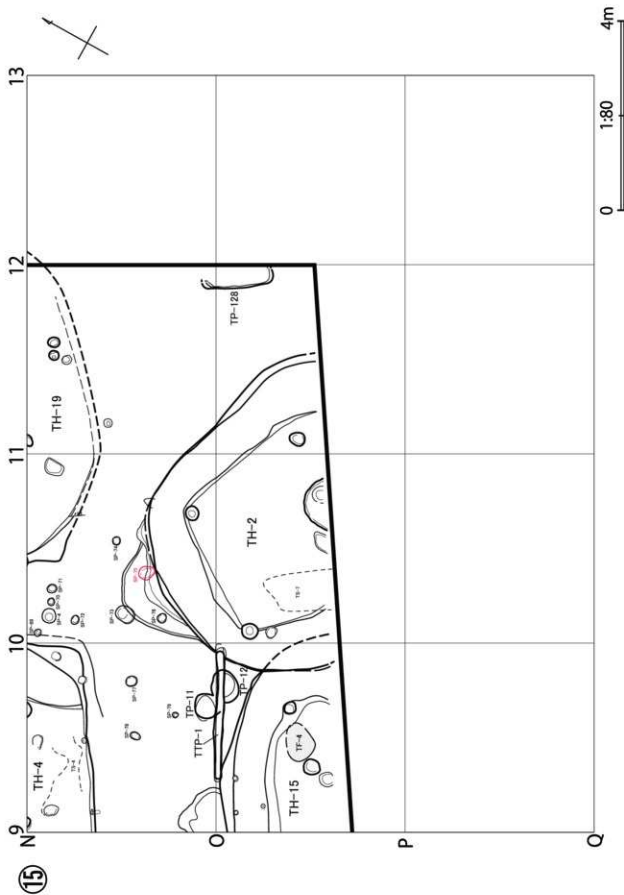
図IV-14 遺構位置図 (12) : E~G 9~12区



図IV-15 遺構位置図 (13) : H~J 9~12区

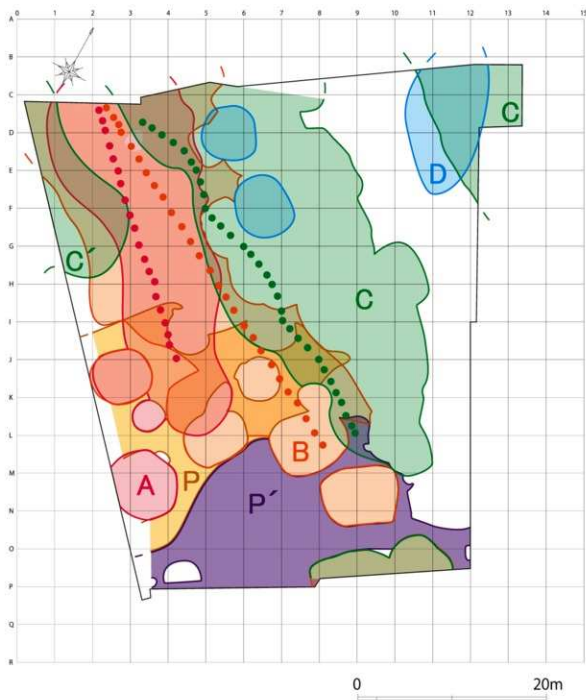


図IV-16 遺構位置図 (14) : K~M 9~12区



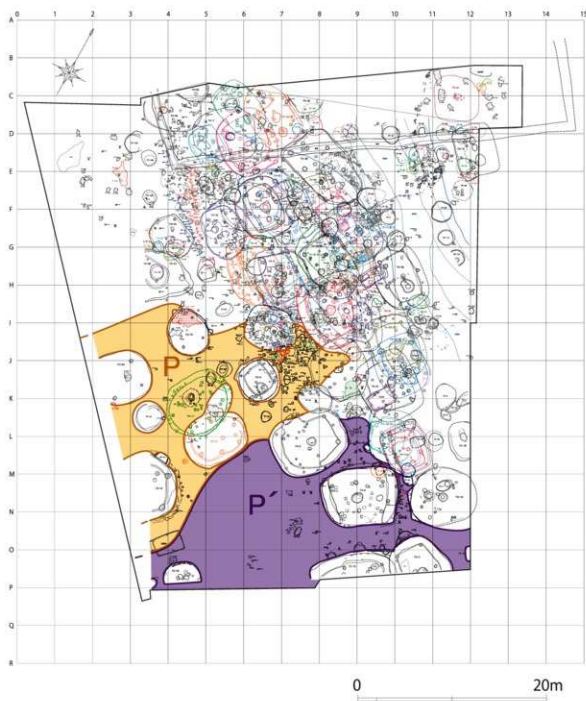
図IV-17 遺構位置図 (15) : N~P 9~12区

盛土遺構



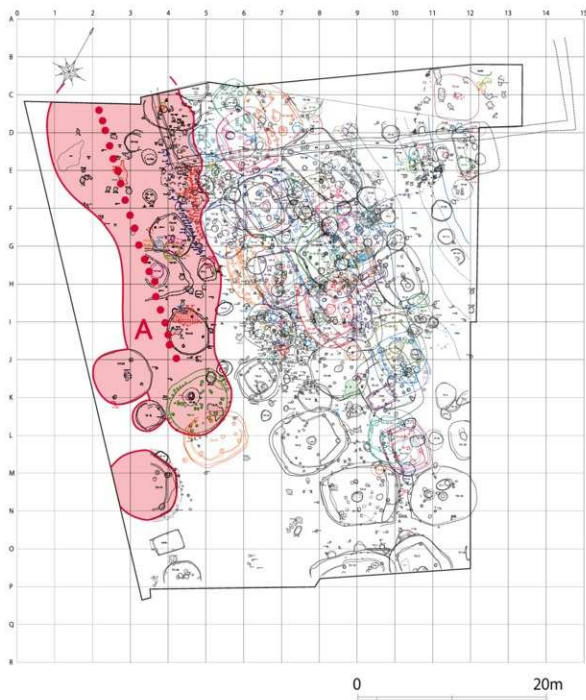
図IV-18 盛土遺構範囲図

P盛土・P'盛土



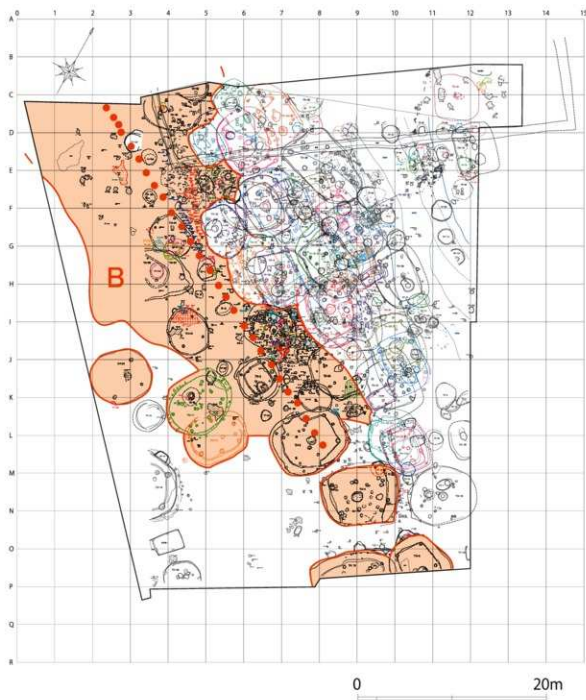
図N-19 盛土遺構範囲図(1) P・P'盛土

A盛土



図IV-20 盛土遺構範囲図(2) A盛土

B盛土



图IV-21 盛土遺構範圍圖(3) B盛土

C盛土・C'盛土



図N-22 盛土遺構範囲図(4) C・C'盛土

D盛土



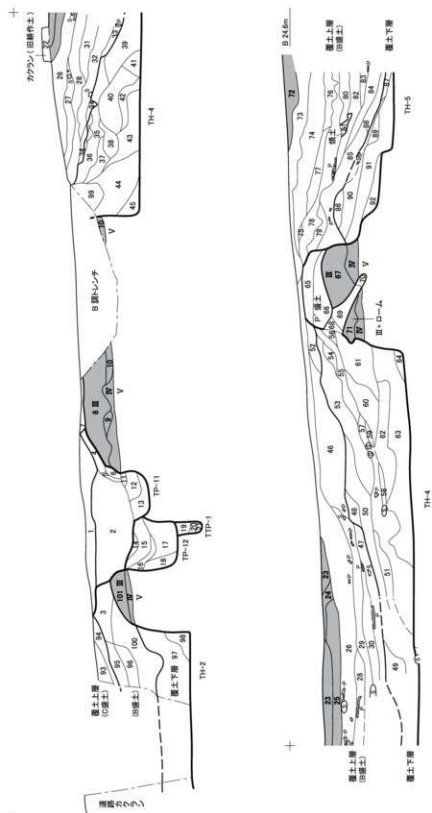
图IV-23 盛土遺構範圍图 (5) D盛土

土層断面



図Ⅳ-24 土層断面図セクションポイント

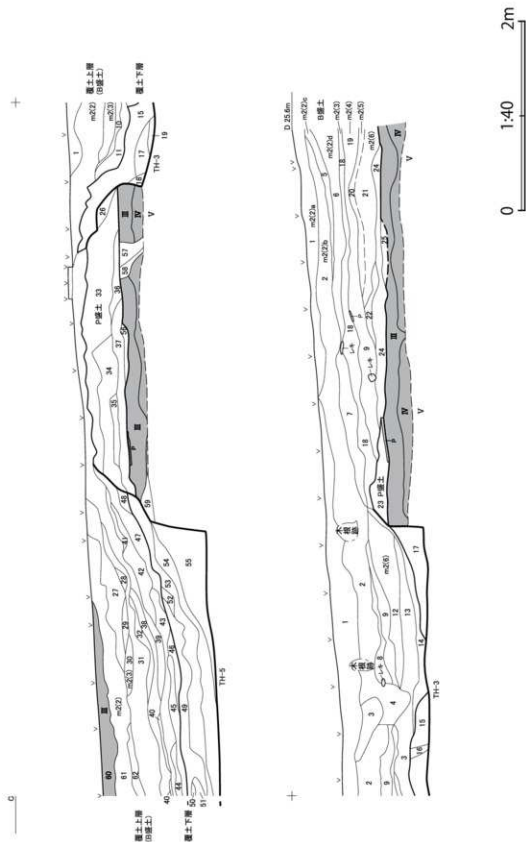
土層断面①



※自然発露層であるB層土、IV層に1号を入れた。矢印は遺構位置、中央部は人為堆積層位置

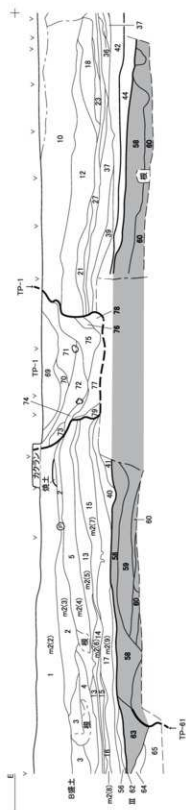
図IV-25 土層断面①

土層断面②



図IV-26 土層断面②

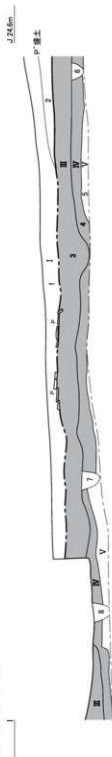
土層断面③



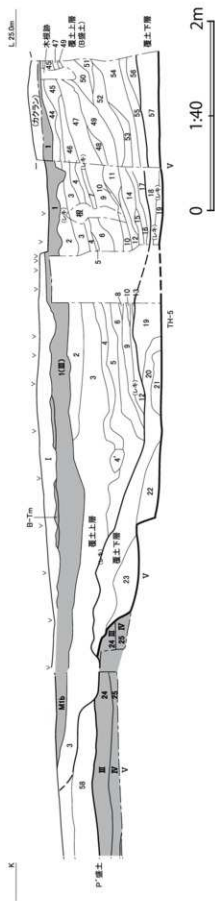
土層断面④



土層断面⑤

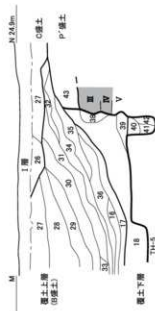


土層断面⑥

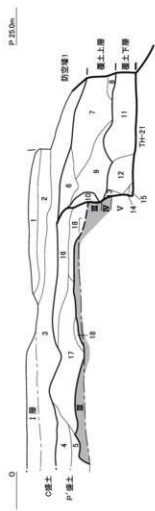


図IV-28 土層断面④～⑥

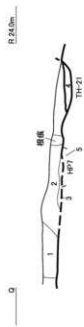
土層断面⑦



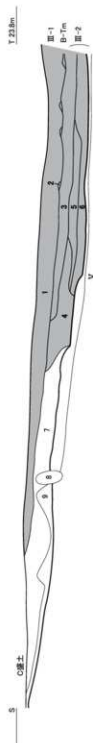
土層断面⑧



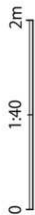
土層断面⑨



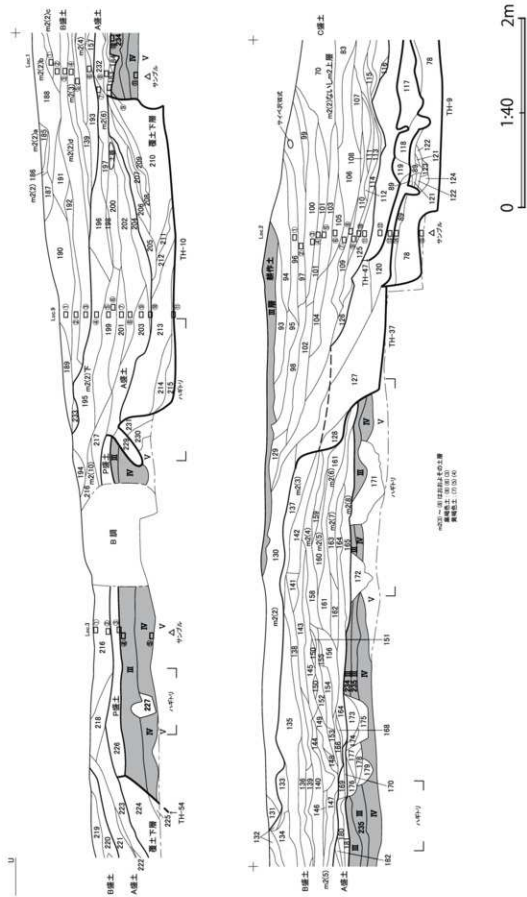
土層断面⑩



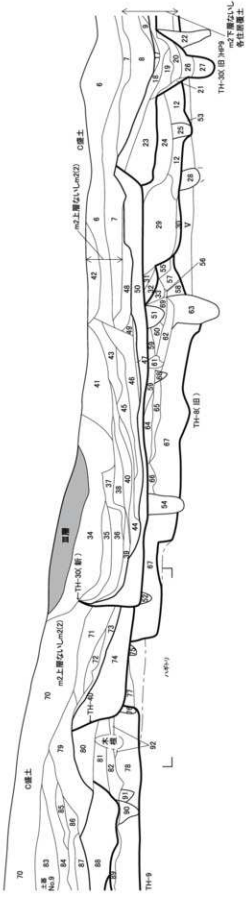
圖IV-29 土層断面⑦~⑩



土層断面①

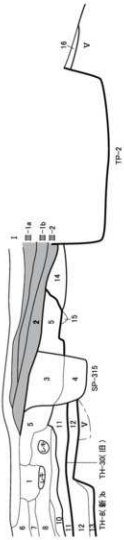
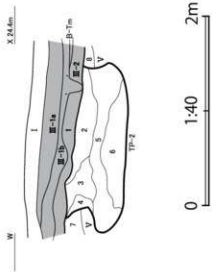


図IV-30 土層断面①(1)



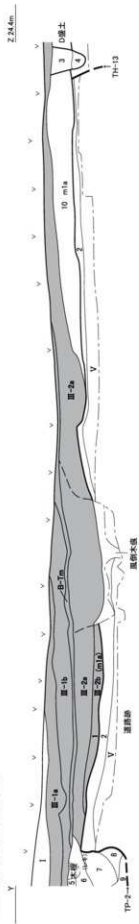
土層断面⑫

V 25.7m



図IV-31 土層断面⑪ (2)・⑫

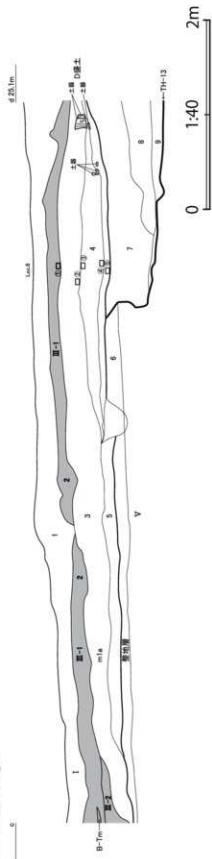
土層断面⑬



土層断面⑭

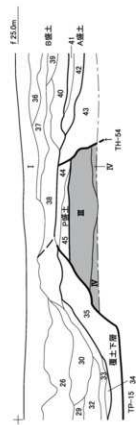
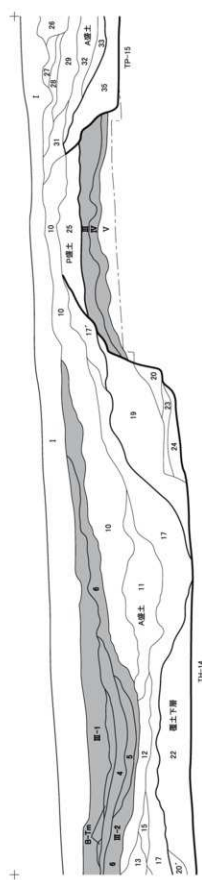
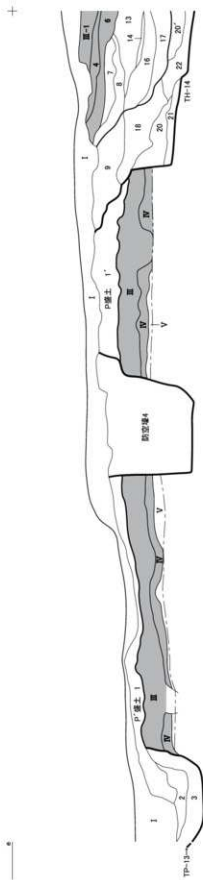


土層断面⑮



図IV-32 土層断面⑬~⑮

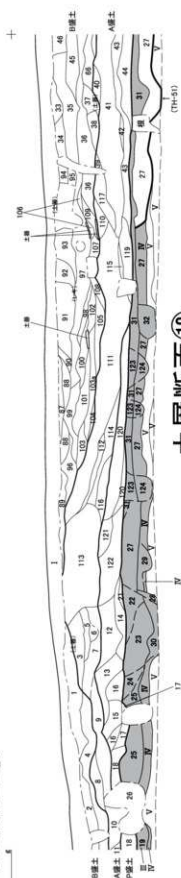
土層断面⑬



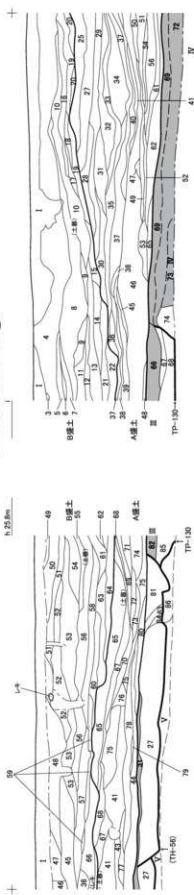
図IV-33 土層断面⑬



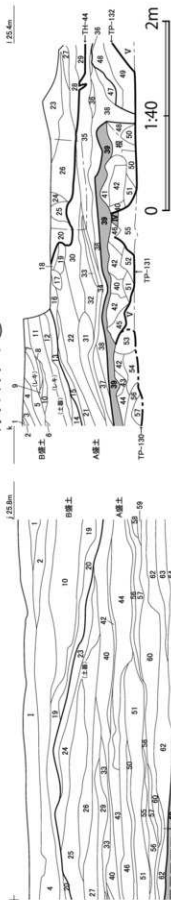
土層断面⑰



土層断面⑱

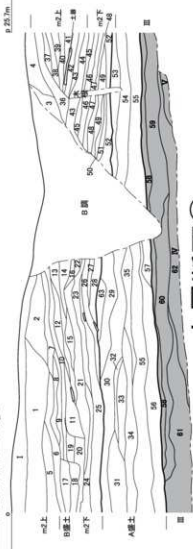


土層断面⑲

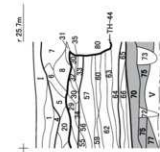


図IV-34 土層断面⑰～⑲

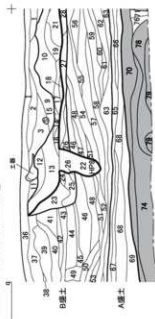
土層断面①



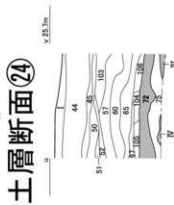
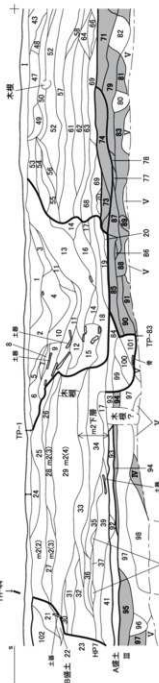
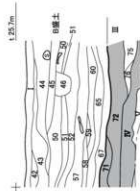
土層断面②



土層断面③

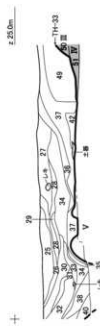
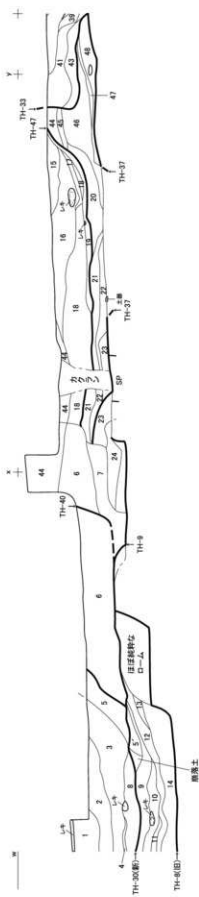


土層断面④

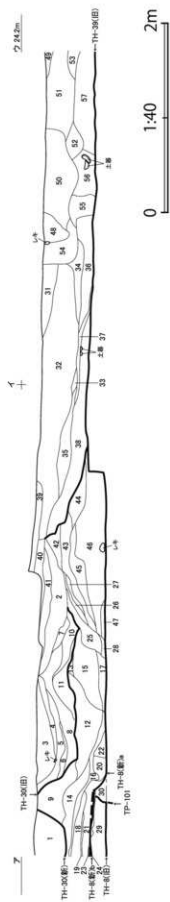


図IV-36 土層断面①~⑤

土層断面 ㉕

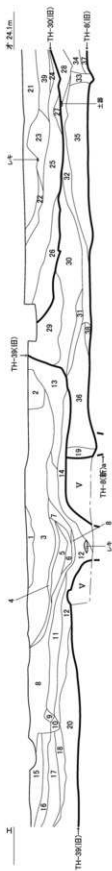


土層断面 ㉖

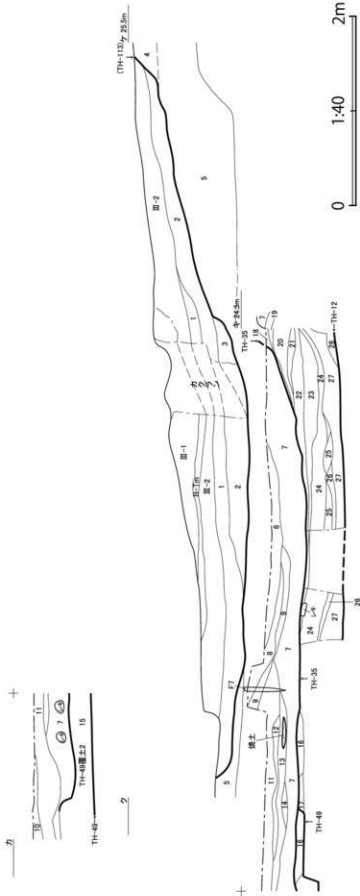


図IV-37 土層断面 ㉕・㉖

土層断面 ㉑



土層断面 ㉒



図IV-38 土層断面 ㉑・㉒

土層断面②

+

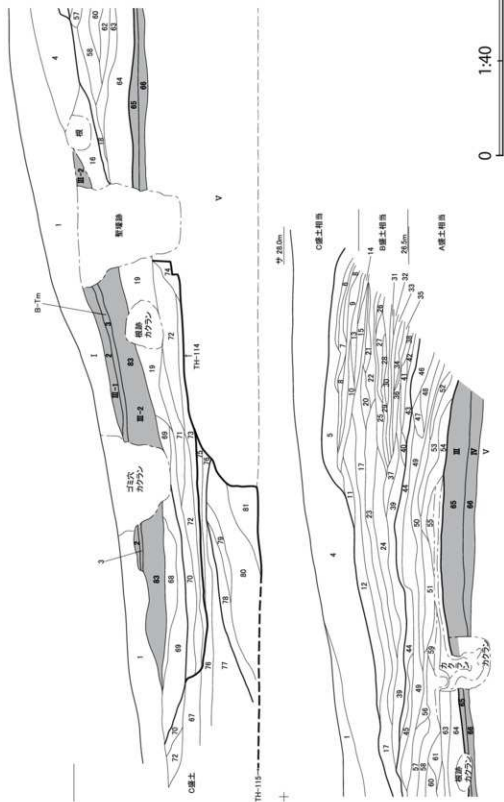
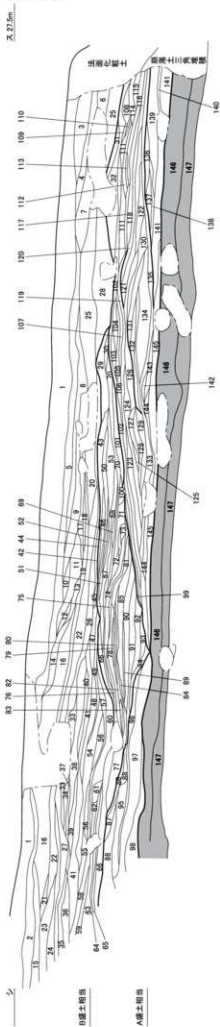


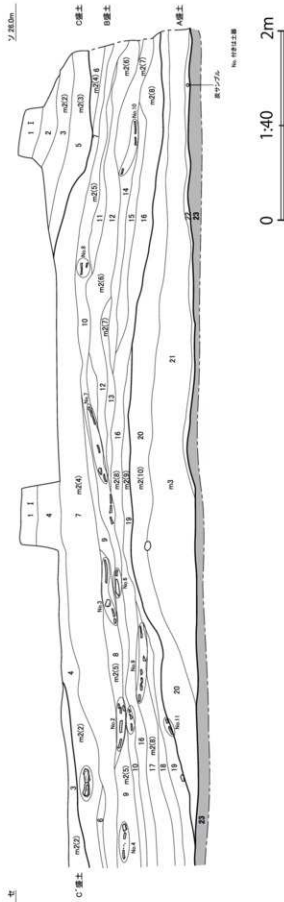
図4-39 土層断面②

土層断面③〇

福島町 館崎遺跡

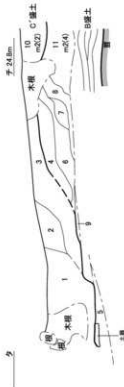


土層断面③①

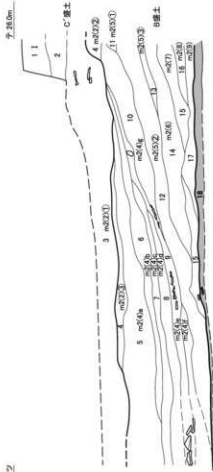


図IV-40 土層断面③〇・③①

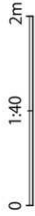
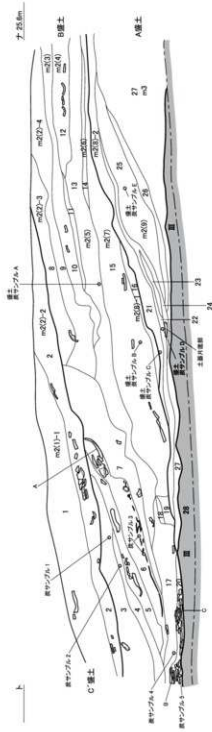
土層断面 32



土層断面 33

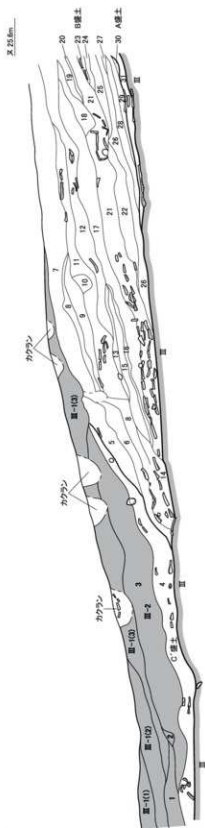


土層断面 34

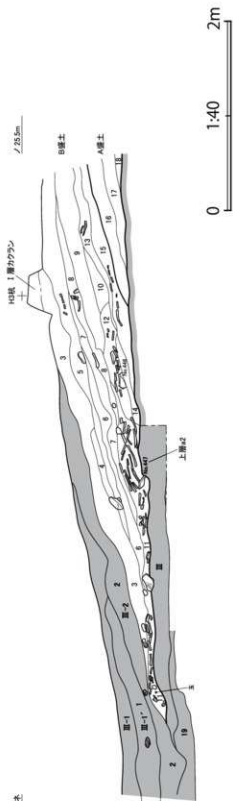


図IV-41 土層断面32~34

土層断面③⑤

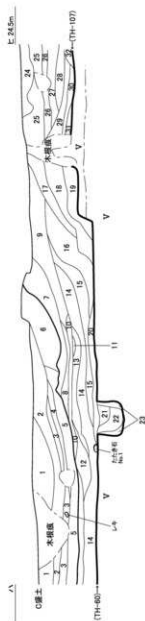


土層断面③⑥

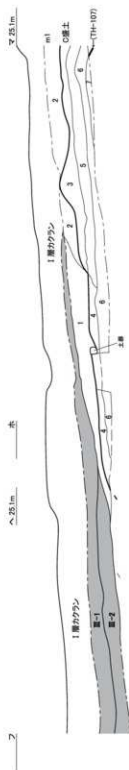


図IV-42 土層断面③⑤・③⑥

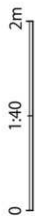
土層断面 ㉟



土層断面 ㊿



土層断面 ㊿



図IV-43 土層断面㉟~㊿

土層断面記				土層断面記			
層	土名	属性	層厚	層名称	層名称	層名称	備考
21	硬質粘土	10706.5	硬	底土	ローム土層		
22	硬質粘土	10706.5	硬	底土			
23	硬質粘土	10706.5	硬	底土			
24	底土	10706.4	硬	ローム層 2%			
25	硬質粘土	10706.3	硬	ローム層 2%			
26	底土	10706.2	硬	ローム層 2%			
27	硬質粘土	10706.1	硬	ローム層 2%			
28	硬質粘土	10706.0	硬	ローム層 2%			
土層断面記							
1	底土		硬				
2			硬				
3			硬				
4	二六八質粘土	10704.9	硬				
5	硬質粘土	10704.9	硬				
6	硬質粘土	10704.9	硬				
7	硬質粘土	10704.9	硬				
8	硬質粘土	10704.9	硬				
9	硬質粘土	10704.9	硬				
10	硬質粘土	10704.9	硬				
11	硬質粘土	10704.9	硬				
12	硬質粘土	10704.9	硬				
13	硬質粘土	10704.9	硬				
14	硬質粘土	10704.9	硬				
15	二六八質粘土	10704.9	硬				
16	硬質粘土	10704.9	硬				
17	硬質粘土	10704.9	硬				
18	硬質粘土	10704.9	硬				
19	硬質粘土	10704.9	硬				
20	硬質粘土	10704.9	硬				
21	硬質粘土	10704.9	硬				
22	硬質粘土	10704.9	硬				
23	二六八質粘土	10704.9	硬				
24	硬質粘土	10704.9	硬				
25	二六八質粘土	10704.9	硬				
26	硬質粘土	10704.9	硬				
27	硬質粘土	10704.9	硬				
28	硬質粘土	10704.9	硬				
29	硬質粘土	10704.9	硬				
30	硬質粘土	10704.9	硬				
31	硬質粘土	10704.9	硬				
32	硬質粘土	10704.9	硬				
33	硬質粘土	10704.9	硬				
34	硬質粘土	10704.9	硬				
35	硬質粘土	10704.9	硬				
36	硬質粘土	10704.9	硬				
37	硬質粘土	10704.9	硬				
38	硬質粘土	10704.9	硬				
39	硬質粘土	10704.9	硬				
40	硬質粘土	10704.9	硬				
41	硬質粘土	10704.9	硬				
42	硬質粘土	10704.9	硬				
43	硬質粘土	10704.9	硬				
44	硬質粘土	10704.9	硬				
45	二六八質粘土	10704.9	硬				
46	硬質粘土	10704.9	硬				
47	硬質粘土	10704.9	硬				
48	硬質粘土	10704.9	硬				
49	硬質粘土	10704.9	硬				
50	二六八質粘土	10704.9	硬				
51	硬質粘土	10704.9	硬				
52	硬質粘土	10704.9	硬				
53	底土	10704.9	硬				
54	硬質粘土	10704.9	硬				
55	底土	10704.9	硬				
56	硬質粘土	10704.9	硬				
57	硬質粘土	10704.9	硬				
58	硬質粘土	10704.9	硬				
59	硬質粘土	10704.9	硬				
60	硬質粘土	10704.9	硬				
61	硬質粘土	10704.9	硬				
62	硬質粘土	10704.9	硬				
63	硬質粘土	10704.9	硬				
64	硬質粘土	10704.9	硬				
65	底土	10704.9	硬				
66	硬質粘土	10704.9	硬				
67	硬質粘土	10704.9	硬				
68	硬質粘土	10704.9	硬				
69	硬質粘土	10704.9	硬				
70	硬質粘土	10704.9	硬				
71	硬質粘土	10704.9	硬				
72	硬質粘土	10704.9	硬				
73	硬質粘土	10704.9	硬				
74	二六八質粘土	10704.9	硬				
75	硬質粘土	10704.9	硬				
76	硬質粘土	10704.9	硬				
77	硬質粘土	10704.9	硬				
78	二六八質粘土	10704.9	硬				
79	二六八質粘土	10704.9	硬				
80							
81	硬質粘土	10704.9	硬				
82	硬質粘土	10704.9	硬				
83	硬質粘土	10704.9	硬				
84	硬質粘土	10704.9	硬				
85	硬質粘土	10704.9	硬				
86	硬質粘土	10704.9	硬				
87	硬質粘土	10704.9	硬				
88	硬質粘土	10704.9	硬				
89	硬質粘土	10704.9	硬				
90	硬質粘土	10704.9	硬				
91	硬質粘土	10704.9	硬				
92	硬質粘土	10704.9	硬				
93	硬質粘土	10704.9	硬				
94	硬質粘土	10704.9	硬				
95	硬質粘土	10704.9	硬				
96	硬質粘土	10704.9	硬				
97	硬質粘土	10704.9	硬				
98	硬質粘土	10704.9	硬				
99	硬質粘土	10704.9	硬				
100	硬質粘土	10704.9	硬				
101	二六八質粘土	10704.9	硬				
102	硬質粘土	10704.9	硬				
103	二六八質粘土	10704.9	硬				
104	硬質粘土	10704.9	硬				
105	硬質粘土	10704.9	硬				
106	硬質粘土	10704.9	硬				
107	硬質粘土	10704.9	硬				
108	硬質粘土	10704.9	硬				

図IV-51 土層断面注記②8~③0

No.	土名	地質	埋蔵物	遺物	備考
108	埋				1層
109	埋				2層
111	埋				
112	埋				
113	埋				
114	埋				
115	埋				
116	埋				
117	埋				
118	埋				
119	埋				
120	埋				
121	埋				
122	埋				
123	埋				
124	埋				
125	埋				
126	埋				
127	埋				
128	埋				
129	埋				
130	埋				
131	埋				
132	埋				
133	埋				
134	埋				
135	埋				
136	埋				
137	埋				
138	埋				
139	埋				
140	埋				
141	埋				
142	埋				
143	埋				
144	埋				
145	埋				
146	埋				
147	埋				

No.	土名	地質	埋蔵物	遺物	備考
1	埋				1層
2	埋				1層
3	埋				
4	埋				
5	埋				
6	埋				
7	埋				
8	埋				
9	埋				
10	埋				
11	埋				
12	埋				
13	埋				
14	埋				
15	埋				
16	埋				
17	埋				
18	埋				
19	埋				
20	埋				
21	埋				
22	埋				
23	埋				
24	埋				
25	埋				
26	埋				
27	埋				
28	埋				
29	埋				
30	埋				
31	埋				
32	埋				
33	埋				
34	埋				
35	埋				
36	埋				
37	埋				
38	埋				
39	埋				
40	埋				
41	埋				
42	埋				
43	埋				
44	埋				
45	埋				
46	埋				
47	埋				
48	埋				
49	埋				
50	埋				
51	埋				
52	埋				
53	埋				
54	埋				
55	埋				
56	埋				
57	埋				
58	埋				
59	埋				
60	埋				
61	埋				
62	埋				
63	埋				
64	埋				
65	埋				
66	埋				
67	埋				
68	埋				
69	埋				
70	埋				
71	埋				
72	埋				
73	埋				
74	埋				
75	埋				
76	埋				
77	埋				
78	埋				
79	埋				
80	埋				
81	埋				
82	埋				
83	埋				
84	埋				
85	埋				
86	埋				
87	埋				
88	埋				
89	埋				
90	埋				
91	埋				
92	埋				
93	埋				
94	埋				
95	埋				
96	埋				
97	埋				
98	埋				
99	埋				
100	埋				

No.	土名	地質	埋蔵物	遺物	備考
1	埋				1層
2	埋				1層
3	埋				
4	埋				
5	埋				
6	埋				
7	埋				
8	埋				
9	埋				
10	埋				
11	埋				
12	埋				
13	埋				
14	埋				
15	埋				
16	埋				
17	埋				
18	埋				
19	埋				
20	埋				
21	埋				
22	埋				
23	埋				
24	埋				
25	埋				
26	埋				
27	埋				
28	埋				
29	埋				
30	埋				
31	埋				
32	埋				
33	埋				
34	埋				
35	埋				
36	埋				
37	埋				
38	埋				
39	埋				
40	埋				
41	埋				
42	埋				
43	埋				
44	埋				
45	埋				
46	埋				
47	埋				
48	埋				
49	埋				
50	埋				
51	埋				
52	埋				
53	埋				
54	埋				
55	埋				
56	埋				
57	埋				
58	埋				
59	埋				
60	埋				
61	埋				
62	埋				
63	埋				
64	埋				
65	埋				
66	埋				
67	埋				
68	埋				
69	埋				
70	埋				
71	埋				
72	埋				
73	埋				
74	埋				
75	埋				
76	埋				
77	埋				
78	埋				
79	埋				
80	埋				
81	埋				
82	埋				
83	埋				
84	埋				
85	埋				
86	埋				
87	埋				
88	埋				
89	埋				
90	埋				
91	埋				
92	埋				
93	埋				
94	埋				
95	埋				
96	埋				
97	埋				
98	埋				
99	埋				
100	埋				

No.	土名	地質	埋蔵物	遺物	備考
1	埋				1層
2	埋				1層
3	埋				
4	埋				
5	埋				
6	埋				
7	埋				
8	埋				
9	埋				
10	埋				
11	埋				
12	埋				
13	埋				
14	埋				
15	埋				
16	埋				
17	埋				
18	埋				
19	埋				
20	埋				
21	埋				
22	埋				
23	埋				
24	埋				
25	埋				
26	埋				
27	埋				
28	埋				
29	埋				
30	埋				
31	埋				
32	埋				
33	埋				
34	埋				
35	埋				
36	埋				
37	埋				
38	埋				
39	埋				
40	埋				
41	埋				
42	埋				
43	埋				
44	埋				
45	埋				
46	埋				
47	埋				
48	埋				
49	埋				
50	埋				
51	埋				
52	埋				
53	埋				
54	埋				
55	埋				
56	埋				
57	埋				
58	埋				
59	埋				
60	埋				
61	埋				
62	埋				
63	埋				
64	埋				
65	埋				
66	埋				
67	埋				
68	埋				
69	埋				
70	埋				
71	埋				
72	埋				
73	埋				
74	埋				
75	埋				
76	埋				
77	埋				
78	埋				
79	埋				
80	埋				
81	埋				
82	埋				
83	埋				
84	埋				
85	埋				
86	埋				
87	埋				
88	埋				
89	埋				
90	埋				
91	埋				
92	埋				
93	埋				
94	埋				
95	埋				
96	埋				
97	埋				
98	埋				
99	埋				
100	埋				

No.	土名	地質	埋蔵物	遺物	備考
1	埋				1層
2	埋				1層
3	埋				
4	埋				
5	埋				
6	埋				
7	埋				
8					

No.	土色	範囲	観察者	記入人物	備考
20	黒褐色	10765.9	SL	Y. 土名不明	ローム層上部、灰質褐色土4%、炭灰、焼土層 わずか、焼骨わずか
21	黒褐色	10765.2	中平部	壁	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
22	暗褐色	10765.4	中平部	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
23	灰質褐色	10765.1	中平部	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、 焼土層わずか
24	暗褐色	10765.2	壁	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
25	褐色	10764.4	壁	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
26	暗褐色	10765.3	SL	壁	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
27	黒褐色	10765.2	SL	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
28	黒褐色	10765.2	SL	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
29	暗褐色	10765.4	SL	壁	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨わずか
30	暗褐色	10765.4	SL	壁	焼骨→大ローム1%、炭灰、 焼土層わずか
31	黒褐色	10765.1	SL	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか

土層断面番号	No.	土色	範囲	観察者	記入人物	備考
	1	褐色	10765.7	壁	壁	
	1	黒褐色	10765.2	わずか	Y. 土名不明	
	2	黒褐色	10765.2	わずか	壁	ローム層わずか、炭灰
	3	暗褐色	10765.2	中平部	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか
	4	褐色	10764.4	わずか	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか
	5	褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	10764.4に比べ焼骨多量、大ローム層→大 1%、炭灰、焼土層わずか
	6	暗褐色	10765.4	SL	Y. 土名不明	ローム層、炭灰、焼土層わずか
	7	暗褐色	10765.4	中平部	Y. 土名不明	焼骨、焼土層わずか、炭灰多量
	8	暗褐色	10765.2	壁	壁	ローム層→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか
	9	褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	10764.4に比べ焼骨多量、炭灰、焼土層 わずか、焼骨層わずか
	10	暗褐色	10765.2	SL	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層、 焼土層
	11	暗褐色	10765.2	SL	壁	ローム層、炭灰、焼土層わずか
	12	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰10%、炭灰10%、焼土層、 焼土層
	13	黒褐色	10765.2	わずか	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか
	14	暗褐色	10765.4	壁	壁	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか、 焼骨
	15	暗褐色	10765.2	中平部	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰
	16	暗褐色	10765.2	中平部	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰
	17	暗褐色	10765.3	中平部	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰
	18	暗褐色	10765.2	SL	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層わずか
	19	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	ローム層、焼土層わずか

土層断面番号	No.	土色	範囲	観察者	記入人物	備考
	1	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層
	2	褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰
	3	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層
	4	褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層わずか、 焼土層
	5	褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層わずか
	6	褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層わずか、 焼土層
	7	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層
	8	ローム質褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層わずか
	9	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層わずか
	10	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層
	11	暗褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層
	12	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層
	13	ローム質褐色	10764.4	SL	Y. 土名不明	ローム層
	14	褐色	10764.4	SL	壁	ローム層10%、炭灰、焼土層
	15	褐色	10764.4	SL	壁	ローム層10%、炭灰、焼土層
	16	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層
	17	ローム質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層10%、炭灰、焼土層
	18	暗褐色	10765.3	SL	壁	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層
	19	暗褐色	10764.4	壁	壁	1%焼土層
	20	暗褐色	10765.3	SL	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層
	21	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	焼骨→大ローム1%、炭灰、焼土層
	22	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	焼土層
	23	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	焼土層
	24	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	焼土層
	25	暗褐色	10765.4	壁	Y. 土名不明	焼土層
	26	ローム質褐色	10764.4	壁	壁	焼土層
	27	ローム質褐色	10764.4	壁	壁	炭灰、焼土層
	28	ローム質褐色	10764.4	壁	壁	ローム層、炭灰
	29	暗褐色	10764.4	壁	壁	炭灰、10%焼土層
	30	暗褐色	10765.2	わずか	壁	ローム層
	31	暗褐色	10765.2	わずか	壁	ローム層

土層断面番号	No.	土色	範囲	観察者	記入人物	備考
	1	灰質褐色	10764.3	SL	Y. 土名不明	ローム層
	2	暗褐色	10765.1	SL	壁	ローム層、炭灰
	3	暗褐色	10765.1	SL	壁	ローム層、炭灰
	4	暗褐色	10765.1	SL	Y. 土名不明	ローム層
	5	ローム質褐色	10764.3	わずか	Y. 土名不明	ローム層→大ローム1%、炭灰、焼土層
	6	ローム質褐色	10764.3	わずか	壁	ローム層
	7	暗褐色	10765.2	わずか	壁	ローム層

図IV-53 土層断面注記③5~③9

報告書抄録

ふりがな	ふくしまちょう たてさきいせき							
書名	福島町 館崎遺跡							
副書名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第333集							
編著者名	中山昭大・影浦 覚・福井淳一・柳瀬由佳・立田 理							
編集機関	(公財)北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 (011)386-3231 mail@domaibun.or.jp							
発行年月日	西暦2017年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館崎遺跡	北海道松前郡 福島町館崎 337-11ほか	01332	B-03-2	41° 26' 31"	140° 13' 58"	20090507 ～ 20091127 20100412 ～ 20100819 20110509 ～ 20110831	2,171㎡	北海道新幹線 建設事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
館崎遺跡	集落跡	縄文時代 早期後葉	土坑3		縄文土器(東銅路IV式)			最大級の岩偶。 多量の塊状耳飾。 長野県域産 黒曜石製石鏃の 最北例。クリ花 粉多量検出。多 遺体埋葬墓。廃 屋敷。15体の人 骨。貝層。
		縄文時代 前期後葉 ～ 中期中葉	盛土遺構2条、堅穴住居跡48、土坑90、焼土85、集石25、フレイク集中48、小ピット385、杭列2条、道路跡1条		縄文土器(円筒土器下層c～d式、円筒土器上層a～見晴町式) 土製品(土偶など) 石器(スクレイパー、笥状石器、たたく石、石鏃、石錐、台石・石皿、北海道式石冠、扁平打製石器、石斧など) 石製品(石棒、鳥帽子形石器、ヒスイ製垂飾、塊状耳飾、岩偶など) 骨角器(話頭、釣針、骨針、垂飾など) 動物遺存体(オットセイなど)・植物遺存体			
		縄文時代 中期～後期	土坑4、Tピット1、焼土2					
		縄文時代 後期前葉	盛土遺構、堅穴住居跡3、土坑21、焼土10、集石2、小ピット1、配石列2条		縄文土器(涌元式)			
要約	縄文時代前期後葉～中期中葉、後期前葉の集落。盛土遺構、堅穴住居跡、墓、土坑、柱穴、焼土などが複雑に重なり合って検出された。集落の変遷が、土層堆積状況、遺構の重複状況、住居形態、土器型式などから明らかになった。前期末葉の盛土遺構堆積の変化に従って、住居長軸が大きく変化し、散漫な土地利用から偏った土地利用へ変遷する過程をとらえることができた。遺構群は、中期中葉の時点で二本の土手状の盛土と、その間の溝状の道路という人為地形を形成するに至っている。土器は、円筒土器下層c式から見晴町式まで連続的に確認されただけでなく、950個体近く復元された。出土状況は、破片状態のほか、正立・側立・横転状態で散逸していない状態のものも多かった。割片石器は、頁岩製主体。頁岩産地のため、多数の石核がある。また、現存長37cmと列島内最大級の岩偶、北海道初となる長野県域産黒曜石製石鏃、56点と東北以北最多量の滑石製主体の塊状耳飾なども含まれた。骨角器には、話頭や釣針などの道具が多い。動物はオットセイ、ウトウ、アイナメ類、ソイ類など海産生物が主体。植物では、オニグルミ殻が多かったほか、ヒエ属種実が確認され、クリ花粉が多量に確認された。花粉の状況から集落に重なるようにクリの純林が存在したことが推定される。							

(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第333集

福島町 館崎遺跡

－北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書－
第1分冊 遺構編

- 発行** 平成29(2017)年3月24日
- 編集** 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>
- 印刷** 中西印刷株式会社
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL (011) 781-7501 FAX (011) 781-7516

